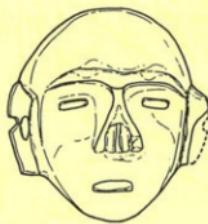


邑久町埋蔵文化財発掘調査報告 1

熊山田遺跡

吉井川農業水利事業邑久用水路
工事に伴う発掘調査



2004

岡山県邑久町教育委員会

邑久町埋蔵文化財発掘調査報告 1

熊山田遺跡

吉井川農業水利事業邑久用水路
工事に伴う発掘調査

2004

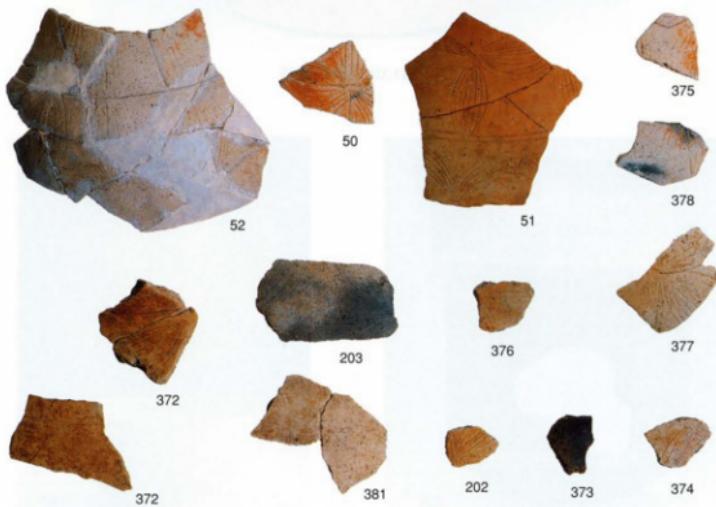
岡山県邑久町教育委員会



1 3区全景（北西から）



2 2区全景（南東から）



3 弥生土器の木葉文

卷頭圖版 2



1 土壤 1 出土人形土製品

2 斜面堆積 1 出土人形土製品



144

3 滿13出土裝飾高杯



486

4 井戸 4 出土瓦質異形土器



487

5 井戸 5 出土青磁碗

序

邑久町は、岡山県南東部を流れる吉井川の下流域左岸に位置し、瀬戸内海に面している人口約2万人の町であります。県下でも有数の穀倉地帯ともいわれる肥沃で広大な千町平野を中心に、古代からの重要な遺跡・文化財も多く残されており、邑久郡の中心的位置を占めてきました。

熊山田遺跡は千町平野の北西部に位置し、吉井川の形成した微高地上に立地する集落遺跡であります。この微高地上には、昭和60年国指定史跡に指定されました史跡門田貝塚も存在しています。

昭和57年度、邑久町・牛窓町の水田・畑地灌漑用として、国営吉井川農業水利事業邑久用水路の新設工事が計画され、遺跡を東西に横断するかたちで大口径のパイプが埋設されることとなり、協議の結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずる発掘調査の実施に踏み切ることとなりました。発掘調査は、「吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会」の調査委員会組織で実施しました。調査の結果、弥生時代前期から中世にわたる集落の一画を検出しました。多量の出土遺物の中で、特に弥生時代の人の土製品や木製鏡の未製品・中国製の陶磁器など、当時の暮らしぶりを示す貴重な手掛かりが得られました。

しかし発掘調査後、諸般の事情により調査委員会は解散し、調査報告書が未刊となっていました。このたび、当時の発掘調査担当者の方々の御協力によりまして、ようやく報告書を刊行することができました。本報告書が、今後の埋蔵文化財保護・保存のため有効に活用されるとともに、学術研究のため、また郷上の歴史研究の資料として役立てれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたりまして、熊山田遺跡報告書編集専門委員の先生方には、長期にわたり出土遺物の整理・本書の執筆編集に至るまで、御指導御協力を賜りました。また、邑久町史編纂委員会顧問近藤義郎氏、くらしき作陽大学、岡山県教育委員会、岡山県古代吉備文化財センターほか関係各位から、多人な御理解と御協力をいただき、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

邑久町教育委員会

教育長 小林一征

例　　言

- 1 本報告書は、国営吉井川農業水利事業邑久用水路の新設工事に伴い、中国四国農政局の委託を受け、邑久町教育委員会が昭和57年度、「吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会」が昭和58年度に、それぞれ発掘調査を実施した熊山田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 熊山田遺跡は、岡山県邑久郡邑久町山田庄字月ノ木363番地ほかに所在している。
- 3 発掘調査は、0区を邑久町教育委員会が担当し、昭和58年1月20日から1月29日まで実施した。1区から6区を吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会が担当し、昭和58年12月7日から昭和59年1月20日まで実施した。調査面積は、1,128m²である。
- 4 本報告書の作成作業ならびに刊行は、邑久町史編纂事業の一環として取り組み実施したものである。
- 5 報告書の作成作業は、邑久町教育委員会で、河本　清・福田正継・中野雅美・馬場昌一が行なった。
- 6 遺物に関する同定については次の機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、成果については報告文をいただいた。
- 木製品鑑定 株式会社吉田生物研究所
- 7 本書の執筆は、河本　清・福田正継・中野雅美・馬場昌一・閔　幸代が行い、項末または文末に文責を記した。全体編集は中野が行った。
- 8 遺物の写真撮影については、柳生写真館の協力と援助を得た。
- 9 本書に關係する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、邑久町立郷土資料館（岡山県邑久郡邑久町尾張465-1）に保管している。
- 10 本書の作成にあたり、下の方々および機関の協力を得ました。記して感謝申し述べます。
秋山浩三・石井 啓・伊藤 晃・扁崎 由・大久保徹也・大橋雅也・岡田 博・岡本寛久
岡本泰典・亀田修一・葛原克人・小林利晴・近藤義郎・佐藤亜聖・澤田秀実・武田恭彰
中野良一・根本 修・乗岡 実・平井典子・正岡睦夫・光永真一・柳瀬昭彦・山本悦世
岡山市埋蔵文化財センター・岡山県教育委員会・岡山県古代吉備文化財センター・
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・くらしき作陽大学

凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高であり、方位は地形図および全体図などは平面直角座標第V系の座標北を示し、中世の掘立柱建物については磁北と座標北を併記した。その他、特に示さない限り磁北である。
- 2 図面縮尺については明記しており、主なものについては以下のように統一している。

遺構	縦穴住居：1/60	掘立柱建物：1/60	井戸：1/30	土塙：1/30	溝：1/30・1/50
遺物	土器：1/4	土製品・金属器：1/2・1/3	石器：1/2・1/3	木製品：1/4・1/8	
- 3 掲載遺物については、土器・土製品・石器・金属器・木製品に分けて通し番号を付け、土器以外は下記略号を番号の前に付している。

土製品C (Cray)	石器S (Stone)	金属器M (Metal)	木製品W (Wood)
-------------	-------------	--------------	-------------
- 4 図版のうち遺物写真に付した番号は、挿図の遺物番号と一致する。
- 5 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口徑復元に不確実性のあることを示す。
- 6 石器実測図で網目をかけた範囲は、磨耗など使用痕のある部分である。
- 7 土層断面に使用した土色は、各調査員の記述に従った。
- 8 本報告書の第2図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「西大寺」「備前・瀬戸」を複製・加筆したものである。また、第3・4図は邑久町計画図1/5,000を複製・加筆し、1/2,500に拡大したものである。
- 9 本報告書に用いた時代、時期区分は統一していない。一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経過と体制	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査の経過	7
第3節 報告書の作成	9
第3章 調査の概要	11
第1節 調査区の概要	11
第2節 基本層序	13
第3節 縄文時代の遺物	22
1 縄文時代の概要	22
2 積石塚	22
3 竪穴住居	23
4 掘立柱建物	24
5 井戸	25
6 土壙	25
7 溝	41
8 斜面堆積	51
9 遺構に伴わない遺物	54
第4節 弥生時代の遺構・遺物	70
1 弥生時代の概要	22
2 積石塚	23
3 竪穴住居	24
4 掘立柱建物	25
5 井戸	25
6 土壙	25
7 溝	41
8 斜面堆積	51
9 遺構に伴わない遺物	54
第5節 古墳時代・古代の遺構・遺物	79
1 古墳時代・古代の概要	79
2 土壙	79
3 溝	80
4 棚列状遺構	80
5 遺構に伴わない遺物	80

第6節 中世以降の遺構・遺物	81
1 中世の概要	81
2 掘立柱建物	81
3 井戸	82
4 溝	86
5 遺構に伴わない遺物	89
第4章まとめ	91
第1節 遺構の変遷について	91
1 繩文時代	91
2 弥生・古墳時代	91
3 古代・中世	92
第2節 出土遺物について	93
1 熊山田遺跡の木葉文	93
2 熊山田遺跡の人形土製品	98
3 岡山県における人形土製品（弥生土偶）	106
4 弥生時代中期中葉の土器	113
5 中世の土器・陶磁器	121
附載 熊山田遺跡から出土した木製品の樹種	125
遺構一覧表	127
遺物観察表	129
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図（黒丸印）	1
第2図 熊山田遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）	2
第3図 調査区配置図（1/2,500）	9
第4図 土層柱状図作成位置図（1/2,500）	14
第5図 調査区別土層柱状図（1/40）	14
第6図 調査区全体図（1/800）	15
第7図 0区・1区遺構平・断面図（1/150）	16
第8図 1区県道部分・2区遺構平・断面図（1/150）	17
第9図 3区遺構平・断面図（1/150）	18
第10図 4区遺構平・断面図（1/150）	19
第11図 5区・6区遺構平・断面図（1/150）	20
第12図 6区遺構平・断面図（1/150）	21
第13図 繩文土器（1/4）	22
第14図 竪穴住居1平・断面図（1/60） 出土遺物（1/4）	23
第15図 掘立柱建物1平・断面図（1/60） 出土遺物（1/4）	24
第16図 井戸1平・断面図（1/30）・出土遺物1（1/2）	25
第17図 井戸1出土遺物2（1/4）	26
第18図 土塙1平・断面図（1/30） 出土遺物（1/2・1/3・1/4）	27
第19図 土塙2平・断面図（1/30） 出土遺物1（1/2・1/3・1/4）	28
第20図 上塙2出土遺物2（1/4）	29
第21図 土塙3平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）	30
第22図 土塙4平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）	31
第23図 土塙5平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）	31
第24図 土塙6・7平・断面図（1/30） 土塙6出土遺物（1/4）	32
第25図 土塙8平・断面図（1/30）・出土遺物（1/2）	32
第26図 土塙9平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）	33
第27図 土塙10平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）	34
第28図 土塙11平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）	35

第29図 土壇12平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/3・1/2・1/4)	35	第65図 斜面堆積1 出土遺物12 (1/4)	65
第30図 土壇13平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	36	第66図 斜面堆積1 出土遺物13 (1/4)	66
第31図 土壇14平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4・1/3)	37	第67図 斜面堆積1 出土遺物14 (1/2・1/3)	67
第32図 土壇15平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/2・1/4)	38	第68図 斜面堆積1 出土遺物15 (1/8)	68
第33図 土壇16平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	39	第69図 斜面堆積1 出土遺物16 (1/2・1/3)	69
第34図 土壇17平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4・1/2)	39	第70図 道構に伴わない遺物 1 (1/4)	70
第35図 土壇18平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4・1/2)	40	第71図 道構に伴わない遺物 2 (1/4)	71
第36図 土壇19平・断面図 (1/30)	40	第72図 道構に伴わない遺物 3 (1/4)	73
第37図 溝 5 ~ 7 断面図 (1/30)	41	第73図 道構に伴わない遺物 4 (1/4)	74
第38図 溝 8 出土遺物 (1/4)	42	第74図 道構に伴わない遺物 5 (1/4)	75
第39図 溝 9・10断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	42	第75図 道構に伴わない遺物 6 (1/4)	76
第40図 溝11・12断面図 (1/30)	43	第76図 道構に伴わない遺物 7 (1/4)	77
第41図 溝13断面図 (1/50) · 出土遺物 1 (1/4)	44	第77図 道構に伴わない遺物 8 (1/3・1/2)	78
第42図 溝13出土遺物 2 (1/4)	45	第78図 土壇20平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	79
第43図 溝13出土遺物 3 (1/4)	46	第79図 土壇21平・断面図 (1/30)	79
第44図 溝13出土遺物 4 (1/4)	47	第80図 條列状道構 1平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	80
第45図 溝14断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	48	第81図 道構に伴わない遺物 (1/4)	80
第46図 溝15・16断面図 (1/50) · 出土遺物 (1/4)	49	第82図 捩立柱建物 2平・断面図 (1/60)	81
第47図 溝17・18断面図 (1/30)	49	第83図 井戸 2平・断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	82
第48図 溝19断面図 (1/30) · 出土遺物 (1/2)	50	第84図 井戸 3平・断面図 (1/30) · 出土遺物 1 (1/4)	83
第49図 溝26・27出土遺物 (1/4)	51	第85図 井戸 3出土遺物 2 (1/4)	84
第50図 たわみ 1 出土遺物 (1/4・1/2)	51	第86図 井戸 4平・断面図 (1/30) · 出土遺物 1 (1/4)	85
第51図 たわみ 2 出土遺物 1 (1/4)	52	第87図 井戸 4出土遺物 2 (1/4)	86
第52図 たわみ 2 出土遺物 2 (1/4)	53	第88図 井戸 5平・断面図 (1/30) · 出土遺物 1 (1/4)	87
第53図 たわみ 2 出土遺物 3 (1/3・1/2)	54	第89図 井戸 5出土遺物 2 (1/4)	88
第54図 斜面堆積 1 出土遺物 1 (1/4)	54	第90図 道構に伴わない遺物 (1/4・1/3)	89
第55図 斜面堆積 1 出土遺物 2 (1/4)	55	第91図 岡山田跡出土の木葉文分類図 (1/8)	94
第56図 斜面堆積 1 出土遺物 3 (1/4)	56	第92図 50・51の施文順序図	95
第57図 斜面堆積 1 出土遺物 4 (1/4)	57	第93図 耳状除番に溝状沈線を施す 弥生時代の人物土製品 (1/2)	103
第58図 斜面堆積 1 出土遺物 5 (1/4)	58	第94図 稲原田跡出土土偶 (1/2)	103
第59図 斜面堆積 1 出土遺物 6 (1/4)	59	第95図 用木山田跡出土分銅形土製品 (1/2)	103
第60図 斜面堆積 1 出土遺物 7 (1/4)	60	第96図 亀塚田跡出土人面綱刻画土器 (1/4)	103
第61図 斜面堆積 1 出土遺物 8 (1/4)	61	第97図 岡山県における人物土製品 (弥生土偶) 出土位置図	107
第62図 斜面堆積 1 出土遺物 9 (1/4)	62	第98図 岡山県における人物土製品 (弥生土偶) 集成図 (1/2)	110
第63図 斜面堆積 1 出土遺物 10 (1/4)	63	第99図 中期中葉・古相器種分類図 (1/12)	115
第64図 斜面堆積 1 出土遺物 11 (1/4)	64	第100図 中期中葉・中相器種分類図 1 (1/12)	116
		第101図 中期中葉・中相器種分類図 2 (1/12)	117

表 目 次

第1表 岡山県における人形土製品 (弥生土偶) 一覧表	109	第7表 條列状道構・観察表	128
第2表 竪穴住居一覧表	127	第8表 上蓋觀察表	129
第3表 捩立柱建物一覧表	127	第9表 土製品觀察表	140
第4表 井戸一覧表	127	第10表 石器觀察表	140
第5表 土壇一覧表	127	第11表 銀器觀察表	140
第6表 溝一覧表	128	第12表 木製品觀察表	140

卷頭図版目次

卷頭図版 1-1 3区全景（北西から）

2 2区全景（南東から）

3 弥生土器の木葉文

卷頭図版 2-1 土壇1出土人形土製品

2 斜面堆積1出土人形土製品

3 溝13出土焚鉢高杯

4 井戸4出土瓦質土器

5 井戸5出土青縞模

図 版 目 次

図版 1-1 0区全景（北西から）

2 1区全景（北西から）

3 3区全景（北西から）

図版 2-1 3区全景（南東から）

2 3区全景（北西から）

3 3区全景（北西から）

図版 3-1 4区全景（北西から）

2 5・6区全景（北西から）

3 6区全景（北西から）

図版 4-1 獨立柱建物1（南西から）

2 井戸1（南西から）

3 土壇1（東から）

図版 5-1 土壇2（東から）

2 土壇3（北東から）

3 土壇6・7（北から）

図版 6-1 土壇8（北東から）

2 土壇9（北東から）

3 土壇11（東から）

図版 7-1 土壇12（南から）

2 土壇14（北から）

3 土壇15（東から）

図版 8-1 井戸1・土壇16・17（南東から）

2 井戸1・土壇16～18（北西から）

3 土壇19（南西から）

図版 9-1 2区全景（北西から）

2 溝13断面（北から）

3 溝9～12（北から）

図版10-1 溝15・16（北東から）

2 斜面堆積1土器出土状況（北西から）

3 橫列状遺構1（南から）

図版11-1 井戸3（北東から）

2 井戸3出土状況（南から）

3 井戸3出土状況（南西から）

図版12-1 井戸4（南東から）

2 井戸5（北東から）

3 井戸5断面（北東から）

図版13-1 繩文土器

2 土壇1・8出土土製品

3 井戸1・土壇1・2・4出土土器

4 井戸1・土壇2・12出土石器

図版14-1 土壇14・15・17・18出土石器

2 土壇9・13出土遺物

3 溝13出土遺物

図版15 溝13・14出土遺物

図版16-1 たわみ1出土遺物

2 溝19たわみ1・2出土石器

3 斜面堆積1出土遺物

図版17 斜面堆積1出土遺物

図版18-1 斜面堆積1出土遺物

2 斜面堆積1出土木製品

3 斜面堆積1出土土製品・石器

図版19-1 遺構に伴わない遺物

2 遺構に伴わない土製品・石器

図版20-1 井戸3出土木製品

2 井戸3・4・5出土遺物

写 真 目 次

写真1 熊山田遺跡周辺の航空写真

写真2 3区発掘調査状況（南東から）

写真3 3区発掘調査状況（北西から）

写真4 人形土製品 C 1

写真5 人形土製品 C 6

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

熊山田遺跡は、岡山県邑久郡邑久町山田庄字月ノ木363番地ほかに所在する（第1図）。

本遺跡の所在する邑久町は、岡山県の南東部の県下三大河川の一つである吉井川下流の東岸に位置する、人口約2万人の町である。町の東部は、片上湾入口の布浜地区や和気郡日生町と境を接し、瀬戸内海に浮かぶ邑久町最大の島である長島が所在する虫明地区となる。南西は、吉井川河口の岡山市と境になっている北島地区まで東西約20kmにわたる。また、南北は長船町と牛窓町の境に近い本庄地区で、約1kmを測る東西に細長い町である。

邑久町の地形は、東部と西部で様相を異にしている。東部は丘陵地が多く、200m級の山々が連なり、長船町・備前市との町市境の丘陵が接し、南は100m級の山々が瀬戸内海に面している。一方、西部は、北と南の町境に100~200m級の丘陵が広がるもの、中央部の大部分はいわゆる「千町平野」と呼ばれる、岡山県下でも有数の肥沃な沖積平野が広がっている。町の面積68.82km²のうち約50%が山林で、農地は25%、宅地は約5%となっている。

吉井川下流域東岸の沖積地は、縄文時代晩期以降の吉井川の活発化した堆積作用により急速な低微高地の形成によるものである。その沖積平野も、山塊から派生した丘陵や独立丘陵により、いくつかの単位平野として小地域に区分ができる。北から南に向かってその平野を辿ると、北側の熊山と南側の西大平山から派生した丘陵部に挟まれた南北約0.5km、東西約3.0kmの細長く延びた長船町長船から備前市大内にかけての香登平野、吉井川下流東岸平野の中央部に独立丘陵としてある甲山や桂山の北側までの南北約1.5km、東西約3.0kmの長船町服部・土師・磯上・牛文地区の長船平野、北の邑久町・長船町境の独立丘陵南の牛窓半島から児島湾口に延びる丘陵地帯に囲まれた邑久町中西部の南北約3.5km、東西約5.0kmに及ぶ、最大規模を測る千町平野の3つの沖積平野に区分される。熊山田遺跡はこの千町平野の中心部よりやや北西に所在する。

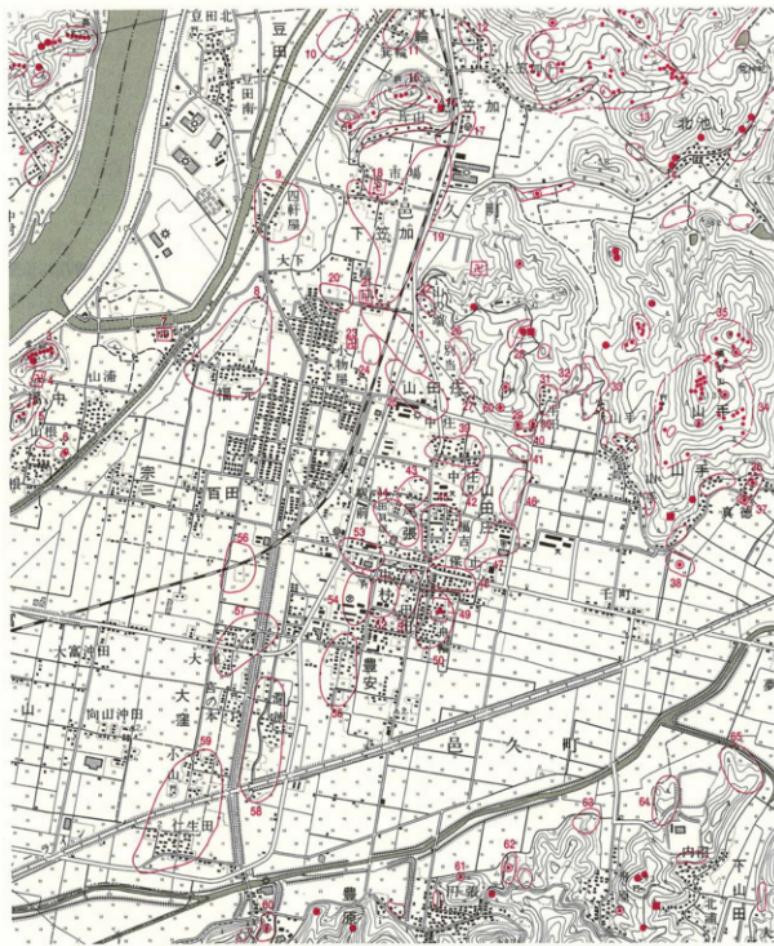
(馬場)



第1図 遺跡位置図（黒丸印）

第2節 歴史的環境

熊山田遺跡の所在する千町平野周辺部での最古の遺物は、下山田柵ケ鼻遺跡（註1）から出土した



- | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 鮎山田遺跡 | 14. 北池1号墳 | 27. 山田庄別当遺跡 | 40. 山田庄官坂遺跡 | 53. 堂免道路 |
| 2. 百枝月南庄寺遺跡 | 15. 我城山古墳群 | 28. 西郷免古墳 | 41. 山田庄川原遺跡 | 54. 馬場崎遺跡 |
| 3. 蓼中山古墳群 | 16. 我城山1号墓 | 29. 山田庄宮下貝塚 | 42. 山田庄本神遺跡 | 55. 豊安遺跡 |
| 4. 大牛山善興寺跡 | 17. 上豆加田城遺跡 | 30. 山田庄宮般貝塚 | 43. 山田庄東光院遺跡 | 56. 百田遺跡 |
| 5. 猪山鶴山古墳群 | 18. 大榮院跡 | 31. 山田庄半田道跡 | 44. 丹門貝塚 | 57. 大窪道跡 |
| 6. 山體古墳 | 19. 下豆加田跡 | 32. 山田庄西町船道跡 | 45. 山田庄福吉遺跡 | 58. 関越道跡 |
| 7. 善覺寺跡 | 20. 下豆加田後着道路 | 33. 山田辻烟道跡 | 46. オンザ道跡 | 59. 仁生田遺跡 |
| 8. 福元寺跡 | 21. 清樂院跡 | 34. 高砂古墳群 | 47. 山田庄北畠遺跡 | 60. 大横貝塚 |
| 9. 四軒屋道路 | 22. 下笠山1ノ塙道路 | 35. 八木山古墳群 | 48. 水舟道路 | 61. 豊原倉ケ端貝塚 |
| 10. 黄輪下道跡 | 23. サアナ古跡 | 36. 真徳貝塚A | 49. 尾張城跡 | 62. 円張東貝塚 |
| 11. 黄輪遺跡 | 24. サアナ古跡 | 37. 真徳貝塚B | 50. 尾張店崎遺跡 | 63. 田山田根ケ鼻遺跡 |
| 12. 上笠加木渡田遺跡 | 25. 番中道跡 | 38. 真徳貝塚 | 51. 尾張助三東道路 | 64. 下山田鳥博遺跡 |
| 13. 上笠加古墳群 | 26. 山田庄北谷道路 | 39. 山田庄塙内遺跡 | 52. 助三郎遺跡 | 65. 下山田崩ケ端遺跡 |

第2図 熊山田遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

ナイフ形石器で、背後の低丘陵上に遺跡が想定されている。近年になって、内陸低位部で旧石器時代の石器の出土が知られるようになり、西谷遺跡（長船町西須恵）（註2）や龜井戸廃寺（備前市佐山）（註3）など、キャンプサイト的な小規模遺跡の存在が確認されている。

後冰期の世界的な気候の温暖化で、縄文時代早期に現在の千町平野が瀬戸内海に続く海となる縄文海進が進行する。

縄文時代前期には、海を挟んで北に宮下貝塚（註4）、南に大橋貝塚（註5）が形成される。さらに中期末から後期初頭の山手貝塚、後期以前では真徳貝塚B（註6）が形成されている。これらの貝塚のうち、大橋貝塚は、前期から後期初めまでの長期にわたって居住が継続されている。貝塚の広がりも面積にして約3,000m²と吉井川東岸下流域で最大規模を測り、当地域での中核的集落であったと考えられる。

晩期になると、助三畠遺跡や堂免遺跡から突堤土器片の出土が見られるように、瀬戸内海の海水面の降下と吉井川の土砂の堆積によって急激な陸化が進み、沖積地に人々の生活の痕跡が見られはじめる。

弥生時代になると、旧吉井川の堆積作用によって下笠加から仁牛田に、細長く弧状の自然堤防が形成される。この微高地は、旧吉井川の中・小の支流でいくつかに分断されるが、前期以降になって全域に集落が形成される。その中でも中核的な集落として、史跡門田貝塚が存在する。数回に亘る発掘調査によって、数条の大規模な溝や貝塚の存在が明らかにされた。また弥生時代前期後葉の土器型式とされた「門田下層式」よりさらに古い前期前葉の土器も出土し、集落の開始時期が古く遡ることが明らかになった（註7・8・9）。

熊山田遺跡の所在する地域は、地理的立地条件の良さから、近年各種の開発に伴う発掘調査が行われ、畠中遺跡（註10）・堂免遺跡・熊山田遺跡（小林石油）などで弥生時代前期の遺構が検出されているから、前期段階に集落が形成されていることが明らかにされつつある。助三畠遺跡では、中期中葉の竪穴住居や掘立柱建物だけでなく、4条の大規模な溝も検出されている（註11）。

中期中葉以降、微高地周辺部の水田の拡大と人口増に伴い、遺跡の分布は微高地上から千町平野を望む丘陵上や丘陵裾部へ移動する。これらの遺跡として真徳貝塚・豊原倉ヶ端貝塚・円張東貝塚・下山田梶ヶ鼻遺跡・下山田扇ヶ端遺跡等があり、いずれも小規模な貝塚を伴っている。また後期後葉以降には、集落内で上器製壺も行われている。弥生時代を通じて当地域は、安定した水稻耕作を生産力の基盤に、邑久地域の中心地として古墳時代に発展する母胎となる。しかし、千町平野東側部分については、千町平野の中央部に自然堤防が形成されて小河川の排水ができなくなり、中世の段階まで後背湿地として取り残されるのである。

弥生時代の墓制については明らかでない点が多いものの、沖積地の遺跡である堂免遺跡から、3基の円形周溝（墓）が検出された。周溝はいずれも全周しなく、2基の埴輪の周溝を部分的に共有するものや、周溝の一部がブリッジ状になって切れているものがある。1基の周溝墓からは、中央部に組み合わせ式の木棺痕跡が検出されている（註12）。また、門田貝塚や助三畠遺跡からは、壺と鉢を合わせた土器組が出土している。丘陵部では、下笠加の我城山1号墓から綾杉文や鋸闘文を施した特殊彫形土器が採集されており、吉井川東岸で唯一の特殊壺を伴う弥生墳丘墓として注目される。

古墳時代の集落遺跡としては、助三畠遺跡・門田貝塚・堂免遺跡で弥生時代の集落の延長上で溝や井戸が検出されているが、5世紀後葉以降の集落の変遷については明確でない。

千町平野周辺部では、平野を望む独立丘陵の頂部から尾根にかけて、小規模な円墳や方墳が群集して築造されている。その中で最古に属する遺物として、福中地区の福中堂山古墳から無茎定角式銅鏡が1点出土している。福中堂山丘陵上には、小規模な古墳が數十基築造されている。かつて堂山F号墳から銅鏡10点が出土したと伝えられており、このF号墳からの1点とも考えられる。福中堂山古墳出土の無茎定角式銅鏡は、岡山市浦間に所在する吉備最古の前方後円墳と考えられている浦間茶臼山古墳から出土した銅鏡と同范品の可能性が高いという（註13）。

千町平野の北側に位置する山手地区の標高135mの高砂山山頂から八木山の尾根筋にかけて、約100基にのぼる低平な古墳群が築造されており、邑久町内でも有数の前半期の群集墳を形成している。内部主体は箱式石棺や小豎穴式石槨で、副葬品に内行花文鏡2面、変形四獸鏡1面、捩文鏡1面の鏡をはじめ、玉類や鉄器が出土している。

後半になると、邑久地域の前方後円墳築造系譜の最終段階となる2基の前方後円墳が、邑久町との町境の長船町亀ヶ原に築造される。1基は金鶴塚古墳で、明治27年（1894）に開墾で墳形が大破され、石室から画文帶神獸鏡1面ほかが出土したと伝えられる。墳丘の測量によって墳長が約35mの前方後円墳であることが判明し、採集された埴輪が川西編年V期の6世紀前葉と推定されている。もう1基は金鶴塚古墳より約30m南の地点に所在する亀ヶ原大塚古墳で、墳長が約40mの前方後円墳である。埋葬施設として前方部に古墳の主軸に直交する長さ約7mの横穴式石室が築かれ、後円部にも横穴式石室の存在が推定されている。詳細な時期については不明であるが、おむね6世紀後葉と考えられている。この2基の古墳は、須恵器生産を掌握・管理していた首長の墓と考えられている（註14）。

高砂山の南斜面をはじめ豊原・福中地区的丘陵端部の斜面に、横穴式石室を内部主体とする小古墳が築造される。高砂山ではほとんどの古墳の埋葬施設が無袖式の横穴式石室で、須恵質の陶棺が納められているものが多い。これらの小古墳群は、6世紀後葉から7世紀にかけての須恵器窯跡群の分布と重なっているので、長船町亀ヶ原古墳群とともに須恵器製作工人集団の墳墓と推定されている。

本庄地区的水落古墳からは、烟の開墾中に横穴式石室に納められた須恵質の切妻形陶棺が出土し、身と蓋の妻部分に焼成前に書かれた「南」の文字が線刻されている。陶棺が小形化しており、8世紀前葉頃のものと考えられる。

また7世紀以降の邑久郡地域で特筆すべき遺構は、恵まれた陶土と薪材を擁して造られた、約110基もの須恵器生産遺跡である邑久古窯跡群の存在である。邑久古窯跡群の開始は、現在確認されているのは長船町木鍋山1号窯跡（註15）の6世紀中葉からで、牛窓町寒風窯跡群（註16）の7世紀から8世紀初頭をピークに11世紀頃まで連綿と存続する。窯では須恵器だけでなく、陶棺・鷦尾・瓦も生産されている。

奈良時代の尾張地域は、『和名抄』や『統日本紀』によると律令体制下で備前国邑久郡の中心地の尾張郷に属する。門田遺跡からは大規模な掘立柱建物の一部と見られる柱穴群が検出され、円面鏡・須恵器・縫釉陶器などの遺物も出土していることから、同地に官衙的な施設の存在が想定される（註17）。寺院跡としては、山田庄半田地区の緩やかな丘陵南斜面の平坦部に半田（尾張）廃寺が存在すると推定されている（註18）が、伽藍配置については不明である。周辺部から長瀬氏によって表採された軒平瓦の中に、本薬師寺や平城薬師寺の軒平瓦と同范瓦の偏行唐草文を有するものがあるので、藤原宮造瓦用として本薬師寺の造瓦組織の一部が解体され、大和以外の地に瓦製作の依頼が行われて、当地で瓦生産をした可能性も考えられている（註19）。

千町平野地域で、現在まで遺構が明らかに残っているものに条里遺構がある。平野南部を流走する千町川周辺部を除き、ほぼ全城に条里地割りが残存している。当地の坪割りは「縦行き連続式」で、左下を起点として上へ数える。条里地割りの時期については、考古学的調査が行われていないので不明であるが、比較的陸地化が早かった尾張地域を中心に施行され、周辺部は中世の段階まで長期間を要したと考える。

中世になると、建久四年（1193）に備前国は東大寺再建の造営国領になり、中世を通じて南都勢力の莊園が数多く存在している。北約5km地点には正安元年（1229）成立の『一遍上人絵伝』に描かれた「福岡の市」で有名な福岡があり、南西約5kmには吉井川の河口右岸に中世から金岡庄の濱町として栄えるとともに、西大寺観音院の門前町として工商業が発展した金岡・西大寺地区がある。このことにより、当地は山陽道にも近く、陸上交通や瀬戸内海沿いの海上交通や舟運による物資集散地に近接した要所としての地理的要因と、肥沃な千町平野の農業基盤を背景に、集落の安定が見られる。このことは、門田遺跡、堂免遺跡、助三畠遺跡、熊山田遺跡などで青磁・白磁・瓦器などの多くの広域流通品の出土によっても知られる。特に助三畠遺跡の井戸からは多量の古備系土師質土器・備前焼・龜山焼の在地土器とともに、畿内系土師質土器、束口系須恵質土器、和泉産瓦器、常滑焼のみならず青磁・白磁の貿易陶磁器も出土している。さらに土器や陶磁器とともに養和元年（1181）の紀年銘を墨書きした題識が共存することによって、中世の商品の流通交易関係や中世土器の併行関係を知る基礎資料となるものである（註20・21・22、第2図）。

(馬場)

註

- (1) 平井泰男「熊山田散布地ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』68 岡山県教育委員会 1988
- (2) 福田正継「西谷遺跡一帯と58年度開拓整備事業に伴う発掘調査一」 長船町教育委員会 1985
- (3) 田代健二「亀井戸塚発掘確認調査報告」 備前市教育委員会 1984
- (4) 三杉兼行「宮下貝塚」『岡山県大百科辞典』下 山陽新聞社 1980
- (5) 桑本寛久「大橋貝塚発掘調査報告書」 艶久町教育委員会 1979
- (6) 平井泰男「真徳貝塚B」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』68 岡山県教育委員会 1988
- (7) 近藤義郎「門田貝塚」『岡山県考古古資料』山陽新聞社 1986
- (8) 岡田博「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55 岡山県教育委員会 1983
- (9) 馬場昌一「史跡門田貝塚環境整備事業報告書」 艶久町教育委員会 1998
- (10) 平井泰男・光永真一「塙中遺跡確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12 岡山県教育委員会 1982
- (11) 馬場昌一「助三畠遺跡発掘調査現況説明会資料」 艶久町教育委員会 1982
- (12) 馬場昌一「塙免貝塚現地説明会資料」 艶久町役場庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会 1984
- (13) 宇垣匡雅「古墳の前期古墳一瀬戸町茶臼山古墳の測量調査一」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会 1987
- (14) 平井泰・宇垣匡雅「岡山県長船町亀塙原所在の前方後円墳一亀塙原大塚古墳と金鶏塙古墳一」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会 1990
- (15) 江見正己「木崎山一号窓」『岡山県史考古資料』 山陽新聞社 1986
- (16) 山鹿康平「寒風古窓址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- (17) 岡田 博「官衙」「吉備の考古学的研究」(下) 山陽新聞社 1992
- (18) 永山卯三郎「岡山県通史」上編 岡山県通史刊行会 1930
- (19) 山崎信二「藤原宮瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『文化財論叢』II (余良國立文化財研究所創立40周年記念論文集) 余良國立文化財研究所 1995
- (20) 馬場昌一「岡山県助三畠遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』4 日本貿易陶磁研究会 1983
- (21) 馬場昌一「岡山県助三畠遺跡出土資料」『第11回研究集会報告資料』 日本中世土器研究会 1992
- (22) 橋本久和「吉井川河口出土の大和型瓦器」『中世土器研究』82号 中世土器研究会 1996



写真1 熊山田遺跡周辺の航空写真 (1/10,000) 1996.5.26撮影

第2章 調査の経過と体制

第1節 調査に至る経緯

熊山田遺跡は邑久郡邑久町山田庄に所在する。この地は吉井川の東岸にあって、弥生時代前期の貝塚として著名な国指定史跡「門田貝塚」から北西1kmの地点にあたる。また、JR赤穂線邑久駅から北800mの位置でもある。調査地の現況は、基本的には吉井川の形成した沖積平野で、平坦な水田地となっている。平野部の東端は丘陵がせまり、それに沿うかのように県道や鉄道が南北にほぼ併行して走っている。

この地を東西に縫うように、畑地灌漑用として国営吉井川農業水利事業邑久用水路の新設工事計画を知ったのは、昭和57年度に入って最初に邑久町教育委員会に協議があつてからである。

工事計画によると、岡山県遺跡地図に掲載され、周知されている熊山田散布地の範囲内を横断して、吉井川支流香登川からポンプアップした水を、大口径の埋設パイプを通して邑久町や牛窓町の丘陵部の畑地に給水するといった広域事業であった。そこで邑久町教育委員会は、事前に確認調査を実施して、遺跡の正確な範囲や密度を把握することとした。

(河本)

確認調査

確認調査は第1次、第2次の2回にわたって実施した。第1次は昭和57年12月8日である。調査箇所は散布地東端部で、工事区では昭和57年第2工区にあたる箇所である。つまり旧県道東側にあたる。4か所で試掘を実施したが、包含層は確認されなく、吉井川の旧河道を推察される上層であった。その後、旧県道西側の工事で、表土層である水田耕土を除去した段階で包含層らしい土層が認められたので、昭和58年1月10日再度1か所の試掘を行った。その結果、表土直下に包含層をもつた微高地が所在することが判明した。のちに「月ノ木遺跡」と命名した箇所である。月ノ木遺跡については、引き続き邑久町教育委員会により全面発掘調査を実施した。調査面積は幅3m×約24mで約70m²である。調査期間は昭和58年1月20日から1月29日までの10日間であった。

第2次の確認調査は、昭和58年2月3日に実施した。対象地は「月ノ木遺跡」に続く西側から、県道箕輪・尾張線やJR赤穂線を越えて、さらに西に所在する樋ノ口集落の西側あたりまでの区間である。この区間に5か所の試掘穴(1×1m)を設定し、人力により掘り下げた。なお、試掘穴(トレーナー)番号は、便宜上西側からNo.1・No.2…と付した。確認調査の結果、この区間には延長320mにわたって弥生時代前期から中世にいたる遺構が所在することが判明した。

(河本)

第2節 調査の経過

確認調査の結果、用水路計画地の総延長320mが調査対象地となった。工事幅3mなので960m²が発掘調査対象面積となる。そこで事業主体者側と邑久町教育委員会ならびに岡山県教育委員会の三者に

第2章 調査の経過と体制

より協議を行い、全面発掘調査の体制、経費、調査期間等の検討を行った。これらの協議で特に苦慮したのは、工事計画地は春に田植えを予定されている水田地にかかるので、工事期間も年度内完了予定ということもあって、全てにおいて急がされることとなった。このため町・県で調査員を出しあって、邑久町教育委員会に事務局を置く調査委員会組織で対応することになった。そこで昭和58年12月1日付けで「吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会」を設置した。引き続き文化財保護法第57条1の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査届は調査委員会委員長上野進により昭和58年12月1日付けで文化庁長官宛に提出した。これらを受けて、具体的に現地に入ったのは12月7日からであった。さらに直接現地に赴いたのは調査委員の内、岡山県教育庁文化課文化財保護主事福田正継、同中野雅美、邑久町教育委員会主事補馬場昌一の3名であった。

(河本)

調査の体制（昭和58年度）

吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会

委員長	上野 進	邑久町教育委員会	教育長
副委員長	橋本 泰夫	岡山県教育庁文化課	課長代理
委 員	入江 章弘	邑久町教育委員会	教育課長
調査員	河本 清	岡山県教育庁文化課	課長補佐
調査員	岡田 博	岡山県教育庁文化課	文化財保護主事（調査担当）
調査員	福田 正継	岡山県教育庁文化課	文化財保護主事（調査担当）
調査員	中野 雅美	岡山県教育庁文化課	文化財保護主事（調査担当）
調査員	馬場 昌一	邑久町教育委員会	主事補（調査担当）
監 事	遠藤 勇次	岡山県教育庁文化課	主任
監 事	松本 汪	邑久町教育委員会	主任
事務局			
事務局長	入江 章弘	邑久町教育委員会	教育課長
事務局次長	横山 次男	邑久町教育委員会	社会教育係長
事務局員	馬場 昌一	邑久町教育委員会	主事補

発掘作業員（順不同）

堀 友二	朝倉三郎	小林幹佳	朝倉康忠	三宅 効	原田策郎	梶原泰男	古松豊治	井上 勇
成本和繁	奥田美智子	雪上清子	三宅孝子	大森小鶴	森岡桂子	原田しのぶ	小林敏子	
浦上房江	清水 都	立岡恵美子	梶原登美子	福間寿美子	赤木美美子	谷村正子	高原 順	
赤枝房子	三宅金子	久保田恵美子	奥田友子	原田昌子	西脇真弓	安木正彦	岡村浩治	
鳥山章夫	峰 嘉宏	奥山睦男	藤中寛也	福江信弘				

調査の方法

調査にあたっては工事工程と競合をきたすが、できるだけそうしたことでの支障がないよう配慮して、調査員3名を班別区分した調査体制をとった。そして、320mの調査区を長短はあるものの1区から6区に設定し、急ぐ工事区から順次調査を行う構えをとり実施した。表土除去作業は、重機（バックホー）により耕土した。その下層は人力による作業であるが、鉄道から西側の4区、5区、6区は旧河道上に形成された遺構が2面あり、上面の弥生時代後期の遺構を調査した後、さらに下面の弥

弥生時代中期から前期の堆積面を調査する状態であったので、調査面積は倍増する結果となった。その上、調査は冬期にあたり、昭和59年1月に入ると、県南といえども積雪に見舞われるなど悪天候も重なり、悪戦苦闘の調査であったが、同年1月20日（木）をもって現地作業を終了することができた。

(河本)



第3図 調査区配置図 (1/2,500)

第3節 報告書の作成

報告書の体制

発掘調査後、諸般の事情により「吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会」は解散し、発掘調査報告書が未刊となっていた。このため、邑久町教育委員会では、弥生時代前期から中期を中心とする多量の遺物が出土し、当地域の微高地上の遺跡を知る上で基本ともなる遺跡の概要を報告するため、当時の発掘調査担当者に報告書刊行に向けて依頼した。平成11年12月12日に第1回会議を行い、発掘調査担当者からは刊行に向けて承諾を得た。協議により報告書の作成は、現在進められている邑久町史編纂事業の考古編へ報告書の成果を掲載することにした。以後、調査担当者による「熊山田遺跡発掘調査報告書編集会議」を開催し、また、邑久町教育委員会では出土遺物の図化と写真撮影を行ながる平成15年度まで資料整理と執筆を進めた。

資料の整理や図化、また遺物の写真撮影にあたって、補助者や多くの方々の協力を得た。 (馬場)

報告書作成（平成15年度）

くらしき作陽大学

（食文化学部）

教 授

河本 清（整理担当）

岡山県古代吉備文化財センター

（調査第二課）

課長補佐

中野 雅美（整理担当）

文化財保護主幹

福田 正繼（整理担当）

邑久町教育委員会

教育長

小林 征

（社会教育課）

社会教育課長

長田 富士子

社会教育指導員

日賀 光徳

主幹兼社会教育主事

光辻 百合恵

係長兼社会教育主事

馬場 昌一（整理担当）

主査兼社会教育主事

今古 崇文

報告書作成協力者

奥田恵美子 大久保雅子 大山知子 稲谷知子 関 幸代

調査日記抄

昭和57年12月8日	0区以東の4か所で確認調査を実施。遺構なし。
昭和58年1月10日	0区1か所の確認調査を実施。遺物包含層を確認。
1月20日	0区重機により表土剥ぎ。発掘調査開始。
1月21日～28日	0区発掘調査。写真撮影。
1月29日	0区発掘調査終了。
2月3日	1区から3区にかけて5か所の確認調査を実施。遺物包含層を確認。
12月7日	発掘機材の搬入。1区から6区にかけて重機により表土剥ぎ。発掘調査開始。
12月8日～12月27日	1区から5区の発掘調査。写真撮影。
昭和59年1月7日～1月19日	1区県道部分、2区から6区の発掘調査。写真撮影。
1月20日	発掘調査終了。発掘機材の撤収。

第3章 調査の概要

第1節 調査区の概要

発掘調査は、川水路工事工程にできるだけ支障が生じないようにするために、作業員を3班に編成し急を要する地点から調査範囲を6か所に分割して進めた。調査範囲の4区から6区に至る西側部分では、遺構が存在する面が2面もあり、上位の面の調査を完了してから再び下位の面の調査を行ったため、作業量が倍増する結果となった。

また、1区から6区の調査区の発掘調査に先立ち、前年度発掘調査を実施した「月ノ木遺跡」と命名した調査区を0区とした。それぞれの調査区における調査結果は、以下のとおりである。

0区

この調査区は、旧道西側部分の幅3m×長さ約24mの範囲である。

検出された遺構は、調査区の中央部に重複状況で南北に流走する、弥生時代中期の水利施設と考えられる溝4条、占代の溝1条、また調査区の西部で、東西方向に主軸をとる中世と考えられる掘立柱建物1棟や柱穴が検出された。特殊な遺物として、調査区東端部の黄茶褐色粘質土層より、分銅形土製品が1点出土した。

1区

この調査区は、県道箕輪・尾張線と旧道との間に位置する約50m範囲である。

検出された遺構は、東西方向に並行して流走する溝3条と竪穴住居1軒以外に、多くの柱穴である。溝はいずれも弥生時代中期のものである。竪穴住居は北半分を検出し、床面で弥生時代後期の高杯が出土した。

1区県道部分

県道箕輪・尾張線の迂回路が敷設されてから、調査の最終段階に作業を行った地点である。検出された遺構は、弥生時代中期の溝2条と室町時代の井戸1基である。溝2条の内には、1区で検出した東西に流走する溝に連続するものが認められた。室町時代の井戸は素掘りで、直径約180cm、深さ約110cmを測る。井戸内から土師質小皿、備前焼播鉢片、青磁片、白磁片が出土した。

2区

この調査区は、県道箕輪・尾張線の西端より川水路までの約40m間である。遺構はいずれも水田の耕土直下に検出された。包含層の上面はある程度の削平を受けたが、遺構の残存状況は良好で、遺構の存在する密度も高かった。

検出された遺構は、主として弥生時代と中世のものである。弥生時代の遺構は、溝6条と多数の柱穴

である。中世の遺構は、井戸ⁱ 2基、多数の柱穴である。弥生時代の溝は、いずれも当時の灌漑用水路として使用されたと考えられ、大規模なものは幅が600~700cmにも及ぶものも存在した。南北方向に流走する溝はいずれも規模が大きく、数回の改修や掘り直しが行われていた。溝内には砂が厚く堆積し、洪水によって埋没したと考えられる。なお溝内からは、多量の土器が出土した。

中世の井戸は、直径約150cmの円形で、深さは約150cmであった。井戸内からは、中国からの輸入陶磁器、須恵質土器、土師質土器、備前焼などの土器以外に、曲物などの木器も出土した。

3区

この調査区は、用水路から西のJR赤穂線までの約70m間である。この地点は、前述した2区も含めて、熊山田遺跡の中心部に相当する。検出した遺構は、水田の耕土直下に存在し、遺構の存在する密度も高かった。検出された遺構のうち弥生時代に属するものは、土壤、溝、掘立柱建物、たわみなどある。中世のものは、井戸や溝である。

弥生時代の土壤は、計15基も存在し、中期のものがほとんどであった。古墳時代の土壤は、1基であった。平面形態は円形または橢円形を呈するもので、最大径は100~150cmを測る。これらの土壤のなかには、土器が多量に出土したものもある。

溝は、2区に面した調査区の東端で5条検出した。これらの溝の時期は、弥生時代中期に属するものが2条、弥生時代中期から後期に及ぶものが3条で、中世に属するものが2条ある。特に調査区の最も東端に存在した溝は、幅が500~600cmの大規模なもので、2区で検出した幅の広い溝と同一方向に流走していた。

JR赤穂線に面した西端地点には、掘立柱建物が存在した。桁行2間と梁行1間まで確認したが、さらに西側のJR赤穂線の地点方向に張り出す可能性が強い。柱穴間の距離は150~170cmを測り、柱穴の平面形は円形であった。柱穴内から弥生時代中期の土器が出土した。

この調査区の中心部からやや東側の2区に寄った部分で、幅約18mを測る緩やかに傾斜した浅い窪地が存在し、弥生時代前期から中期の土器が多量に出土した。

中世の井戸は、直径約200cmの円形を呈するもので、検出面からの深さは約150cmを測る。井戸ⁱの内部からは、中国製の青磁碗の完形品をはじめ備前焼や土師質土器などとともに木製の曲物も出土した。さらに井戸の底部からは、炭化米やウリの種子、魚骨、ウロコなども認められた。

この3区から出土した特異な遺物として、人形土製品がある。土壤内より甕形土器の破片などとともに出土した。大きさは約4.0×4.5cmを測る球状を呈した頭部のみで、鼻と耳の部分を欠損しているものの、全体に極めて立体的な表現になっている。共伴した土器より弥生時代前期後葉に属するもので、全国的にも珍しいものである。

4区

この調査区は、JR赤穂線から農道に至る約60m間である。この4区から西側の6区までは、遺構が存在する面が2面も存在した。JR赤穂線に近接した東端部分は、前述した1区から3区までと同様に、水田の耕土直下に遺構面を確認した。ところがJR赤穂線から約15m西側に寄った地点から5区に面した部分は、急斜面になって多量の土器を含む土砂が約250cmもの厚さに堆積していた。

検出した遺構は、土壤3基、斜面堆積、柵列状遺構などで、上位の遺構面にも存在した。これらの遺

構はいずれも弥生時代中期のもので、土器片が出土した。

この調査区の特徴は、多量の土器が斜面に堆積していたことである。弥生時代前期と中期のもので、完形品に近いものも認められた。

斜面の下位で確認した砂層内からは、弥生時代前期と中期の土器以外に、木製鍬の未製品も出土した。

斜面に堆積していた黒褐色土内には、炭化米や焼土が多く含まれている部分が存在し、比較的多くの炭化米も認められた。

5 区

この調査区は、農道の西側に位置する約30mの狭い範囲である。

検出した遺構は、袋状土壌が1基だけで、地形そのものが東側へ緩やかに傾斜する窪地（たわみ）となっていた。

袋状土壌の形態は、約100×120cmの楕円形に近いもので、検出面からの深さは約45cmと極めて浅い。内部には炭化物を含む黒褐色土、黄褐色土、灰黒褐色土が堆積し、弥生時代中期と推定される土器片がわずかに出土した。

東側へ緩やかに傾斜する窪地からは、弥生時代中期の土器が出土したが、前述した4区の傾斜部分に比較すると、極めて少ない量である。

6 区

この調査区は、熊山田遺跡の調査予定地の最も西端に位置する約90mの直線部分である。遺構が存在する面は2面で、上位の面は海拔約180cm、下位の面は海拔約150cmのレベルになっていた。

上位の面で検出した遺構は、溝2条である。溝の幅は広いものと狭いものが認められるが、検出した方向はいずれも南北方向を示していた。溝内から遺物が出土しないが、層位的に判断して、中世の時期になるであろう。

下位の面で検出した遺構は、溝9条である。上位の面で検出した溝と同様に、流走する方向は南北を示し、遺物は皆無であった。層位的な位置関係から判断して、これらの溝は弥生時代前期から後期に属するであろう。

（福田・馬場）

第2節 基本層序

今回の調査区は、吉井川の沖積作用により形成された微高地に、南東から北西方向に幅3mのトレンチを入れた形となった（第4図）。各調査区の基本的な土層柱状図（第5図）をみると微高地基盤面である旧地形は2区・3区で海拔1.8m～1.9mを測る。3区では水田層直下に基盤面を検出し、当微高地で最も海拔が高く安定した基盤面を示した。2区・3区から南東へは緩やかに下がり、0区において海拔1.2mを測る。0区以東は昭和58年1月の試掘調査では基盤面は検出されず、微高地は旧河道へ続く。また4区の東端から7m以西から基盤面は次第に下がり、0区から続く硬く締まった黄褐色粘質土の基盤層である微高地は旧河道へ続く。微高地斜面の微妙上層で弥生時代前期から中期中葉までの多量の土器が出土した。5区・6区は4区までの基盤層と異なり、軟質の黄褐色粘質土の基盤層で、5区全体は

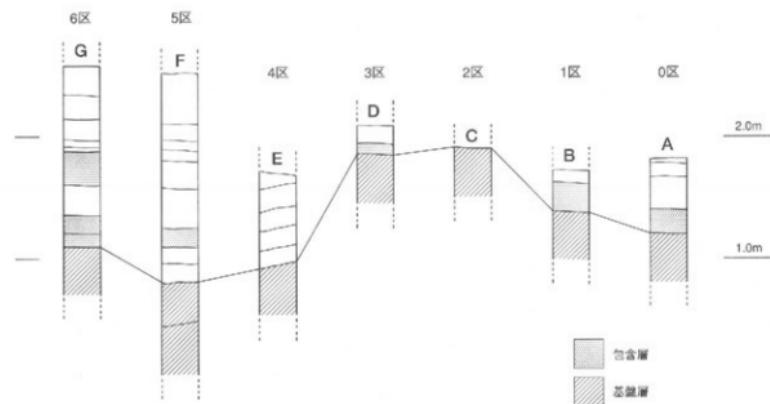
第3章 調査の概要

緩やかなたわみとなっていた。6区は調査区西半分から基盤面が約30cm下がり、下層に溝を中心とした遺構と上層に5区から続く基盤層である黄褐色粘質土層を掘り込む溝があり、2面にわたり遺構が存在した。

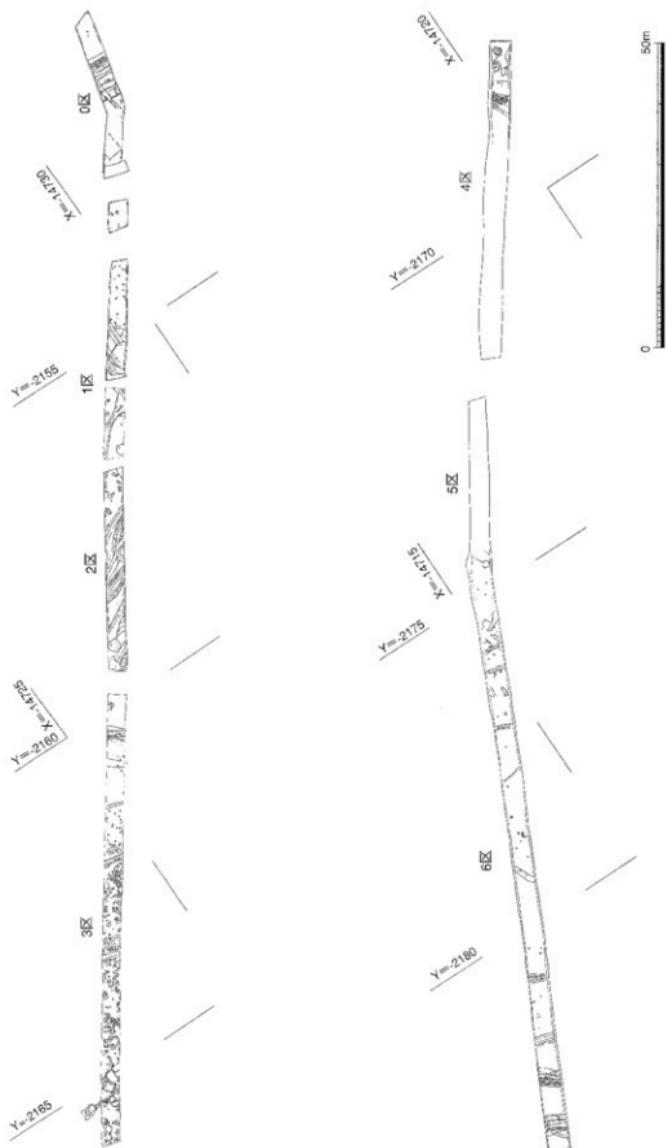
(馬場)



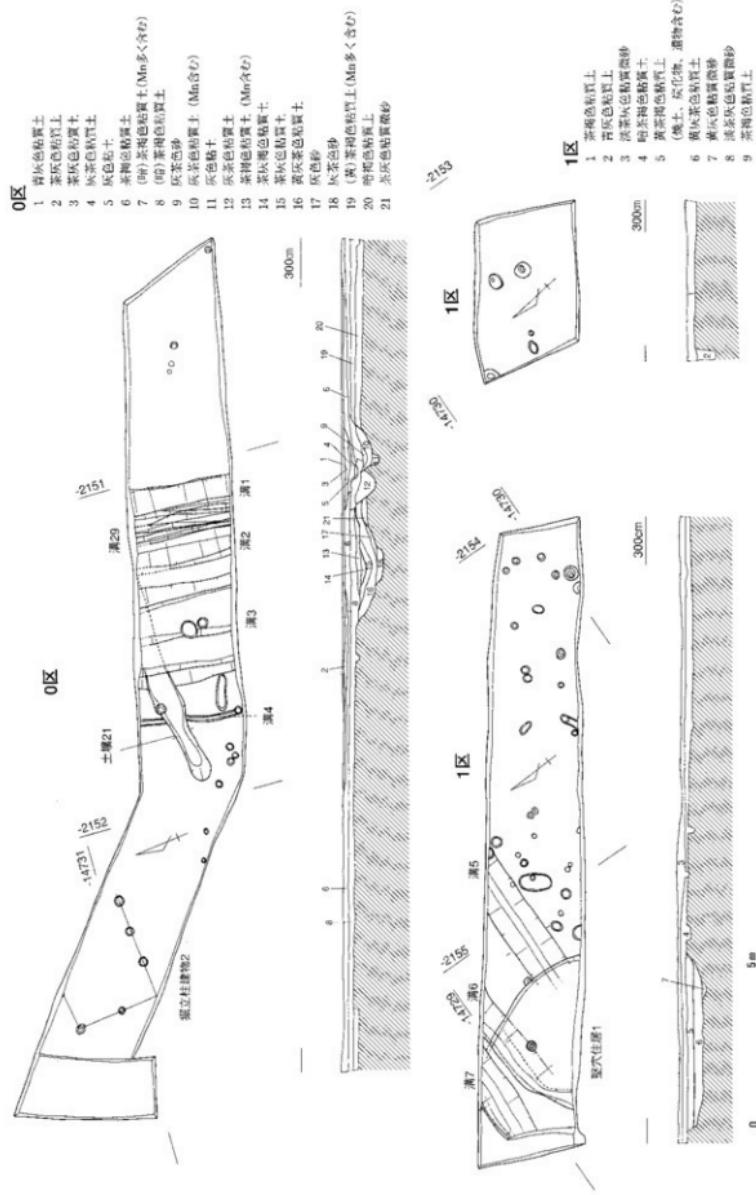
第4図 土層柱状図作成位置図 (1/2,500)



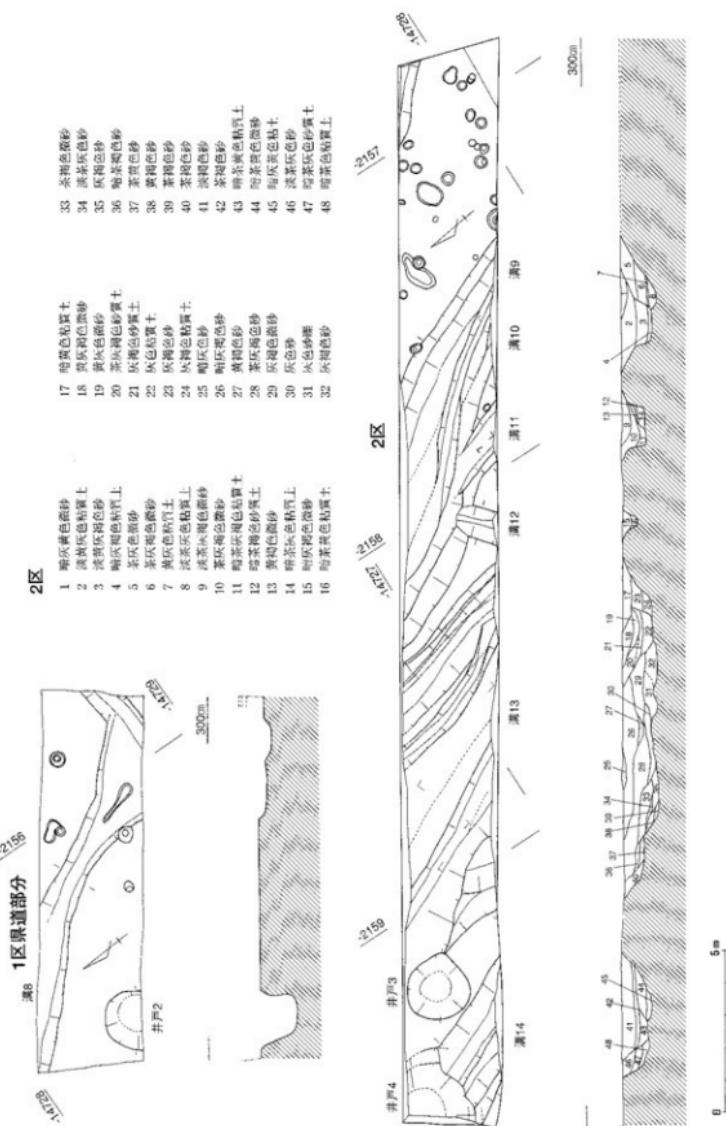
第5図 調査区分土層柱状図 (1/40)



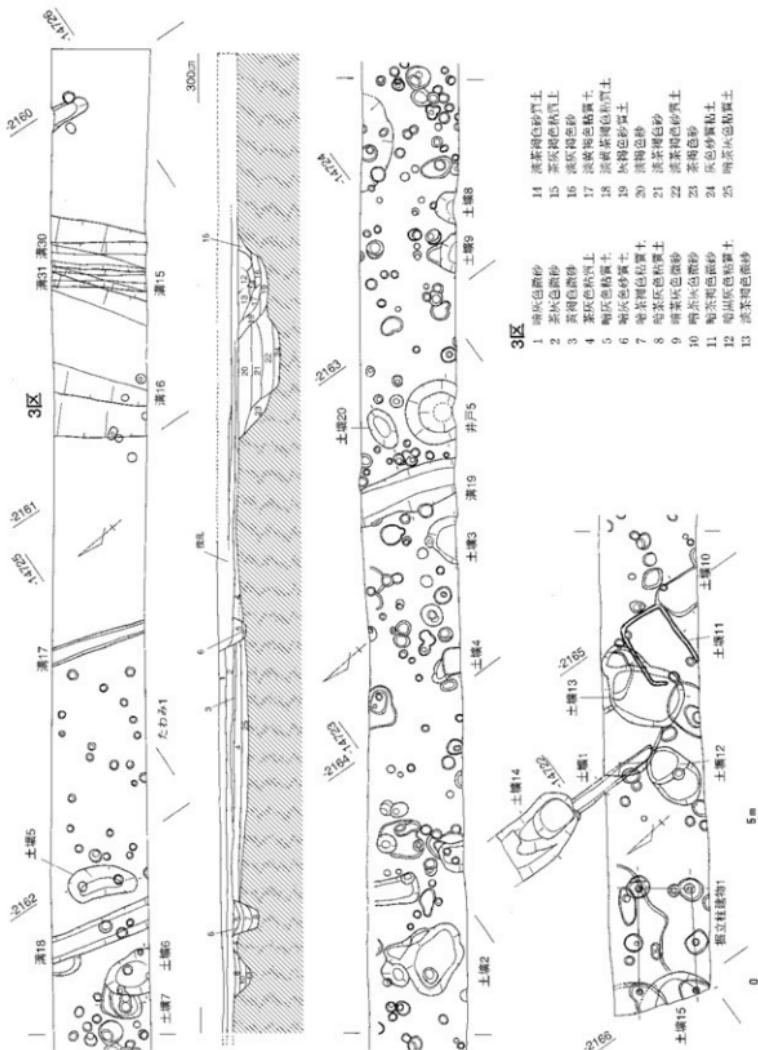
第6図 調査区全体図 (1/800)



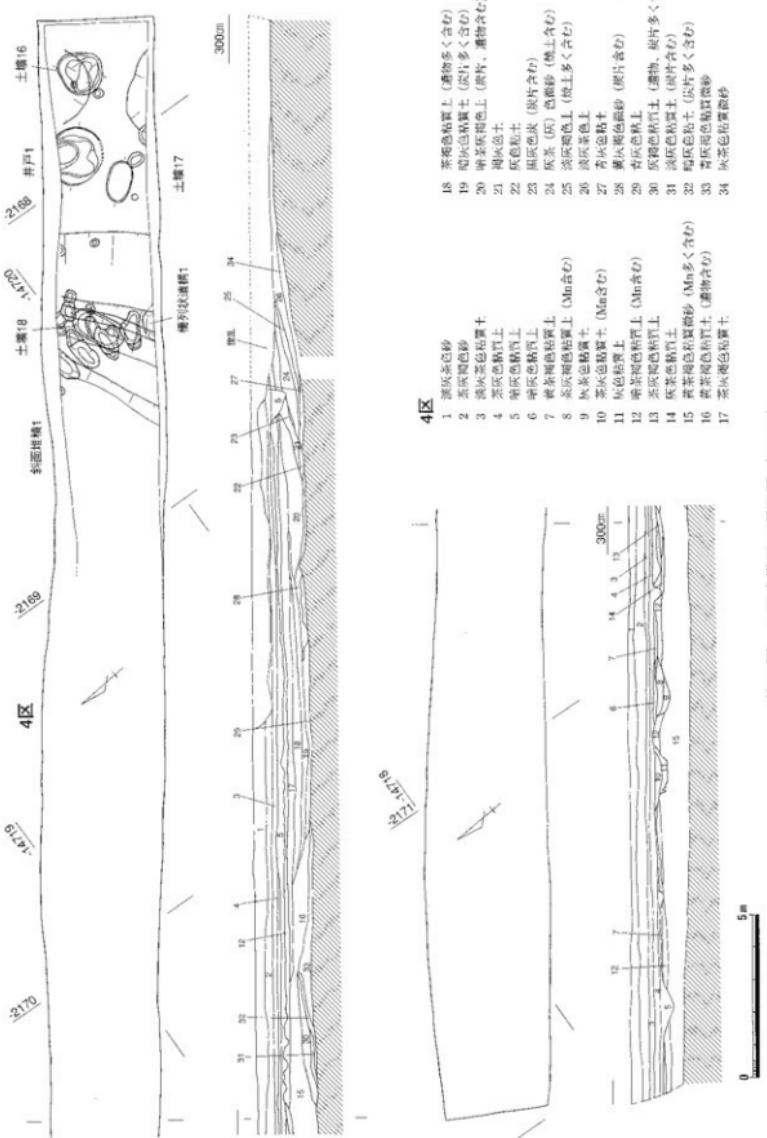
第7図 0区・1区横構造・断面図 (1/150)



第8図 1区煤道部分・2区連構平・断面図 (1/150)



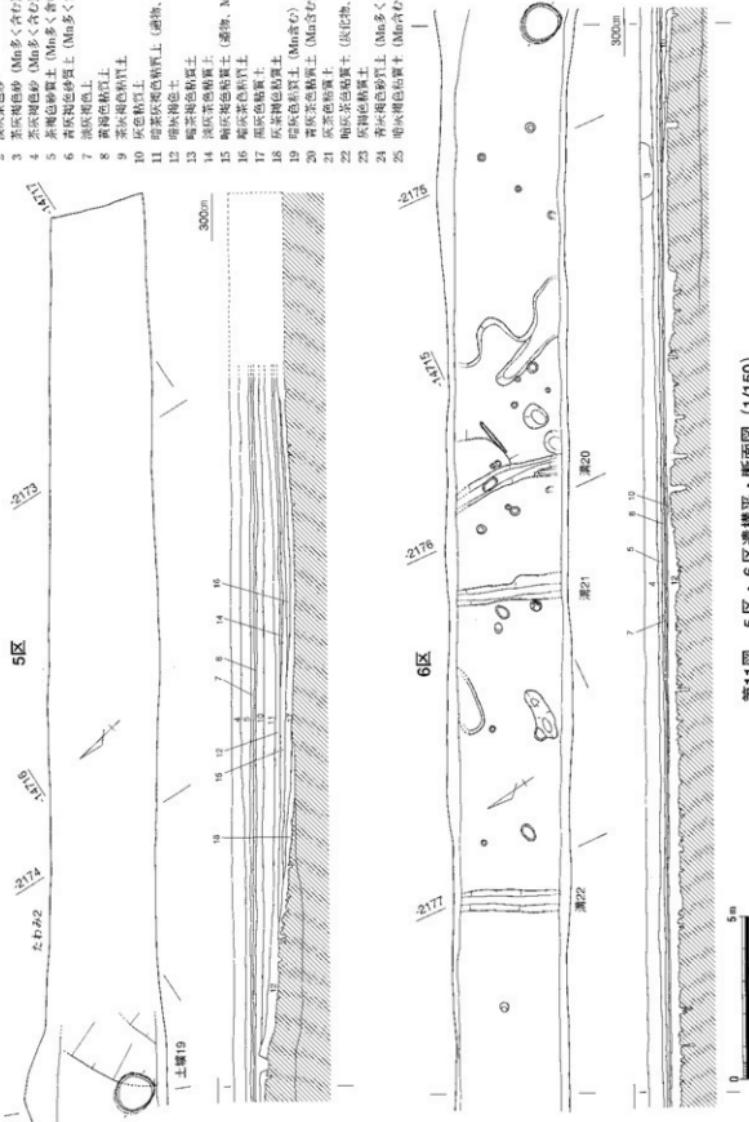
第9図 3区連構平・断面図 (1/150)

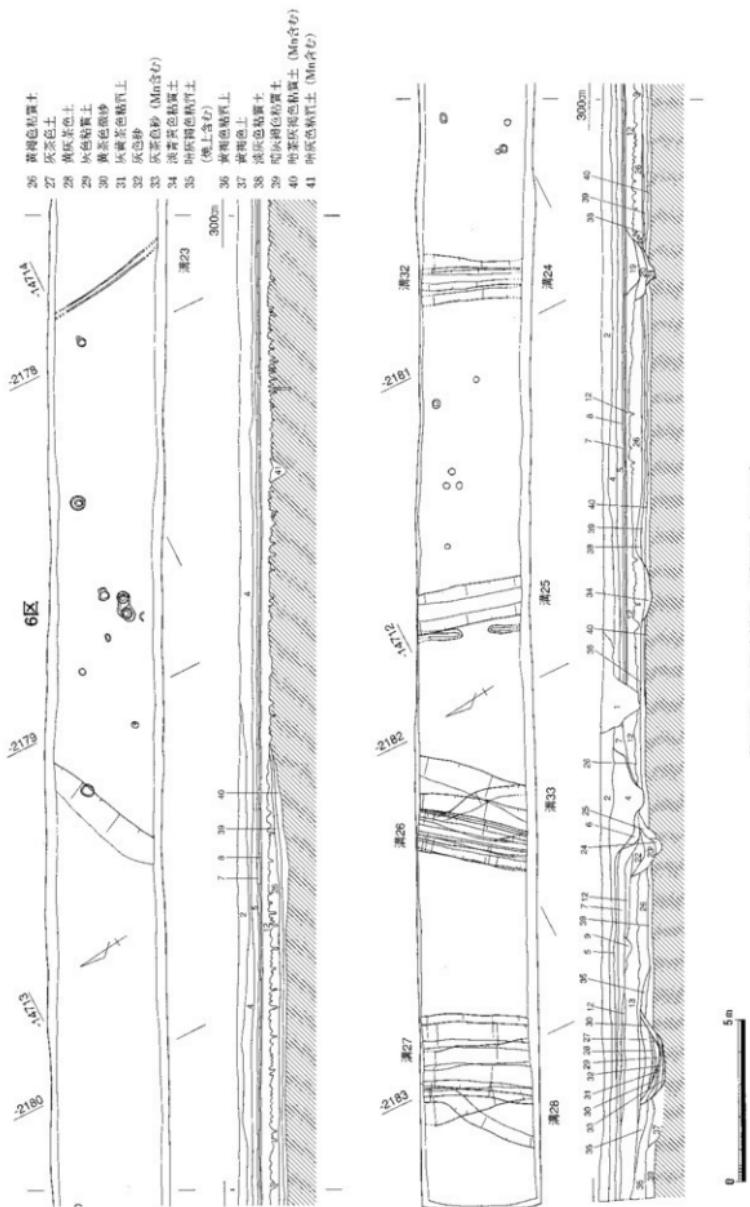


第10図 4区遺構平・断面図 (1/150)

5・6区

- 1 淡青灰茶色砂
- 2 淡灰茶色砂
- 3 苦灰地色砂 (Mn多く含む)
- 4 苦灰地色砂 (Mn多く含む)
- 5 苦灰地色砂質土 (Mn多く含む)
- 6 苦灰地色砂質土 (Mn多く含む)
- 7 淡灰地色土
- 8 苦灰色粘土
- 9 苦灰褐色粘土
- 10 灰色粘土
- 11 苦灰地色粘土 (鐵物、鐵土含む)
- 12 喜灰地色土
- 13 喜灰地色質土
- 14 淡灰地色質土 (鐵物、Mn含む)
- 15 苦灰地色粘質土 (鐵物、Mn含む)
- 16 苦灰地色粘土
- 17 苦灰色粘土
- 18 苦灰地色質土
- 19 苦灰地色質土 (Mn含む)
- 20 苦灰地色質土 (Mn含む)
- 21 苦灰地色質土
- 22 喜灰地色粘質土 (鐵化物、鐵物含む)
- 23 苦灰地色粘土
- 24 苦灰地色粘土 (Mn多く含む)
- 25 苦灰地色粘質土 (Mn含む)





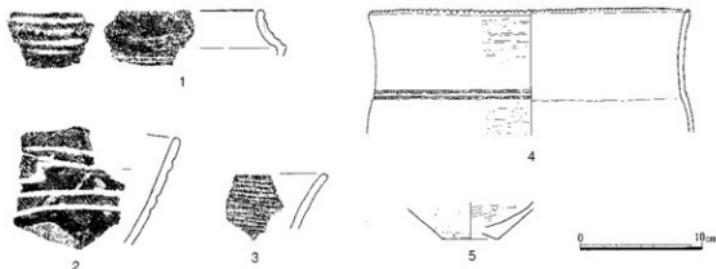
第12図 6区遺構平・断面図 (1/150)

第3節 繩文時代の遺物

1 繩文時代の概要 (第13図)

熊山田遺跡での縄文時代の土器は少量であり、いずれも本遺跡の所在する微高地で海拔の高い0区・1区・3区の小ピット埋土中から出土した。0区で出土した1は、口縁部が内傾しながら立ち上がる浅鉢で、口縁外面に貝による4条の凹線文を施す。時期は縄文時代後期後葉、福田KⅢ式併行期と考えられる。1区県道部分で出土した2は、口縁部が波状をなすと考えられる深鉢で、口縁外面に2本の沈線で描かれた間に縄文を施す。時期は縄文時代後期前葉、中津式併行期と考えられる。3区で出土した3は、外反する口縁部の外面に貝殻条痕文と口縁端部に刻目を施す深鉢。3区で出土した4・5は同一個体の深鉢で、ゆるく外反する口縁部端部に刻目、頸部と胸部の境に2条の押引文を施す。底部はくぼみ底である。3・4・5の時期は、空帶文土器出現前の縄文時代晩期と考えられる。

(馬場)



第13図 縄文土器 (1/4)

第4節 弥生時代の遺構・遺物

1 弥生時代の概要

今回の調査では、弥生時代の各時期の遺構・遺物が多く検出された。地形的には、2・3区が南北方向に延びる微高地部で、弥生前期前半からの遺物が確認されている。住居跡は検出されていないものの、弥生時代当初からこの微高地を占地していたものと考えられる。遺構・遺物は、弥生前期～中期が最も多く検出された。2区の東側には、規模の大きい南北方向の溝が集中して存在しており、弥生中期～後期の幹線水路域としている。また、掘立柱建物、土壙、溝などが確認された。4区は、微高地の西端部にあたり、西方向に下がっている。斜面堆積からは、木製の鎌の未製品をはじめ弥生前期～中期の遺物が大量に出土した。また、微高地斜面にも遺構が存在し、弥生中期の井戸、土壙などが確認されている。5区には、たわみ状の微高地縁辺があり、ここにも弥生前期を中心とする遺物が検出されている。5～6区は、低位部にあたり、遺構面も2面存在しており、溝などが確認された。

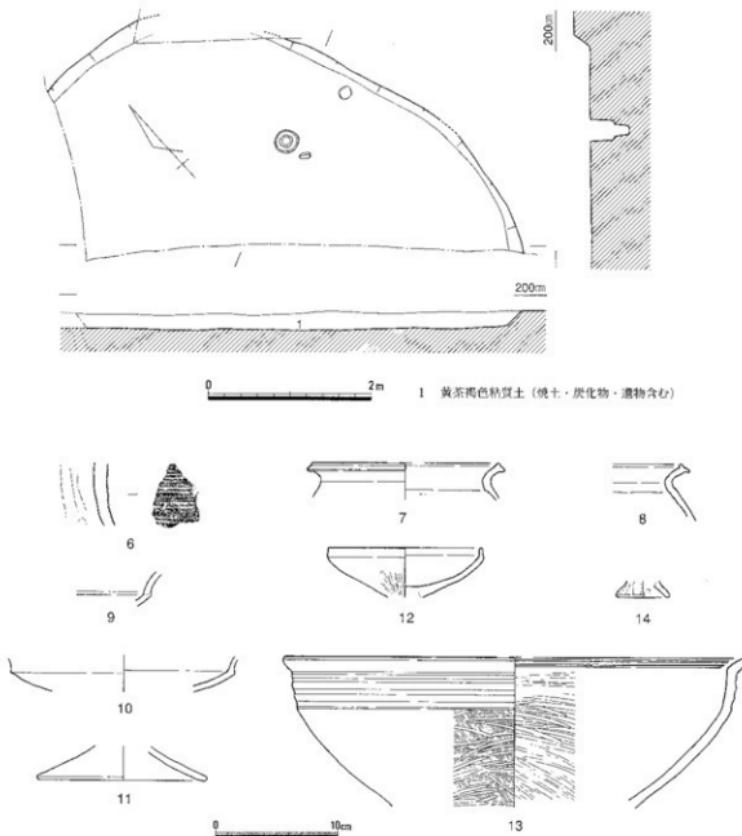
(中野)

2 竪穴住居

竪穴住居1（第14図、図版1-2）

竪穴住居1は、1区の南西部に位置する。住居の北西1/5は搅乱を受け、南西半分は調査区外となり、検出できたのは北東の約1/4である。住居の平面形状は検出状況から不整楕円形を呈すると思われる。住居の規模は、復元すると直径800cm前後、検出面から床までの深さは約20cmを測る。壁体溝は確認できなかった。柱穴は住居の壁から内側100cmの位置に1個検出した。掘り方は円形で、径約30cm、深さ48cmを測り、径約10cmの柱のめり込みが認められる。

遺物としては、住居東側の壁面近くの床面直上で、杯部口縁部が上方へ小さく立ち上がる小形高杯



第14図 竪穴住居1平・断面図(1/60)・出土遺物(1/4)

12が出土した。ほかに焼土や炭化物を含む黄茶褐色粘質土の覆土から、頸部に多条の沈線を施す長頸壺6、「く」字状に外反した口縁部の端部を肥厚した甕7・8、高杯9~11、短い「く」字状口縁の内側と体部外面上部に凹線状のナデを施し、体部下部の外面には斜め方向のハケメ後に粗くヨコ方向のヘラミガキ、内面にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施した鉢13、製塙土器14が出土した。

豎穴住居の時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉と考えられる。

(馬場)

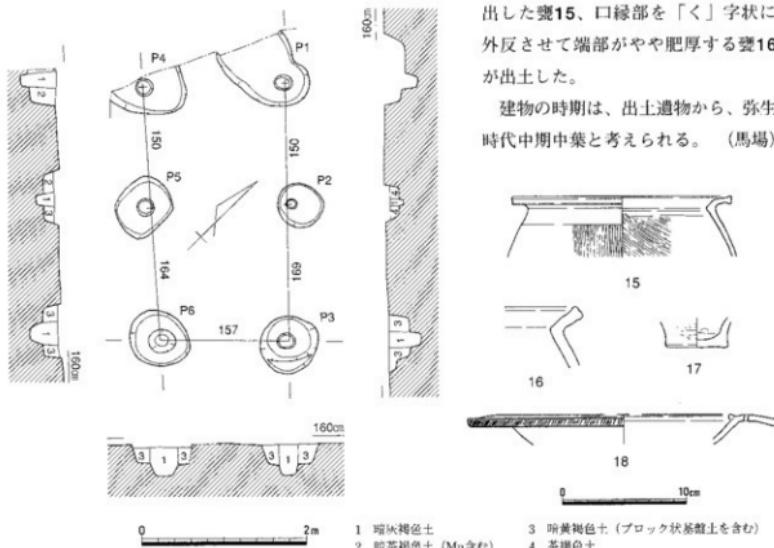
3 挖立柱建物

掘立柱建物1 (第15図、図版4-1)

掘立柱建物1は、3区の西端部に位置する。調査区の南北の幅が3mと狭く、北側・南側・P1とP4より西側は調査区外のため全体の規模については不明である。現状で桁行2間、梁間1間の掘立柱建物で、棟方向は調査区の長軸方向と同じでN-48°-Wである。柱間は北桁行が150・169cm、南桁行が150・164cm、梁間は157cmを測る。床面積は5.0m²である。P3とP6の梁間に比べP1とP4の梁間は約20cm長くなっている。柱の掘り方は、円形ないし不整梢円形で、径は50~60cm、深さは確認面から25~45cmを測る。埋土は暗茶褐色・暗黃褐色・茶褐色を呈する。すべての掘り方から、径約10~20cmを測る平面円形の暗灰褐色の柱痕跡を確認した。

出土遺物は比較的少なく、いずれの土器も柱の掘り方埋土から出土した。P1から平底の甕の底部17、水平に張り出した口縁部の端面を上方に小さく突出させて、斜方向に刻目を施し、口縁部の杯部分近くに焼成前の穿孔を行った高杯18、P4から口縁部が「く」字状に外反し端部を上方に小さく突出した甕15、口縁部を「く」字状に外反させて端部がやや肥厚する甕16が出土した。

建物の時期は、出土遺物から、弥生時代中期後葉と考えられる。(馬場)



第15図 挖立柱建物1 平・断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

4 井 戸

井戸 1 (第16・17図、図版4-2)

4区の南東端部で検出した井戸で、北東部分の約1/6は調査範囲外になるため、調査することができなかった。この井戸の南東側には土壌16が、西側には土壌17が、それぞれ近接した位置に確認されている。これらの遺構が存在した所は、堅く締まって安定した微高地の端部に相当し、その北側は緩やかに傾斜する斜面になって、後述する大量の弥生土器が出土した地点である。

平面形は長径約180cm、短径約160cmの楕円形に似た形態をなし、検出面からの深さは約120cmになっていた。この井戸は、第4層の茶褐色土が堆積した土壌の中央部を、後になって深く掘り下げたもので、上位と下位ではその幅が異なり、断面形が2段掘りの様相を呈していた。計測した第2層の下位の幅は約100cm、第3層の下位の幅は約50cm、底部の幅は約30cmを測り、井戸の底面はほぼ水平になっていた。

井戸内には褐色土、灰褐色土、灰黒褐色土、黒褐色土、灰黄褐色土、黄褐色土が層をなして認められたが、土器や石器などの遺物は、第3層の灰黒褐色土の中に多く含まれ、底部に近い第7層の黄褐色土の中には確認できなかった。

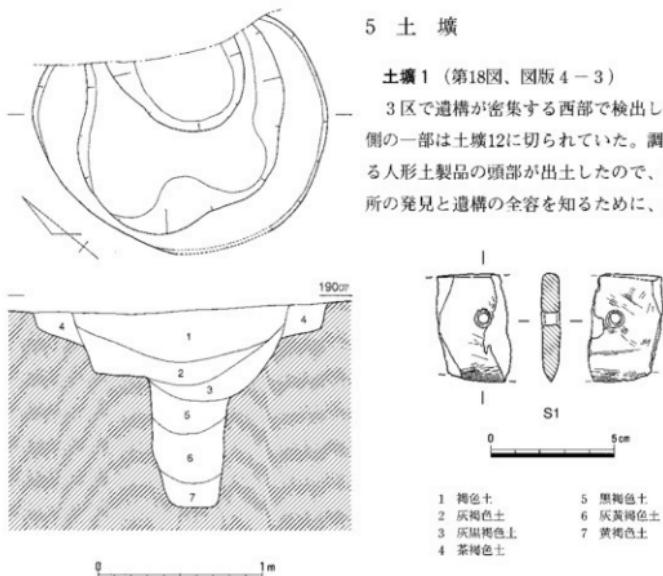
この井戸から出土した土器で、肩部に1条の削り出し突帯を有する壺19だけは、前期に属する古いものであるが、それ以外の土器20～33は、中期中葉の時期と思われる。磨製石包丁の破片S1は、石材が片岩ではないかと推定され、両面から穿たれた凹孔が認められる。

(福田)

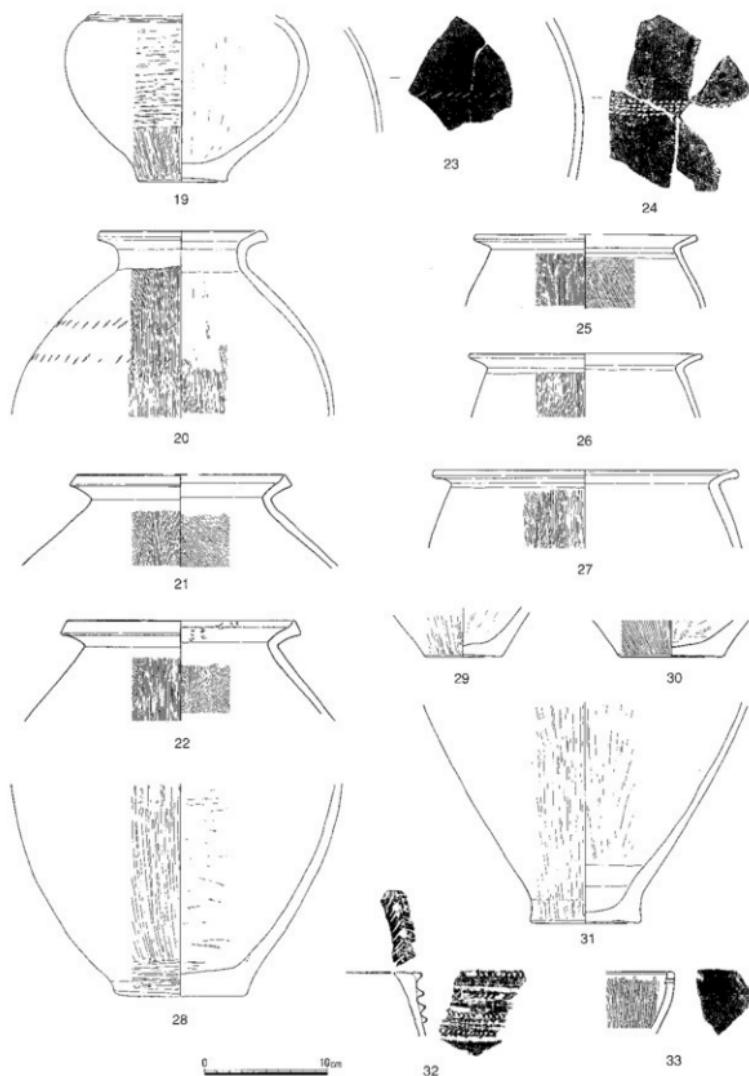
5 土 壤

土壤 1 (第18図、図版4-3)

3区で遺構が密集する西部で検出した土壤で、南側の一部は土壤12に切られていた。調査時、後述する人形土製品の頭部が出土したので、頭部以外の箇所の発見と遺構の全容を知るために、北側へ調査区



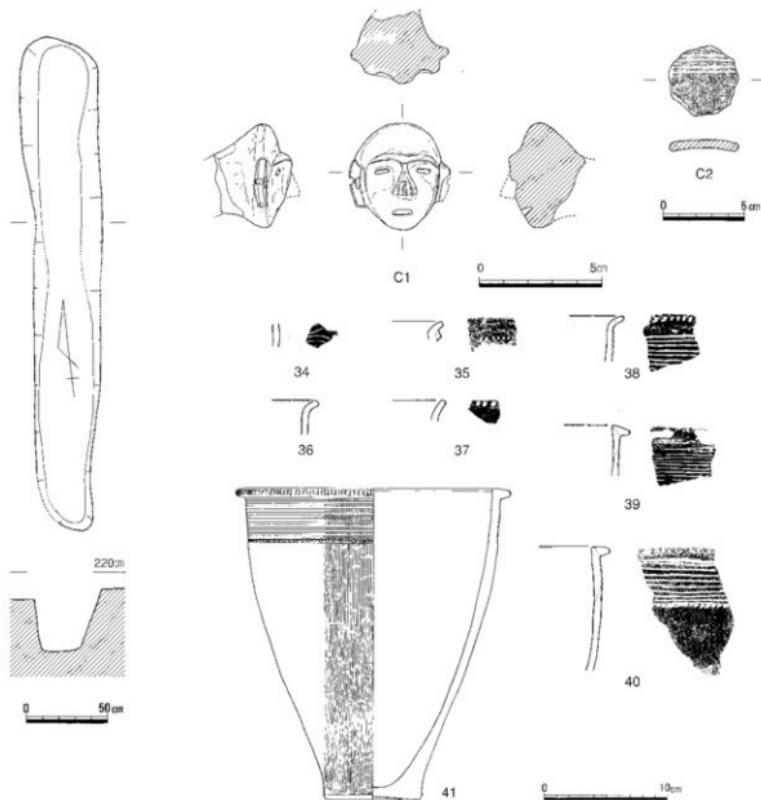
第16図 井戸 1 平・断面図 (1/30)・出土遺物 1 (1/2)



第17図 井戸 1 出土遺物 2 (1/4)

を拡張すると、北側端部は土壤14に切られていた。平面形はほぼ南北に主軸をもち、北側に向かいやや幅が広くなる細長い隅丸長方形を呈する。規模は、長さ305cm、幅は最大で46cm、深さ40cmを測る。底面はほぼ水平を呈し、断面は「U」字状に急角度で掘り込まれている。

出土遺物は、土器と土製品が認められた。胴部に円弧状の沈線を施す壺34、35~41は壺である。35は口縁部を短く外反し、頸部に断面三角形の突帶を貼り付け、端部に刻目を施す。37・38は外反する口縁部の端部に刻目を施す。36はない。39~41は口縁部外面に断面三角形の突帶を貼り付け、胴部上半には10条に達するヘラ描沈線を施す。また40・41は、沈線の下端にヘラ先で刺突文を配する。C1は人形土製品の頭部で、肩・耳・鼻を粘土の貼り付けや隆起により立体的に、目・鼻穴・耳穴・口をヘラ状工具の刺突でそれぞれ表現している。鼻と左耳の一部を欠くが、顔面を非常に具象的に造形している。頭部後ろは欠損する。土壤内からは頭部以外の破片は出土しなかった。C2は沈線



第18図 土壌1平・断面図(1/30)・出土遺物(1/2・1/3・1/4)

を施した甕片の周囲を調整して円形に仕上げた土製円板である。

土壤の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。

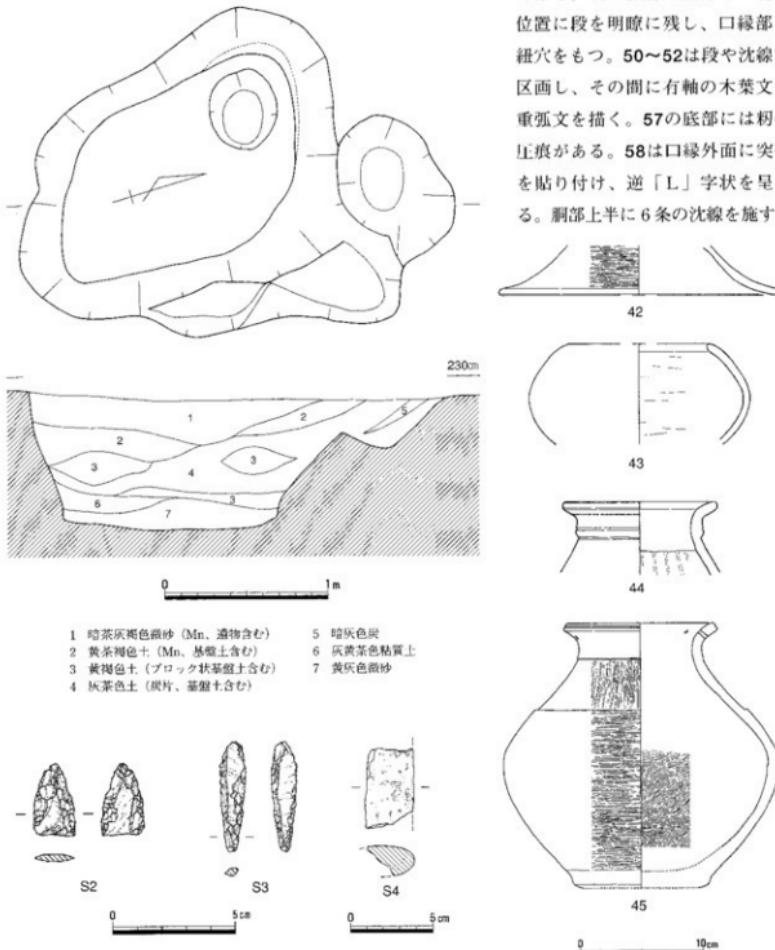
(馬場)

土壤 2 (第19・20図、図版5-1)

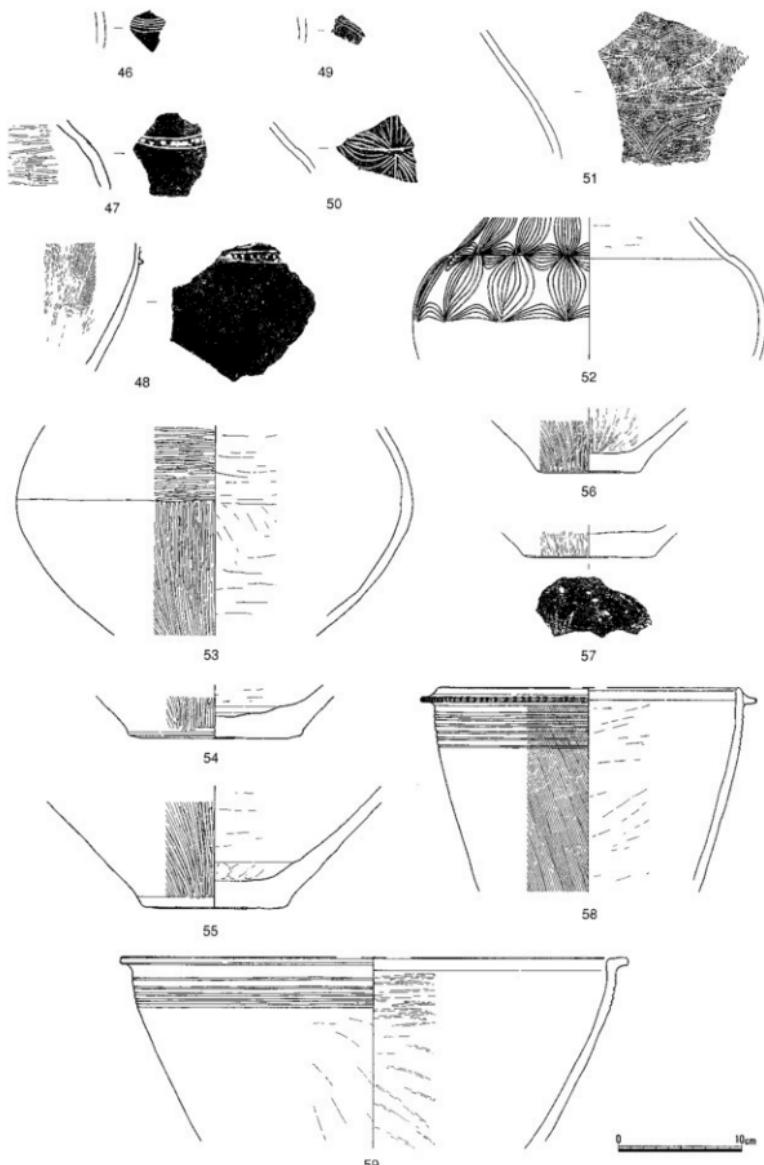
3区の西寄りで検出した土壤で、平面形は北東側に張り出した梢円形を呈する。規模は南北228cm、東西216cm、深さ79cmを測る。底面はほぼ水平であるが、北側に梢円形の浅い穴が穿たれている。

出土遺物は、土器と石器が認められた。土器は蓋42、壺43~53、壺と甕の底部54~57、甕58・59

である。45は頸部と胴部との境の位置に段を明瞭に残し、口縁部に縦穴をもつ。50~52は段や沈線で区画し、その間に有軸の木葉文や重弧文を描く。57の底部には糊の圧痕がある。58は口縁外面に突帯を貼り付け、逆「L」字状を呈する。胴部上半に6条の沈線を施す。



第19図 土壤2平・断面図 (1/30)・出土遺物1 (1/2・1/3・1/4)



第20図 土壌2出土遺物2 (1/4)

石器は平基式の石鎌S 2、石錐S 3、破損しているが断面が楕円形を呈する石棒S 4である。土壇の廃絶時期は、前期前葉の遺物を多く含むが、58の型から弥生時代前期後葉と考えられる。(馬場)

土壇3 (第21図、図版5-2)

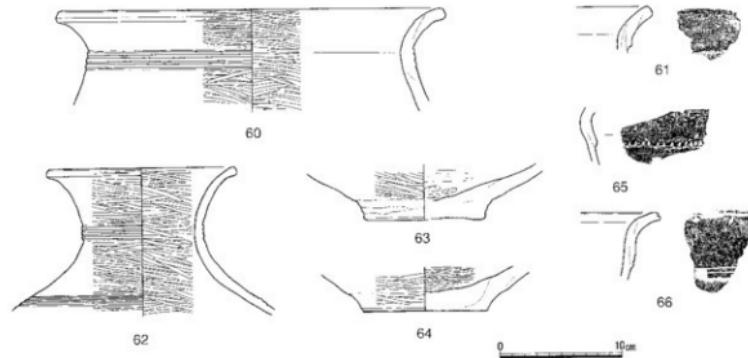
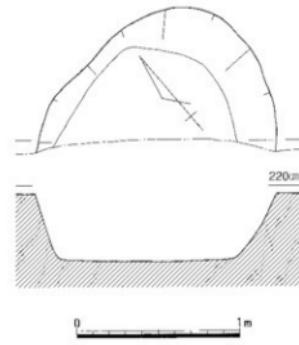
この土壇は、3区のほぼ中央に位置し、土壇2の南東約10mに検出された。土壇は、北側の半分しか検出されていないが、その平面形からみて楕円形を呈すると考えられる。規模は、長さ約144cm、深さは約40cmを測る。断面形は逆台形で、底部はほぼ水平であった。土壇内には、暗茶褐色泥砂が堆積し、60~66などの土器が出土した。

60~66はいずれも前期の上器で、壺60~64、甕65・66がある。60・61は、やや大形の壺で、60は頸部に削り出し突帯を施し、61は外傾接合を利用した段をもつ。63は、頸部、胴部に削り出し突帯を施す。65・66は、いずれも頸部に段をもち、刻目を施す65、ヘラ描沈線の66がある。61・65・66は、接合を利用した段を施しており、やや古相を示している。これらの上器は前期前半期の特徴を示している。土壇の性格については不明である。(中野)

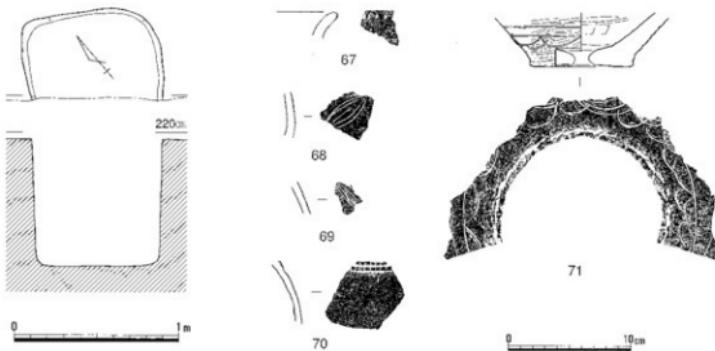
土壇4 (第22図)

土壇4は、3区の微高地に位置し、土壇3の南東約3mに検出された。土壇は、南側は調査区外であるが、検出状況から直径約80cmの円形を呈すると考えられ、深さ約78cmを測る。土壇内には、暗茶褐色泥砂が堆積しており、67~71の土器が出土した。

67~71は、いずれも前期の土器で、67は口唇部に刻目を付けている。68・69はヘラ描きによる木葉文、直線文を施す。70は削り出し突帯。71は、底部に焼成後の穿孔があり、胴部下半にヘラ描直線文2条、その下部に半円弧文を連続させている。土器は、前期前半期の特徴を示している。(中野)



第21図 土壇3平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第22図 土壌4平・断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

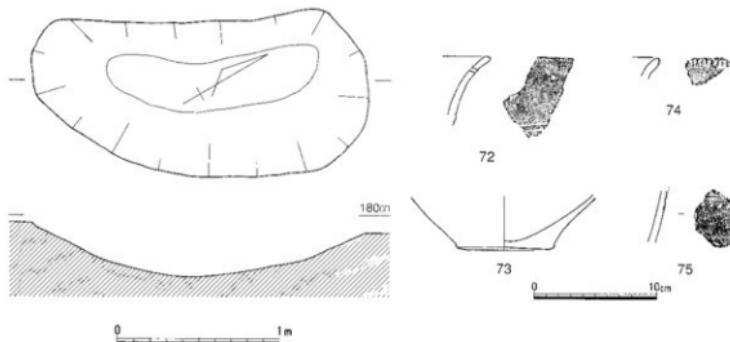
土壌5(第23図)

この土壌は、3区の微高地上に位置し、溝18の東側に隣接して検出された。上壌は、ほぼ南北に長い長楕円形を呈している。規模は、204×95cmで、深さは約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。土壌内からは、72～75の土器が少量出土した。

72は壺で、緩やかに外反する口縁部もち、穿孔が1か所認められる。74は甕の口縁部で、口唇部に刻目をもつ。75は、2条のヘラ描沈線の下部に刺突文を施す。土器は、いずれも前期前半期の特徴を示している。
(中野)

土壌6(第24図、図版5-3)

土壌6は、3区のほぼ中央の微高地上に位置し、土壌5の西側約3mに検出された。土壌の南側端は調査外であるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は、幅130cm、長さは約180cm前後と推定される。深さは約48cmで、断面形は逆台形を呈する。土壌内には、第1～3層がレンズ状に堆積



第23図 土壌5平・断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

していた。出土遺物は、76～78などの土器が少量出土した。時期は、中期。

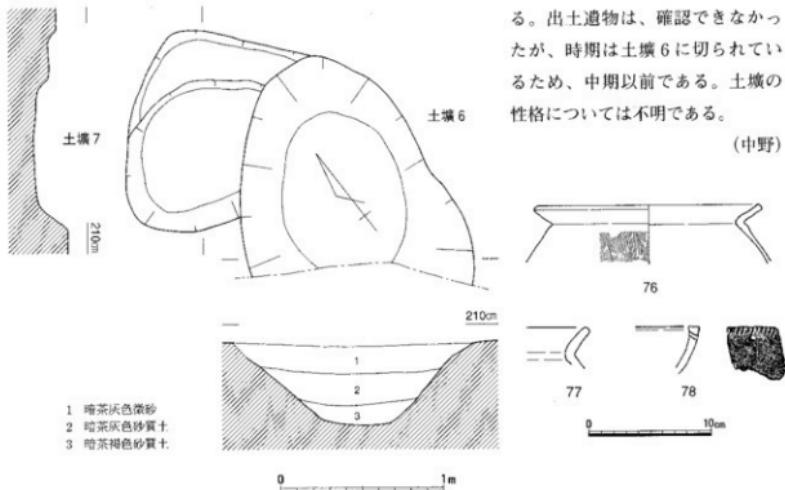
(中野)

土壤7 (第24図、図版5-3)

この土壤は、3区の微高地上に位置し、土壤6の北側に接して検出された。土壤の東側は、土壤6に切られている。平面形は、不整円形を呈しており、長さ約124cmで、深さは約10cmを測る。土壤の

北側は浅く、2段掘りとなっている。出土遺物は、確認できなかつたが、時期は土壤6に切られていいるため、中期以前である。土壤の性格については不明である。

(中野)



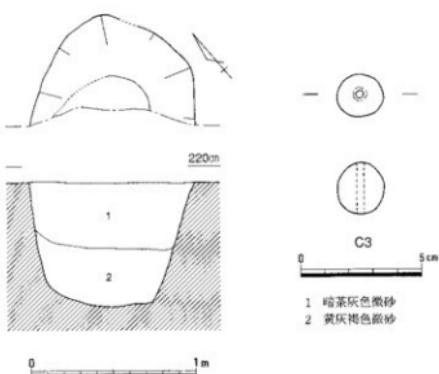
第24図 土壌6・7平・断面図(1/30)・土壌6出土遺物(1/4)

土壤8 (第25図、図版6-1)

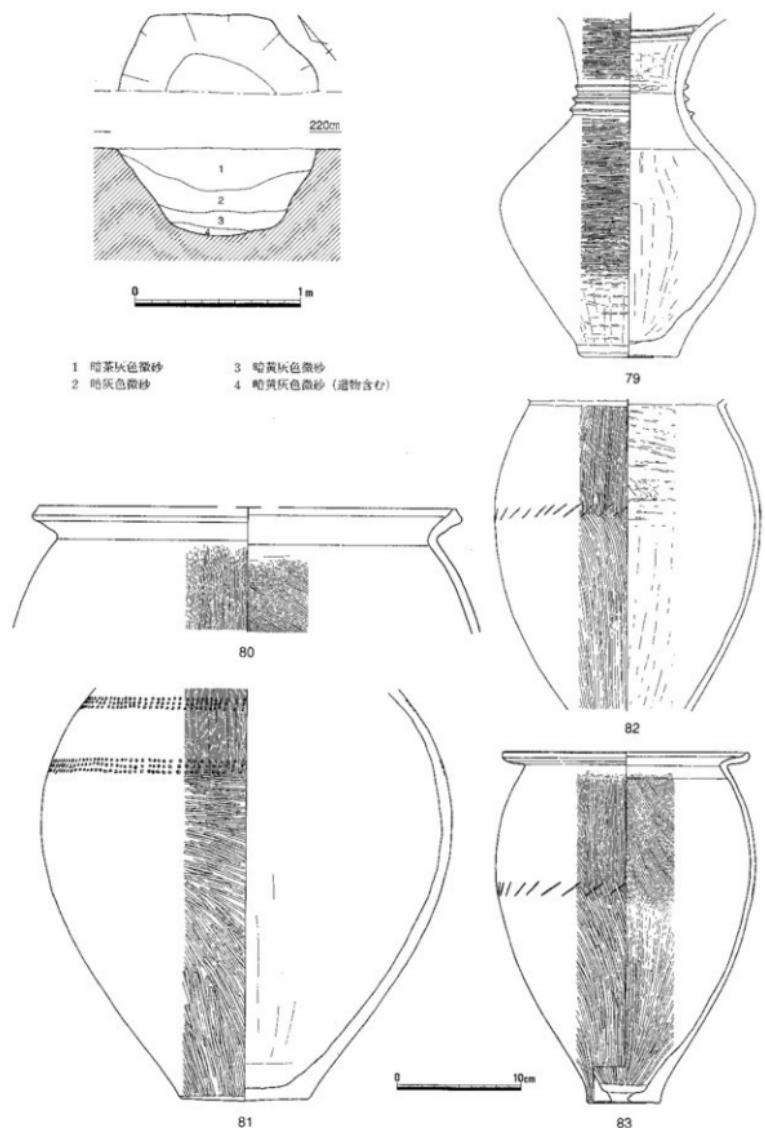
土壤8は、3区のほぼ中央部に位置し、土壤7の北西約8mに検出された。土壤は、北側半分しか検出されなかったが、平面形は、円形ないし椭円形になると考えられる。規模は、長さ約96cm、深さ約75cmを測る。断面形は、「U」字形を呈する。土壤内には、第1・2層がレンズ状に堆積していた。

出土遺物は土玉C3が1点検出されたのみで、詳細な時期については不明である。性格についても不明である。

(中野)



第25図 土壌8平・断面図(1/30)・出土遺物(1/2)



第26図 土壌9平・断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

土壤9 (第26図、図版6-2)

この土壤は、微高地上の3区のほぼ中央部に位置し、土壤8の西側に隣接して検出された。土壤は、南側が調査区外であるため、北側の半分が確認できた。平面形は、ほぼ円形を呈すると考えられる。規模は、直径約124cmと推定される。深さは約54cmを測る。断面形は、椀形を呈する。土壤内は、第1～4層がレンズ状に堆積しており、下部より図示した土器が出土した。出土した土器は、完形に近いものも含め大きな破片であった。

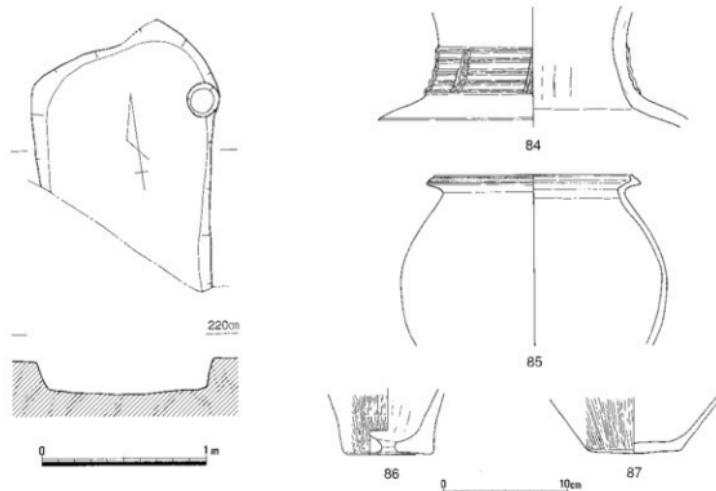
79は前期の壺であるが、他の土器はいずれも中期の前半期の特徴を示している。 (中野)

土壤10 (第27図)

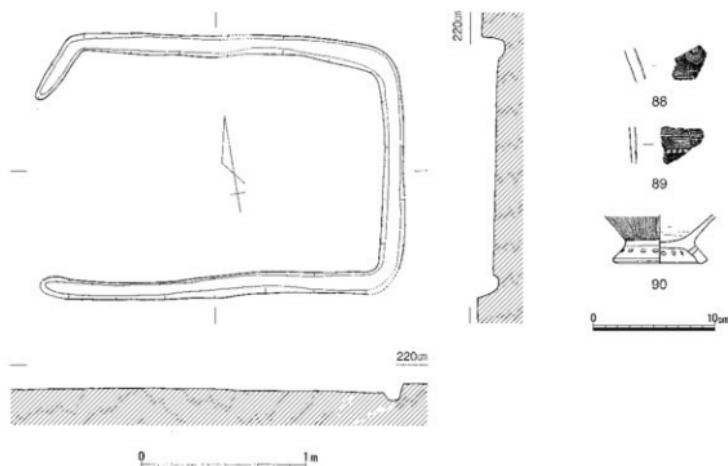
3区西側の遺構が密集する地点で検出した土壤で、土壤11により北端部が切られている。南側部分は調査区外となった。平面形は隅丸方形を呈する。規模は検出長168cm、幅114cm、深さ20cmを測る。底面はほぼ水平である。出土遺物は、底部に焼成後穿孔された壺86、頸部に5条の貼り付け突帯に縦方向に2条一組の棒状浮文を貼り付けた広口壺84、口縁部を「く」字状に外反させて回線文を施す壺85、平底の壺87である。土壤の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。 (馬場)

土壤11 (第28図、図版6-3)

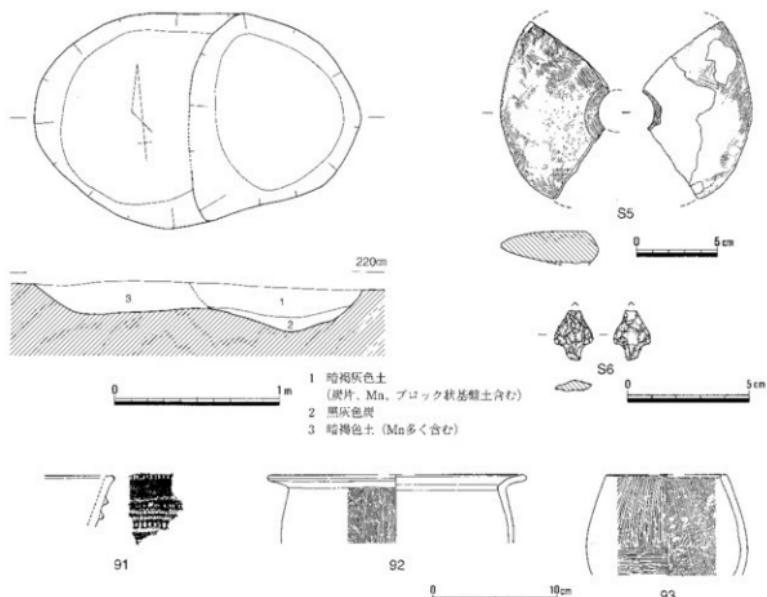
3区の北西端部で検出したもので、土壤10や土壤13と重複していた。その新旧関係を精査したところ、この遺構が両土壤を新しく切っていた。検出面での幅が10～15cmを測る溝が隅丸長方形を描いて巡るが、南西部分は途切れで存在しなかった。溝に開まれた内部は外側よりも約9cm低く、全体に平坦面を形成していた。溝の断面形は上方に開いた「U」字形を呈し、堆積上中から中期の土器片88～90が出土した。この遺構を土壤にしたが、柱穴を持たない竪穴住居の可能性もある。 (福田)



第27図 土壌10平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第28図 土壌11平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第29図 土壌12平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/2・1/4)

土壤12（第29図、図版7-1）

3区西側の遺構が密集する地点で検出した土壤で、土壤の東端部が土壤1を切っている。平面形は2つの橢円形が重なった長楕円形を呈する。規模は、長径198cm、短径134cm、深さ27cmを測る。土壤東側の一段深い底部に厚さ9cmで黒灰色炭層が認められた。

出土遺物は、上器と石器が認められた。土器は口縁外面に断面三角形の突帯に貼り付け刻目を施した短頸広口壺91、口縁部を「く」字状に曲げ、上方へわずかに湾曲する甕92、口縁部が内傾斜する鉢93である。石器は約1/4に破損した環状石斧S5、先端を欠く有茎の石鎌S6である。

土壤の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

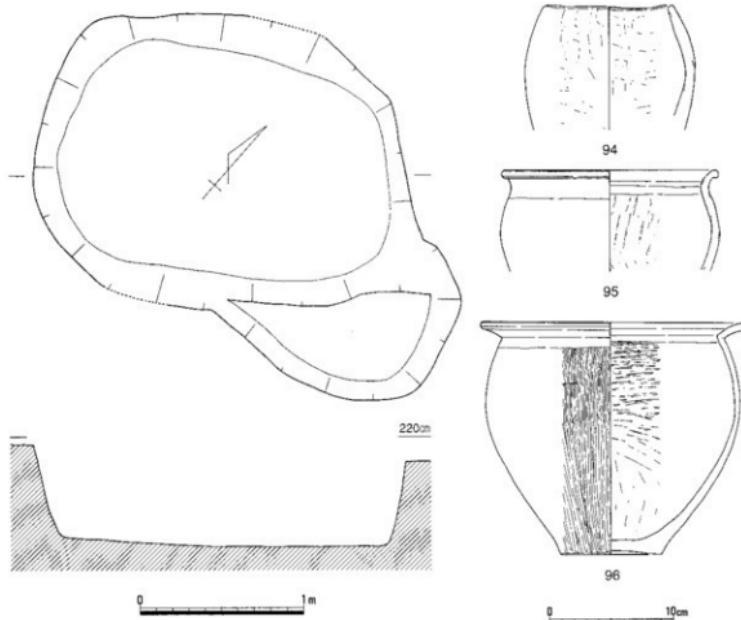
(馬場)

土壤13（第30図）

3区西側の遺構が密集する地点で検出した土壤で、土壤の南東部は土壤11により切られている。平面形は東側に一段浅い拡張部をもつ不整橢円形を呈する。規模は、長径226cm、短径220cm、深さ57cmを測る。底面はほぼ水平である。

出土遺物は、口縁部が内湾し端部を丸くおさめる小形の鉢94、やや張りのある胴部に口縁部を外反させて端部を肥厚する鉢95、94・95は弥生時代前期のものであろう。「く」字状口縁で底部が上げ底となる鉢96である。土壤の廃絶時期は、鉢96から弥生時代中期中葉と考えられる。

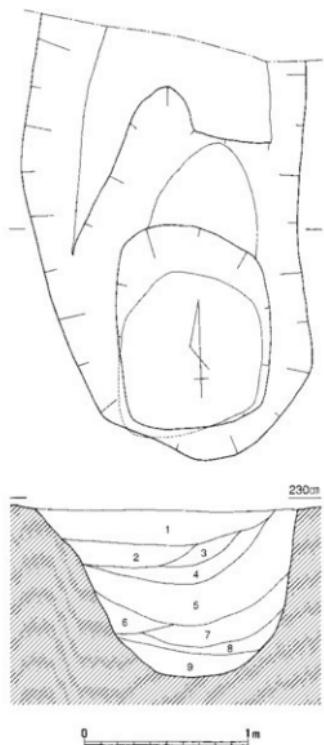
(馬場)



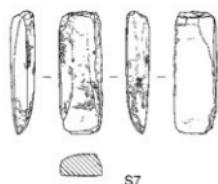
第30図 土壌13平・断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

土壤14 (第31図、図版7-2)

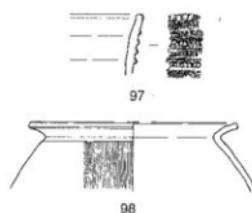
3区の西側で土壤1の規模を確認するために調査区を拡張した際、土壤1の北端部を切り込む形で検出した。北側部分は調査区外のため調査しなかった。平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。規模は検出部分で長さ260cm、幅159cm、深さ102cmを測る。断面は「U」字状に急角度で掘り込まれている。境内の堆積土は9層に分かれ、最下層の灰黄色砂を覆う第8層の炭層が4~10cmの厚さで認められた。



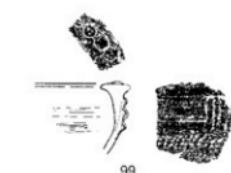
- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 茶褐色砂質土 (Mn含む) | 6 淡黄茶褐色砂 |
| 2 淡茶褐色土 | 7 淡黄灰茶色微砂 |
| 3 黄茶褐色土 | 8 黑色炭 (植物の炭化物) |
| 4 鴉灰色土 (Mn含む) | 9 灰黄色砂 |
| 5 淡茶灰褐色砂質土 | |



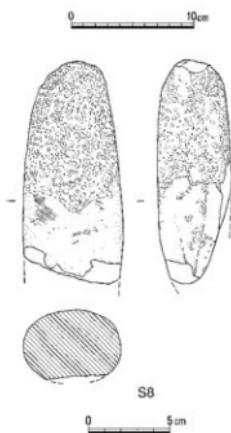
S7



97



98



99

第31図 土壌14平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

出土遺物は土器と石器が認められた。土器は口縁外面に4条の断面三角形の貼り付け突帯に刻目、口唇部に刻目を施した短頸広口壺97、口縁部を「く」字状に曲げ、上方へわずかに湾曲する甕98、橢形になる杯部の口縁上端部を肥厚させて円形浮文、外面に3条の突帯を貼り付け、縦方向に棒状浮文、貼り付け突帯下端に刺突文を施す高杯99がある。石器はほぼ完形の扁平片刀石斧S7・全体に丁寧に仕上げられ、使用のためか刃部を欠損した大型船形石斧S8である。

土壇の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

(馬場)

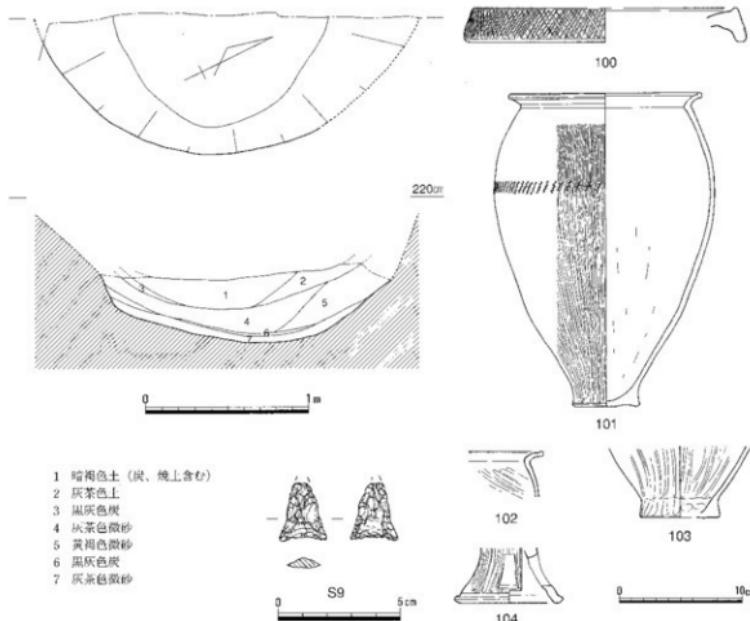
土壤15 (第32図、図版7-7)

3区の調査区西端部で検出した土壇で、上壇の一部は掘立柱建物1に切られている。西側は調査区外となり約1/2を検出した。平面形は精円形を呈すると考えられる。規模は、推定長径232cm、検出面からの深さ80cmを測る。断面形は、緩やかな楕状を呈する。土壇内の堆積土は7層に分かれ、第3層と第6層の2層の黒灰色炭層が認められた。

出土遺物は土器と石器が認められた。土器は口縁端部を垂下し外面に斜格子文を施した広口壺100、甕101~103で、101は口縁部を「く」字状に曲げ上方へわずかに湾曲、胴部に二枚貝の貝殻腹縁による刺突文を施す。脚部に縦長の方形透かしがある高杯104である。石器は先端をくぼ回基式の石鎌S9である。

上壇の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

(馬場)



第32図 土壇15平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/2-1/4)

土壤16（第33図、図版8-1）

4区の南東端部で検出した土壌で、近接した位置に井戸1と上塙17が確認されている。

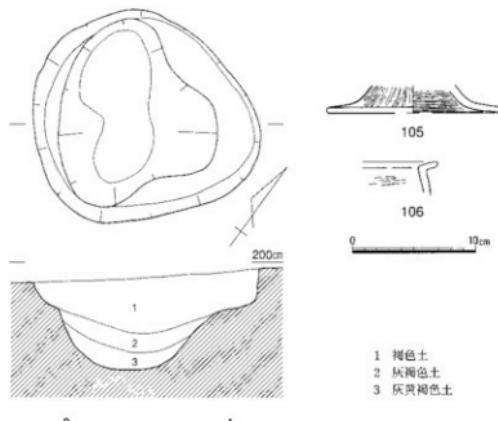
平面形は長径約140cm、短径約130cmの楕円形に近い形態をなし、検出面からの深さは約56cmになっていた。内部には褐色土、灰褐色土、灰黃褐色土が堆積し、断面形が2段掘りの様相を呈していた。底部は丸く湾曲し、内部から蓋になると推定される破片105と甕の小破片106が出土した。

これらの土器片の特徴から、この土壌は中期中葉の時期に属すると思われる。（福田）

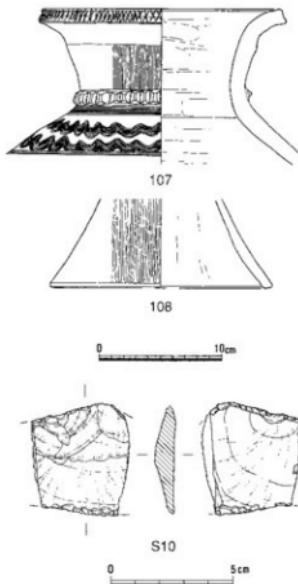
土壤17（第34図、図版8-1・2）

4区の南東端部で検出した土壌で、東側の近接した位置に井戸1が確認されている。

平面形は長径126cm、短径74cmの楕円形をなし、検出面からの深さは23cmであった。底面はほぼ水平になり、断面形は浅い「U」字形を呈していた。内部には褐色土が堆積し、中期中葉の土器片107・108以外にスクレイバーの破片S10が出土した。（福田）



第33図 土壌16平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第34図 土壌17平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4-1/2)

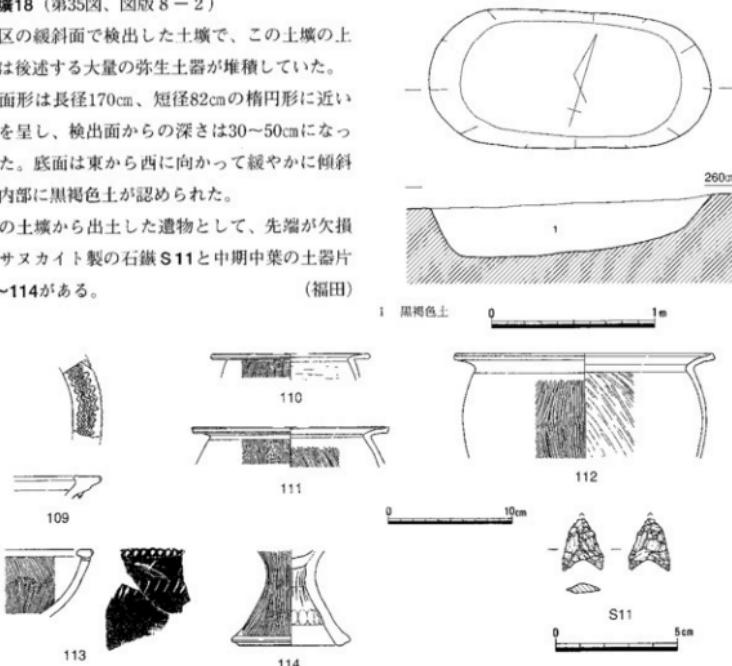
土壤18 (第35図、図版 8-2)

4区の緩斜面で検出した土壤で、この土壤の上面には後述する大量の弥生土器が堆積していた。

平面形は長径170cm、短径82cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは30~50cmになっていた。底面は東から西に向かって緩やかに傾斜し、内部に黒褐色土が認められた。

この土壤から出土した遺物として、先端が欠損したサヌカイト製の石錘 S11 と中期中葉の土器片 109~114 がある。

(福田)



第35図 土壌18平・断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

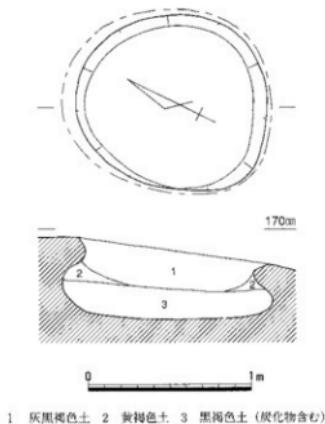
土壤19 (第36図、図版 8-3)

5区と6区の境界地点で検出した土壤で、全体が袋状を呈していた。

平面形は長径120cm、短径108cmの円形に近い楕円形の形態をなし、検出面からの深さは北側で47cmになっていた。壁面は「S」字状のカーブを描いて外側に抉れ、底面は周囲から中央に向かって緩やかに湾曲していた。内部には灰黒褐色土と炭化物を多く含む黒褐色土が堆積していたが、内部に張り出す壁面に近い部分には、それらの土砂の間に黄褐色土が認められた。

内部を精査したが、遺物は土器片だけであった。この土壤を検出した地点は、遺構の密度が希薄な所で周辺に遺構が存在しないが、堆積した土砂の状況や出土した土器片から弥生時代中期と考えたい。

(福田)



1 灰黒褐色土 2 黄褐色土 3 黒褐色土(炭化物含む)

第36図 土壌19平・断面図(1/30)

6 溝

溝1（第7図）

0区の中央東側にほぼ平行する状態で検出した溝群の最も東側に位置する溝である。検出面での溝の幅は150cm、深さは60cm、溝底の海拔高は50cmを測る。溝の中心よりやや西側寄りの底面が、約30cm幅で一段低くなっている。土層断面から溝2を切っている。埋土は4層で、上層から暗茶褐色粘質土、灰茶色砂、灰茶色粘質土、一段低い底に灰色粘土が堆積していた。

遺物は上層から土器片が出土し、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(馬場)

溝2（第7図）

0区の東側で溝1に平行する形で検出した溝である。溝1と同様、南北に流走する。検出面での溝の幅は110cm、深さは40cm、溝底の海拔高は75cmを測る。断面は緩やかな「U」字形を呈する。土層断面から溝1に切られている。埋土は灰茶色粘質土である。

遺物は少量の土器片が出土し、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(馬場)

溝3（第7図）

0区の中央やや東側で検出した溝である。検出面での溝の幅は285～300cm、深さは80cm、溝底の海拔高は50cmを測る。溝の中央部は幅100cm、深さ約20cmで一段低くなっている。溝1・2と同様南北に流走する。土層から溝1・2に切られている。埋土は5層で、上層から茶灰褐色粘質土、茶灰色粘質土、黄灰茶色粘質土、灰色砂、一段低い底に灰茶色砂が堆積していた。

遺物は各層から土器片が出土し、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(馬場)

溝4（第7図）

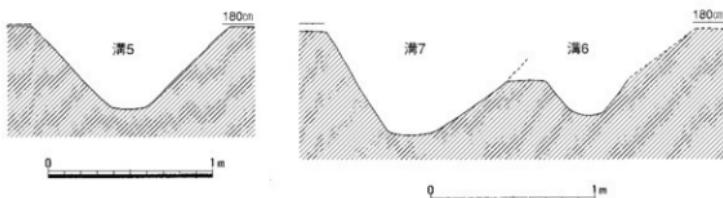
0区のほぼ中央部で検出した溝である。やや西側に弧を描いて南北に流走する。検出面での溝の幅は20cm、深さは10cm、溝底の海拔高は130cmを測る。断面は「U」字形を呈する。埋土は暗茶褐色粘質土である。遺物の出土は認められないが、埋土から時期は弥生時代と考えられる。(馬場)

溝5（第7・37図）

1区で平行して流走する溝5・6・7の3条で、最も東側で検出した溝である。東西に流走する。検出面での溝の幅は120cm、深さは50cm、溝底の海拔高は128cmを測る。断面は「V」字形を呈する。遺物は少量の土器片が出土し、時期は弥生時代中期と考えられる。(馬場)

溝6（第7・37図）

1区で平行して流走する溝5・6・7の3条の溝で、中央部に位置する溝である。西側は竪穴住居



第37図 溝5～7断面図 (1/30)

1により切られている。東西に流走する。検出面での溝の幅は50cm、深さは22cm、溝底の海拔高は124cmを測る。断面は緩やかな「V」字形を呈する。遺物は少量の土器片が出土し、時期は弥生時代中期と考えられる。
(馬場)

溝7 (第7・37図)

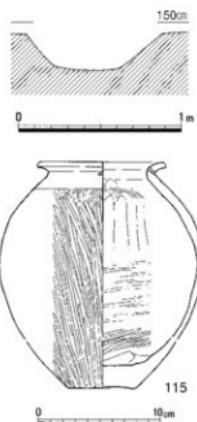
1区で平行して流走する3条の溝で、最も西側で検出した溝である。西側は溝8により切られている。検出面での溝の幅は110cm、深さは60cm、溝底の海拔高は112cmを測る。遺物は少量の土器片が出土し、時期は弥生時代中期と考えられる。
(馬場)

溝8 (第8・38図)

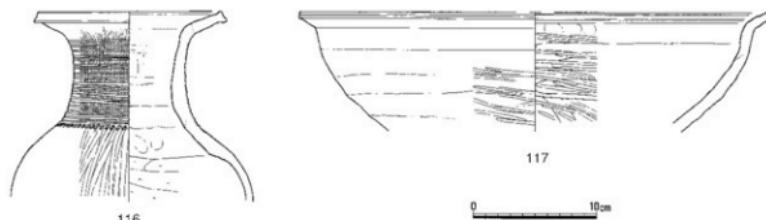
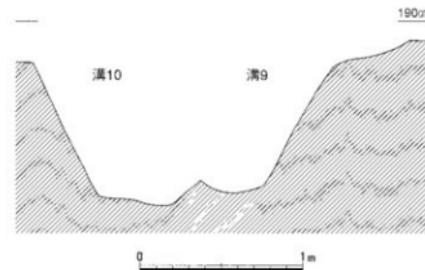
1区県道部で北西から南東に流走する溝である。検出面での溝の幅は80~200cmを測り、一定幅でない。深さは極めて浅く、南側で底部が土壘状に浅く窪んでいる。出土遺物は口縁部が「く」字形に外反し、頭部に穿孔がある壺115である。時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。
(馬場)

溝9 (第8・39図、図版9-3)

この溝は、2区の北北西から南南東に流走する溝群の東端に位置する。溝10とほぼ重なり合っており、溝10の下部にある断面から、溝10に切られた溝と考えられる。



第38図 溝8出土遺物 (1/4)



第39図 溝9・10断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

規模も検出状況からみて、溝10と同規模と思われる。深さは約105cmを測る。溝内には、第8図第5～8層が堆積しており、洪水砂で埋没している。出土遺物はほとんど認められないものの、検出状況などからみて溝10とさほど時期差はないものと考えられる。

(中野)

溝10（第8・39図、図版9-3）

溝10は、溝9の西側にややずれた状態でほぼ重複している。幅は約100cmで、深さは約92cmを測る。溝は、2段掘りになっており、第8図第1～4層がレンズ状に堆積していた。出土遺物は、図示した土器などが少量検出された。116・117は、いずれも後期中葉の特徴を示している。溝は、その規模などからみて、遺跡南東部に広がる低位部への幹線水路と考えられる。

(中野)

溝11（第8・40図、図版9-3）

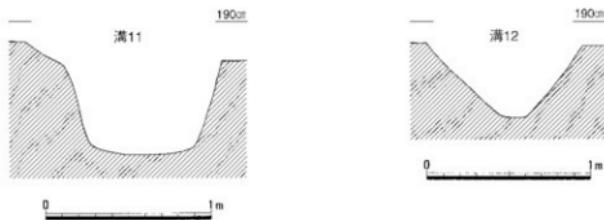
溝11は、溝10の西側に接して検出された。溝10との先後関係は明確ではない。溝は、第8図のように、掘り直しが行われており、第1～3層と第4～6層に新旧差が認められる。幅は約118cmで、深さは約70cmを測る。溝内は、溝9・10と同様に洪水砂が認められる。出土遺物は、確認できなかつたが、状況からみて溝10と相前後する時期であろうか。

(中野)

溝12（第8・40図、図版9-3）

この溝は、溝10の西側に検出されたもので、溝10との先後関係は不明である。溝は、2区の溝群にあって他の溝とは異なり北東～南西方向に延びる。幅は約93cmで、深さは約45cmを測る。溝内は、上下2層に堆積しており、他の溝と同様に洪水砂で埋まっている。出土遺物はないものの、溝10・11と同時期ぐらいであろうか。

(中野)



第40図 溝11・12断面図 (1/30)

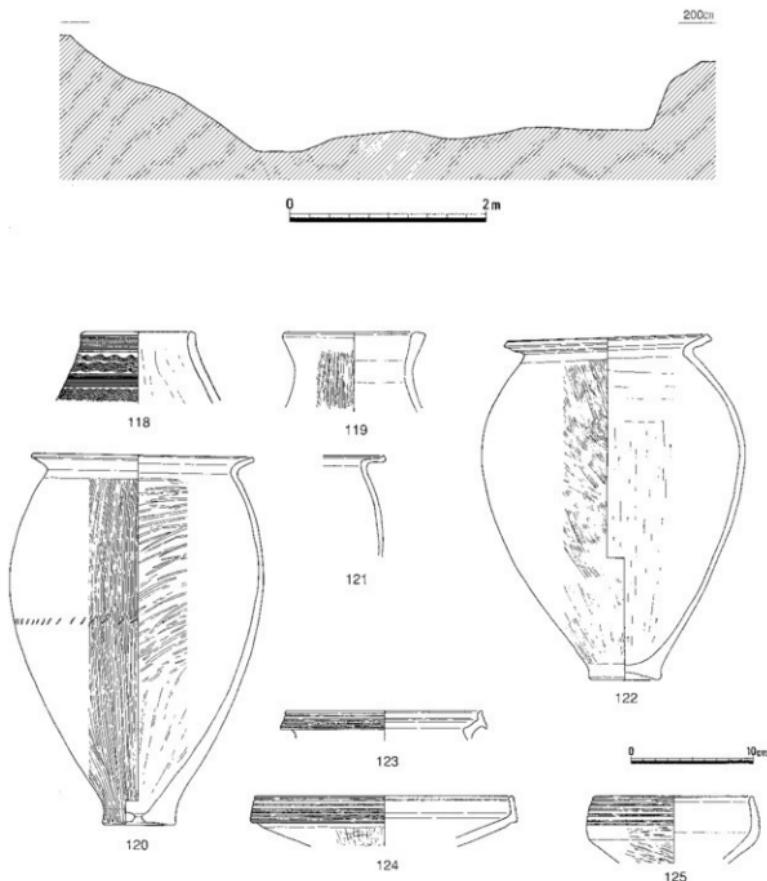
溝13（第8・41～44図、図版9-1・2）

溝13は、2区の溝群の中央に、他の溝と同様に北北西～南南東方向に検出された。溝は、第8図の断面図（第17～40層）の示すように何条もの溝が重複している。堆積層からみて、幅約6.5mの間に7回以上は掘り直しが行われたと考えられる。最も新しい溝は第18～22層である。規模は、いずれの溝も2～3mの大きいものであったと思われる。溝内は、堆積層の大半が砂層であるため、洪水で埋まつては溝を掘り直していたものと考えられる。

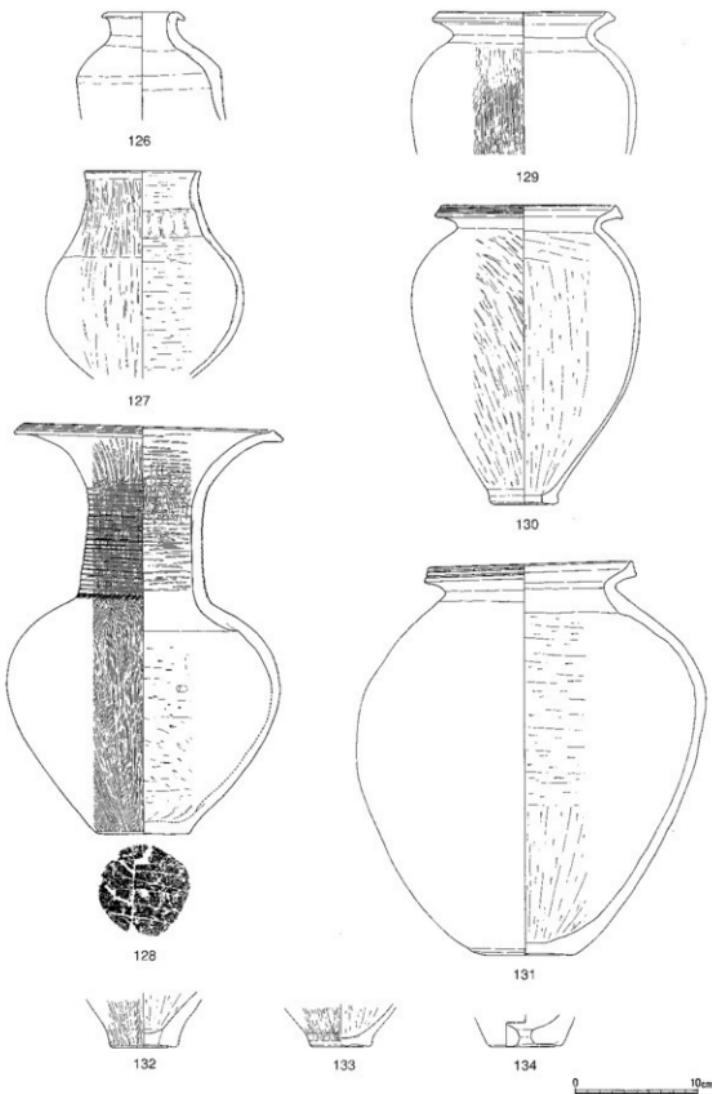
出土遺物は、完形品も含めて、中期～後期の多量の土器が検出された。調査時の状況下で上器の詳

細な分層による取り上げは困難であった。118～122の上器は、中期中葉のもので出土した中では最も古い一群である。次は、123～125の中期末のもの、さらに、126～156の後期など時期幅は広い。しかし、第25～40層からは、135～139などの後期中葉の土器が出土している。また、出土した中では新相の144は、第30～32層で検出している。こうように、溝は後期中葉の時期を中心に機能していたと考えられる。

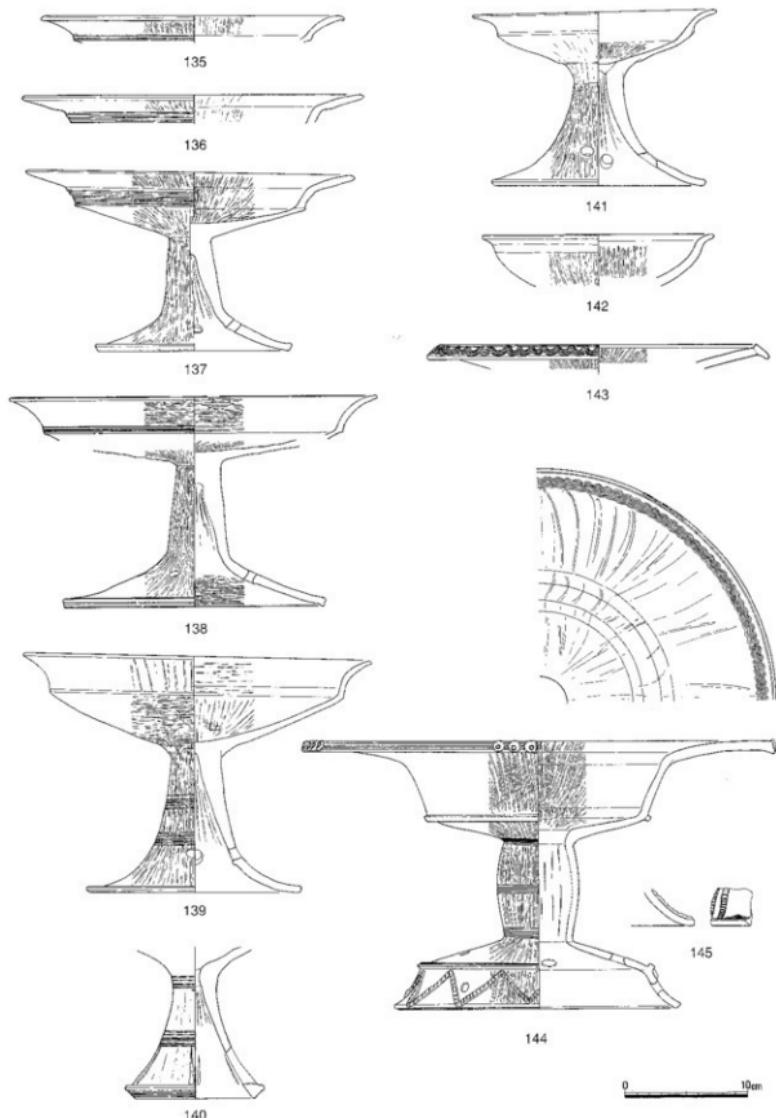
144は、装飾高杯で、エンタシス状の柱状部から軸部と脚部が大きく聞く。口縁部は水平に大きく開き、やや肥厚した端面に凹線文と3個一対の円形浮文を5か所に配する。口縁部内面に彫描波状文



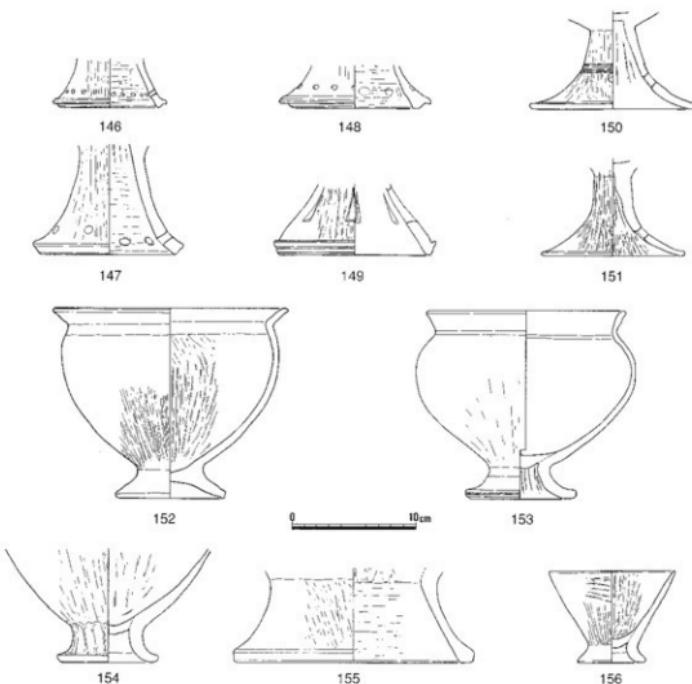
第41図 溝13断面図 (1/50)・出土遺物1 (1/4)



第42図 满13出土遺物 2 (1/4)



第43図 満13出土遺物 3 (1/4)

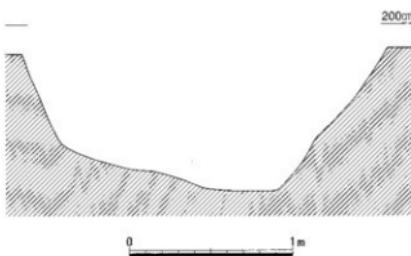


第44図 溝13出土遺物4(1/4)

を施す。脚部はさらに外方に開き、裾部に銀巻状に貼り付け突帯を付け刻目を付ける。外面は、ていねいなヘラミガキを施す。145も装飾高杯である。
(中野)

溝14(第8・45図)

この溝は、2区の溝群の西端部に位置し、溝13の西側約1mに検出された。溝の北側は井戸4に切られている。方向は、他の溝群と同様に北北西～南南東である。第8図の堆積状況から何回かの掘り直しが行われていると考えられる。最も新しい溝は、第8図の第41～45層で、幅約220cmと規模は大きい。深さは約88cmを測る。溝内は、他の溝群と同様に洪水によると思われる砂層の堆積が認められる。底部近くからはほぼ完形の157が出土しているのみで、他の遺物は認められなかった。古い溝は、第46～48層で溝の西側部に残存していた。この溝の規模も残存状況からみて、新しい溝ぐらいはあったと思われる。いずれにしても規模は大きく、幹線の水路としての機能を果たしていたと考えられる。157は、頸部から大きく外反する口縁部をもち、胴部は長胴形である。肩部には櫛描きの平行直線文と波状文を交互に配し、下端に2列の刺突文を付けている。
(中野)



溝15（第9・46図、図版10-1）

この溝は、3区の東端部に検出され、2区の溝群西端の溝14の西約8mに位置する。溝は、2区溝群とはやや方向が異なり、北東～南西に流走する。溝の西側には、溝16が重複しており、位置関係などからみて溝16の掘り直しの溝と考えられる。規模は、幅約330cm、深さ約90cmを測り、溝16よりはやく規模が小さくなっている。溝内には、第46図第2～8層が堆積しており、図示した158～160などの土器が少量出土した。

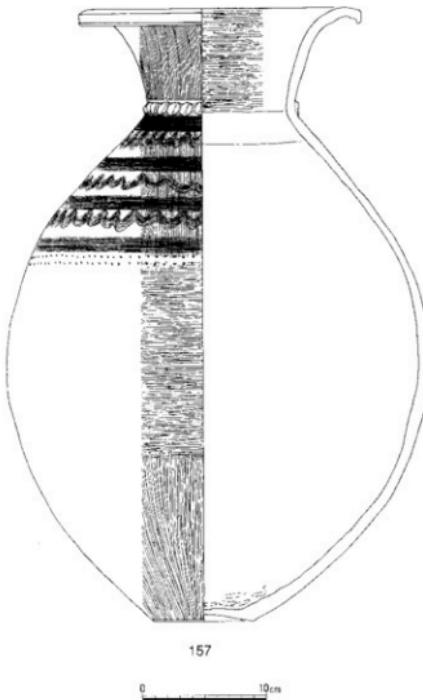
（中野）

溝16（第9・46図、図版10-1）

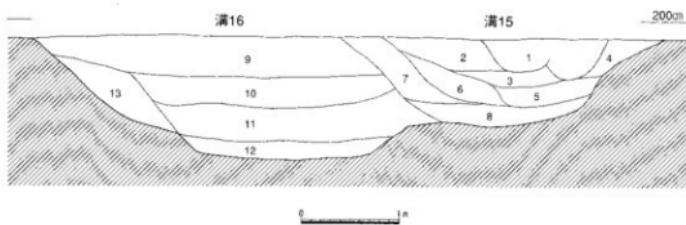
溝16は、3区の東端の溝15の西側に位置する。溝の東側を溝15に切られており。規模は、幅が推定約415cm、深さは約123cmと大規模な溝であることから、2区の溝群と同様に幹線水路としての機能を果たしていたと思われる。溝内には、第46図の第9～12層がレンズ状に砂層が厚く堆積しており、洪水により埋没したものと考えられる。

出土遺物は、ほとんど認められなかつたが、溝15とさほど時期差はないと思われ、弥生中期の前半期と考えられる。

（中野）



第45図 溝14断面図（1/30）・出土遺物（1/4）



- | | | |
|-----------|------------|------------|
| 1 喷銀灰色粘質土 | 5 淡灰褐色砂 | 9 淡褐色砂 |
| 2 淡茶褐色砂 | 6 淡黃褐色粘質土 | 10 淡茶褐色砂 |
| 3 淡茶褐色砂質土 | 7 淡黃茶褐色粘質土 | 11 淡茶褐色砂質土 |
| 4 茶褐色粘質土 | 8 灰褐色砂質土 | 12 灰色砂質粘土 |
| | | 13 茶褐色砂 |

溝17（第9・47図）

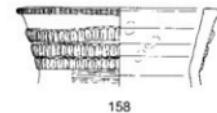
この溝は、3区のやや西側に位置し、溝16の西約10mに確認された。溝は、ほぼ南北に流走する。幅約95cmで、深さは約60cmを測る。溝内は、第47図第1・2層が堆積していた。検出状況などから中期～後期か。（中野）

溝18（第9・47図）

溝18は、3区の土壤5と土壤6の間に検出された。溝は、溝17と同様にほぼ南北方向に延びている。幅は約108cmで、深さは約76cmを測る。溝内は、第47図第1～4層がレンズ状に堆積していた。中期～後期か。（中野）

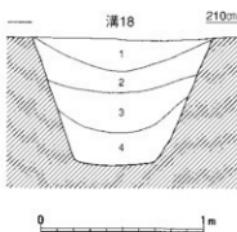
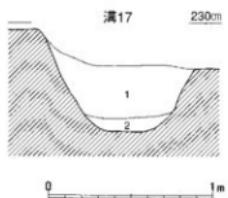
溝19（第9・48図）

この溝は、3区の中央部に位置し、土壤3の東側に隣接して検出された。溝は、北北東～南南西方向に流走する。幅は、約125cmで、深さは約70cmを測る。断面形は椀形を呈する。出土遺物としては、上層よりS12のサヌカイトの石鏃が1点ある。（中野）



第46図 溝15・16断面図(1/50)

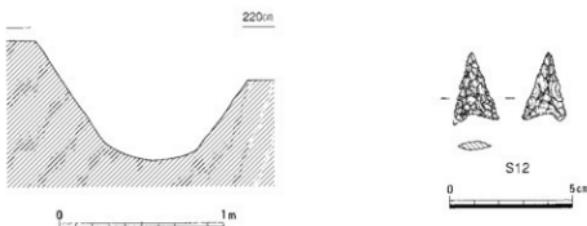
・出土遺物 (1/4)



- 1 喷銀灰色粘質土
2 暗灰色砂質土

- 1 喷銀灰色粘質土
2 暗灰色砂質土
3 喷茶褐色粘質土
4 喷茶灰色粘質土

第47図 溝17・18断面図 (1/30)



第48図 溝19断面図 (1/30)・出土遺物 (1/2)

溝20（第11図）

6区の南東端部の5区に寄った地点で検出した溝で、西方向の位置には次に説明を加える溝21が確認されている。この溝は緩やかに湾曲して存在するが、検出面での幅は25~30cmを測り、底部までが極めて浅くなっていた。溝の内部には、上塙のように浅く窪む部分が認められた。
(福田)

溝21（第11図）

6区の南東端部の5区に寄った地点で検出した溝で、東方向の位置には前述した溝20が確認されている。この溝は直線的に流れるが、検出面での幅が北東側で20~25cm、南西側で35~40cmと異なっていた。検出面からの深さは極めて浅く、断面形が境界部分にかすかに認められた。
(福田)

溝22（第11図）

6区の南東部分に検出した溝で、周辺には主要な遺構がなく、わずかに柱穴が確認されているだけである。この溝も直線的に流れ、前述した溝21とほぼ平行する方向を示していた。検出面での幅は30~35cmを測り、深さは溝20や溝21と同様に極めて浅くなっていた。
(福田)

溝23（第12図）

6区の南東部分に検出した溝で、近くには約1m離れた地点に重複する柱穴が確認されているだけである。この溝は南北方向を示して直線的に流れるが、前述した溝20~22とは異なる方向になっていた。検出面での幅は5~10cmを測る狭いもので、断面形は浅い「U」字形を呈していた。
(福田)

溝24（第12図）

この溝は、低位部の6区のほぼ中央部に検出された。溝は、北北東~南南西に流れていた。規模は、幅約150cmで、深さは約12cmを測る。溝内は、第12図第20・21層が堆積している。出土遺物は確認されていないが、検出面からみて弥生中期か。
(中野)

溝25（第12図）

溝25は、低位部の6区に位置し、溝24の西約8mに検出され、北北東~南南西に流走する。規模は、幅約120cmで、深さは約30cmを測る。出土遺物はないが、検出状況からみて溝24と同様に弥生中期か。
(中野)

溝26（第12図）

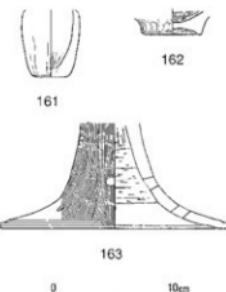
この溝は、低位部の6区の西側に位置し、溝25の西約6mに検出された。溝は、北東~南東に流走する。規模は、幅約180cm、深さは約90cmを測る。溝24・25より上層から掘られている。溝内には、第12図第22~24層が堆積している。出土遺物は161・162が出土しており弥生後期か。
(中野)

溝27（第12・49図）

溝は、6区の西端に位置し、溝26の西側約5mに検出され、北北東～南南西に流走する。規模は、幅が約240cmで、深さは約60cmを測る。遺物は163が出土しており弥生後期。（中野）

溝28（第12図）

この溝は、6区の西端の低位部に位置し、溝27の西側に重複して切られている。北北東～南南西に流走する。幅は、約300cmと推定され、深さは、約40cmを測る。遺物はないが弥生中期か。（中野）

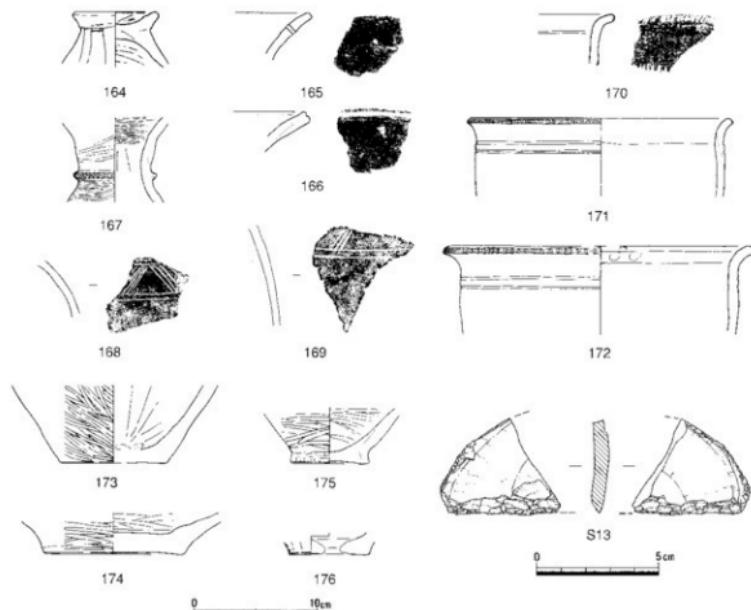


第49図 溝26・27出土遺物（1/4）

7 たわみ

たわみ1（第9・50図）

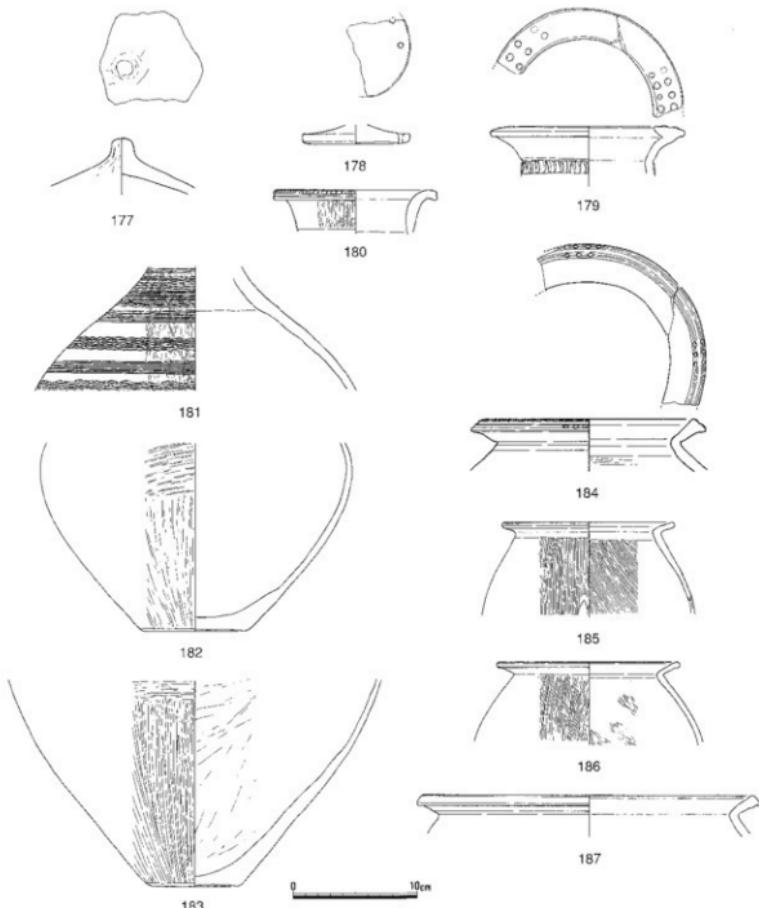
このたわみは、3区の微高地上に位置し、ほぼ溝17と溝18の間に検出された。たわみは、ほぼ東西



第50図 たわみ1出土遺物（1/4・1/2）

方向に幅約14m、深さ約30cmで基盤層の黄褐色土が窪んでいる。その窪みに第9図第4・25層が堆積しており、人工的な造構ではなく微高上の凹部と思われる。この堆積層からは、図示したような上器や石器が検出された。上器は、いずれも弥生前期の特徴を示している。

167の壺は、頸部に貼り付け突縁を1条施しており、出土土器の中では最も新相である。168・169体部にはヘラ描きの沈線と山形文。170の甕は、口唇部に刻目、体部に接合を利用した段をもち、刻目を施す。この土器は、出土土器の中でも最も古相。また、刃器のS13も出土した。 (中野)

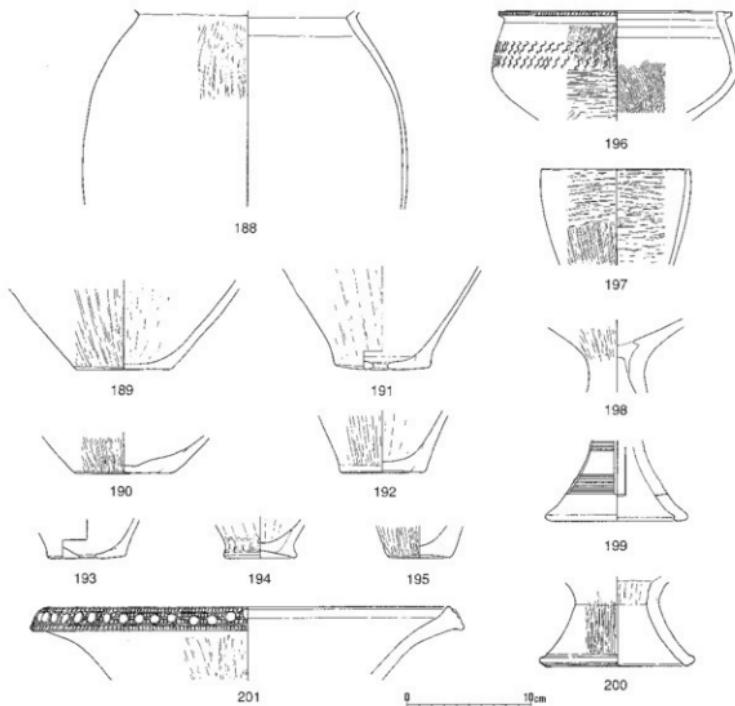


第51図 たわみ2出土遺物1 (1/4)

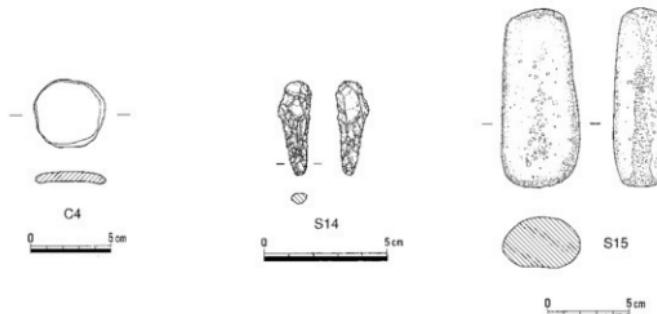
たわみ2（第11・51・52・53図）

このたわみはほぼ5区全体を占める大規模なもので、4区の北西端部と5区の北西端部から緩やかに傾斜し、5区の中央部が最も深くなっていた。検出面での幅は30m以上を測るが、深さは約120cmと極めて浅い。内部にはマンガンを含む暗灰褐色粘質土、暗灰茶色粘質土、黒灰色粘質土、灰茶褐色粘質土が堆積していたが、遺物は上層の暗灰褐色粘質土内から多く出土し、下層の黒灰色粘質土や灰茶褐色粘質土の中にはほとんど認められなかった。

その出土遺物として、弥生時代中期中葉の土器片177～201以外に、土製品の円板C4、石錐S14や叩石S15の石器がある。177と178は蓋で、178には2個一対の凹孔が認められる。179～183は壺で、179の口縁部には2列の円形浮文がある。181の外面には櫛描平行直線文と波状文が交互に存在する。184～195は甌で、184の口縁部には2列3個が一単位の円形浮文があり、191と193の底部には穿孔が認められる。196と197は鉢で、196の胴部には2段の刺突文がある。198と199は高杯、200は台付鉢の台部であろう。201は広口壺の口縁で、刺突文や凹線の上面に円形浮文を巡らせており。（福田）



第52図 たわみ2出土遺物2(1/4)



第53図 たわみ 2 出土遺物 3 (1/3・1/2)

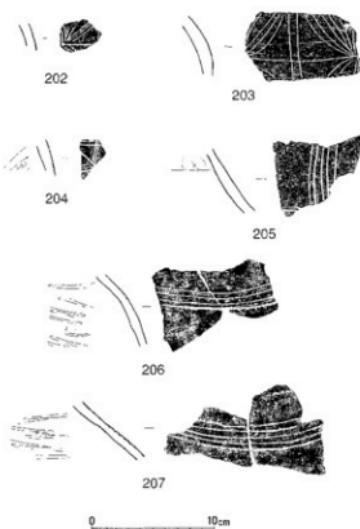
8 斜面堆積

斜面堆積 1 (第10・54~69図、図版3-1・10-2)

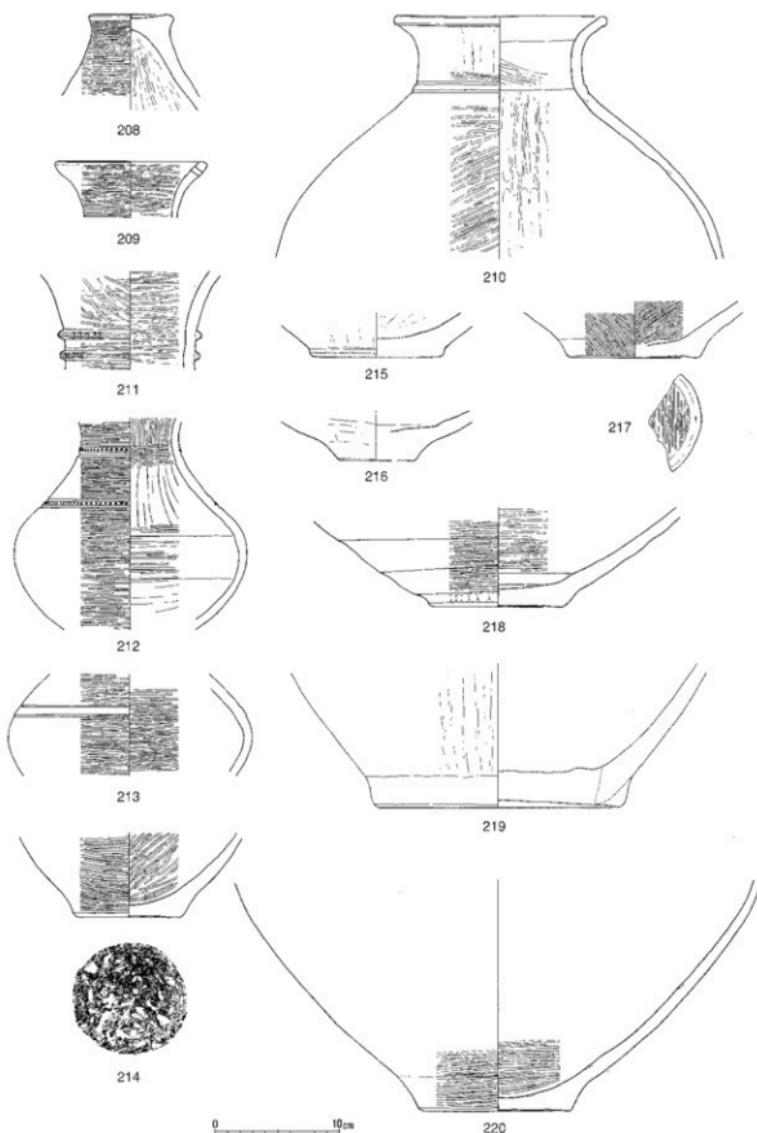
3区と4区の調査区の境界は、JR赤穂線の線路敷である。その線路敷の南東側に位置する2区や3区は、薄い表土の直下に黄褐色を呈する安定した構造面が確認でき、弥生時代のみならず鎌倉時代や宝町時代の中世の遺構が、数多く複雑に重なり合って存在する。ところが線路敷の北西側の4区になると様相が異なり、前述した井戸1や土壤17を検出した地点から、黄褐色の面が北西方向に向かって緩やかに傾斜し、5区や6区に続いている。

この地点の土層断面を観察すると、茶褐色砂、淡灰茶色粘質土、暗灰色粘質土、茶灰褐色粘質土が水平に堆積した下位に、炭化物や遺物を多く含む暗茶灰褐色土、褐灰色土、灰色粘土、黒灰色を呈する炭層、焼土を含む灰茶色微砂、焼土を多く含む淡灰褐色土、淡灰茶色土、青灰色粘土、灰茶色粘質微砂が存在した。

この4区の南東部の緩斜面からは、完形品を含む大量の土器（第54~66図）だけでなく、土製品（第67図）や石器（第69図）が出土している。また斜面を下って平坦面へ移行する所では、木製の鍤の未製品（第68図）も認められた。



第54図 斜面堆積 1 出土遺物 1 (1/4)

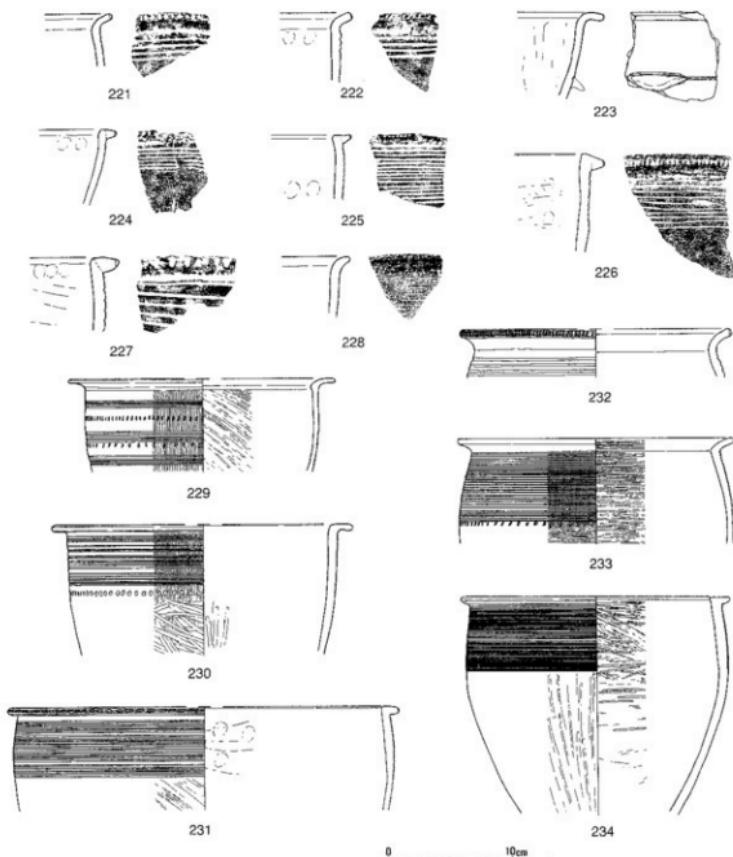


第55図 斜面堆積1出土遺物2 (1/4)

なお緩斜面で確認した前述の土壙17は、大量の遺物を取り上げた後に、黄褐色を呈する斜面を平坦に削ってその存在が明らかになったのであるが、土壙17の内部から出土した土器109～114と斜面に堆積していた新しい土器255～362に時期差が認められないから、土壙17がまだ機能している段階に大量の遺物がその上面に廃棄されたと思われる。

この4区の緩斜面から出土した大量の遺物の中でも、大半を占める弥生時代前期から中期中葉にかけての土器群は注目される。なお弥生時代中期中葉に属する土器群は、まとめの項で検討したい。

第54図202～207は、弥生時代前期の前半期に属する壺の肩部破片である。外面にはヘラ描沈線で方形区画を描き、その内部に軸を有しない木葉文を斜め方向に配している。その上位と下位には、ヘ

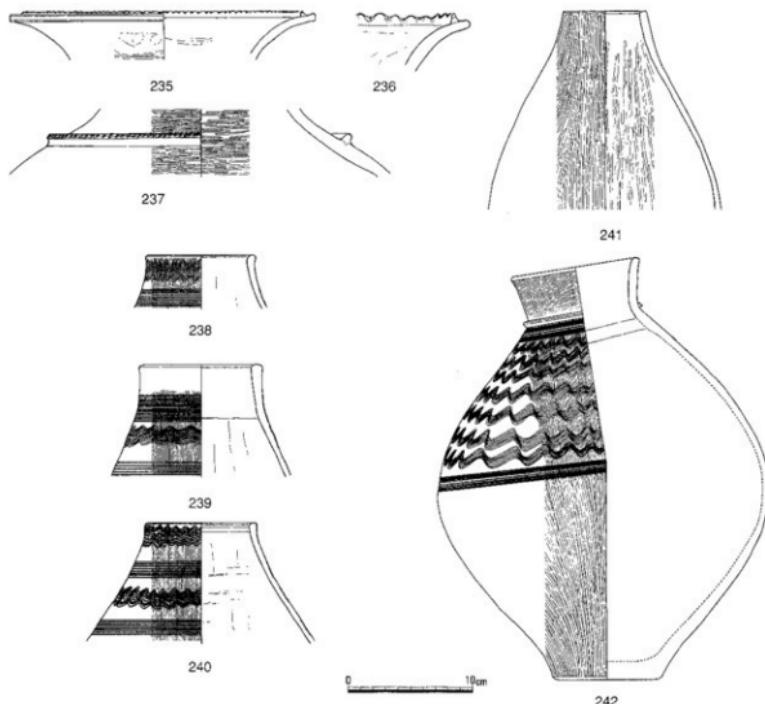


第56図 斜面堆積1出土遺物3 (1/4)

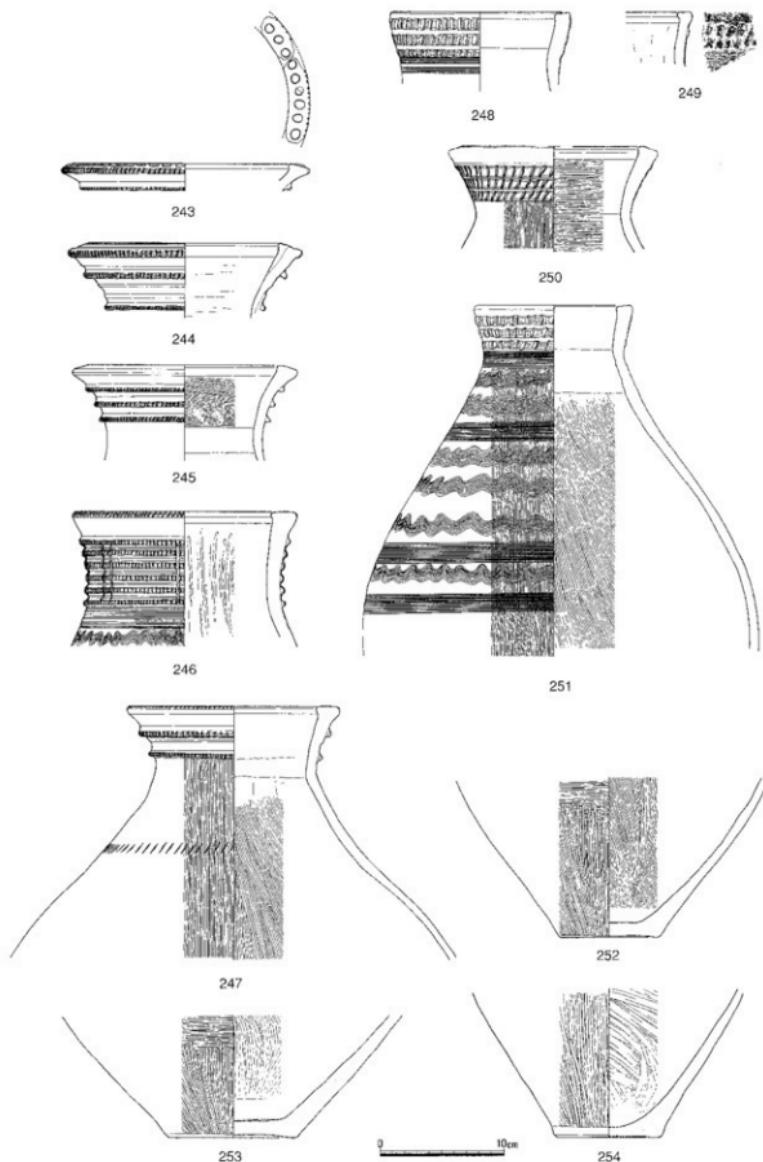
ラ描沈線が巡るようであるが、4条または5条のヘラ描平行沈線だけが認められるものも存在する。内面はいずれもナデを施し、胎土中には長石や石英を多く含んでいる。

弥生時代前期を前葉と後葉に大きく時期区分するならば、第55図208～220は後葉に属するものである。208の蓋以外はいずれも壺の破片で、外面の頸部や胴部に刻目を施した突帯を有するもの211、2条のヘラ描沈線の間に竹管文が認められるもの212、2条のヘラ描沈線だけを巡らすもの213、頸部と胴部の境界部分に削り出し突帯を有するもの210などがある。底部は平底であるが、中央部が上げ底になって、ヘラミガキを施すもの217や初の圧痕を有するもの214も存在する。外面は横または斜め方向に丁寧なヘラミガキを施すものが多いが、底部に近い部分にナデを行っているだけのもの314・315や、縦方向の粗いヘラミガキが認められるもの219もある。内面も丁寧なヘラミガキを施すものが多いが、ナデを行っているだけのもの210・214・215も存在する。

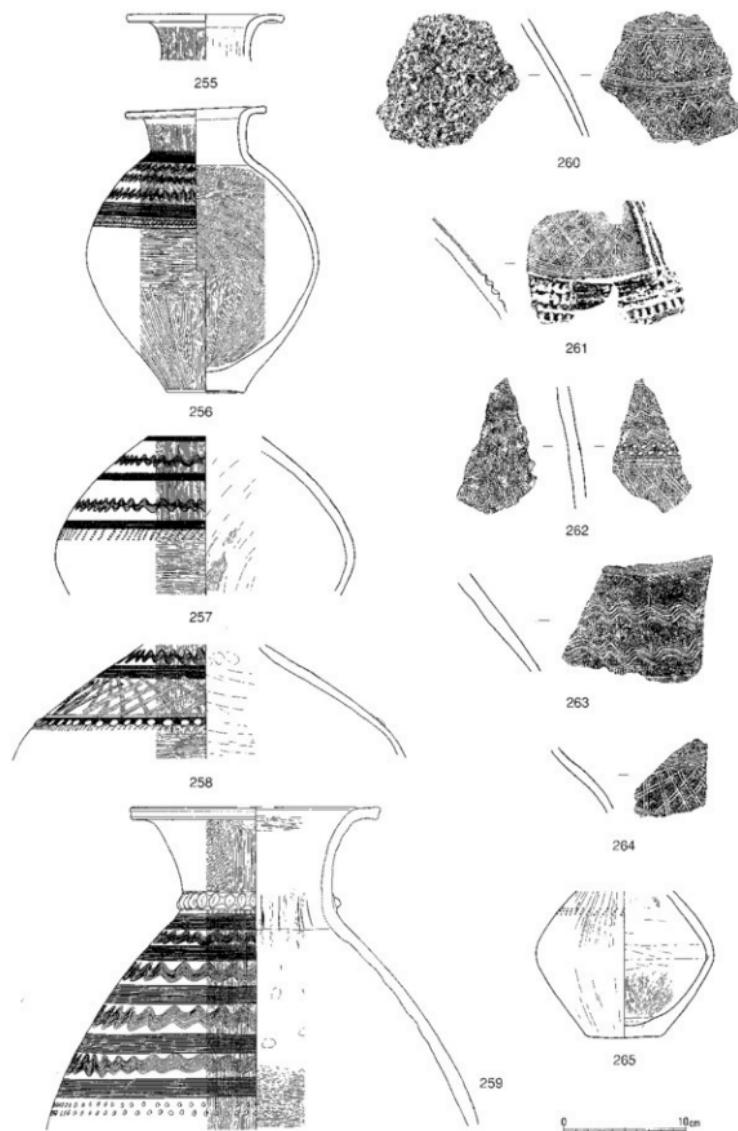
第56図221・222・224～234は胴部が膨らみの少ない倒鐘形を呈する壺で、口縁部が「く」字状に外反するもの（如意形口縁）221・222・228・229・232・233と、直立した口縁端部に断面が三角形の突帯を貼り付けて逆「L」字状の口縁を有するもの（瀬戸内壺）224～227・231・234以外に、口



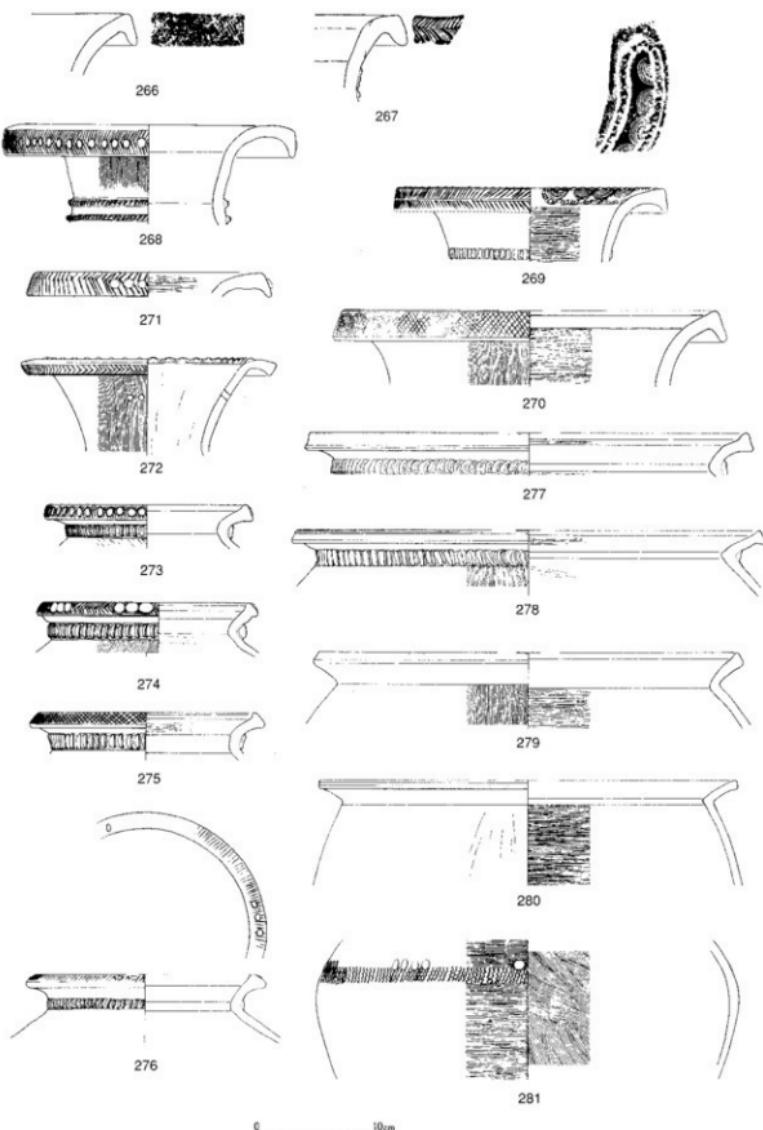
第57図 斜面堆積 1 出土遺物 4 (1/4)



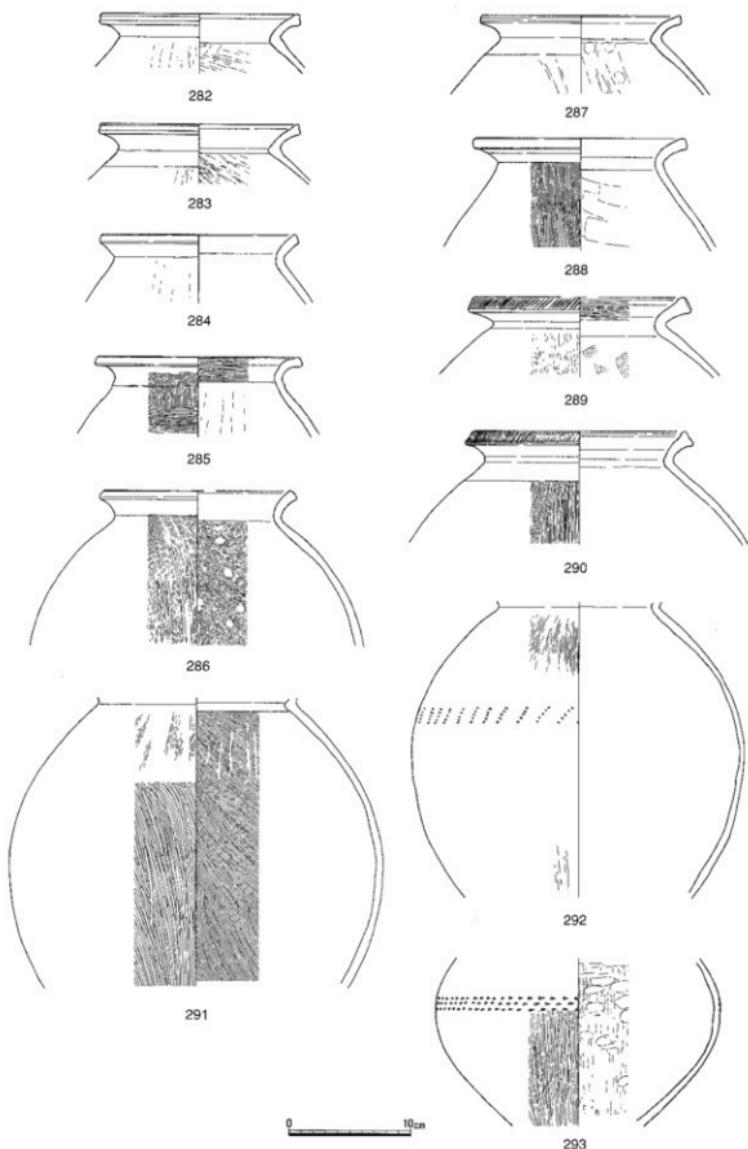
第58図 斜面堆積1出土遺物5 (1/4)



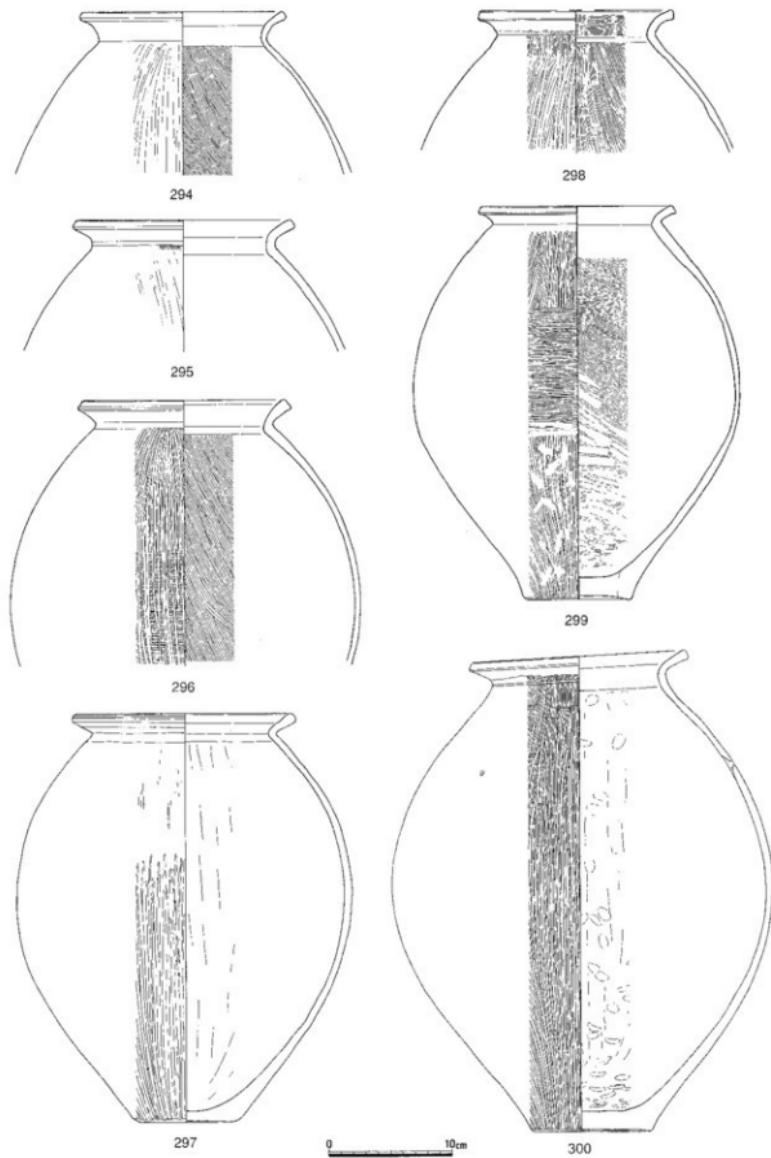
第59図 斜面堆積1出土遺物6 (1/4)



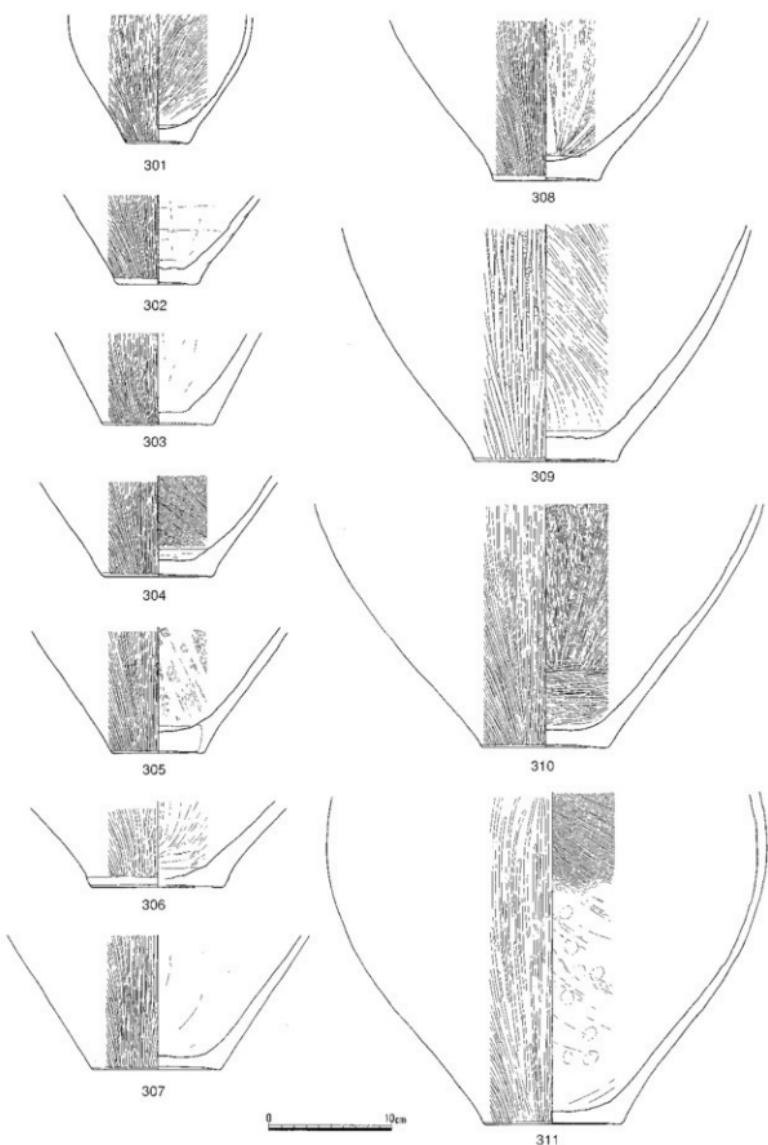
第60図 斜面堆積1出土遺物7 (1/4)



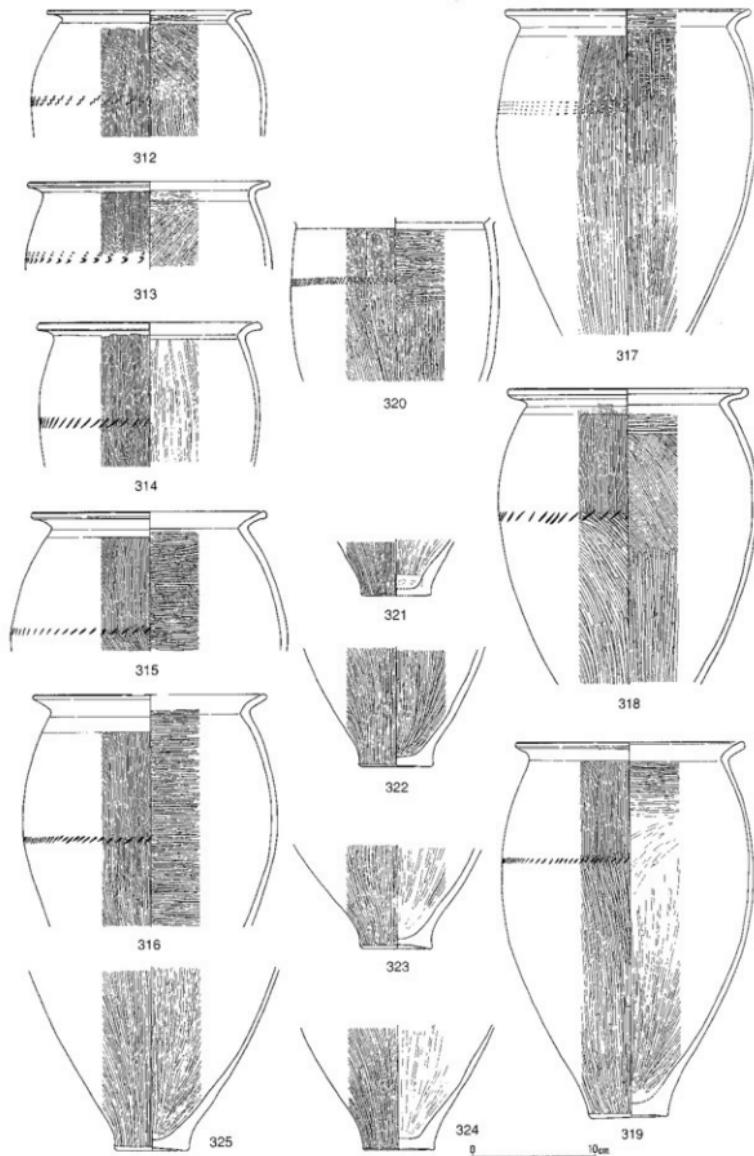
第61図 斜面堆積1出土遺物8 (1/4)



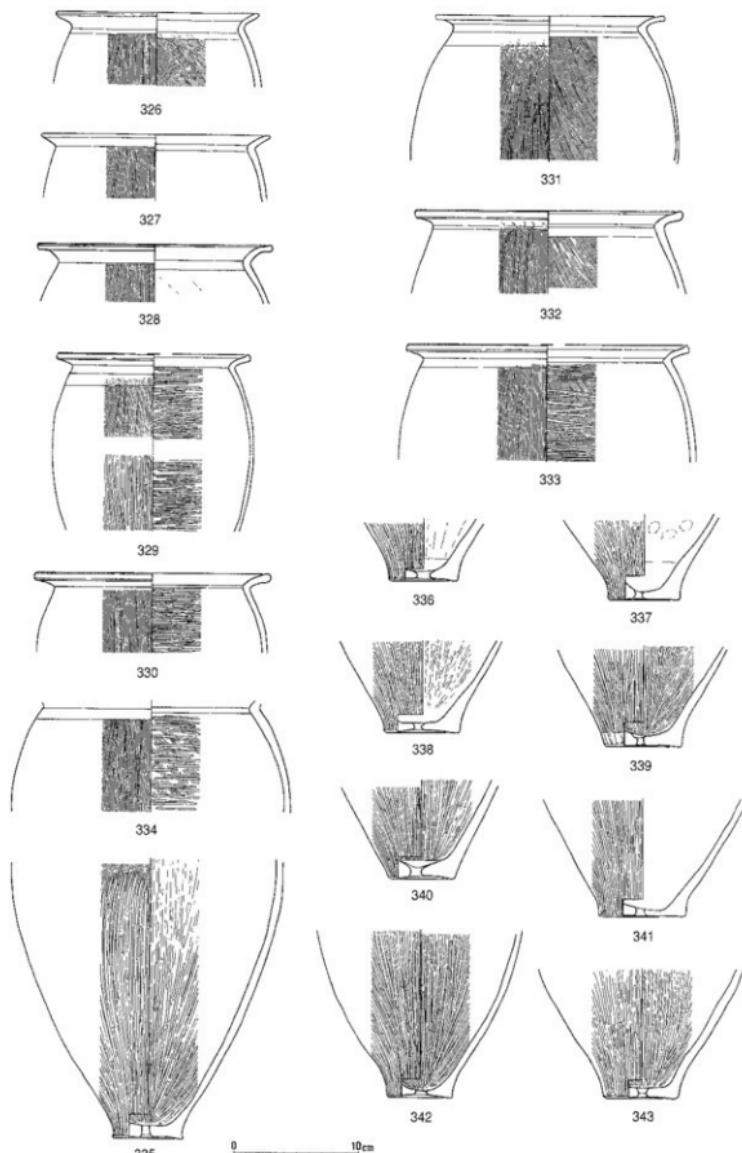
第62図 斜面堆積 1 出土遺物 9 (1/4)



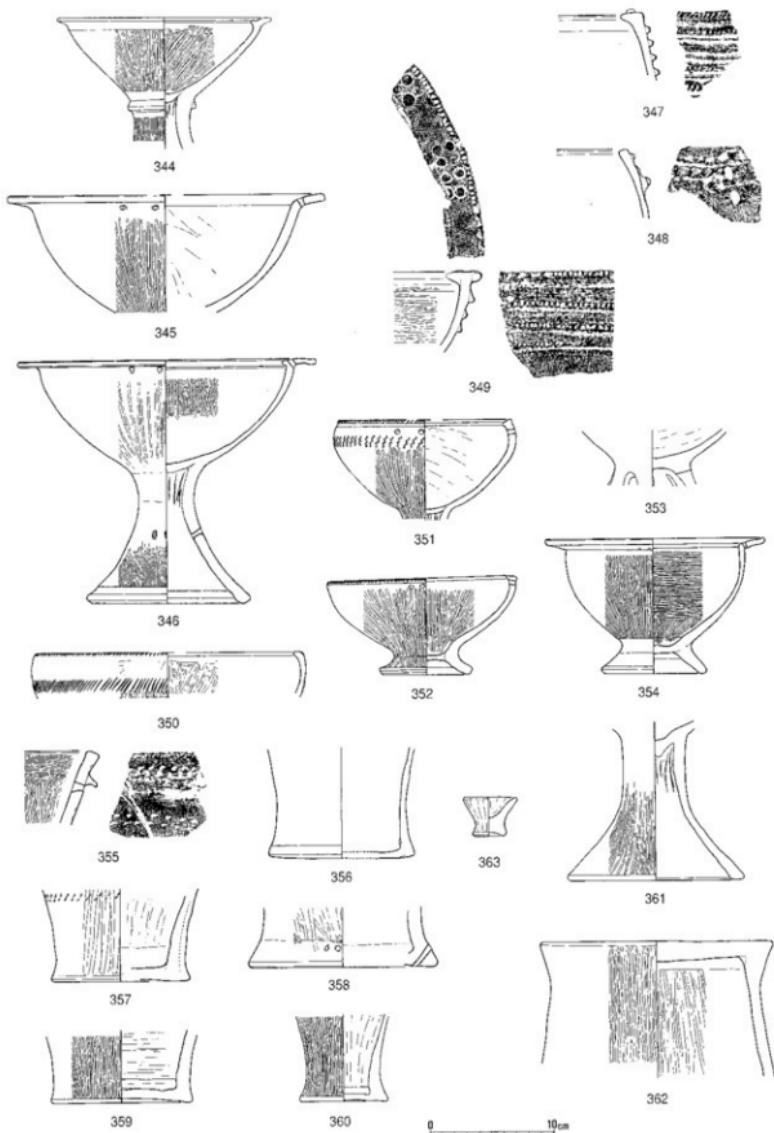
第63図 斜面堆積1出土遺物10 (1/4)



第64図 斜面堆積 1 出土遺物11 (1/4)



第65図 斜面堆積1出土遺物12 (1/4)



第66図 斜面堆積 1 出土遺物13 (1/4)



縁部を逆「L」字状に折り曲げたもの230がある。これらは甕の胴部上半には多条の平行沈線が存在するが、ヘラ描きのもの221・222・224～227・232と櫛描きのもの228～231・233・234がある。この形態の甕は、櫛描沈線の出現をもって弥生時代中期とされているから、前者のヘラ描きのものが前期後葉に、後者の櫛描きのものが中期前葉にそれぞれ属するであろう。ヘラ描沈線を有するものは小破片が多いが、図示したすべてのものの口縁端部に刻目が認められ、胴部上半には4条から14条以上の平行沈線が存在する。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、胴部の内面はいずれもナデ仕上げを行っているが、胴部の外面に縱または斜め方向のハケメが確認できるもの224・226がある。櫛描沈線が認められるものでは、口縁端部に刻目が存在するのは231だけである。胴部上半には多条の平行沈線だけのもの228・231・234、平行沈線の下位に刺突文を巡らすもの230・233、平行沈線と刺突文を交互に配するもの229がある。口縁部はヨコナデを施しているが、胴部の外面上には縱方向のハケメが認められるもの226、上位が縱方向のハケメで下位に横または斜め方向のヘラミガキを施しているもの230・233、ナデだけを行っているもの231、下位に縱方向のヘラミガキが存在するもの234がある。胴部の内面にはナデだけを行っているもの228・231、縱方向のヘラミガキの上面にナデを加えているもの230、斜め方向のハケメの上面にナデを加えているもの229、横方向のヘラミガキを行っているもの233、斜め方向のハケメの上面に横方向のヘラミガキを加えているもの234がある。なお223は弥生時代前期後葉の大形の鉢である。「く」字状に折り曲げられた口縁の端部は丸く仕上げ、外面に把手が存在する。

第57図235～242は弥生時代中期前葉の土器である。235と236は広口壺で、大きく開いた口縁部の上面に指頭丘痕文を施した突帶文を巡らせている。237の壺の外面肩部には、刻目を施した1条の貼り付け突帯が認められる。238～241は長胴形の胴部を有する無頸壺である。241は内外面とも縱方向のヘラミガキを施すが、238～240の外面上には縱方向のハケメの上面に櫛描平行直線文と波状文が交互に認められ、内面は縱方向のナデを行っている。完形に近い242の短頸広口壺は、外面の頸部に三角形の貼り付け突帯を有し、肩部から胴部の中位には櫛描平行直線文の間に7条の櫛描波状文が縱方向のハケメの上面に認められ、胴部下半は縱方向のヘラミガキを施している。口縁部の端部から内面にかけてはヨコナデを行い、頸部から底部にかけての内面は縱方向のナデと思われる。

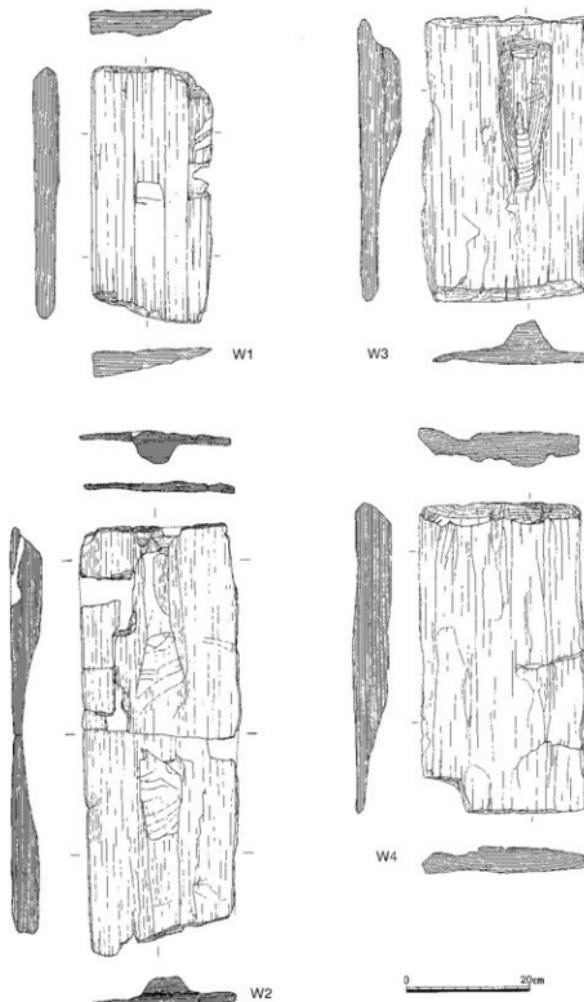
第67図のC 5は土器片を転用した円板である。最大径53.3mmで重さ31.2gを測る。人形土製品C 6

は、砂層直上面に堆積していた黄褐色粘質土内から出土したもので、遺物整理中に発見した。頭部のみの破損品であるが、眉・目・口を窪ませて表現し、ユーモラスな表情になっている。

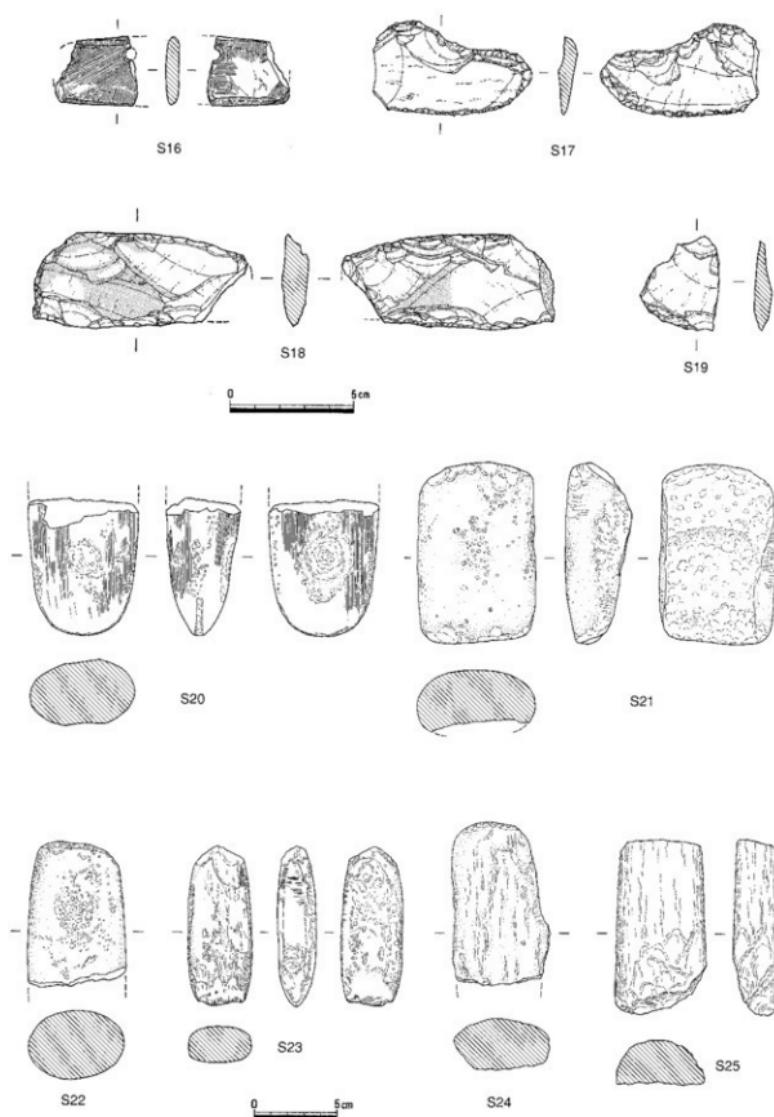
第68図のW1～W4はいずれも木製鉋の未製品である。木質はアカガシだという鑑定結果を得ている。

W2は刃の部分が隣り合う形で存在し、2本の木製鉋の製作過程を知ることができると良好な資料である。

第69図 S16～S25は石器である。S16は磨製石包丁の破損品で、両面から穿孔した円孔が認められる。S18は打製石包丁で、石材はサヌカイトである。S17とS19はサヌカイト製の石器で、器種が特定できないが、スクレーバーになるのかもしれない。S20は大型蛤刃石斧であるが、刃部に叩いた痕跡が存在するから、叩石に転用された可能性が強い。S21～S23は小形の石斧で、S22は刃部を欠損した基部だけの欠損品である。S23の基部の先端は欠損し、刃部は刃こぼれが著しい。S24・S25は弥生時代には珍しい石棒で、どちらも欠損した小破片である。（福田）



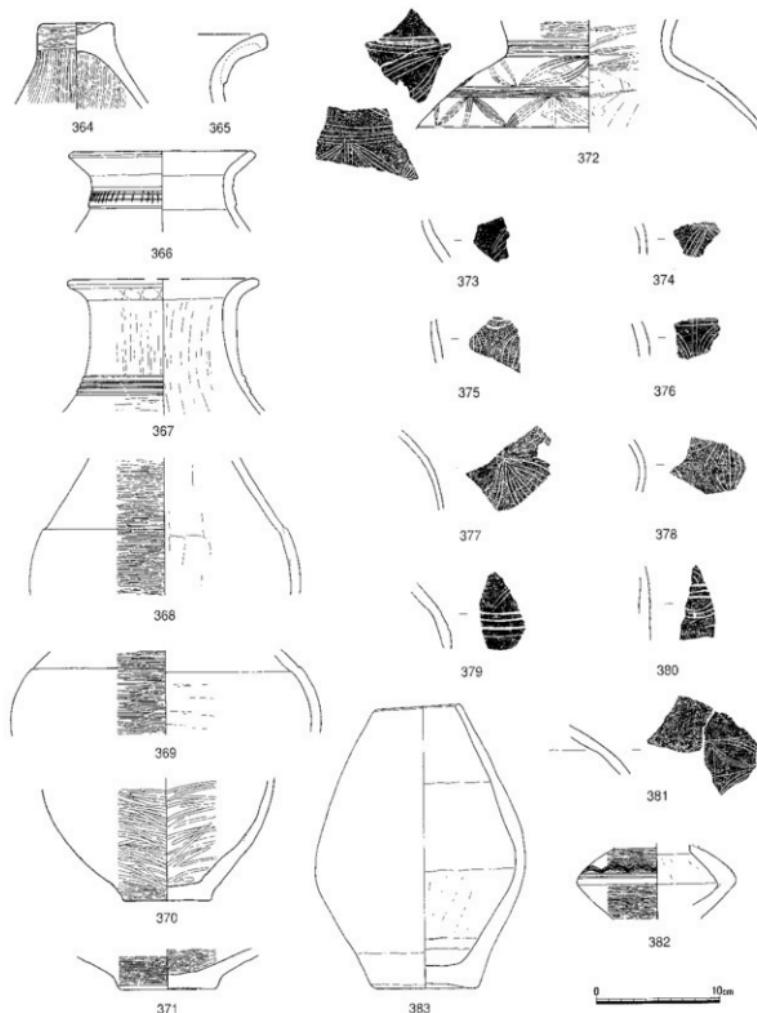
第68図 斜面堆積1出土遺物15 (1/8)



第69図 斜面堆積1出土遺物16 (1/2・1/3)

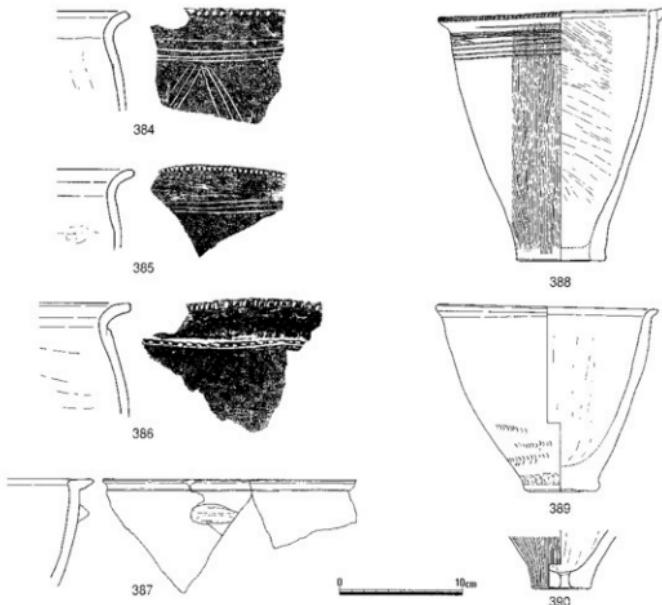
9 遺構に伴わない遺物（第70～75図）

包含層中出土や遺構検出時に出土した遺構に伴わない遺物として、土器・土製品・石器がある。



第70図 遺構に伴わない遺物 1 (1/4)

弥生時代前期の土器は、蓋364、壺365～383、甕384～386・388～390、鉢387、ミニチュア土器456が認められる。364はつまみ部分の上部が残る。365は短く外反する口縁部の頸部に粘土接合の段を明瞭に残す。366は頸部に幅広の削り出し突带上に2条の沈線と刻目状の沈線を施す。367は頸部に3条の削り出し突帶を施す。368・369は頸部の下端、胴部との境に粘土接合の段を残す。372～381は壺の頸部から肩部の破片で、372はヘラ描平行沈線と縦方向にヘラ描沈線で区画された間に無軸の木葉文を交互に斜め方向に配する。373～375・377・378は木葉文、376・381は縦横方向にヘラ描沈線で方形に区画し、その間に無軸の木葉文を斜め方向に配する。380は3条のヘラ描き平行沈線の上下に重弧文を施すようである。382は算盤玉のような形態を呈する小形の壺で、胴部に2条のヘラ描平行沈線を巡らし、その上に重弧文を施す。外面は横方向に丁寧にヘラミガキされ、全面に朱彩されている。383はやや上げ底の底部から胴部中央へ向けて直線的に広がり、胴部中央から口縁部に向かい直線的にすぼまり、口縁端部を丸くおさめる長胴形を呈する。外面ともヘラミガキは認められなく、ナデによる調整である。器壁は全体的に厚く、内面に粘土接合痕を残すなど、概して粗雑なつくりをしている無頸壺である。384～386は口縁部を緩やかに「く」字状に折り曲げ、口縁端部に刻目を施すもので、384は外面に4条のヘラ描沈線を引きその下に3条一単位で山形文を施す。386は狭い間隔のヘラ描沈線の間にヘラ状工具による刺突文を施す。388は植木鉢状を呈し、口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部上半に6条のヘラ描平行沈線文を施す。外面の調整は縦方向のハケメを施す。389は口縁端部を小さく「く」字状に外反する。胴部下半部に浅く爪形文状の刺突が認められる。390は焼成後に円形の穴を穿ってい



第71図 遺構に伴わない遺物 2 (1/4)

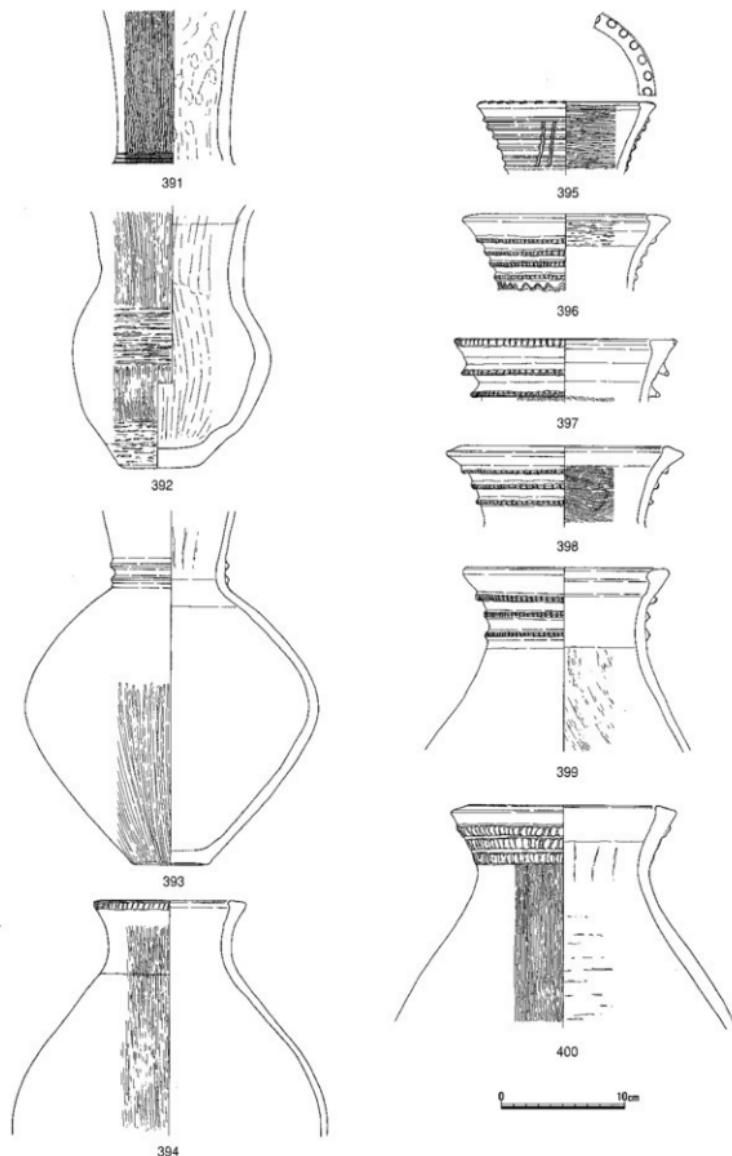
る。387は口縁部が逆「L」字状を呈し、口縁部の少し下に把手を付けている。456は底部から直線的に広がる鉢形を呈し、内外面ともナデを施す。胎土は前期土器特有の粗い砂粒を含む。

弥生時代中期の土器は、壺393～409・412・413、斐416～430、高杯440～442・444～445・447～449、鉢450～455が認められる。393は胴部中央部の膨らみが大きく、頸部に断面三角形の突帯を2条巡らせる。394は口縁部を肥厚し刻目を施す。395は口縁端部を肥厚し端面に円形浮文、外面に貼り付け突帯を巡らし、2本一単位で棒状浮文を施す。396～399は口縁部が緩やかに外反し、端部に向かい徐々に肥厚し、外面に貼り付け突帯を巡らせて刻目を施す。399は口縁端部にも刻目を施す。400は口縁部外面に3条の指頭圧痕文突帯を巡らす。401は大きく開く口縁端部を下方に肥厚し、凹線文・斜め方向に刻目・2本一単位の棒状浮文を施す。また、口縁内側に環状の突帯を巡らし、端部に円形浮文を施す。頸部には2本一単位の棒状浮文を施す。402・403は外反する口縁端部を下方に拡張し、綾杉状の刻目と円形浮文を施す。404は肩部には櫛描平行直線文と波状文を交互に巡らし、下端の櫛描平行直線文の上に4個一単位で円形浮文、その下に斜格子文を施す。405は胴部中央外面にヘラ状工具による刺突文を施す。406は大形の短頭広口壺で口縁端部を拡張し、綾杉状の刻目を施し、頸部に2段の指頭圧痕を施した幅広の突帯を貼り付ける。407は口縁部が水平に広がり端面に刻目、上面に櫛描文を施し、2孔一対の穿孔がある。頸部には2条の突帯を貼り付ける。408・409は「く」字状に外反する口縁部の端部をやや肥厚し斜め方向に刻目と円形浮文を施す。頸部に指頭圧痕文突帯を巡らす。412・413は口縁部が短く外反する。416～424は口縁部を「く」字状に折り曲げ、上方にわずかに湧曲し、口縁端部上面にナデによる窪みがある。胴上半部に最大径をもつ。底部は細くすぼまる。422・423はわずかに上げ底となる。422の底部は焼成後の穿孔がある。外面の文様として胴部最大径付近に421・422はヘラ状工具による刺突文、423は櫛状工具による2段にわたる刺突文を施す。425～430は口縁部が「く」字状に外反し、端部が肥厚する。425～427は口縁端面に刻目を施す。425は胴部に「ノ」字状刺突文を施す。440は杯部が水平となる。441・442は杯部が皿形で端部が拡張する。444・445・447～449は高杯の脚部で、杯部と脚部の境は円盤充填である。450は台付鉢で深い楕形を呈し、脚部との境に刻目を施す2条の突帯を巡らす。杯部上方に穿孔し、外面に櫛状工具による2段の刺突文と3個一単位で円形浮文を配す。脚部に長方形の透かしを5か所施す。451は楕形の形態に台を付け、口縁端部に刻目、2個一対の穿孔がある。452はジョッキ形を呈し、平底の端に穿孔がある。453～455は鉢の台部である。

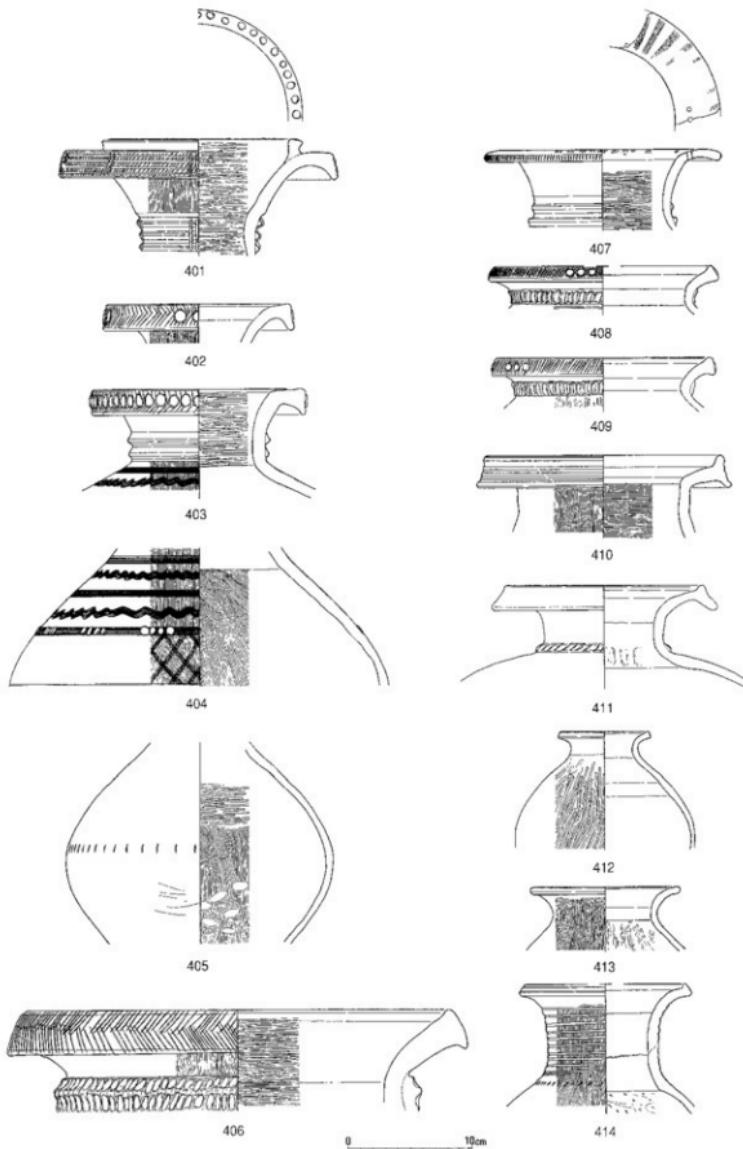
弥生時代後期の土器は、壺391・392・410・411・414・415、斐431～439、高杯443・446、製塙土器457～462がある。391はわずかに逆台形を呈する長頸壺の頸部で、下方にヘラ描沈線文を施す。392は直な胴部から口縁部が長く外方へ開く形態で、器壁が全体に厚い。410は口縁部が拡張し、凹線文を施す。411は口縁部を下方に拡張、頸部に刻目を施した貼り付け突帯を巡らす。414は直立する長頸部から外反する口縁の端部を肥厚させ凹線文、頸部に螺旋状の沈線文、肩部に刺突文を施す。415は胴張りで口縁端部を肥厚させ凹線文、竹管文、鋸歯文を施す。口縁部内面には1/2の範囲で二枚貝の背面の圧痕を付ける。443は杯部が皿形で外方へ開く。457～462は製塙土器の脚部である。外面はヘラケズリを施す。

土製品は、外面に沈線を巡らす弥生時代前期の甕片を転用した紡錘車C7、片面のくびれ部に櫛描平行文と上縁部に沿って細いヘラ状工具で1条の沈線と刻目状の沈線を施す分銅形上製品C8がある。

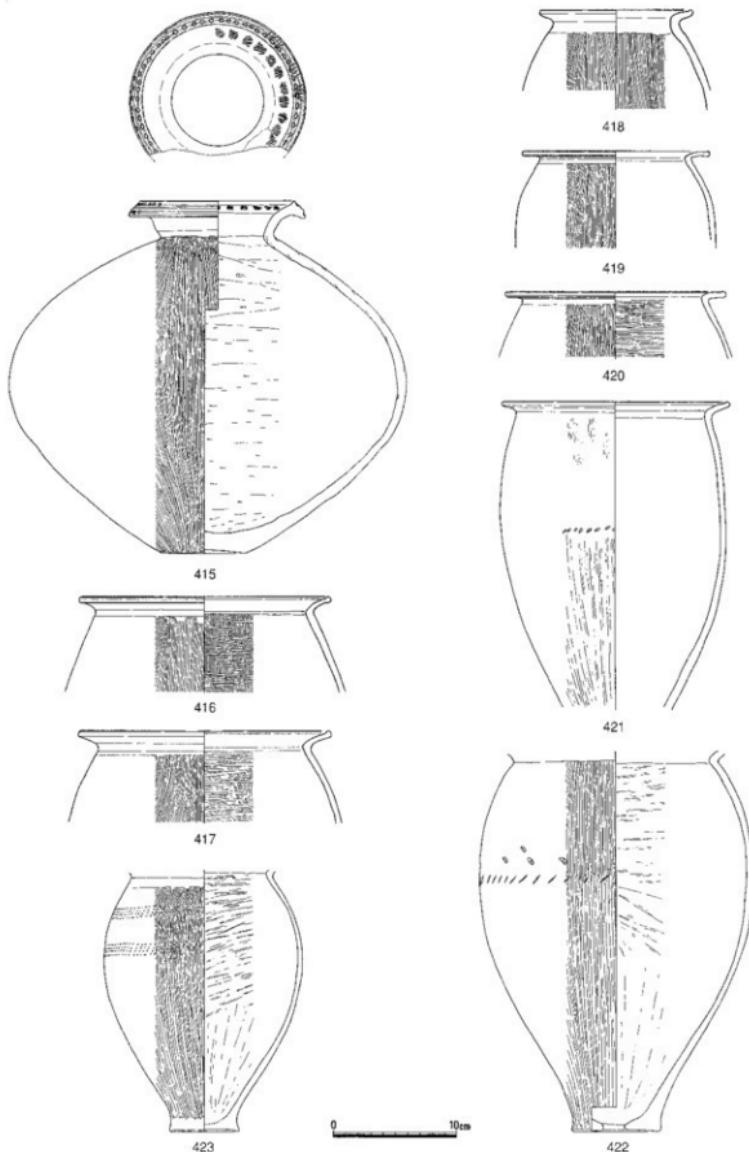
石器は、石鎌S26～S32では基部の形状から、凹基式の石鎌はS26～S30、平基式の石鎌はS32である。使用により両面に磨耗痕の残る完形の打製石包丁S33、尖頭部が三角形を呈し基部を欠く石槍状石器S35、石錐S35・S36、砥石S37、全面が丁寧に磨かれている扁平片刃石斧S38である。（馬場）



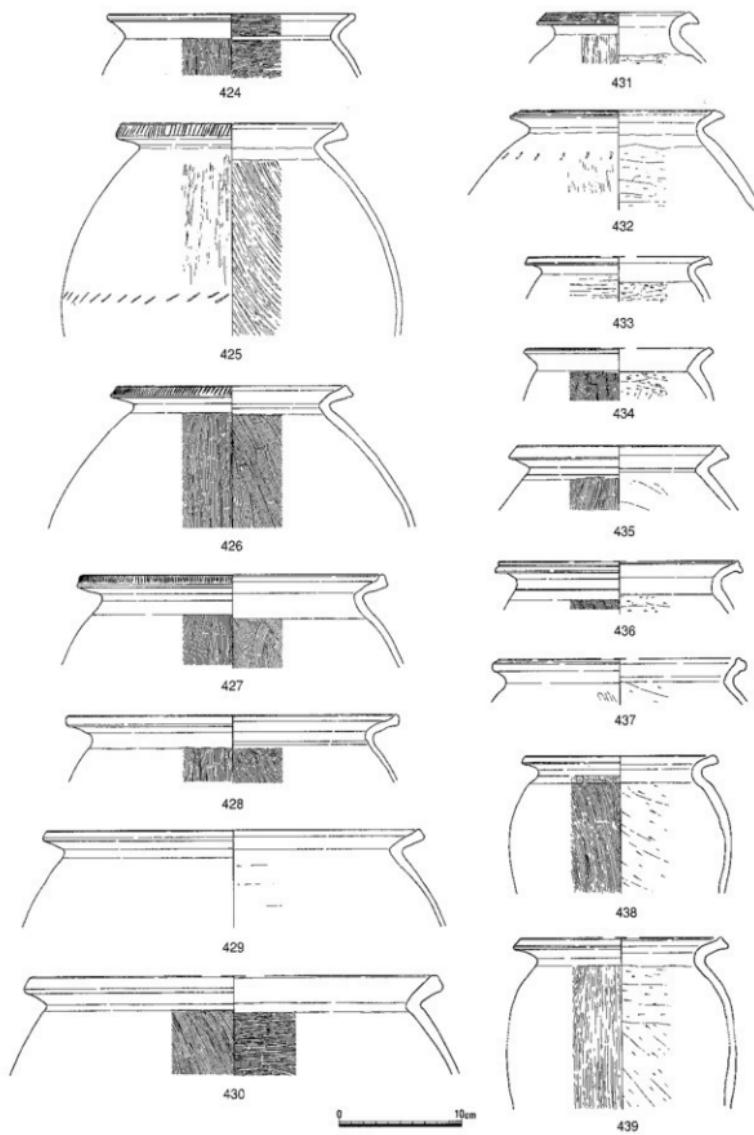
第72図 遺構に伴わない遺物3 (1/4)



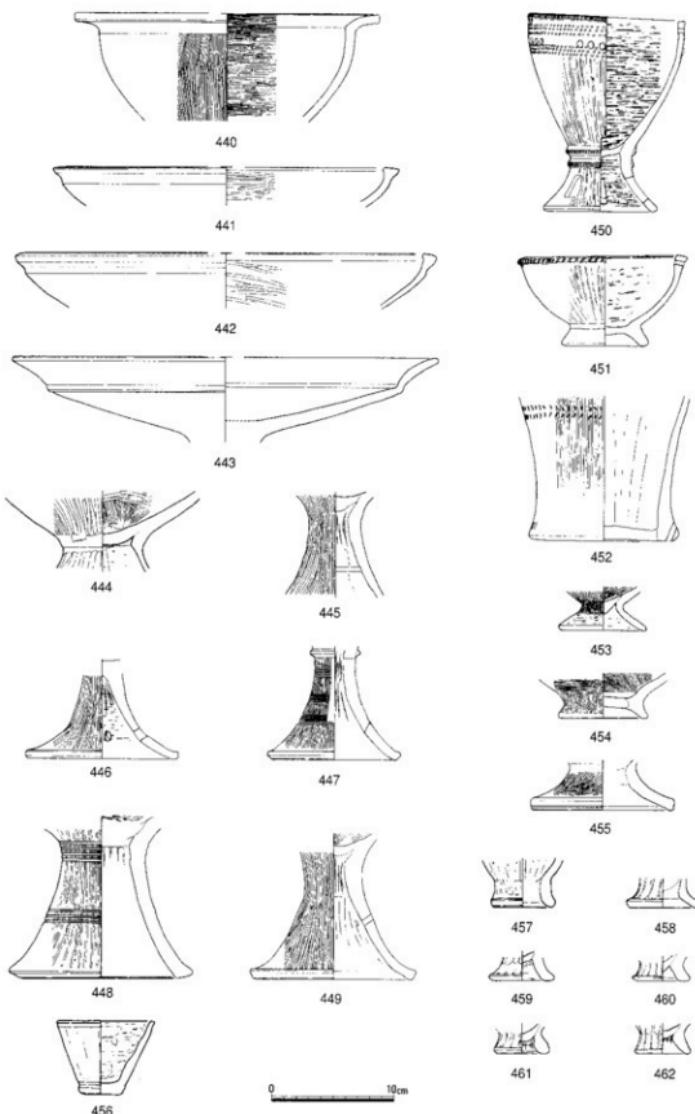
第73図 遺構に伴わない遺物 4 (1/4)



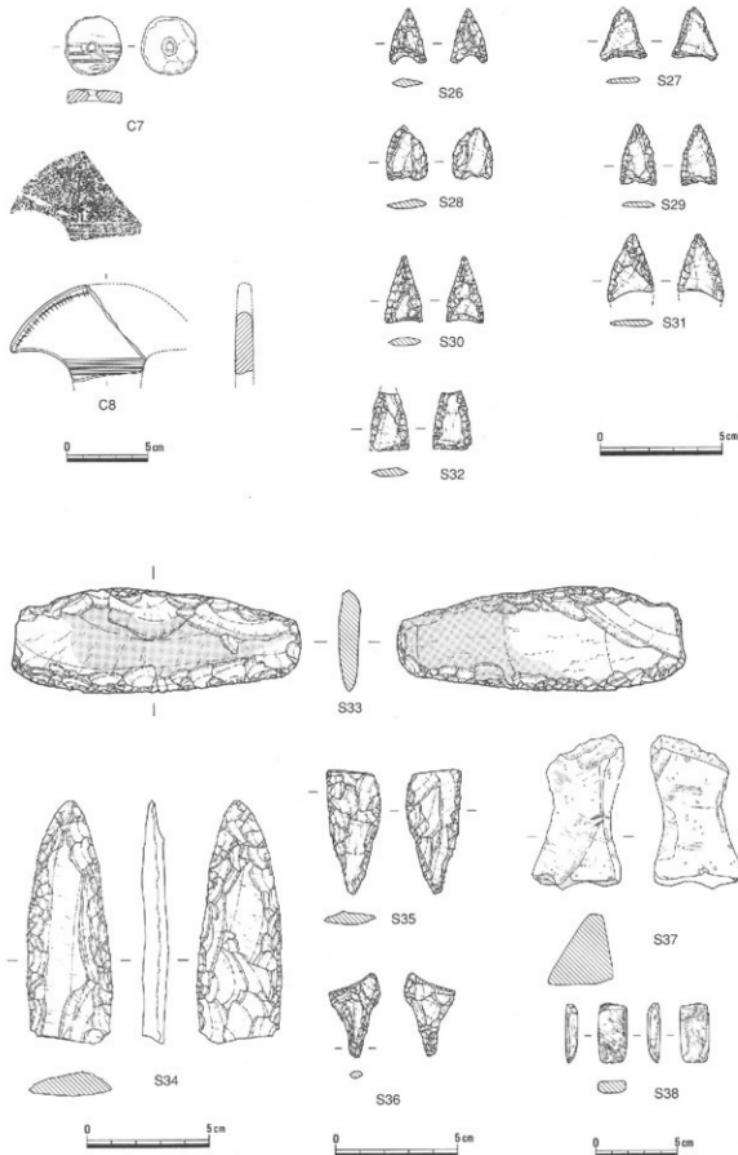
第74図 遺構に伴わない遺物 5 (1/4)



第75図 遺構に伴わない遺物 6 (1/4)



第76図 遺構に伴わない遺物 7 (1/4)



第77図 遺構に伴わない遺物 8 (1/3・1/2)

第5節 古墳時代・古代の遺構・遺物

1 古墳時代・古代の概要

検出した古墳時代・古代の遺構は、弥生時代の遺構に比べ極端に少なく、0区の土壙1基、溝1条、3区の土壙1基、4区の柵列状遺構1基を数えるに過ぎない。弥生時代の遺構と同様、基盤の安定した地点で遺構を検出したが、古墳時代・古代の遺構の中心は本調査区以外に求められる。出土遺物も少量であるが注目されるものは、3区の印花文を施す統一新羅系上器469・470である。(馬場)

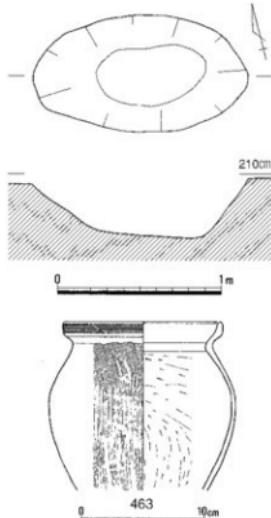
2 土壙

土壙20(第78図)

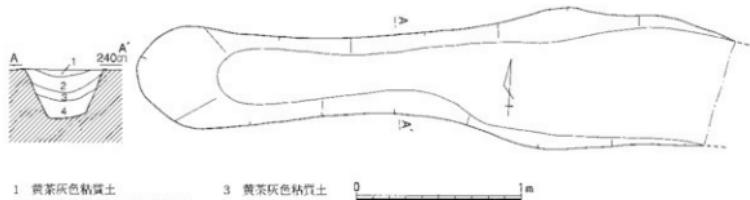
この土壙は、微高地の3区に位置し、溝19の東側に隣接して検出された。規模は、132×72cmで長楕円形を呈し、長軸を東西方向にとる。深さは約34cmを測る。土壙内からは、463号吉備型甕が出土した。時期は、古墳時代前期。(中野)

土壙21(第79図)

0区の中央で検出した上城で、東側部分は明確にプランを確認することができなかつた。平面形は東側に向かい幅を増す東西に細長い形態を呈し、断面は台形を呈する。規模は検出した長さ362cm、幅は46~85cm、深さ30cmを測る。埋土は4層でレンズ状に堆積していた。土壙の時期は、明確ではないが、他の遺構との切り合い関係から古代と考えたい。(馬場)



第78図 土壙20平・断面図(1/30)・出土遺物(1/4)



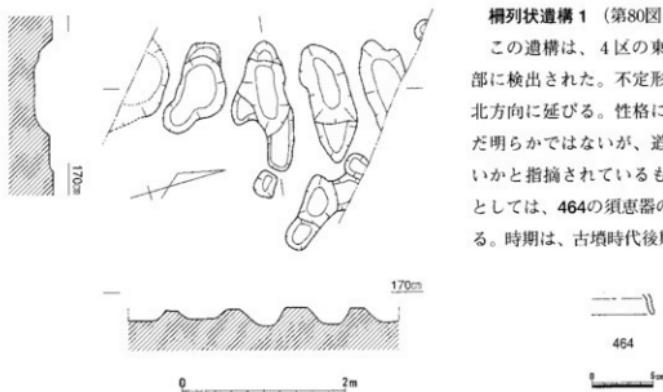
第79図 土壙21平・断面図(1/30)

3 溝

溝29（第7図）

0区の東側で溝1・2の上層で検出した溝である。ほぼ南北に流走する。検出面での溝の幅は260cm、深さは40cm、溝底の海拔高は130cmを測る。断面は皿状で中央部が幅約40cmで一段深くなっている。埋土は3層で、遺物は上層から須恵器甕片が出土し、時期は古代と考えられる。（馬場）

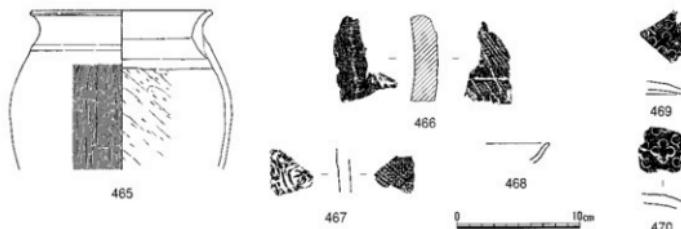
4 柵列状遺構



第80図 柵列状遺構1 平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5 遺構に伴わない遺物

古墳時代・古代の遺構・遺物は、弥生時代に比べると非常に少ない。466は、縄目、布目を施す平瓦。467は須恵器の甕か横瓶の胴部で、内面に「米」字状の車輪文が付く。468は淡い緑色の綠釉で京都産か。469・470は、同一個体と思われ、蓋状の部位か。器表面に竹管による花弁状の押文を全面に施す。統一新羅焼か。（中野）



第81図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

第6節 中世以降の遺構・遺物

1 中世の概要

今度の発掘調査で検出した中世の遺構は、0区の掘立柱建物1棟、1区から3区にかけての井戸4基、6区の溝2条である。

1区の北西から3区までの範囲は表土直下に遺構が確認でき、周辺の0区から1区の南東部やJR赤穂線の北西側に位置する4区から6区の地点よりも、遺構が存在する地盤がかなり高くなっていた。その中でも1区の県道部分から2区が最も高く、地表面を深く掘り下げた井戸や溝だけを検出することができた。このような状況であったことから、かつて存在した浅い遺構は削平されて残っていない可能性があり、井戸の周辺に掘立柱建物のみならず溝や土壌などが数多く構築されて、中世の集落を形成していたと思われる。

出土遺物で注目されるのは、井戸5の完形品の青磁碗487を含む一括資料で、各地域で生産されたものが混在している。また井戸4の瓦質の家形土製品486は、特異で珍しいものである。（福田）

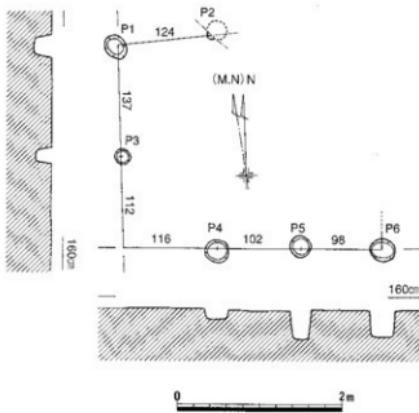
2 掘立柱建物

掘立柱建物2（第82図、図版1-1）

掘立柱建物2は、0区の北西側で近くに柱穴が同一軸線上に並ぶ柱穴群以外に、他の遺構が検出されない場所に位置する。調査区の南北の幅が3mと狭く、遺構も調査区に対して斜め方向で検出され約1/3は調査区外であるため、全体の規模については不明である。現状で桁行3間、梁間2間の掘立柱建物で、棟方向はほぼ東西方向で

N-86°-Wである。柱間は北桁行が北側調査区端部で柱穴の一部を検出したP2を復元し124cm、P3とP4の柱通りの延長上に柱穴を想定し南桁行が116・102・98cm、梁間は137・112cmを測る。床面積は約7.9m²である。北桁行は南桁行に比べやや開き気味である。柱穴の平面形態は円形で、径30~20cm、深さ15~35cmを測る。P4は他の柱穴に比べ深さがやや浅く15cmである。

掘立柱建物2の時期は、柱穴内から遺物の出土はなく確定しがたいが、柱穴の直径が小さく、埋土が茶灰色粘質土であることから中世と考えられる。（馬場）



第82図 掘立柱建物2 平・断面図 (1/60)

3 井戸

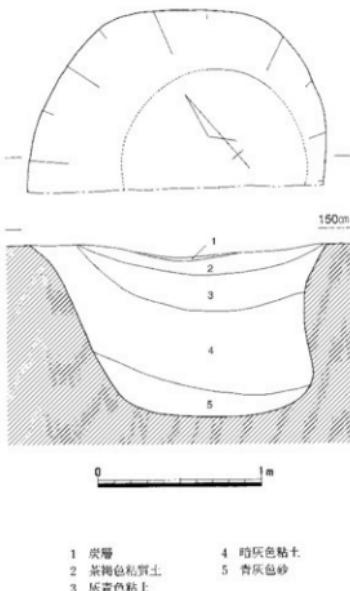
井戸 2 (第83図、図版11-1)

井戸 2 は、1区県道部分の西端部に位置する。南西の約1/2は調査区外のため、確認することができなかった。平面形は、径約180cmを測り、ほぼ円形を呈すると推定される。検出面からの深さは約105cmを測る。埋土は5層で、北側から堆積した状況を示す。

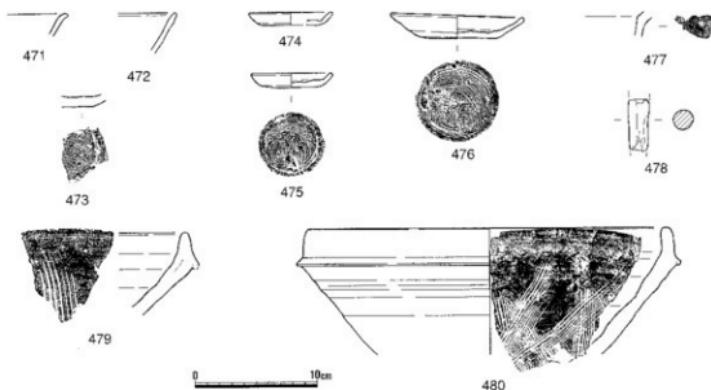
出土遺物は、口縁端部を短く外反する青磁碗471、口縁端部が直立する白磁碗472、底部が糸切りの備前焼碗473、土師質の小皿474・475で、475の底部は回転糸切りである。底部が回転糸切りの土師質の杯476、外面にタテハケを施す上鍋477、瓦質羽釜の脚478、479・480は備前焼擂鉢で、体部が直線的に開き、口縁部が上方に立ち上がる。内面には放射状櫛描条線を施す。480は条線の多条化と条線の交差が認められる。

井戸の廃棄時期は、備前焼擂鉢の器形の特徴から室町時代後半の15世紀後半と考えられる。

(馬場)



1 底層
2 茶褐色粘質土
3 灰青色粘土
4 暗灰色粘土
5 青灰色砂



第83図 井戸 2 平・断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

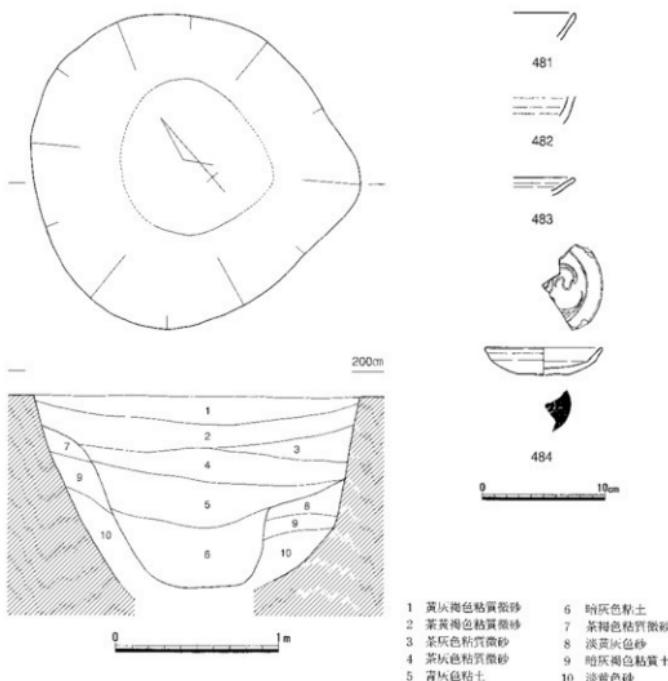
井戸 3 (第84・85図、図版11-2・3)

この井戸は、微高地上 2 区の西端部に位置しており、溝13の肩部を切って検出された。また、井戸の西側には、井戸 4 が近接して存在する。井戸の平面形は、204×191cm でほぼ円形を呈する。深さは、肩部から約115cmまでは確認できたが、そこから下部は湧水が激しく、底部まで掘れなかった。井戸の堆積状況をみると、一度埋まった後に掘り直されて第84図第1～6層の部分が再堆積している。井戸内は、いずれも砂層の堆積が顕著で、洪水で埋没したのであろうか。

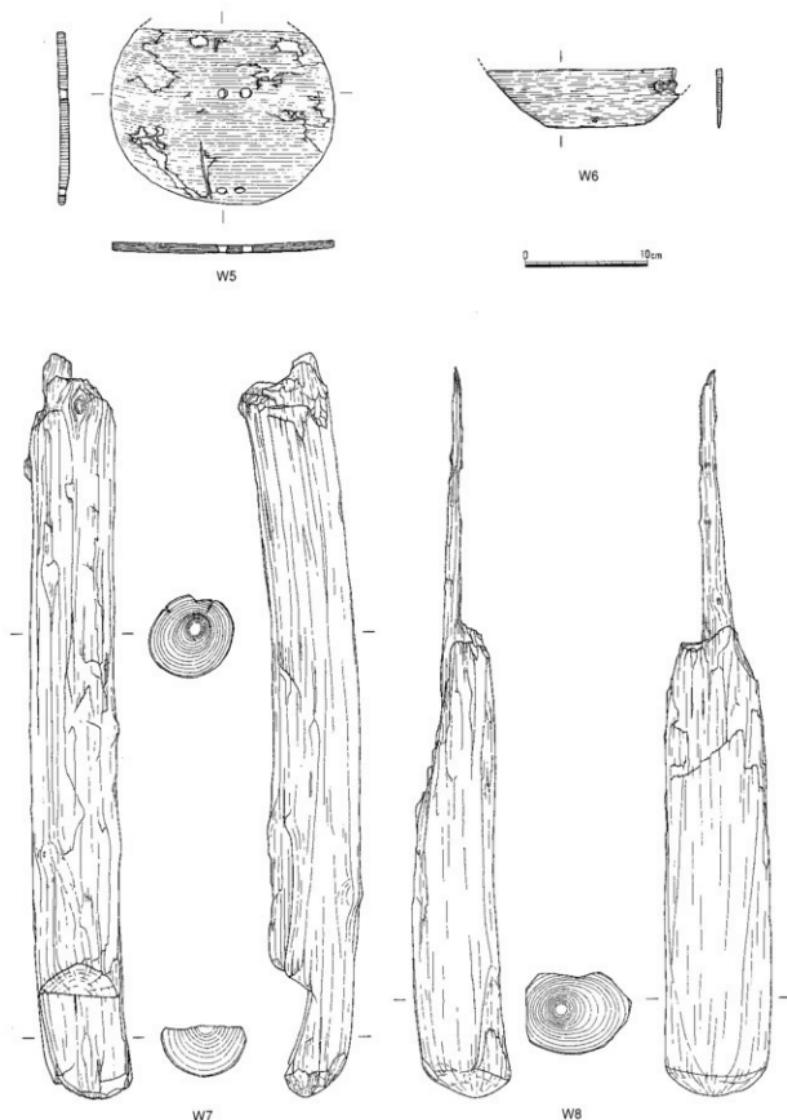
出土遺物としては、白磁481・482、青磁483・484の輸入陶磁器や曲物W 5・W 6、堅杵W 7・W 8 の木器が検出された。
(中野)

井戸 4 (第86・87図、図版12-1)

井戸 4 は、微高地上 2 区の西端に位置する。井戸は、調査区外に広がるため約1/3しか調査ができなかったが、検出状況からみて径約400cmの円形と推定される。深さは、約160cmで、第84図第1～6層が堆積する。遺物は、図示した485・486が出土した。485は、青磁の碗で、見込みと外面に文様を施す。486は、瓦質の異形土器である。手あぶり状の形態で、上部に屋根的なヒレ状のものを貼り付



第84図 井戸 3 平・断面図 (1/30)・出土遺物 1 (1/4)



第85図 井戸 3 出土遺物 2 (1/4)

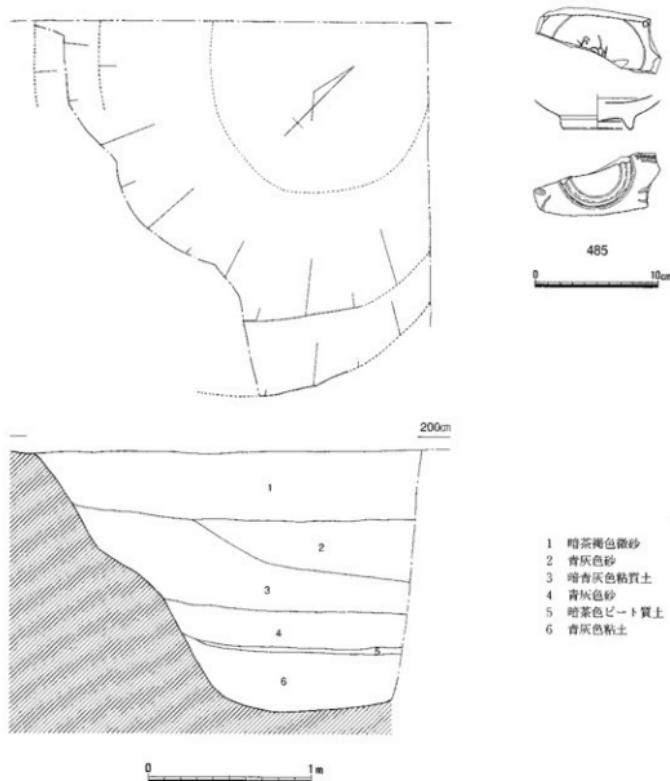
ける。胸中央部の片面に方形の窓を開ける。窓の上下にはつば状のものが巡る。底部は丸底で屋根・胴部に比べ器壁が薄い。内外面ハケ目。

(中野)

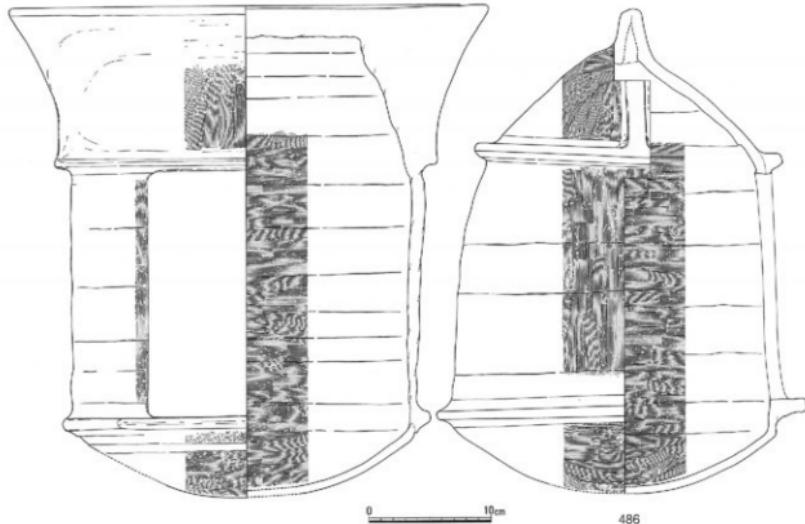
井戸 5 (第88・89図、図版12-2・3)

3区のほぼ中央部で検出した井戸で、南西側の一部が調査範囲外になるため、調査することができなかった。平面形は円形に近い楕円形を呈し、検出面での計測値が長径203cm、短径190cmになっていた。断面形は2段掘りの様相を示して、第3層の茶灰色粘質土が堆積していた所から、壁面が角度を変えて急激に下降していた。井戸の内部は、検出面から約110cmの深さまで堀り下げる事ができたが、それより下位の部分は危険だったので調査を中止した。出土した遺物は上層よりも下層に多く含まれていたが、土師質土器と須恵質土器の形態や特徴から、13世紀中葉の時期に属すると考える。

井戸内から出土した遺物は、各地域で生産されたものが多い。完形品の龍泉窯系青磁碗487はI-4



第86図 井戸 4 平・断面図 (1/30)・出土遺物 1 (1/4)



第87図 井戸4出土遺物2 (1/4)

類に分類されるもので、体部の内面を2本の弦線で5分割し、その中に飛雲文を描いている。玉縁を有する白磁碗488はIV-1a類に分類され、福建省などの華南一帯で生産されたものである。灰白色を呈して底部に糸切り痕跡を有する土器489~496は、小皿497~499とともに備前市伊部周辺に窯跡が分布している。内面に暗文を施した底部の破片500・501は、和泉型瓦器碗である。502・503は東播系須恵質土器の捏鉢である。504は備前系須恵質土器の甌の破片と思われる。505は外面に格子状のタタキが認められるから、倉敷市の龜山窯で生産された土器と考える。貼り付け高台を有する椀506~509は吉備系土師質土器と呼称されるもので、底部がヘラ切りの小皿514(510~513は底部が手づくねのもの)や鍋515~518と一緒に、瀬戸内海中部北岸地域の備前西部や備後で多く出土するものである。519は三足の付く瓦質の釜で、畿内系の土器である。
(福田)

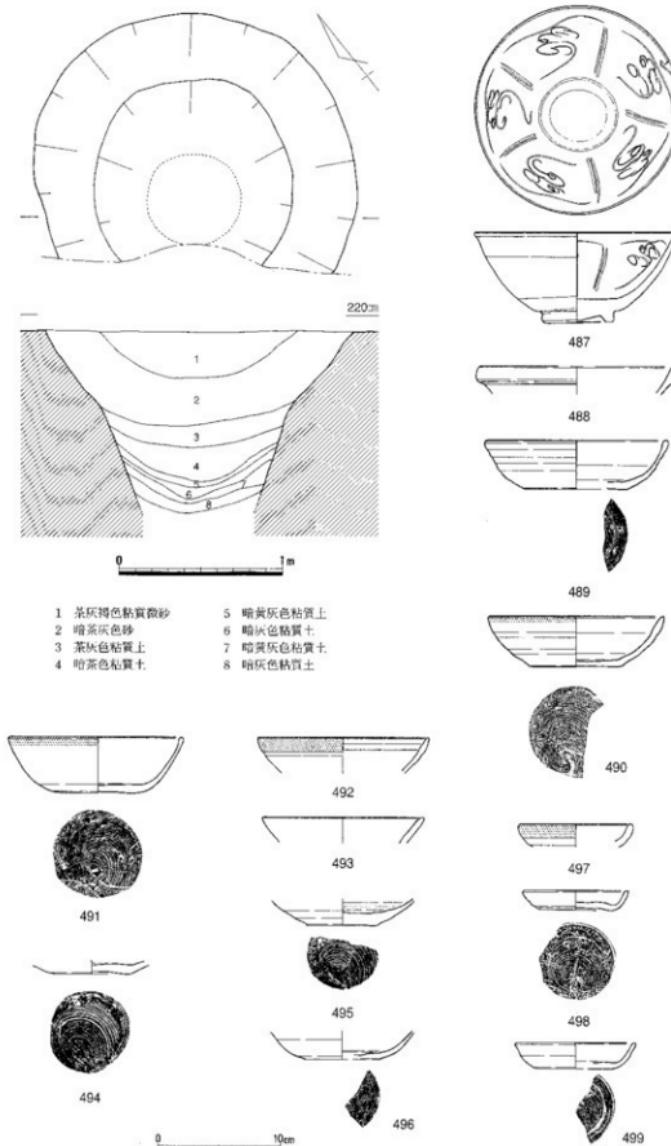
4 溝

溝30 (第9図)

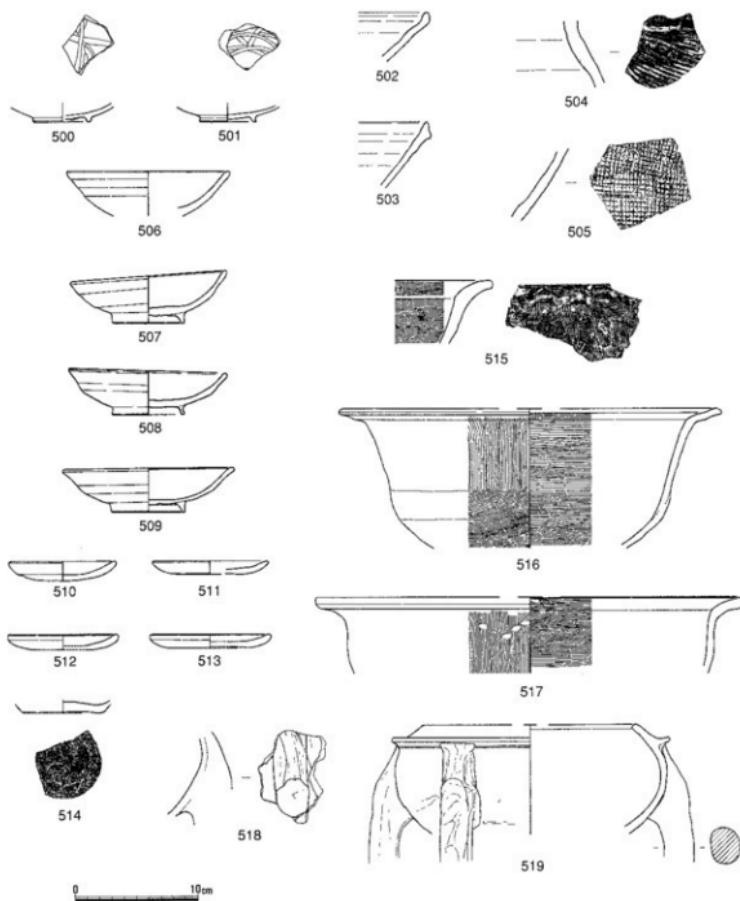
この溝は、微高地の3区の東側に位置し、溝15の上部に検出された。北北東から南南西に延びる。溝は、溝31の東側に接しており、ほぼ平行する。幅約80cm、深さは約40cmを測る。溝の埋土は溝31と類似するが、溝31に切られている。遺物はないが、検出状況などから中世か。
(中野)

溝31 (第9図)

溝は、3区の東側に位置し、溝30の西側に接して平行する。溝30を切っている。幅は、約50cmで、



第88図 井戸 5 平・断面図 (1/30)・出土遺物 1 (1/4)



第89図 井戸5出土遺物2(1/4)

深さは約40cmを測る。溝内は、淡茶褐色微砂が堆積しており、出土遺物は確認できなかった。時期は、溝30と同様に中世か。
(中野)

溝32(第12図)

溝は、6区の溝24の上部にほぼ重複するように検出された。北北東から南南西に延びる。幅約200cm、深さは約40cmを測る。溝内には、暗灰色粘質土が堆積している。出土遺物はないが、溝24よりは新しく、溝33よりは古い。
(中野)

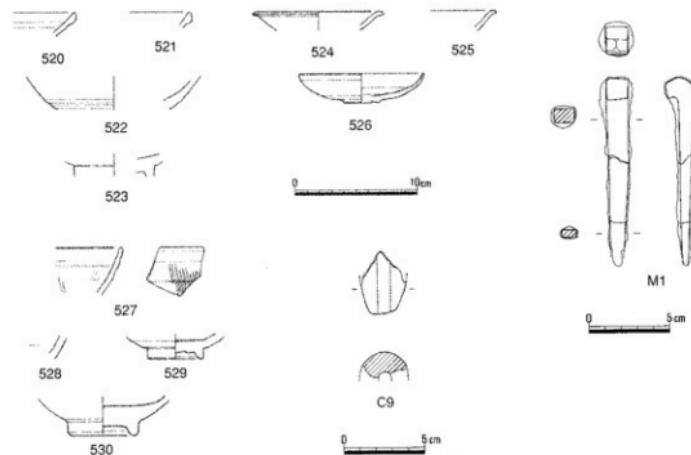
溝33（第12図）

この溝は、6区の西側に位置し、溝32の西約15mに検出された。溝26の上部にあり、北北東～南南西に流走する。規模は、幅約300cm、深さは約80cmを測る。溝は、2段掘りとなっており、茶灰褐色砂が堆積している。出土遺物はないが、検出面からみて中世以降か。

(中野)

5 遺構に伴わない遺物

包含層中出土や遺構検出時に出土した遺構に伴わない遺物として、輸入陶磁器・土製品・鉄器がある。輸入陶磁器として、0区・3区で出土した520～523は白磁碗で、口縁部の形態は520・521のように小さな玉縁を呈する。削り出し高台は523のように玉縁口縁部に伴う台形を呈するようである。3区・4区で出土した524～526は白磁皿で、口縁部の形態は524・525のように短く外反するものと、526のように体部を内湾気味にし、口縁部に向かい引き上げているものがある。底部はやや上げ底になっている。0区・3区で出土した527～530は青磁碗で、527は体部から口縁部にかけて若干内湾する。外面に櫛目、内面に櫛状工具による施文を施す。施文の特徴から同安窯系に分類される。529・530は青磁碗の高台部分で、529は削り出し高台がシャープで、底部に向かい器肉の厚さを増すことにより、龍泉窯系に分類される。530は底部の器肉が厚く、高台にシャープさがない、体部外面に蓮弁の文様の一部を有することより、龍泉窯系に分類される。白磁・青磁は、熊山田遺跡でも微高地の標高が高く、遺構の密度の高い3区で多く出土した。白磁・青磁の時期は12世紀代から13世紀代に生産されたものと考えられる。土製品として、3区で出土したC9は管状土錘で、大形で胴張りのある形態を呈する。約1/4残存している。鉄器として、6区で出土したM1は鉄釘で、長さ11.6cm、最大幅1.3cm、厚さ0.9cmを測り、断面は長方形を呈する完形品。頭部の一端を折り込む形態を示す。（馬場）



第90図 遺構に伴わない遺物 (1/4 · 1/3)



写真2 3区発掘調査状況（南東から）



写真3 3区発掘調査状況（北西から）

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

発掘調査は、長さ約346m、幅3mの調査面積にして約1,128m²という狭く細長い調査区の中で、弥生時代前期から中世にわたる竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・溝・柵列状遺構など数多くの遺構を検出した。これらの遺構は、吉井川東岸に形成された微高地上に立地する遺跡に、東西方向にトレントを入れた成果でもある。ここでは、出土遺物や周辺の状況から各時代の遺構の変遷についてまとめる。

1 繩文時代

繩文時代の遺構は検出されなかったが、遺跡の立地する微高地上で海拔の高い0区・1区・3区で、後期前葉から突堤文土器出現前の晩期にかけての土器片が出土した。4区斜面や5区・6区の低位部では出土しなかった。このことにより、現在の千町平野の大部分が繩文時代には瀬戸内海に続く海であったものが、吉井川の土砂の堆積によって急激な陸化が進み、吉井川左岸の自然堤防の微高地上が形成され、熊山田遺跡から北へ約500mに位置する下笠加遺跡や、南へ約700mに位置する堂免遺跡などの突堤文土器の出土から、晩期には陸化された沖積地に人々の生活の痕跡が見られはじめると言われてきたが、今度の熊山田遺跡の発掘調査によって、繩文時代後期前半にまで遡る可能性が高くなった。このことは、千町平野を望む丘陵南隣に位置し、繩文時代前期（羽島下層式）から後期（福田KⅡ式）までの長期にわたる吉井川下流域での拠点的な繩文貝塚である、大橋貝塚の居住が継続された時期の終末に相前後している。これらのことから、繩文時代中期まで丘陵裾や谷部に貝塚を形成して定住していた居住地を、後期以降になって一部の者は、微高地上が形成された沖積地へ生活基盤となる農耕や狩猟による食料確保の適地を求めて、また一部のものは、大橋貝塚の立地する丘陵裾から同丘陵を南に越えた低い丘陵裾に位置する繩文時代後期（中津式）から晩期（黒土BⅡ式）の貝塚である黒和貝塚などへ、貝の採集など漁労による食料確保の適地を求めて居住地を移動または拠点としていた繩文時代後期の時期的転換の一端を示していることが想定される。

(馬場)

2 弥生・古墳時代

今回の調査で、弥生・古墳時代の古地形がほぼ明らかとなった。0～3区は、南北方向に延びる微高地部にあたり、各時期の遺構が検出された。特に、2・3区の遺構密度は高かった。0区から東へは、徐々に下がっていくと考えられる。4区の東側では、西側に基盤層が下がって行く微高地の斜面部にあたり、大量の遺物が出土した。この斜面にも遺構が存在しており、0～4区が生活域として認識できる。4区西端から5区の間には、たわみ状の凹部が確認されており、微高地縁辺部の湿地と考えられる。4区西・5区・6区は、低位部にあたり水平堆積層が認められ、遺構面も2面ある。遺構は、溝などが断続的に確認されており、生産域と考えられる。

以上のように、古地形の状況はある程度明らかとなったが、今回の調査は幅約3mという限定された

ものであったため、遺跡の性格等の掌握は困難であった。しかしながら、各時期の数多くの遺構・遺物が確認されており、時期順にその概要を以下に記す。

今回の調査で確認された弥生・古墳時代前期の遺構は、竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、土壙21基、溝29条等がある。最も古いものとしては、遺構は検出されなかったが、61・65・66などの弥生前期前半の土器が出土していることからみて、この時期にはすでに微高地に占地していたと思われる。次に、弥生前期中頃～後半では、竪穴住居は認められないが、土壙1～5などの遺構がある。弥生前期の遺構は、微高地西側のたわみ1から西の4区までの約50m間に集中しており、微高地上でも最も安定した地点であったと考えられる。隣接地に居住城が想定される。引き続きの中期中葉まで同様な状況を示している。また、微高地西側の5・6区の低位部での水田の存在も想起される。弥生中期では、掘立柱建物1、井戸1、土壙6～12・14～19などがあり、遺構の数も多くなる。また、土壙11は、小規模な竪穴住居の可能性もある。さらに、4区の微高地斜面には、弥生前期を含む弥生中期前葉の土器など(第54～69図)が大量に出土しており、その消費単位を考えると弥生前期から弥生中期へ集落の飛躍的な展開が予想される。一方、集落域の東側には、溝14～16などの規模の大きい溝が掘られ、その労働力は集落の拡大を裏付けている。この大規模な溝は、以後弥生後期に至るまで2区から3区東側の地点に踏襲される。このような微高地上を横断する規模の大きい溝は、幹線水路と考えられ、微高地南東部に展開するであろう水田に水を供給していたものと考えられる。また、5・6区の低位部にも溝が確認されており、畦畔などは認められないものの水平堆積層が存在することから水田域であった可能性が強い。弥生中期中葉以降、遺構・遺物は減少するものの弥生後期後半の竪穴住居1などが確認されており、微高地の土地利用は拡大していったと思われる。また、弥生後期中葉の溝13など幹線水路も引き続き存在し、幾たびの洪水による埋没にも掘り直しを行っている。

古墳時代前期には土壙20しか確認できず、集落は別地点に移動したものと考えられ、古墳時代後期には水田域となったと思われる。
(中野)

3 古代・中世

古代の遺構は土壙1基と溝1条であり、遺物としては内面に布日の印き、外面に縄日の印きを有する平瓦の破片466、内面に車輪文が認められる須恵器の小破片467、縁釉陶器の小皿片468、外面に竹管による押圧文を施した統一新羅の蓋と思われるもの469・470が出土している。

中世の遺構は、掘立柱建物1棟、井戸4基、溝2条だけである。井戸4基を確認した1区から3区にかけての地点は、周辺の調査区よりも遺構面のレベルが高くて表土直下に遺構を検出したから、地表面を深く掘り下げた井戸だけが残存した状況で、かつて存在した浅い遺構は削平されて残っていないと考えられた。したがって、4基の井戸に近接した場所には、掘立柱建物のみならず溝や土壙などが数多く構築されて、まとまった中世の集落を形成していたと思われる。
(福田)

第2節 出土遺物について

1 熊山田遺跡の木葉文

熊山田遺跡からは、多数の木葉文を有する土器が出土している。藤田憲司氏は、木葉文とは『向い合う上に複数の弧線で形つくられた1葉の木葉形を「×」字状に配した（斜めにクロスさせた）4葉の木葉状圓形の複合体』（註1）としている。つまり、木葉文は基本的には「×」形に展開するものと言える。その後すでに諸氏により様々な分類（註2）が行われているが、ここでは熊山田遺跡出土の木葉文を有する土器について、基準線の展開方法・木葉文の形態による分類、施文順序に基づいて、詳細に観察してみる。

a) 基準線の展開・木葉文の形態による分類

木葉文は、1つの木葉形内の軸線の有無により主に有軸・無軸と分類されるが、藤田憲司氏によると「有軸と無軸の差は、弧線を描く際の基準となる線が向い合う弧線の内側にあるか、外側にあるかの差」（註3）であることから、その軸線をここでは「基準線」と称し、その基準線を中心として木葉形を展開するものをA類、基準線で□などの枠を構成し、その間の空間に木葉形を展開するものをB類に大別する。さらにA類をみていくと、基準線が「+」形に展開するもの（1）、「T」形に展開するもの（2）、「×」形に展開するもの（3）に分類できる。次にB類については、木葉文の中でも基本的に縦・横で構成される基準線の中に木葉形を施すものを（1）、横方向のみの基準線間に木葉形を施すものを（2）に分類できる。以上の分類に基づき、熊山田遺跡から出土した木葉文を見ていきたい。

A—1類 「+」形の基準線に木葉形を展開するもの。**50・52**があげられる。**52**は本遺跡の木葉文を施す上器の中で一番大きな破片である。頸部から胴部の境に明瞭な段を有するが、この段を木葉文の横方向の基準線にしている。木葉形は基準線を中心に両側にほぼ4本ずつ（3～5本の場合もある）の弧線を施している。木葉形自体は、かなり膨らみがある。**50**は小さい破片であるが、**52**と非常によく似ている。**52**と同一個体の可能性もあるが、木葉形の沈線が**52**より少し幅広いこと、施文の深さが深いこと、また1つの木葉の大きさがやや**52**より小さいことから、別個体としている。**52**同様、頸部から胴部の境に明瞭な段を有し、段を横方向の木葉文の基準線として、上下左右に木葉形を施す。

A—2類 「T」形の基準線に木葉形を展開するもの。**51**があげられる。A—1類の**50・52**同様に水平垂直方向に木葉形を施しているが、木葉文の展開は「+」形ではなく、「T」形となる。木葉形の基準線を中心と両側に3～5本の弧線を描く。木葉形自体は膨らみがある。

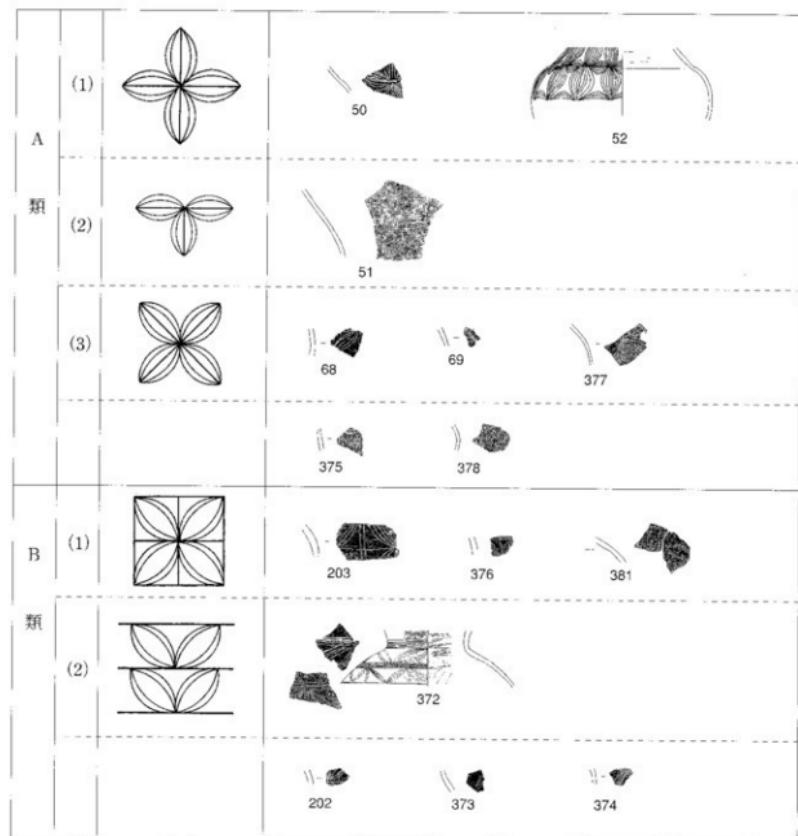
A—3類 「×」形の基準線に木葉形を展開するもの。**68・69・377**があげられる。**68**は、基準線を中心に両側に2本ずつ弧線を描く。木葉形自体は膨らみのない、幅の小さい形となっている。**69**は、木葉形の中心にある基準線のかく木葉形の弧線なのかが不鮮明な程、木葉の幅が小さくなっている。A類かB類か不明瞭であるが、中央の線がやや直線的なことを考慮すると基準線の可能性もある。**377**は、小片のため不明瞭であるが、基準線の方向は「×」形であると考えられる。弧線は、基準線を中心と両側に4本ずつ描いて木葉形を構成している。木葉自体はかなり膨らみがある形をしている。

その他のA類 A類であるが、基準線の展開方向が不明瞭であるもの。**375・378**がある。**375**は小片のため方向ははっきりしないが、木葉形自体はかなり膨らみのある形をしている。**378**は、木葉形の弧

線が基準線に対して片側に4本あることが分かる。木葉形自体はかなり膨らみがある。

B-1類 縦・横の基準線で□を構成し、その間の空間に木葉形を展開するもの。203・376・381があげられる。203は、木葉形の一部のみをみるとA類にもみえるが、横1条・縦2条の基準線となる沈線があるため、B類となる。木葉形の中央部分にわずかに空間を持つ。376は小片であるが、縦2条・横2条以上の沈線で基準線を構成している。弧線は片側3本以上と思われる。381は縦1条・横1条の基準線がある。木葉形の中央部分に文様を施していない空間がかなりある。木葉形は膨らみがあり、両側に3本ずつ弧線を施している。

B-2類 横方向のみの基準線間に木葉形を展開するもの。372があげられる。372は、同一個体と考えられる2つの破片より構成されている。横方向に5条一単位の直線文が2段以上施されている。直線文で区画された空間の上段の方に施されている木葉形の弧線は両側に3本ずつある。やや大きめで膨



第91図 熊山田遺跡出土の木葉文分類図 (1/8)

らみがあり、木葉形の中央部分には空間がある。下段の方に施されている木葉形は5本の弧線で構成されている。幅は細く中央に空間のない木葉形をしている。木葉形2つの間に縦方向の3条の沈線がある。

その他のB類 基準線の間に木葉形を展開するものの、縦横の基準線か横の基準線が不明なもの。また基準線自体が不明であるが、木葉形がA類のように基準線に展開していないもの。**202・373・374**がある。202は、木葉形以外に横方向と思われる直線文が見える。これが基準線であろう。木葉形の弧線は両側に3本ずつある。373は小片であり、縦横の基準線は不明である。かなり細い施文具で文様を施している。幅の狭い木葉形であるが、中心のわずかな空間を挟んで2本ずつ木葉の弧線を施している。374も、縦横の基準線は不明である。幅の狭い木葉形であるが、1つの木葉形の弧線は5~6本である。

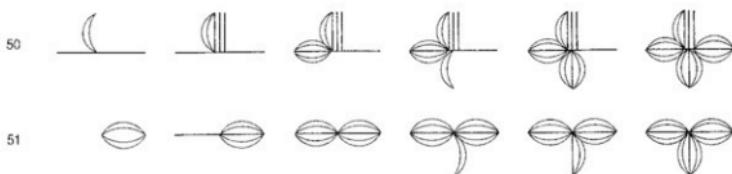
以上のように、熊山田遺跡においてA類では基本的な展開方法と考えられる「×」形だけでなく、水平垂直方向（「+」形・「T」形）に展開するものも多く含む。特に**50・52**のように、段の部分を横方向の基準線にしているという注目すべき特徴がある。また、B類では、□または=の方向で区画された中に木葉形を描いており、基準線の判明する個体のほとんどが「×」方向に展開している。372のみは上下2段に木葉文が展開し、「×」方向にはならず、上段下段で「V」字状に展開する可能性がある。

b) 基準線と施文順序

次に、A・B類共に基準線と木葉形との施文順序の関係を見てみる。比較的、施文順序等が分かる残存状況の良いものを取り上げていく。A類では**50~52**、B類では、**203・372・381**がある。

まず、A-1類の**50**は、器表の摩滅が少ないため、木葉文の施文方法がよく分かる。段より上・縦方向の木葉形は、左側の木葉の弧線を基準線が切っているので、基準線より先に弧線を描いていることが分かる。さらに、左・横方向の木葉形は、弧線が下・縦方向の木葉形の基準線に切られている。同様に下・縦方向の木葉形自体も、弧線を描いた後に基準線を描いている。また右・横方向の木葉形の弧線が下・縦方向の木葉の弧線を切っている。先後関係からみると、木葉の弧線を描いた後に基準線を描いており、4つある木葉形もおそらく反時計回りの順序で描いたものと思われる。52は、木葉形が「+」形に展開しており、段より上方と下方では、縦方向の基準線が通っていないので、木葉文の縦方向の基準線は、上方下方と別々に描かれていることが分かる。また、器表が摩滅しているため、施文方法が不鮮明であるが、基準線よりも木葉形の方を先に描いている部分がある。

A-2類の**51**は木葉文の下方に2条の直線文、さらにその下には、重弧文が施されている。この直線文は木葉形を描いた後に描かれているので、B類のように区画してから木葉を描くという基準線ではなく、重弧文との区別のために引いたものであろう。木葉文自体の施文順序をみると、右・横方向の木葉形の弧線の両側を描いた後に、おそらく横方向の基準線を左・横の木葉形のところまで描く。その後、



第92図 50・51の施文順序略図

左・横方向の木葉の弧線を描き、下・縦方向の木葉形を描く。下・縦方向の木葉形は、基準線に対して右側の弧線、縦の基準線、左側の弧線という順序で描いていると思われる。

このようにA類についてみてみると、木葉形の弧線を描いた後に基準線を描く例があることから、必ずしも木葉形の施文の基となる「基準線」を割り付けた後に、木葉文を描いてないことが分かる。

次にB-1類の203・381である。203は、まず横方向の直線文を4条以上描き、1条以外はナデ及びミガキでほとんど消されている。その後、縦方向の沈線2条及び、木葉形を施している。381は、縦横1条のみの沈線で□の基準線を構成し、区画している。施文具は、他の上器のものより、かなり細いものを使用していると思われる。現存している破片の状況から、少なくとも上下2段で構成されており、まず、横方向の直線文を2条描き、その後、縦方向の直線文を上から下まで描いている。その後に中心から下側の3本、次に上側の3本の弧線を描いたと思われる。

B-2類の372は、胸部と頸部の境と、胸部上半部分に、それぞれ横方向に5条の直線文が施されている。下段は、横方向に5条の沈線を引いた後、木葉形を施していく。まず右側の木葉形を描いた後、縦3本の直線文、その後左側の木葉形と、右から左へと文様を施している。上段下段の区画の意識はあったかもしれないが、それを縦方向に分割する意識は低かったのかもしれない。

これらのことから、B類は棒で区画してから、その中に木葉形を描いていたことが分かる。すなわち、B類はA類とは反対に、□の棒を基準線として全体を割り付けてから木葉形を描くという施文順序をとっていたと考えられ、熊山田遺跡の木葉文は二つの異なる施文の原則があったと考えられる。

c) まとめ

岡山県内においても木葉文は多数出土しているが、それらの木葉文の資料と熊山田遺跡の出土資料とを比較してみると、いくつかの特徴が挙げられる。

まず、岡山県において木葉文が出土している遺跡の分布をみる。すべて網羅できていないが、現状で把握している遺跡は、県南部では西から、児島の広江・浜遺跡（註4）、足守川流域の上東遺跡（註5）、川入遺跡（註6）、鎌戸原遺跡（註7）、津寺遺跡（註8）、葦木遺跡（註9）、南溝手遺跡（註10）さらに東の旭川流域では津島遺跡（註11）、百間川遺跡群（註12）、砂川流域の南方前池遺跡（註13）、そして東端部にあたる吉井川流域の円張東貝塚（註14）、門田貝塚（註15）、熊山田遺跡がある。県北部でも若干出土しており、津山市の天神原遺跡（註16）、大田茶屋遺跡（註17）、哲西町の清水谷遺跡（註18）、岸本下遺跡（註19）、西江遺跡（註20）、大倉遺跡（註21）がある。これらのうち、木葉文を多数出土している遺跡としては、津島遺跡、南溝手遺跡、百間川遺跡群などが挙げられる。その他の遺跡はそれぞれ数点程度の破片が出土しているのみである。

明瞭に木葉形の展開が判明するものだけをみていくと、多くは「×」の基準線となるが、「十」形に展開する土器は、津島遺跡と南溝手遺跡のそれぞれ1点ずつ、逆「T」形に展開するのは、津島遺跡と百間川遺跡群の1点ずつのみである。また、熊山田遺跡出土50・52の資料のように、有段壺の段部分を横方向の基準線として木葉文を展開しているものはない。

以上の比較から、熊山田遺跡の木葉文の特徴をあげると以下のようになる。

①A類の中では基準線が水平垂直方向に展開するもの（「十」形・「T」形）になっているものが他の遺跡に比べて多い。

②頸部と胸部の境の段を横方向の基準線として木葉形を展開している。

③施文順序が判明したのからみると、B類の場合は棒となる基準線を引いてから、木葉形を施す。

A類の場合は「×」形のものは不明だが、水平垂直方向（「+」形・「T」形）の基準線をもつものは木葉形の施文の基となる割付線となっていない。

岡山県内の資料の比較にとどまるものの、熊山田遺跡の資料の検討により明らかになった、このような施文方法の違いがどのような意味をもつのか、今後の検討が必要であろう。 (問)

註

- (1) 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古研究集報』第17号 倉敷考古館 1982
- (2) a 許1と同じ
 - b 工業普通「遠賀川式上器における木葉文の展開」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983
 - c 深澤芳樹「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号 考古学研究会 1989
- (3) 許1と同じ
- (4) 間忠彦・間博茂子・藤田憲司「江戸・浜遺跡」『倉敷考古研究集報』第14号 倉敷考古館 1974
- (5) 下澤公明「下庄遺跡 上來遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157 岡山県教育委員会 2001
- (6) 関田 博・井上 弘「新郎遺跡、那ノ溝遺跡、佐生田遺跡、掛無堂遺跡、川入遺跡、中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 岡山県教育委員会 2004
- (7) 正岡睦大・物部茂樹「前山遺跡 鎌戸原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』115 岡山県教育委員会 1997
- (8) 亀山行雄・大橋雅也「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 岡山県教育委員会 1997
- (9) 関田 博「津木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120 岡山県教育委員会 1997
- (10) 平井泰男「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995
- (11) a 許1と同じ
 - b 平井 稔「津烏遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
 - c 氏平昭則ほか「津島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 岡山県教育委員会 2001
 - d 岡本泰典「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004
- (12) a 江見正己ほか「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1980
 - b 井上 弘ほか「百間川当麻遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1982
 - c 正岡睦大ほか「百間川原尾島遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1984
 - d 関田 博ほか「百間川沢田遺跡2」「百間川長谷遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1985
 - e 平井 稔ほか「百間川沢田遺跡3」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会1993
 - f 柳瀬昭彦・岡本寛久「原尾島遺跡 津田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』153 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 2000
- (13) 近藤義郎「前方後円遺跡—縄文時代本の実腔藏穴の発掘一」『山陽町教育委員会』1995
- (14) 平井泰男「熊山田散布地ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』68 岡山県教育委員会 1988
- (15) 関田 博「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財調査報告』55 岡山県教育委員会1983
- (16) 河本 浩ほか「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975
- (17) 岡本寛久「人田茶屋遺跡2 人田障子遺跡 大田松山久保遺跡 大田大正開遺跡 大田西奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』129 1998
- (18) 下澤公明・浅倉秀昭「清水谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22 岡山県教育委員会 1977
- (19) 山野康平・伊藤 晃「岸本下遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21 岡山県教育委員会 1977
- (20) 正岡睦大ほか「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20 岡山県教育委員会 1977
- (21) 松本和男「大倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20 岡山県教育委員会 1977

2 熊山田遺跡の人物土製品

弥生時代の土器や金属器に人形や人面を描いたり、土・木・石で人形や人面を造形した資料の発見が、近年、瀬戸内海沿岸地域に増加している。そのうち、人形や頭部を立体的に造形した土製品は、縄文時代、女性を表現した土偶と区別するため、弥生土偶と呼ばれたり、顔面や頭部のみであるので人面土器と呼ばれている。ここでは、頭部のみの出土で手足や胴部は残存していないが、材料である粘土により、人間を立体的に造形した土製品として「人物土製品」と呼ぶ。本遺跡からは、弥生時代前期後葉の土壇埋土と弥生時代前期から中期中葉の土器群とともに斜面堆積埋土から、2点の人物土製品が出土した。ここでは、2点の人物土製品C1・C6について詳細に観察してみたい(写真4・5)。

C1は粘土塊を球形に成形し、顔面を意識したのか、球形の頭部前面の顔面に広く平坦な面積をとり、人物の顔面をヘラ状工具による刺突と丁寧な手づくねとナデにより、立体的に表現している。後頭部の上部から斜め下と頸から上にかけて、すばみながら頸部へ続くとみられるが、本資料はくびれ部分で下部が欠損している。残存している人頭部の大きさは、頭頂部から頸までの顔面長4.25cm、両側の耳状の隆起部分までの顔面幅4.0cm、鼻先が破損しており、現状で最高部となる鼻と眉の間から、後頭部背後へ続く残存頸部までの厚さ3.2cm、重さ40.0gを測る。色調はにぶい黄橙色で、表面に彩色は認められない。胎土は、弥生時代前期の土器に一般的に見られる長石・石英の粗い砂粒を多く含む。焼成は、表面の剥離もなく良好である。

次にそれぞれの部位について詳細に観察していく。顔面全体は、正面から見ると逆卵形を呈し、のっぺらした扁平な顔面である。顔面に弊面を表すような線刻や彩色は認められない(写真4-2)。頭部は、正面から見ると楕円を描くように丸い弧を描くが、側面から見ると頭部のみが盛り上った形状を示し、人頭としてみると違和感を覚える(写真4-1)。頭部の頂部の中心よりやや右方に、頭部から頭部に向かう形で、ヘラ状工具による長さ0.5cmを測る浅い1条の沈線が施されている(写真4-4)。頭部には、被り物や装飾などの付属品が付けられていた痕跡は認められない。眉ともいう眉毛は、左右の眉毛を鼻と一体化し、両目の上に弓状に眉弓を隆起して表現している。眉弓の端は、次第に細くすぼまる形状を示す(写真4-5)。目は、目の付属器官である上下のまぶたを開けた状況をヘラ状工具の先で長さ0.5~0.6cm、幅0.2cm、深さ0.2cmで刺突により表現されている。両目ともに直線的に日尻に向かい、下がっている。目の中に眼球の瞳を表現したものはない(写真4-5)。口は、目と同様ヘラ状工具の先で、長さ0.8cm、幅0.2cm、深さ0.4cmで、刺突により横一字文字の状況で、口を開けた状況を表現している。刺突の方向は、顔面に対してやや下から穿いている。口の中に歯を表現したものはない(写真4-6)。鼻は、眉毛の表現を表す粘土の隆起からつながり、顔面中央部に隆起により表現されていたものであるが、本例は人間の鼻でいうと、中間の辺りの軟骨部と鼻の先端である鼻尖部が欠損している。平面的に見ると鼻の端が広がり、ややだんご鼻の形状を示す。また鼻先が欠損しているため、鼻内部には鼻孔がヘラ状工具により表現されていることが分かり、鼻孔の深さは0.6cmを測る。この鼻の欠損部分は、磨耗されていることから、この欠損は発掘調査時の削り等による破損ではなく、土壤に埋まる時すでに破損していた可能性がある。鼻先が欠損しているためか、鼻の下から口の上までの長さは0.5cmを測り、鼻の下がやや長い感じを受ける(写真4-6)。耳状隆帯は、顔面中央部の両端に貼り付けられ、いかにも耳の外耳である耳介を表現している。耳介とした場合、左側は下方の1/2が欠損している。この欠損部分も背面の一部に新しい削り痕があるが、その他は鼻と同様端部が磨耗されていることから、この

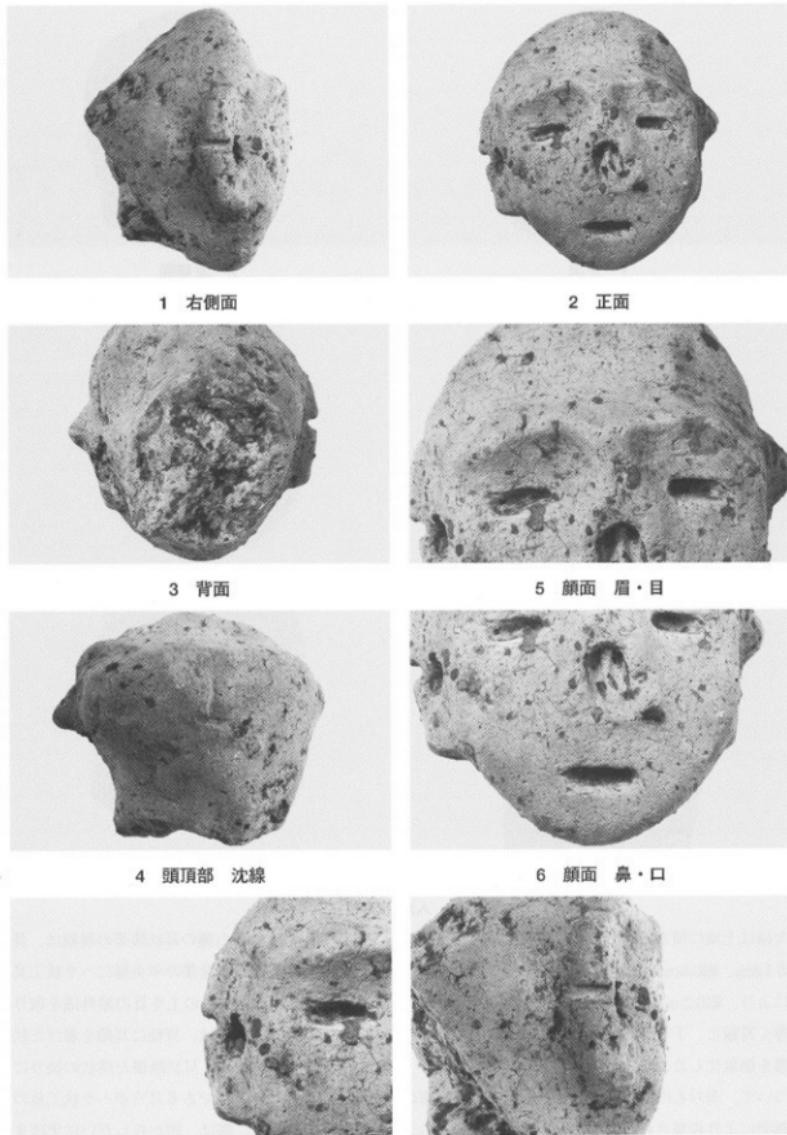


写真4 人形土製品 C 1

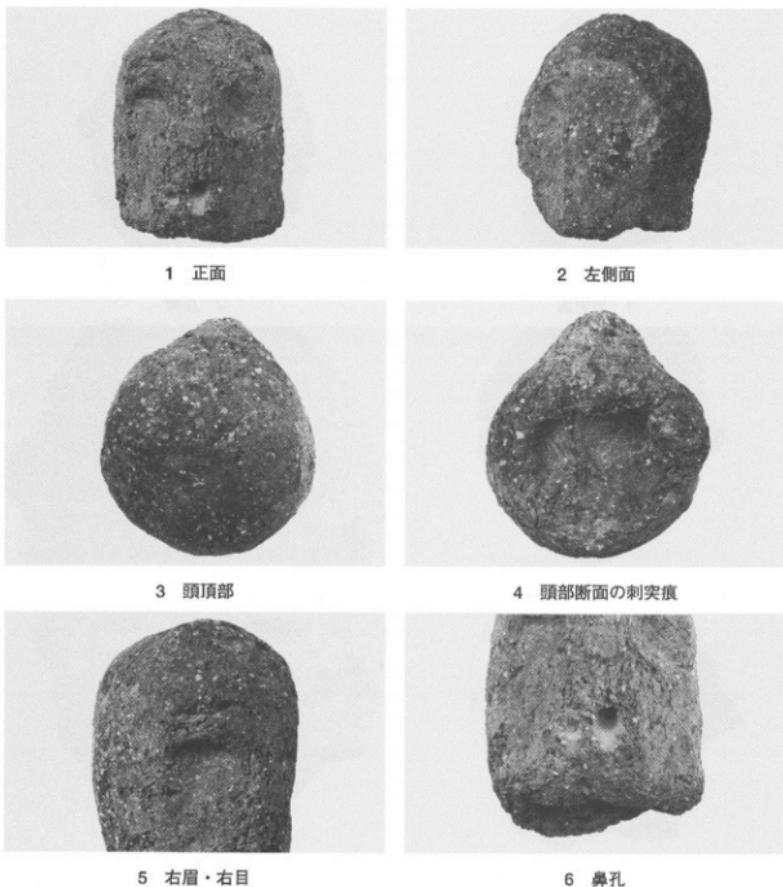


写真5 人形土製品 C 6

欠損は土壤に埋まる時、すでに破損していた可能性がある。完存している右側の耳状隆帯の規模は、長さ1.8cm、幅0.5cm、高さ0.2~0.3cmを測り、鱗状の隆帯が弓状を呈する。耳状隆帯の中央部にヘラ状工具により、幅0.2cm、深さ0.2cmの溝状の抉りが施される。耳介とした場合、抉りの上を耳の最外周を取り巻く耳輪と、下を下方に重ね下がった耳朶部分と考えることができる。または、耳輪に耳飾を着けた状態を抽象化した表現とも考えられるのではないか（写真7-7・8）。後に、耳状隆帯と溝状の抉りについて、別のものとして考えて見たい。耳状隆帯の中央部の顔面側に外耳道である耳穴がヘラ状工具の刺突により表現される。規模は、長さ0.4cm、幅0.2cm、深さ0.3cmを測る。顎は、頬からしだいにすぼまり、丸い顎先を持つ形態を示す。頭部は頭部背後ですぼまり胴部に向かい広がるようであるが、頭部に右側では括れる途中で欠損、左側では括れ広がる途中でそれぞれ欠損しているため、頭部が直線的に欠

損したのではない。欠損部分の断面の大きさは上下2.9cm、左右2.3cmを測る。断面の色調は褐灰色を呈し、外面より白っぽい（写真4-3）。

C6は球形の粘土塊を、C1で見られたように顔面を意識して広く平坦な面をとること無く、人物の頭部を忠実に立体的に成形し、ヘラ状工具による刺突と手づくねとナデにより、顔面を立体的に表現している。本資料は、顔面では口の部分、後頭部では頭部の括れから背中部分へ続くとみられる箇所で、それぞれ欠損している。残存している人頭部の大きさは、頭頂部から顎部までの残存長3.63cm、頭部横幅2.67cm、鼻先から後頭部までの厚さは3.17cm、重さ30.5gを測る。色調はやや暗い灰黄褐色で、表面に彩色は認められない。胎土は、C1で見られた弥生時代前期土器に含まれる粗い砂粒ではなく、長石・石英・雲母など細砂を多く含むもので、弥生時代中期前葉の土器の胎土に酷似している。焼成は比較的良好であるが、胎土の細砂のためか、頭部側面から顔面にかけて表面の剥離が認められる（写真5-1）。

次にそれぞれの部位について詳細に観察していく。顔面全体は、正面から見ると頬の張りもなく長方形を呈する。顔面に輪廓を表すような線刻は認められない。頭部は、全体に椭円を描くように丸い弧を描き、頭頂部がわずかな盛り上がりを示す（写真5-3）。頭部には被り物や装飾などの付属品は付けられていない。ただし、後に述べるが、頭部の側部で耳が位置する部分で器面の剥離痕が認められる。眉毛は、両目の約0.2cm上にヘラ状工具の先で、右眉の長さ0.8cm、左眉の長さ0.5cmで、両眉とも下がりで線刻される。目は、まんまるに上下のまぶたを開けた状況を示す。右目は、径0.7×0.8cm、深さ0.3cm、左目は、径0.8cm、深さ0.3cmを測る。目の深さは一定でなく、工具の角と考えられる痕跡の窪みが、右目ではやや右下がり方向で、左目では少し右下がりの斜め方向で残存しており、このことから目の成形方法として、右目は竹管状の工具を顔面に対して鼻先方向から掘り込み、手前に粘土をかき出し、左目は竹管状の工具を顔面に対して鼻先方向から掘り込み、粘土をかき出している。単純に考えると、左手に工具を持って施行したことから製作者が左利きであった可能性がある。目の中に眼球の瞳を表現したものはない（写真5-5）。口は、一見すると鼻の下に棒状工具の先で、径0.2cm、残存深さ0.6cmで、刺突によりおちよぼ口を表現しているようであるが、本当に口であるのか、後の鼻との関係で考えてみたい。鼻は、顔面中央部を隆起させ、目や頬を窪ますことにより表現している。鼻の先端である鼻尖部は欠損している。鼻は高くないものの、鼻筋の通ったやや長い形状を示す。C1で見られた鼻孔の有無について考えるとき、鼻の下にある口状の刺突についてここで再考してみたい。口と考えられる刺突の位置は、鼻筋に対してやや左側であり、刺突方向は顔面に対してかなり下から鼻の方向に穿いている。また、当初人形十製品に含まれる砂礫の剥離痕と思われていたものであるが、口状の刺突のすぐ左側に、径0.15cm、残存深さは0.1cmを測る棒状工具による刺突痕が認められる。ただし、口状刺突に比べ、深さが極めて浅い。しかしこれは、鼻尖部が欠損しているため、深さを確認できたわけであり、刺突により鼻孔として外面から表現できれば良いため、深さの差は問題ではない。このことから、口状の刺突は、鼻孔のうちの左側の鼻孔である可能性が高いと考えられる（写真5-6）。そうなると口は、その下にあるはずである。その箇所に不鮮明ではあるが、棒状工具による刺突痕状のものが認められるが、ちょうど欠損しているため、詳細については不明である。頬は、鼻の両側にこけたように窪ませている。耳は現状では存在しないが、耳の外耳である耳介が位置する箇所に、右側では長さ2.4cm、幅1.5cm、左側では長さ2.5cm、幅1.3cmで、剥離痕とも器面の剥落とも思える部分が認められる。左側の剥離痕の形状は、耳介状を示す半円形を呈することから、頭部に耳が貼り付けられていた可能性がある（写真5-2）。頸部は、後頭部ではすぼまり、胴部に向かい広がっていくことが伺えるが、顔面の口以下は欠損してい

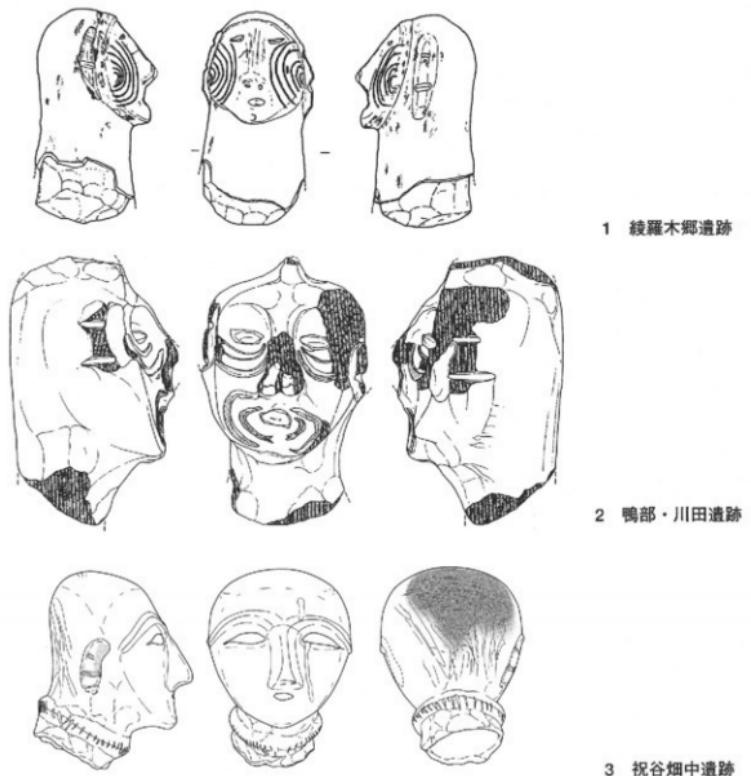
るため、頭部を確認できない。欠損部分の断面の大きさは2.3×2.3cmを測る。断面の色調は褐灰色を呈し、外側より黒っぽい。頭部の欠損部分の断面には、方形を呈する棒状の工具による刺突痕が認められる。これは頭部を上にして見た場合、左右に2か所並んでいるもので、大きさは右が縦0.6cm、横0.8cm、深さ0.5cm、左が縦0.7cm、横0.5cm、深さ0.3cmを測る。刺突の深さは一定ではなく、2か所とも外側側が深く刺突されている（写真5-4）。欠損部分は、右頭部に新しい破損箇所が認められるが他の端部は磨耗していることから、頭部の欠損は、4区の斜面堆積1の下層の砂層直上に埋まる時は、すでに破損していた可能性がある。

以上、2点の人物土製品の各部について詳細に観察してきたが、観察を進める中で以上記載した部位の一部に別の意味をもつ可能性があると考えた。また、頭部のみの出土であったが、観察から伺える全体像の復元を行い、まとめとしたい。

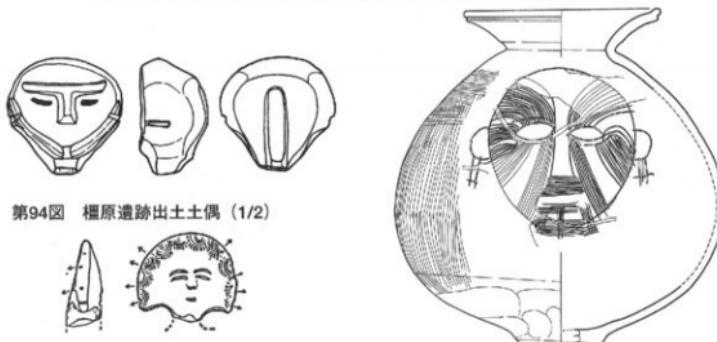
C1で耳状隆帯と隆帯の中央にある溝状抉りであるが、他に類例を探すと、C1と同じく隆帯の中央部に溝状抉りを持つものはないが、溝状抉りを2か所施す例として、山口県綾羅木郷遺跡（第92図-1、註1）と香川県鴨部・川田遺跡（第93図-2、註2）、3か所施す例として、愛媛県祝谷畠中遺跡（第93図-3、註3）の人物土製品がある。いずれの人物土製品も、時期がC1と同じく弥生時代前期に比定されている。また時期も形態的にも耳状隆帯とは異なるが、顔面の左右の側端部に一对の溝状抉りを施すという形態的な類似例として、奈良県橿原遺跡の顔面表現として「T」字形隆帯で眉・鼻を表現した土偶（第94図、註4）があり、時期は繩文時代晩期に比定されている。さらに、岡山県用木山遺跡から眉・目・鼻・口を具象的に表現した分銅形土製品（第95図、註5）があり、時期は弥生時代中期中葉に比定されている。

以上の形態的類似例から、耳状隆帯の溝状抉りの意味について2つの試案を考えてみた。1つは耳状隆帯の意味を含めて形状から考えるもの。もう1つはこの人物土製品の使用法にも関係する機能を表現していると考えるものである。1つ目の形状からみた具体的な試案としては、耳状隆帯を耳ではなく「髪」すなわち「美豆良」（みずら）を表現していると考えるものである。「美豆良」といえば、古墳時代の人物埴輪の男性に見られる結髪であり、長く伸ばした頭髪を、頭部中央で左右に分けて、垂れた髪を両耳の付近で束ね、紐で結んだもので、結んだ下端が肩に垂れたものが下美豆良と呼ばれ、耳のところで小さくまとめたものを上美豆良と呼ばれている。C1では、頭頂部に施された浅い1条の沈線を、頭髪を左右に分けた分け目を表し、耳状隆帯と中央の溝状抉りを左右に分けた髪を両耳の付近で束ね、結んだ紐を表したもの、すなわち上美豆良を表現しているのではないかと考える。山口県綾羅木郷遺跡と香川県鴨部・川田遺跡出土の人物土製品では、耳状隆帯に2か所、愛媛県祝谷畠中遺跡出土の人物土製品では3か所の溝状抉りがあることから、束ねた髪を2か所ないし3か所で結んだ状態を表現しているのではなかろうか。

さらに美豆良を表すと考えられる例として、愛知県亀塚遺跡から出土した弥生時代後期後葉に比定される人面線刻上器がある。線刻された顔面には、円弧に描かれた耳の下に、右耳には2本、左耳には3本の縦線が引かれ、下端に横線を施すもので、下横線を左右に振り分けられた髪を束ねた結び紐と考え、束ねた髪を耳の後ろに重らした美豆良とみるものである（第96図、註6）。弥生時代の髪形について『魏志倭人伝』（註7）では「男子皆露紺、以木縣招頭」「婦人被髮屈紺」とあり、男性は「露紺」を冠や頭巾を付けていない頭とも、みずらとも解釈され、女性は髪を束ねていたと考えられている。いずれにしても、髪や美豆良を結っていたのか、単に髪を束ねていたのか、結髪の詳細については不明である。



第93図 耳状隆蒂に溝状沈線を施す弥生時代の人形土製品 (1/2)



第94図 樅原遺跡出土土偶 (1/2)

第95図 用木山遺跡出土分銅形土製品 (1/2)

第96図 亀塚遺跡出土人面線刻画土器 (1/4)

古墳時代後期の人物埴輪に見られる男性の結髪である美豆良が、弥生時代まで遡れるのかについては不明であるが、頭髪の結髪を表している可能性があることを、一試案として提示しておきたい。

また頭髪に関係して、鴨部・川田遺跡出土の人形土製品の頭頂部に鱗状の隆帯が見られる。同様な例として大阪府東奈良遺跡（註8）や兵庫県長田神社境内遺跡（註9）出土の人形土製品でも同様な隆帯がある。さらに島根県西川津遺跡出土の人口面土器（註10）では、頭頂部から後頭部にかけて延びる隆帯が、鳥帽子状を呈したものもある。これらの鱗状の隆帯を頭髪と考える向きもあるが、線刻で頭部に突起や羽をつけたような「鳥装」を意識して描かれた土器と同様に、鱗状の隆帯を頭部に筋りを付けた「鳥装」を表現しているのではないかと考えられる。

2つの使用方法の復元からみた具体的な試案としては、溝状抉りを紐掛け用の切目と考えるものである。弥生時代前期後葉から後期後葉にかけて、瀬戸内地域を中心に西日本の広い範囲に分布する祭祀遺物である分銅形土製品には、上半部の両端に各1～3個の小孔が穿孔されている例がある。この小孔の用途は孔に紐状のものを通し身に着けるという、はじめは仮面として使用されたのちに護符のような役目を持ち物に変わったと考えられている（註11）。単純に板状の分銅形土製品と同様な用途とは考えないが、立体的な弥生時代の入形土製品に施される小孔もやはり使用方法としては、懸垂用のため紐状のものが通されたと考えられる。しかし、C1には紐通しの小孔はない。そこで、耳状隆帯の溝状抉りを使いここに紐を掛け、人形土製品を身に着けたものではないか。そうすると、顔面中央部に紐が回る形となり、使用形態としても無理があるようと思われるが、溝状抉りの意味について一試案として提示しておきたい。

C1は頭部の下に頸部があるのではなく、頭頂部から顎先端部を結ぶ軸線に対して頭部が72°下向きにある。逆に言えば、頭部に対して頭部軸線の仰角が72°となっている。柱状の胴部を持ったものであるならば、奈良県唐古・鍵遺跡（註8）・愛媛県祝谷畠中遺跡出土の入形土製品と同様、顔面を斜めに上げ仰ぎ見た状態であったと考えられる。なお、愛媛県祝谷畠中遺跡出土の入形土製品の仰角が40°であることから、C1はかなり上に向いている形態を呈していたと考えられる。C2の頭部については、頭部の下に頸部から胴部へ続くようであるため、岡山県高塚遺跡（註12）、岡山県伊福定国前遺跡（註13）、岡山県津島遺跡（註14）出土の入形土製品と同様に、顔面が正面を見据えた形態を呈していたと考えられる。

次にC2の頭部の欠損部分で認められた2か所の方形を呈する棒状の工具による刺突痕から、以下のような入形土製品の構造を想定することができる。それは頭部と胴部が一つの粘土塊から製作されたのではなく、頭部は頭部として製作され、胴部と接合の際、接合面である頭部に刺突を施し接合を確実にするための痕跡か、もしくは頭部製作時に粘土塊に2本の棒状工具を挿し頭部を製作した時の痕跡であったと考えられる。頭部と胴部が製作工程の上で別作りであることは、大阪府東奈良遺跡や山口県綾羅木郷遺跡出土の入形土製品など、頭部に対して頭部が長く頭部の下部に器面の剥離痕が認められることからも伺うことができる。

以上、同じ遺跡で時期的にも近い2体の入形土製品であるが、観察を行った中で類似点とともにかなりの相違点もあり、弥生時代の入形土製品の用途を考える上で漠然とした推測にすぎないが、いくつかの可能性を指摘してきたものである。

(馬場)

註

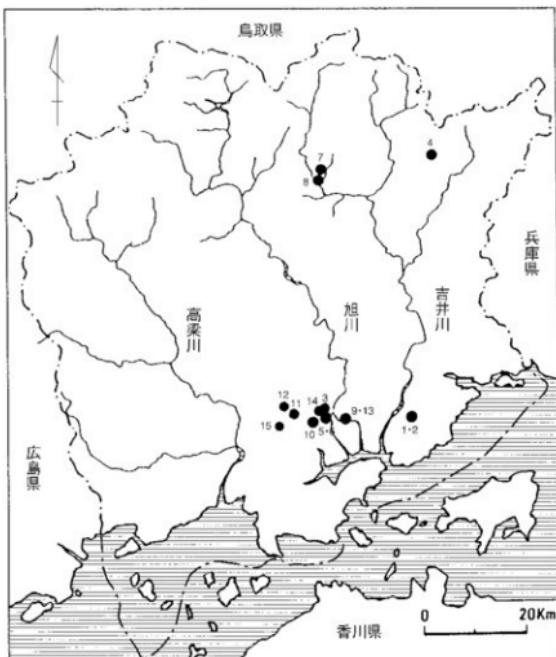
- (1) 阿字雄敏・藤本憲司・西岡義貴「綾羅木郷台地遺跡」「山口県埋蔵文化財調査報告書」120集 山口県教育委員会 1989
- (2) ここでは耳状隆起を耳章とし、端部が破損しているため、溝状抉りを本来は孔が開けられたものとも考えられている。
森下友子「鴨部・川田遺跡」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」第10冊 香川県教育委員会 2002
- (3) 真鍋昭文・西川真美・上井光一郎・鎌土奈々「祝谷畠中遺跡」「都市計画道路後谷緑整備に伴う埋蔵文化財調査報告書」財團法人愛媛県埋蔵文化財センター 2002
- (4) 大野 薫「顔のない土偶」「立命館大学考古学論集」Ⅲ-1 立命館大学考古学論集刊行会 2003
- (5) 東 潤「東高月遺跡群出土の分銅形土製品」「用木山遺跡」 山陽町教育委員会 1977
- (6) 左右の耳の下に引かれた縦線の下端に横線を旋す表現を、耳筋を下げている表現とする説もある。
天野暢保「愛知県龟塚遺跡の人面文土器」「考古学雑誌」第67巻第1号 日本考古学会 1981
- (7) 穂木裕行「孫生のデザイン」「古代史復元」5 講談社 1989
- (8) 設楽博己「線刻人面土器とその周辺」「国立歴史民俗博物館研究報告」第25集 国立歴史民俗博物館 1990
- (9) 石原道博編訳「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」 岩波書店 1951
- (10) 東山 奥「遺跡が語る死生人の顔」 徳島市立考古資料館 1998 図録から
- (11) 「長田神社境内遺跡第10次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」「神戸市教育委員会 2000
- (12) 岩崎孝典・渡辺正巳・中山唯史「西川津遺跡」「朝の川広城河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第13冊 島根県教育委員会 2001
- (13) 高橋氏は小孔や紋様により形態分類し、「上半部の両端に各1孔と、下端部の両端に各1孔で計4孔、あるいは、上半部の両端にのみ孔をもつもの」をⅡ類とし、バッヂ形の使用を考えている。
- (14) 高橋 譲「分銅形土製品」「弥生文化の研究」第8巻 雄山閣 1987
- (15) 岩永省三「焚身と祭りの造形」「古代史復元」5 講談社 1989
- (16) 江見正己ほか「高家の遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」150 岡山県教育委員会 2000
- (17) 杉山一雄ほか「伊能定前遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」125 岡山県教育委員会 1998
- (18) 島崎 東ほか「津島遺跡5」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」181 岡山県教育委員会 2004

3 岡山県における人形土製品（弥生土偶）

弥生時代の人面を表す呪術ないし祭祀遺物に吉備では分銅形土製品が有名である。しかし、一方では近藤義郎・高村耕夫両氏によって早くから紹介された福田池尻遺跡の弥生土偶（註1）もまたよく知られてきた土製品である。また、熊山田遺跡の人形土製品は弥生時代前期の数少ない発見例として注目され各地での展覧会や報文で取り上げられてきた。ところが今回、熊山田遺跡の報告書を作成する段階で新たに弥生時代中期の土製品の出土が知られた。そこで本稿では岡山県におけるこれら人形土製品（以下土製品と呼称する場合もある）の集成をおこない若干の評価を行おうとするものである。

出土状況の確認（第97・98図・第1表）

3の津島岡大遺跡の人形土製品は、旭川右岸に形成された沖積平野の微高地縁辺の旧河道埋上から出土したものである。河道理土からは繩文時代後期から弥生時代前期・中期までの遺物がある。したがって弥生時代中期に埋没を終えた河道である。人形土製品は薄い板状の粘土板に一对の乳房状の突起を張り付けた胸部の小破片である。出土部位と胎土から弥生時代前期の可能性が高いという。横約2.8cm（註2）。4の福田池尻遺跡の土偶は、1952年に畠地から採集されたものである。弥生土偶としては岡山県における最初の発見例である。縦約4.3cm（註1）。5の上伊福南方遺跡（旧南方（済生会）遺跡）の頭部土製品は、J R岡山駅に近い微高地縁辺から出土したものである。微高地北辺に形成された旧河道を埋めた弥生中期の洪水砂より出土した。土製品は頭部のみの完形品である。顎を細く尖らす顔面は、頸部にあたる部位を親指で軽く押さえて、顎を突出させるかのごとく造り、その押された箇所に幅2.5mm、深さ7.5mmの細い穴を穿っている。おそらくこの部位に棒状のものを差し込んで使用したことが窺える。縦2.4cm（註3）。6の南方釜田遺跡の土製品は、上伊福南方遺跡の東北にあたり、現在の福武ビル建設地から出土した。土製品は包含層中から出土したものであるが、胎土から弥生時代中期に比定された。鼻は欠損しているが目、口は刺突によって表す。頭部下半は欠損する。縦3.8cm（註4）。7の九番丁場遺跡の土製品は、県北の鏡野平野に所在する径12mの大形竪穴住居の埋土中から出土。住居との共伴関係はないが、それに近い弥生時代後期前葉と推察されている。鼻を欠損するが板状の完形品である。縦6.1cm（註5）。8の竹田（弥生）遺跡の土製品は、九番丁場遺跡の北西部にあたり、古井川の支流香々美川の右岸丘陵上に所在する弥生時代後期の集落跡から出土した。土製品は調査区北端の標高165mの傾斜地に掘られた竪穴住居の覆土から出土した。手、足を欠損する。左胸に乳房状の突起がある。縦約8.9cm（註6）。9の百間川兼基遺跡の土製品は、旭川左岸にあって、1971年以来調査されている百間川遺跡群の弥生後期の土器溜まりから出土したものである。縦6.25cm（註7）。10の伊福定国前遺跡の土製品は、上伊福南方遺跡の西方にあたる県立岡山工業高校敷地内の遺跡から出土したものである。土製品は幅27cmの柱穴の埋土中から出土した。柱穴埋土は上、下2層からなるが、下層を埋めた後、頭部を下方にして土製品を埋めた、と調査者は推察する。土製品は両腕を欠損する。加えて頭部に被りものを飾る焼成痕を残す。調査区周辺の状況から弥生時代後期後半と推定する。縦9.6cm（註8）。11の津島遺跡の土製品は、トレンチ調査という限定された中での発見であったが、弥生時代後期末の竪穴住居跡3から出土したものである。完形品で縦5.45cm（註9）。12の高塚遺跡の土製品は、J H総社インターに近い、足守川右岸の沖積平野から出土したものである。土製品は一辺176×182cm、深さ57cmの土壌の埋土上下部から出土した。共伴土器から弥生後期後半に比定。手・足を欠損する。縦5cm（註10）。13の百間川原尾島遺跡の土製品は、竪穴住居の覆土から出土したものである。住居は径9.05mの大形で多数



第97図 岡山県における人形土製品（弥生土偶）出土位置図

の柱穴を検出していることを特徴とする。上製品は棒状を呈し、頸部下部を欠損している。両眼と口を刺突で表現する。頭部前端部に横長粘土を貼り、或る種の髪型を表していたようであるが、右半分を欠損している。弥生後期後半に属する。縦2.75cm（註11）。14の津寺（加茂小）遺跡の上製品は、足守川左岸の集落遺跡から出土した。上製品は集落内を南北に走る幅50cmの浅い溝から出土。溝の時期は下田所期（古墳時代初頭）にあたる。鯨面を画く顔は頭部下半を欠く。縦約3.3cm（註12）。樅築弥生墳丘墓は、足守川右岸丘陵にある弥生時代後期の墳丘墓。人形土製品は木櫛上部を埋めた円礫堆から出土した。15aは右胸に乳房状の小突起をもつ。頭部と腰下半を欠損する。縦9.5cm。他に9片ある。これらは明らかに首長靈の祭祀に伴う遺物である（註13）。

形態区分

岡山県における人形土製品の出土例はそんなに多くない。それでも近年の調査で県南や県北でも出土例が増し、その報告が知られてきたので、以下のとおり形態分類を試みた。

A類	頭部を残して下半を欠損しているもの	1・2・4・6・14
B類	頭部単体のもの	5
C類	棒状立像のもの。細分される。	
C-1	手または足を欠くか、その両方とも欠損しているもの	8・10・12
C-2	棒状のもの	11・13
D類	板状のもの	3・7・9
E類	明らかに埴墓祭祀に使用されたもの	15a～15】

A類はその使用時に意識的に頭部顔面を残すことに意味があったようだ。B類とした頭部単体のものも頭部に細い棒を差し込んで使用したと推察されるので、使用時には頭部下半は容易に切り離すことが出来る。この点ではA類と同様に頭部顔面に意味がある使用が窺える。使用時期は弥生時代前期から中期に集中傾向がある。ただし、14の頭部顔面は鯨面である上に、時期が下がる点に他の遺物とは違っている。C類は棒状立像を基本として、弥生時代後期になって出現する。D類とした3の津島岡大遺跡のものは、人形土製品としては、他の遺物と少し異なる。また、このように性別を表したものに8の竹田（弥生）遺跡のもの15aの柄築弥生埴丘墓の3点がある。

まとめ

岡山県における人形土製品は熊山田遺跡や津島岡大遺跡の出土例によって確実に弥生時代前期に遡って出現し、同中期を経て後期には出土例が増す現状が把握できた。その分布図は、東は吉井川下流の熊山田遺跡から西は足守川流域の高塚遺跡、津寺（加茂小）遺跡と、おおよそ高梁川左岸流域までであることが知られる。北の中国山地寄りでは、吉井川上流域の竹田（弥生）遺跡から津山盆地の東端にあたる奈義町福田池尻遺跡まで知られている。おおよそ県北東部にあたる地域である。この点では分銅形土製品の分布状態とは異なっている。

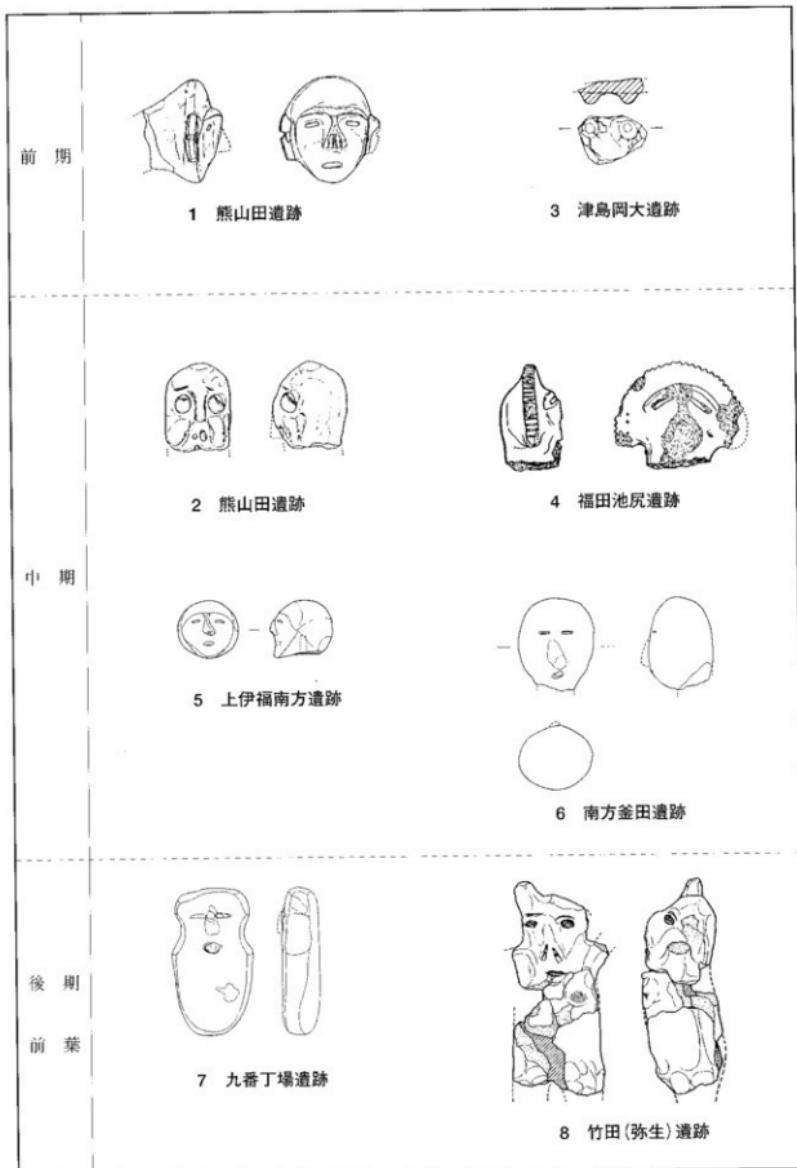
さて、弥生開始期に出現する人形土製品（弥生土偶）のもつ意味について秋山浩三は「石棒類や土偶の顕在性は……弥生系集団の中に縄文系集団と精神面を共有する要素が存在した」（註14）として縄文系集団と弥生系集団の「密接で頻繁な交流や友好性が人的・社会（集団）的に達成されていた」（註14）と結論付けている。熊山田遺跡でも結晶片岩製の縄文系の石棒3点が出土している実態は、まさに弥生開始期のこの遺跡地において「新来の「弥生系集団」と在来の「縄文系集団」……の「共生」（共存状態）」（註14）が進行していく様子を窺がい知る遺物であり、遺跡であると評価できよう。

本稿を作成するにあたり、小林利晴、根木 修、山本悦世、扇崎 由、島崎 東、岡本泰典、大橋雅也、武田恭彰、平井典子、馬場昌一、闇 幸代、岡山県古代古備文化財センター、岡山市教育委員会、岡山大学理蔵文化財調査研究センター等からご教示、ご援助を得た。記して感謝申し上げたい。（河本）

第1表 岡山県における人形土製品（弥生土偶）一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土状況（遺物）	時期	種類	文献等
1	熊山田遺跡	邑久都色久町 山田庄	土壙内埋土中	前期末	頭部	河本 清「縄文土器、人物・鳥形スタンプ文土器」『古墳の考古学的研究』（上） 小嶋新蔵社 1992
2	熊山田遺跡	邑久都色久町 山田庄	微高地から斜面にのる前期・中期名 古層中で斜面上から出土	中期後葉	頭部	
3	津島間大遺跡	岡山市津島	河道内埋土中、堆土中には竪文陶器 ～弥生前期末あるいは中期初頭まで の遺物を含んでいるが、人形土 製品は粘土が竪文土器と異なる	前期	胸部	上井基司・山本昌世「津島間大遺跡5・第6・7次調査 」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書』第9冊 岡山 大学附属文化財調査研究センター 1965
4	横田池内遺跡	勝田郡奈義町 桔	傾地より表面叢集	中期	頭部	近藤義郎・高橋信夫「弥生土偶について」『私たちの考古学』第3巻第4号 考古学研究会 1967
5	上伊福原古道跡	岡山市南方	包含層中 弥生前期～古墳時代の 遺物を含む赤水砂より出土 人形土製品の粘土は弥生中期の土 器に最も近い	中期	頭部	高崎由「南方（済生会）遺跡」『発掘された日本列 島』'97』 文化学 1997 岡山市教育委員会高崎氏教示 岡山市教育委員会資料提供
6	南方益田遺跡	岡山市南方	包含層中	中期	頭部	岡山市教育委員会根木氏教示 岡山市教育委員会資料提供
7	九重丁場遺跡	吉田郡鏡野町 布原	整穴住居跡7堆土中	後期前葉	人形	氏岡田ほか「九重丁場遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘 調査報告』165 岡山市教育委員会 2000
8	竹田（弥生）遺跡	吉田郡鏡野町 竹田	整穴住居跡3堆土	後期後葉	人形	河本 清「縄文土器、人物・鳥形スタンプ文土器」『古 墳の考古学的研究』（上） 小嶋新蔵社 1992 土居 敦「竹田（弥生）遺跡」『鏡野町史考古資料編』 鏡野町 2000
9	百間川兼基遺跡	岡山市兼基	土器底り 4	後期中葉	人形	平井泰男・百間川兼基遺跡出土人形土製品」『考古学ジ ャーナル』238号 ニュー・サイエンス社 1984 柳原昭彦ほか「百間川兼基遺跡 5」『岡山県埋蔵文化財発 掘調査報告』114 岡山市教育委員会 1996
10	伊福定国前遺跡	岡山市伊福町	柱穴内	後期後葉	人形	杉山一雄ほか「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発 掘調査報告』125 岡山市教育委員会 1998
11	津島遺跡	岡山市いずみ 町	整穴住居跡 3	後期後葉	人形	岡本泰典ほか「津島遺跡 5」『岡山県埋蔵文化財発掘調 査報告』181 岡山県教育委員会 2004
12	高原遺跡	岡山市高原	方形土壙139堆土上層中	後期後葉	人形	江見正己ほか「高岡遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査 報告』150 岡山県教育委員会 2000
13	百間川原尾島 遺跡	岡山市原尾島	整穴住居跡6	後期後葉	人形	宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡 6」『岡山県埋蔵文 化財発掘調査報告』179 岡山県教育委員会 2004
14	津寺（加茂小） 遺跡	岡山市加茂 寺	集落内に所在する幅約50cmの浅い 塚から出土、共伴遺物は下刊所蔵 （古墳初回）らしい	後期後葉 ～ 古墳初回	頭部	河本 清「縄文土器、人物・鳥形スタンプ文土器」『古 墳の考古学的研究』（上） 小嶋新蔵社 1992 総社市教育委員会武田恭彰氏教示
15	樺窓弥生墳丘墓	倉敷市矢部	円錐堆中	後期後葉	人形	近藤義郎「樺窓弥生墳丘墓の研究」 横浜市行会 1992

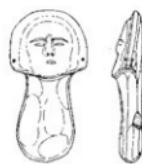
※ 種類は現状での形態を表す



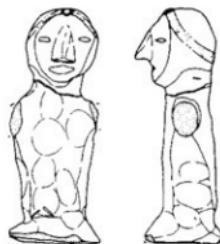
第98図 岡山県における人形土製品（弥生土偶）集成図（1/2）

後期

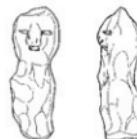
中葉



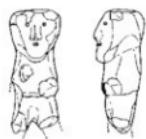
9 百間川兼基遺跡



10 伊福定國前遺跡



11 津島遺跡



12 高塚遺跡



13 百間川原尾島遺跡



14 津寺(加茂小)遺跡

後期

後葉



15 a



15 b



15 c



15 d



15 e



15 f



15 g



15 h



15 i



15 j

15 植染弥生墳丘墓



註

- (1) 近藤義郎・高村繼夫「弥生土偶について」「私たちの考古学」第3巻第4号 考古学研究会 1957
- (2) 土井基司・山本悦世「津島岡大遺跡6-1第6・7次調査一」[岡山大学構内遺跡発掘調査報告書] 第9輯
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995
- (3) 犀崎 由「南方(済生会)遺跡」「発掘された日本列島'97」 文化庁 1997
岡山市教育委員会犀崎由氏教示
- (4) 岡山市教育委員会根本修氏教示
- (5) 氏平昭明ほか「九番丁場遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」165 岡山県教育委員会 2000
- (6) 土居 健「竹田(秀生)遺跡」「鏡野町史考古資料編」 鏡野町 2000
- (7) 柳瀬昭彦ほか「百間川兼基遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」114 岡山県教育委員会 1996
- (8) 杉山一雄ほか「伊福定国前遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」125 岡山県教育委員会 1998
- (9) 岡本泰典ほか「津島遺跡5」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」181 岡山県教育委員会 2004
- (10) 江見正己ほか「高塚遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」150 岡山県教育委員会 2000
- (11) 宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡6」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」179 岡山県教育委員会 2004
- (12) 河本 清「絵画土器 人物・鳥形スタンプ文土器」「古備の考古学的研究」(上) 山陽新聞社 1992
総社市教育委員会武田恭彰氏教示
- (13) 近藤義郎「櫛彫弥生墳丘墓の研究」 櫛築刊行会 1992
- (14) 秋山治二「弥生開始期における土偶の意味—近畿縄文「終末期」土偶を中心素材として—」『大阪文化財論集』Ⅱ
財团法人大阪府文化財センター 2002

4 弥生時代中期中葉の土器

熊山田遺跡の発掘調査では、掘立柱建物1、井戸1、土壤6・8・11・13・14・15・16・17、溝13・14、たわみ1、4区の斜面堆積1などから、弥生時代中期中葉の時期に属する良好な土器が大量に出土したので、高橋護氏の編年（註1）や正岡陸氏の編年（註2）を参考にしながら検討を行ってみたい。

243～254・394～400は短頸広口壺である。肥厚しながらわずかに開いて漏斗状に立ち上った口縁の端部は、内側に断面形が三角形を呈して短く張り出し、上位に平坦面を形成するが、その部分に円形浮文を巡らすもの243・395も存在する。口縁端部の外面には、刻目を施すもの243・244・246・247・394・397とヨコナデを行っているだけのものとがある。外面の口縁部から頸部にかけては、2条から6条の貼り付け突帯を有するものが大多数を占め、何も認められないもの394は少ない。貼り付け突帯の上面には、刻目を施すもの243～247・396～399と指頭圧痕文が認められるもの248～251・400があり、縱方向2本一組の棒状浮文を配しているもの246・395も存在する。外面の肩部には、縱方向のハケメの上面に横平行直線文と波状文を交互に描いているもの251や、二枚貝の貝殻腹縁による斜め方向の刺突文を巡らせているもの247がある。胴部の膨らみは大きくなる。外面の中位には横方向のヘラミガキを施すもの252・253があり、外面の胴部下半は縱方向のハケメの上面に縱方向の丁寧なヘラミガキを行っている。底部は平底であるがわずかに上げ底になっており、不定方向のナデを施している。口縁端部は内外面ともヨコナデによって仕上げ、口縁部の内面には横または斜め方向のハケメが認められるもの245・398、縱方向のナデを施しているもの246、横方向のヘラミガキを行っているもの250・395もあるが、口縁端部から連続してヨコナデを施しているものが多い。内面の頸部直下の肩部はヨコナデを行い、内面の胴部には縱または斜め方向のハケメが認められる。内面の底部に近い部分は、ナデによってハケメが消えている。この器形を呈する短頸広口壺には無頸壺も共伴すると考えられるが、今度の熊山田遺跡の発掘調査では確認することができなかった。

遺構に伴わない遺物の中に、4区の斜面堆積1から大量に出土した、「く」字状に折り曲げた口縁を有して胴長の器形を呈する壺312～343よりも、胴部の膨らみが小さいもの421が掲載されている。屈曲して斜め上方へ立ち上った口縁の端部は、肥厚せずに丸く仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、外面の胴部中位にはヘラ状工具による列点文を巡らせている。外面の胴部は頸部直下から底部まで縱方向のヘラミガキを行い、内面の胴部は器表面が磨滅して調整が不明である。おそらくヘラミガキまたはハケメが施されていたと思われる。

遺構に伴わない遺物の中には、杯部が深い楕形の台付鉢450が存在する。杯部の底部から口縁部にかけては、器壁が上方へ移行するにしたがって薄くなりながらわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部の上位には面が認められる。口縁端部の外面には刻目と2個一対の円孔を有し、外面の上位には2列の刺突文と3個一対の円形浮文が巡らされている。脚部は短く「ハ」字状に開き、端部は丸く仕上げて中位の5か所に長方形の透かしが認められる。外面の杯部と脚部の境目には、上面に刻目を施した2条の貼り付け突帯が存在する。杯部の底部は円盤充填で、接合部分を丁寧に仕上げている。口縁端部から外面の口縁部にかけてと脚端部はヨコナデを施し、外面の杯部下位から脚部にかけては縱方向のヘラミガキを行っている。内面の杯部と脚部は、全体に横方向のヘラミガキをしている。この杯部の深い楕形の高杯には、杯部が皿状になった高杯や水平口縁を有する高杯も伴うと思われるが、良好な土器が存在しなかった。また蓋やヨック形の鉢も共伴するはずであるが、精査したにもかかわらず確認することができ

きなかった。

以上に説明した土器は、哲西町の二野遺跡（註3）、作東町の高本遺跡（註4）、備前市の船山遺跡（註5）、岡山市の雄町遺跡（註6）、百間川兼基遺跡（註7）、南方遺跡（註8）などから出土しており、弥生時代中期中葉でも前期後葉に近い時期に属し、高橋氏編年作のIV-a期、正岡氏編年のIII-1様式占相に相当する。

107・157・255～265は短頭広口壺である。直立またはやや外開きに短く立ち上がった頭部は、外反して口縁端部に統くが、口縁端部を丸く仕上げているもの255・266、外面に凹線状の浅い窪みを有するもの107・259、端部が下方へ短く垂れ下がって外面に平坦な面が認められるもの157がある。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施しているものが多いが、内面に横方向のヘラミガキを行っているもの157や、外面に「×」状の刺突文を巡らせているもの107も存在する。外面の頭部には縱方向のハケメが認められ、内面はナデを行っているものと、口縁端部から連続して横方向のヘラミガキを施しているものの157がある。胴部は大きく膨らんで最大径が中位に認められ、外面の頭部に上面をヘラ状工具で押圧した貼り付け突帯を有するもの107・157・259とないものがある。外面の肩部には、縱方向のハケメの上面に櫛描平行直線文と波状文を交互に配するもの157・256・262・263、櫛描平行直線文の間に2条の櫛描波状文を有するもの107、櫛描平行直線文の間に櫛描斜格子文が存在するもの258・261・262・264があり、それらの文様の下位にさらに円形浮文を巡らすもの258、斜め方向の貝殻腹縁の刺突文を巡らすもの257・258・265、2列の刺突文を巡らすもの157・261、列点文を巡らすもの256、上面に刻目を有する断面形が三角形の3条の貼り付け突帯を巡らすもの261がある。外面の胴部の中位には横方向のヘラミガキを施し、下位は縱方向のヘラミガキを行っている。内面の胴部に縦または斜め方向のハケメが顕著に認められるもの256は少なく、ハケメをナデによって消しているもの257～260・265、ハケメの上面にユビオサエの痕跡を残しているもの262、ナデだけを行ってハケメが認められないもの107・157がある。底部は器壁が厚いもの256・265と薄いもの157があり、上げ底を呈するもの157・256も存在する。

256～272は広口壺の口縁部破片である。緩やかに外湾して立ち上がった口縁の端部が、下方に大きく拡張して、外側に広い面を形成しているもの266～268・270と、端部が肥厚して斜め下方へ短く張り出すもの269・271・272がある。前者の口縁端部外面には、斜格子を描いたもの266・270、綾杉状の刻目を有するもの267、綾杉状の刻目の中位に円形浮文を巡らすもの268が存在する。後者の口縁端部外面にはいずれも綾杉状の刻目を有するが、中位に2条の平行線が認められるもの269と、3個一単位の円形浮文が存在するもの271がある。269の口縁端部内面には貼り付け突帯に囲まれて櫛描半円形同心円文が認められ、272のそこには上面に指頭圧痕文を有する貼り付け突帯が巡らされている。口縁の端部と内面は、いずれもヨコナデを施している。頭部については、外面に指頭圧痕文を有する貼り付け突帯を巡らせてナデ仕上げを施し、内面に横方向の丁寧なヘラミガキを行っているもの269と、外面に縦方向のハケメが認められ、2個一対の小孔を有するもの272がある。

273～276・282～300は、胴部が大きく膨らんで最大径が中位に存在する甌である。「く」字状に外反した口縁の端部は、斜め上下にわずかに肥厚して外側に面を形成している。大多数のものが口縁端部にヨコナデを施しているから、外面に凹線状の浅い窪みが認められるものが多いが、斜め方向の刻目だけを巡らせているもの289・290、斜め方向の刻目の上面に3個一単位の円形浮文を配しているもの276、綾杉状の刻目の上面に円形浮文を連続して巡らせているもの273、綾杉状の刻目の上面に3個一単位の

時代	正開 福4-	壺	甕	台付 鉢
高麗 朝		248 249 250	400 245 244 397 396 395 394 399 243 252 253 254 421 251 247 398 246	450
中 期 中 葉	III-1 古相			
中 期 中 葉	IV-a			
		古相		

第99図 中期中葉・古相器種分類図 (1/12)

時期	高櫛 輪車	正圓 輪車	臺	壺	瓶	高 杯

中期 中葉・中相

IV-b

III-1 新相

第100図 中期中葉・中相器種分類図 1 (1/12)

時期	高櫛編牛	正岡編牛	壺	甌	瓶	鉢	
中期中葉			266 267 268	312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362			
中期中葉・中期	IV-b	III-1 新相	83 101 120 269 270 271 272				

第101図 中期中葉・中期器種分類図2 (1/2)

円形浮文を配しているもの274、斜格子文を施しているもの275もある。外面の頸部には装飾を施さないものが多いが、上面にヘラ状工具で押圧した痕跡や指頭圧痕文を有する貼り付け突帯が存在するもの273～276も認められる。口縁部から頸部にかけてはヨコナデを施しているものが多いが、外面に縱方向のハケメを有するもの285・286・288・295・298・300や縱方向のヘラミガキを施しているもの274・294・296・299があり、内面に横または斜め方向のハケメを有するもの283・286・294・296・298もある。胴部は大きく膨らみ、外面の中位よりや上方に刺突文が巡るもの292・293も認められる。胴部の外面の調整は、底部に近い下位の部分がいずれも縱方向の丁寧なヘラミガキを行っているのに対して、中位は横方向のヘラミガキを行うもの285・299、横方向のヘラミガキの上面に縱方向のヘラミガキを加えているもの296、下位の底部から連続して縱方向のヘラミガキを行っているもの291・297・300があり、頸部直下の肩部は縱方向のハケメが認められるもの285・286・288・290～292・298～300、縱方向のヘラミガキを行っているもの294・296・299、縱方向のナデを施しているもの276・282～284・287・289・293・295・297がある。胴部の内面の調整は、鮮明な縦または斜め方向のハケメが認められるもの291・294・296、縱方向のナデを施しているもの284・285・295、板状工具で斜め方向のナデを行っているもの288、縦方向のハケメの上面に指頭によるナデを加えて指頭圧痕が残存しているもの293、斜め方向のハケメの上面に指頭圧痕が認められるもの286・298、斜め方向のハケメの上面にナデを加えてハケメが消えているもの282・283・287・289・299、指頭による縦方向のナデを行っているもの297、指頭による縦方向のナデを行って指頭圧痕が残存しているもの293・300がある。底部は平底であるが、円板状の粘土を充填しているもの299もあり、中央部分がわずかに上げ底を呈しているものが多い。

277～289は大形の壺の口縁部破片である。「く」字状に外反して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、わずかに肥厚して外側に凹線状の窪みを有する面が認められる。外面の頸部には、上面に指頭圧痕の痕跡を有する貼り付け突帯が認められるもの277・278と、装飾がないもの279・280がある。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施しているが、内面の頸部直下は斜め方向のハケメの上面に横方向のヘラミガキを加えているもの279・280が存在する。外面の頸部直下は、縦方向のヘラミガキを行っているもの278、縦方向のハケメが認められるもの279、縦方向のナデを施しているもの280がある。

83・101・120・312～343・416～420・422は胴長の器形を呈する壺で、胴部の膨らみが前述したもの421よりも大きくなり、最大径の位置が中位よりや上方にあって、底部は細く痩まる。「く」字状に折り曲げて斜め上方へ立ち上がった口縁の端部はわずかに肥厚し、丸く仕上げているだけで刻目などは施していない。口縁端部が上方へ屈曲して、上面に浅い窪みを有するもの83・317・318・329・333・416～419がある。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施しているが、内面に横方向のハケメやヘラミガキの痕跡が残存するもの312・313・317も認められる。外面の胴部には二枚貝の腹縁による刺突文310・312、ヘラ状工具による「ノ」字状の刺突文83・314～316・318・319・422、ハケ状工具による刺突文320、3段または4段の刺突文313・317が存在し、上位には縦方向のハケメが認められ、下位には縦方向のヘラミガキを行っているものがほとんどである。内面の胴部の上位には横方向のヘラミガキを行っているもの120・316・319・320・330・420、斜め方向のハケメが認められるもの83・312・326・331・332・418、斜め方向のハケメの上面に横方向のヘラミガキを加えているもの315・318・333・334・416・417、縦方向のヘラミガキを行っているもの313・314、斜め方向のハケメの上面に縦方向のヘラミガキを加えているもの317、縦方向のナデを施しているもの101・419があり、内面の下位には縦方向のヘラミガキを行うのが一般的であるが、縦方向のヘラミガキの上面に縦方向のナデ

を加えているもの312・323・324・338、縦方向のナデだけを施すもの101・336、ユビオサエを行って指頭圧痕が残存するもの337もある。底部は小さな平底で、中央部がわずかに上げ底を呈し、焼成後の穿孔を有するもの83・120・368～342・422が多い。

344～346・351・361は高杯である。高杯の上位部344は、杯部の底部から口縁部にかけて器壁が薄くなりながら斜め上方へ直線的に立ち上がり、内側に蓋を受ける張り出しが存在する。外面の杯部と脚部の境界には断面が三角形の貼り付け突帯があり、脚部は器壁の厚い長脚と思われる。杯部の底部は円盤充填で、脚部内面の上位には絞り痕跡が認められる。口縁部の内外面と杯部と脚部の境界の外面はヨコナデを施し、杯部は外面とも縦方向のヘラミガキを行っている。脚部上位の外面には縦方向のハケメが存在するが、脚端部は欠損して不明である。口径の大きな高杯の杯部だけのもの345は、緩やかに内湾して立ち上がった杯部が「く」字状に外反して口縁部になるが、口縁端部は丸く仕上げている。口縁部には2個一对の小孔が認められ、外面とも全体にヨコナデを施している。杯部の外面は縦方向のヘラミガキを行い、内面は縦または斜め方向のナデ仕上げを施している。完形に近い器壁が薄くて口径の大きな高杯346の口縁部は、逆「L」字状に折れ曲がって上位に水平な面を形成している。口縁部と脚部の中位には、2個一对の円孔が認められる。杯部の底部は円盤充填で、脚部は長脚である。脚端部は「ハ」字状に開いて全体を丸く仕上げている。口縁部全体と脚部の上位と端部はヨコナデを施し、脚部外面の下位には縦方向のハケメが存在する。杯部の外面は縦方向のヘラミガキを行い、内面には斜め方向のハケメの上面に縦方向のヘラミガキを加えている。脚部内面の上位には絞り痕跡が多く残存し、下位は縦方向のナデを施している。緩やかに内湾して立ち上がった口縁の端部が、わずかに肥厚して上位に浅い四線状の窪みを有する小形の杯部だけのもの351は、口縁端部の外面に刻目を有し、2個一对の小孔の下位に二枚貝の貝殻腹縁による刺突文を巡らせている。口縁部は外面とも全体にヨコナデを施し、杯部の外面は縦方向のヘラミガキを行っている。杯部の内面は斜め方向のナデ仕上げで、杯部の底部は円盤充填になっている。長脚高杯の脚部だけのもの361は、「ハ」字状に開いた端部の接地面が水平である。外面の上位にはヨコナデを施し、下位には縦方向のヘラミガキを行っている。脚端部は内外面ともヨコナデを施し、内面の上位には絞り痕跡が認められる。

大形の高杯または鉢の破片347～349の外面には、上面に刻目を施した断面形が三角形の貼り付け突帯が存在する。緩やかに内湾して立ち上がった口縁の端部は、わずかに肥厚するもの348、内側に張り出して上面に円形浮文を有するもの347、内外に大きく拡張して上面に2個4列の円形浮文と斜格子文が存在する広い面が認められるもの349がある。内面の調整は、ナデを施しているもの347と横方向のヘラミガキを行っているもの349がある。

350・352～355・451は鉢である。350は大形の鉢の口縁部と考える。内湾して立ち上がった口縁端部の外面には刻目を施し、その下位には「ノ」字状の刺突文を巡らせている。口縁端部の内外面と外面の刺突文の上位はヨコナデを施し、内面は斜め方向のハケメの上面にヘラミガキを加えている。355は大形の鉢の口縁部破片である。外面には貼り付け突帯が存在し、その上下に2段の刺突文が巡らされ、突帯の下部には円孔が認められる。内面の上位には横方向のハケメが存在し、下位には縦方向のヘラミガキを行っている。完形に近い小形の台付鉢352は、「ハ」字状に開く低い台が存在する。緩やかに内湾して立ち上がった口縁の端部が肥厚し、外面に刻目を施している。口縁の上位には2個一对の円孔が認められ、底部は円盤充填である。口縁部と台部の端部は内外面ともヨコナデを施し、内外面には縦方向のヘラミガキを行っている。「ハ」字状に開いて端部を丸く仕上げた台部を貼り付けている、ほぼ完形に

近い台付鉢354は、「く」字状に折り曲げた口縁の端部が上方へわずかに屈曲して上面に浅い窪みが認められる。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施し、2個一対の小孔が穿たれている。緩やかに内湾して立ち上がる杯部の外面全体と内面の下位は縱方向のヘラミガキを行い、内面の上位は横方向のヘラミガキが認められる。外面の杯部と台部の境界部分と内面の台部は、全体にヨコナデを施している。451は器壁が厚くて「ハ」字状に短く開く台部が存在する。内湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、肥厚して上位に中央部が浅く窪んだ面を形成している。口縁端部の外面には刻目を施し、2個一対の円孔が認められる。口縁端部と台部はヨコナデを施し、杯部の外面は縱方向のヘラミガキを行っている。杯部の内面は、横方向のヘラミガキの上面に粗いヨコナデを加えている。

356～360・452はジョッキ形の鉢で、大形のものと小形のもの360がある。胴部下位から底部にかけてはすぼまる形態を呈し、底部は円盤充填の平底でわずかに上げ底になるが、外側へ膨らんでいるもの356も存在する。357と452の胴部外面には2段の刺突文を巡らせ、358と452の底端部には2個一対の穿孔が認められる。外面には縱方向のヘラミガキ359・360やハケメ358・452が認められるが、縱方向のヘラミガキの上面に縱方向のナデを加えているもの357もある。内面は縱方向のナデを施しているものが多いが、ヨコナデを行っているもの359も存在する。

362は回転台の破片である。台部分の器壁は厚く、上面は平坦である。胴部は器壁が薄くなって末広がりになる。台部の上面は不定方向のナデを施し、端部はヨコナデを行って丸く仕上げている。胴部の外面には縱方向のヘラミガキを行い、内面には縱方向のナデを施している。

以上に説明した大量の土器は、倉敷市の菰池遺跡（註9）や岡山市の南方遺跡などで出土しているものの、良好な資料は極めて少ないので現状である。これらの土器群は、弥生時代中期中葉の中頃の時期に属し、高橋氏編年のIV-b期、正岡氏編年のⅢ-1様式新相に相当する。遺構に伴わない斜面堆積の土器ではあるが、器種が豊富で非常にまとまった資料と考える。

次の段階の弥生時代中期中葉でも後期前葉に近い時期になると、熊山田遺跡ではその時期に属する土器が突如として消え、確認することができない。人間の生活の場が、何らかの理由でにわかに移動したのではなかろうか。

(福田)

註

- (1) 高橋 譲「弥生土器—山陽1—」『考古学ジャーナル』173 ニュー・サイエンス社 1980
- (2) 正岡勝夫「畿内地域」『弥生土器の様式と編年』一山陽・山陰編 一木耳社 1992
- (3) 福田正継ほか「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 岡山県教育委員会 1977
- (4) 山崎康平・岡田 博ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
- (5) 正岡勝夫・京本知秀ほか「船山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- (6) 正岡勝夫ほか「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- (7) 正岡勝夫・森畑知功・島崎 東ほか「百間川兼基遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 建設省岡山市河川工事事務所・岡山県教育委員会 1982
- (8) 出宮徳清・神谷正義・岡崎順子「南方（国立病院）遺跡発掘調査報告」 岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団 1981
- (9) 下澤公明・内藤善史「菰池遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71 岡山県教育委員会 1988

5 中世の土器・陶磁器

今度の熊山田遺跡の発掘調査によって出土した中世の遺物で量的に多いのが、備前系須恵質土器と呼ばれる椀489～496と小皿497～499である。外面の口縁端部に重ね焼きによって生じた黒色部分が認められるものもあるが、いずれも全体に灰白色を呈し、外面の底部に糸切り痕跡が存在する。これらの土器を生産した窯跡は備前市伊部の周辺に分布する（註1）が、最近になって赤磐郡瀬戸町の吉井川右岸の地域にも窯跡が存在することが明らかになった（註2）。消費地としては、備前市や瀬戸町に近い邑久郡長船町の西谷遺跡（註3）や熊山田遺跡の所在する邑久町の助三畠遺跡（註4）は言うまでもなく、岡山県内の瀬戸内海沿岸地域に位置する岡山市の百間川遺跡群（註5）や倉敷市の川入遺跡（註6）のみならず、広島県福山市の草戸千軒町遺跡（註7）、対岸の四国北部に所在する愛媛県今治市の馬越遺跡（註8）、吉野川下流の大規模な集落である徳島市の中島田遺跡（註9）、当時の交通の要所であった大物浦（浜）に関連する兵庫県尼崎市の大物遺跡（註10）などのほかに、遠くは神奈川県鎌倉市の千葉地東遺跡（註11）が知られており、備前系須恵質土器は意外にも広域に流通する土器なのである。

邑久町で発掘調査が実施された遺跡から出土する中世の遺跡で、比較的量が多くて目立つのが、吉備系土師質土器（註12）と命名された土器群である。これらの土器を畿内在住者は土師器として扱っているが、岡山県と広島県で遺跡の調査を担当している者は土師質土器と呼んでいる。なぜなら体部を丸く成形した供膳容器の椀は、丸底で高台の付かないもの（椀A）、輪高台を貼り付けたもの（椀B）、外底面の中央部を大きく窪ませた無高台のもの（椀C）のいずれも粘土紐を巻き上げて作られているが、杯や皿の底部には回転ヘラ切りの痕跡が存在し、成形手法や形態が奈良時代や平安時代の須恵器との連続性が認められ、古墳時代以降の土師器の系譜を引くものではない（註13）と考えるからである。

この土器群は、以前には早島式土器と称されていた。昭和12年（1937）に水原岩太郎氏が岡山県都窪郡早島町無津小松露の窯跡から出土した土器を紹介し、早島式土器と命名したからである（註14）。最近になって高畠知功氏のご尽力により、窯跡とそこから出土した土器が明らかになった（註15）ことは、誠に喜ばしいことである。図面や写真を見る限り、吉備系土師質土器の初期に出現するものと思われるが、回転台を使用して底部が切り離されているならば、岡山県鶴方町の沖の店遺跡（註16）で発見された窯跡から出土した土器と同様に、防長系土師質土器（註17）としなければならないであろう。なお報文中の7と8は、岡山市三手で検出された土器（註18）で明らかになった、窯に伴う道具と思われる。高畠氏による早島町の小松露窯跡から出土した土器は、内外面にヘラミガキの痕跡を有する古代末期の古い時期に属する特殊なもので、瀬戸内海中部北岸地域の中世を代表する供膳容器の椀が、手づくねで回転台を使わずに成形し、ヘラミガキは行わずに簡単なナデ仕上げを施しているだけの土器とは、著しく異なった様相になっている。したがって早島式土器の実態が明らかになったとはいえ、中世の土師質土器椀は、従来のように吉備系土師質土器と呼んで早島式土器の名称は使わないようにしたい。

現時点において岡山県内で上師質土器を生産した窯跡が発見されているのは、関戸廐寺跡（註19）、沖の店遺跡（註20）、小松露窯跡（註21）、三手向原遺跡（註22）、三藏畠遺跡（註23）、万富東大寺瓦窯跡（註24）の6遺跡で、三手向原遺跡には2基、万富東大寺瓦窯跡には3基も存在した。窯の構造は千差万別で、分焰柱（ロストル）を有するものや窯道具を伴うものなどがあり、三藏畠遺跡の窯は鍋・鉢・羽釜・カマドの大形品専用の特異なものである。これらの土器のうちでも供膳容器の椀の消費地は、瀬戸内海中部北岸地域の岡山県や広島県東部の沿岸はもとより、前述した備前系須恵質土器のところで記した岡山県外の遺跡は勿論のこと、淀川流域（註25）のみならず京都市内（註26）からも出土してい

る。さらに遠く離れた遺跡として、博多（註27）や鎌倉（註28）が古くから知られている。このように吉備系土師質土器は、備前系須恵質土器よりもさらに広い地域に、量的にも比較的多く流通しているのである。なお熊山田遺跡の井戸5から出土した底部が手づくねの小皿510～512は、千町平野で発掘調査が実施された遺跡だから出土する特異な土器で、近くの吉井川下流左岸で生産された可能性が高いと思われる。

備前焼が井戸2から出土している。擂鉢479・480の破片だけであるが、内面に卸し目が存在し、口縁端部は上方へ拡張している。この2点の擂鉢は、間壁編年（註29）のIVB期、乗岡編年（註30）の中世4b期と中世5a期に属し、ほぼ15世紀第2四半期から15世紀第3四半期の時期が与えられている。したがって、井戸2には法量の異なる底部回転糸切りの土師質土器の皿474～476が伴うが、熊山田遺跡が備前焼の生産地に近いこともあって、供膳具が大小の皿だけに変化する画期が、草戸千軒町遺跡のIV期前半（15世紀後半）（註31）とほぼ同時期であることが明らかになった。また瀬戸内海中部北岸地域の岡山県や広島県東部沿岸では、土師質土器皿の底部の切り離し方法が、ヘラ切りまたは回転ヘラ切りから回転糸切りに変化することが知られているが、現時点では笠岡市の園井土井遺跡（註32）や賀陽町の大村遺跡（註33）などで回転糸切りのものが多く認められ、岡山市の百間川当麻遺跡D区の溝状遺構28（註34）で備前焼の甕と擂鉢が伴う小皿がすべて回転糸切りであることから、その変化する時期が大雑把に15世紀全般から下がっても16世紀前葉までと考えられていたが、熊山田遺跡では井戸2から出土した資料によって、15世紀第3四半期には回転糸切りになっていることが判明した。

井戸5から出土した外面に格子目のタタキ痕跡を有するもの505は、倉敷市玉島八島に所在する亀山遺跡（註35）の窯跡で生産された陶器の破片である。亀山遺跡に近い前述の園井土井遺跡や草戸千軒町遺跡などの集落遺跡のほかに、岡山県北部の山地に所在する大村遺跡のような集団墓地で葬骨器に使われて出土するのは理解できるが、東方向はせいぜい百間川遺跡群までと考えていただけに、吉井川を越えて備前焼の生産地に隣接する熊山田遺跡で確認されたことは驚きである。亀山遺跡の発掘調査で、平行タタキを有する破片を多く含む灰原を切って格子目タタキのものを生産した窯跡が造られていたから、平行タタキが古くて格子目タタキが新しいことが分かり、平行タタキから格子目タタキに変化するのは漠然と13世紀中葉と考えていたが、熊山田遺跡の井戸5から出土した遺物の状況から、それよりもやや古くなるのかもしれない。なお九州の北部地域で出土している外面に格子目タタキ痕跡の存在する亀山焼に似た甕は、熊本県荒尾市の中畠城窯跡（註36）の製品であることが判明し、島根県松江市周辺の遺跡から出土する外面に格子目のタタキ痕跡を有する亀山焼系統のものは、松江市の別所遺跡（註37）で生産されたことが明らかになったから、四国の松山平野や今治平野で検出されている硬質で格子目がやや細かい大形の容器も、近い将来にそれを生産した窯跡が地元で発見されると思われる。

熊山田遺跡からは、比較的多くの中国産の磁器が出土している。全体の形態が確認できるものについて、山本信夫氏の大宰府における分類（註38）、上田秀夫氏の青磁碗の分類（註39）、森田勉氏の白磁の分類（註40）を参考にしながら、少しだけ記述してみたい。

井戸3から出土した灰白色に変色した皿484は、内面の見込み部分に櫛描文を有する同安窯系の青磁皿で、山本分類のI-I b類に属して大宰府では12世紀後半に出現するというが、草戸千軒町遺跡では13世紀中葉から16世紀初頭までくまなく出土している。井戸4から出土した青磁碗の底部だけの破片485は、内面の見込み部分に印花文に描いたもので、口縁部外面には雷文帯を巡らせていると思われる。上田分類の青磁碗C-II類に相当し、草戸千軒町遺跡ではIV期前半とIV期後半の15世紀後半から16世紀

初頭の時期に集中的に出土している。井戸4には家形土製品486が共伴しているから、15世紀後半から16世紀初頭になると、瀬戸内海中部北岸地域にも大形の瓦質土器が出現するのは確実である。また井戸5の出土資料によって、畿内系の三足の付く瓦質の釜519は、13世紀中葉になると千町平野に流入していることが分かる。井戸5から出土した完形品の龍泉窯系青磁碗487は、山本分類のI-4a類に属するもので、体部の内面を2本の沈線で5分割し、その中に飛雲文を描いている。大宰府では12世紀中葉に出現して12世紀後半から13世紀初頭にかけて出土量が多くなるというが、瀬戸内海中部北岸地域の岡山県と広島県東部では、12世紀後半になってその存在が広く知られるようになり、16世紀初頭までの長期間にわたって出土する。玉縁を有する白磁の碗488は、山本分類のIV-1a類に属するもので、福建省などの華南一帯で生産している。岡山県南部地域では比較的多く出土する遺物で、12世紀後半から13世紀中葉の時期に目立つ中国産磁器である。遺構に伴わない遺物として提示した白磁の皿526は、森田分類によるD群の白磁で、口縁部外面に雷文帯を巡らせた青磁碗と共伴して出土することが多い。森田氏は、青森市尻八館遺跡や太宰府市推定金光寺跡の出土例から、14世紀代にはすでに使用されていたとしているが、草戸千軒町遺跡ではⅢ期の15世紀前半から中葉に出現し、Ⅳ期前半の15世紀後半に出土量が多くなっている。内外面に樹描文を有する口縁部の破片527は、山本分類のI-1b類に属する同安窯系青磁碗である。前述した井戸3から出土した皿484とセットになって出土することが多く、岡山県南部地域では龍泉窯系青磁碗とともに墓の副葬品に使用されている。529の底部の破片は、口縁部外面に雷文帯を巡らせた上田分類の青磁碗C-I類に相当するものかもしれない。文様が施されない青磁碗の底部530は、山本分類の龍泉窯系青磁碗I類のうちで碗I-5類を除くものが含まれる。瀬戸内海中部北岸地域の岡山県と広島県東部では、出土量が比較的多い中国産の磁器である。

熊山田遺跡で検出した中世の遺構は、掘立柱建物1棟、井戸4基、溝2条だけであったが、井戸から出土した遺物には各地域で生産されたものが多く、良好な一括資料を得たと考えている。 (福田)

註

- (1) 石井 啓「伊東南大室跡周辺跡群確認調査報告書」『備前市埋蔵文化財調査報告』5 備前市教育委員会 2003
- (2) a 下澤公明「保木淀跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」99 日本道路公園広島建設局備前工事事務所、岡山県教育委員会 1995
b 國木芳明「史跡万富東大寺瓦実跡確認調査報告」「瀬戸町埋蔵文化財発掘調査報告」1 岡山県瀬戸町教育委員会 2003
- (3) 福田正應「西谷遺跡・昭和58年度圃場整備事業に伴う発掘調査」岡山県長船町教育委員会 1985
- (4) 馬場昌・「岡山県助三郷遺跡出土の陶磁器」「貿易陶磁研究」No.4 日本貿易陶磁研究会 1984
- (5) a 福田正麻「百間川当麻遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」46 建設省岡山河川工事事務所、岡山県教育委員会 1981
b 山附康平・松尾佳子「百間川米田遺跡4」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」164 国土交通省岡山河川工事事務所、岡山県教育委員会 2002
- (6) 柳原祐彦・江見正己・中野雅美「川入遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」16 岡山県教育委員会 1977
- (7) 広島県草「千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 広島県教育委員会 1996
- (8) 小野倫美「馬越遺跡発掘調査報告書」「今治市埋蔵文化財調査報告書」第58集 今治市教育委員会 2001
- (9) 福家清司「中島田遺跡」「県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」徳島県教育委員会 1989
- (10) 福井英治・益田吉古・岡田 慶・山上真子・高梨政大「大物遺跡第1次調査概要 その1」「尼崎市埋蔵文化財調査年報」平成7年度(2) 尼崎市教育委員会 2001
- (11) 服部喜容・中田 英・宍戸信悟「千葉地東遺跡」「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告」10 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986
- (12) 百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展開」「考古学ジャーナル」No.299 ニュー・サイエンス社 1988
- (13) 鈴木康之「土師質上器碗」「概説 中世の上器・陶磁器」真陽社 1995

- (14) 快舟散史〔水原岩太郎〕「考古行脚」「吉備考古」第32号(拾周年記念号) 吉備考古学会 1997
- (15) 高畠知功「早島式土器について—実物の再発見と確認—」『古文化談叢』第50集発刊記念論集(下) 九州古文化研究会 2004
- (16) 伊藤 晃・浅倉秀明「沖の店遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』42 岡山県教育委員会 1981
- (17) 註11に同じ
- (18) 草原孝典「三子向原遺跡—中世土師質土器窯と集落遺跡の発掘調査報告—」岡山市教育委員会 2001
- (19) 安東康宏・岩崎仁司「開戸庵寺」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』3 笠岡市教育委員会 1997
- (20) 註16に同じ
- (21) 註15に同じ
- (22) 註18に同じ
- (23) 神原英朗ほか「三義畠遺跡」『岡山県若山湖新住宅街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(6) 岡山県山陽町教育委員会 1976
- (24) 註2 bに同じ
- (25) a 河上磐作・橋本久和・淀川・木津川河床の採集資料。『中世土器の基礎研究』IX 日本中世土器研究会 1993
b 橋本久和『土牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980
- (26) a 伊野近路・杉木 宏・橋本高明・谷口智樹「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 京都府教育委員会 1980
b 萝田 基「左京六条三坊」「平安京跡発掘調査概報」昭和57年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983
- (27) a 大庭康時・力武卓治「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ)博多」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第184集 福岡市教育委員会 1988
b 大庭康時「日本各地から運ばれたやきもの」『よみがえる中世』・博多 半凡社 1988
- (28) 河野真知子「鍾乳における白かわらけの特徴と系譜」『鍾乳考古』No.10 鍾乳考古学研究所 1981
- (29) a 間壁忠彦・間壁貞子「備前焼研究ノート(1)一備前焼の成立—」『倉敷考古館研究集報』第1号 倉敷考古館 1966
b 間壁忠彦・間壁貞子「備前焼研究ノート(2)一中世備前焼の推移—」『倉敷考古館研究集報』第2号 倉敷考古館 1966
c 間壁忠彦・間壁貞子「備前焼研究ノート(3)一備前焼の分布とその性格—」『倉敷考古館研究集報』第5号 倉敷考古館 1968
d 間壁忠彦・間壁貞子「備前焼研究ノート(4)一その後の新資料—」『倉敷考古館研究集報』第18号 倉敷考古館 1984
e 間壁忠彦「備前焼」「考古学ライブラリー』60 ニュー・サイエンス社 1991
- (30) 采岡 実「備前焼鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会 2000
- (31) 註7に同じ
- (32) 福田正徳・田中 寿「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
- (33) 江見正己・柴田英樹ほか「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113 日本道路公団広島建設局高梁工事事務所・岡山県教育委員会 1996
- (34) 註5 aに同じ
- (35) 岡田 博・武田恭彰・福田正徳「龜山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
- (36) 美濃口雅則「釋迦城跡の中世須恵器(1)」「肥後考古」第10号 肥後考古学会 1997
- (37) 岡崎進二郎は「別所遺跡」「中國電力・北松江変電所造成予定地内発掘調査報告書」松江市教育委員会 1988
- (38) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1996
- (39) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究」No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- (40) 森田 魁「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究」No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

付載 熊山田遺跡出土の木製品の樹種

(株)吉田生物研究所 汐見 真

1. 試料

試料は邑久町熊山田遺跡から出土した農具 6 点、容器 2 点の合計 8 点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接続断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹 2 種、広葉樹 2 種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マキ科マキ属イヌマキ (*Podocarpus macrophyllus* D.Don)

(W 7)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ~ 2 個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州（中・南部）、四国、九州、琉球に分布する。

2) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

(W 5 ~ W 6)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1 ~ 3 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

3) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

(W 1 ~ W 4)

放射孔材である。木口では年輪に關係なくまちまちな大きさの道管 ($\sim 200 \mu\text{m}$) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に 1 ~ 3 細胞幅の独立帶状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が狭まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。

熊山田遺跡

アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

4) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect *Prinus* sp.)

(W 8)

環孔材である。木口では大道管（～380 μm ）が年輪界にそって1～3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを感じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は單列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平状細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の單列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

熊山田遺跡出土の木製品の樹種

No.	品名	樹種
W 1	鍼未製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
W 2	鍼未製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
W 3	鍼未製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
W 4	鍼未製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
W 5	曲物 蓋	スギ科スギ属スギ
W 6	曲物	スギ科スギ属スギ
W 7	堅杵状木製品	マキ科マキ属イスマキ
W 8	堅杵状木製品	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東 隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東 隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）
伊東 隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所（1999）
北村 四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社（1979）
深澤 和三 「樹体の解剖」 海青社（1997）

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

第2表 穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)	床面積(m ²)	底面海拔高(cm)	柱穴	焼土面	壁体構	高床部	カマド有無	時期	旧遺構名
穴住居1	(不整楕円形)	(800)	—	158	1 /	無	無	無	無	弥生後期後葉	1区住居址1

第3表 掘立柱建物一覧表

遺構名	規模	柱間距離		桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m ²)	棟方向	柱穴形状	時期	旧遺構名
		桁	梁							
掘立柱建物1	2以上×1	150~169	157	(319)	157	(5.0)	N-48°-W	円・不整楕円	弥生中期中葉	3B区建物1
掘立柱建物2	3×2	98~116	112~137	316	249	(7.9)	N-86°-W	円	中世	0区建物

第4表 井戸一覧表

遺構名	構造	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高(cm)	時期	旧遺構名
井戸1	素掘り	(楕円形)	180	160	120	60	弥生中期中葉	4区No.2土壤
井戸2	素掘り	(円形)	180	—	105	35	15C後半	1区県道部分井戸1
井戸3	素掘り	円形	204	191	115以上	—	中世	2区井戸1
井戸4	素掘り	(円形)	(400)	—	160	30	中世	2区井戸状遺構
井戸5	素掘り	(楕円形)	203	190	110以上	—	13C中葉	3B区井戸1

第5表 土壙一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高(cm)	時期	旧遺構名
土壤1	隅丸長方形	U字形	305	46	40	171	弥生前期後葉	3B区P-1008
土壤2	不整楕円形	逆台形	228	216	79	134	弥生前期後葉	3B区P-1042
土壤3	(楕円形)	逆台形	144	—	40	173	弥生前期前半	3B区土壤2
土壤4	(円形)	方型	80	—	78	138	弥生前期前半	3B区土壤3
土壤5	長楕円形	皿状	204	95	30	142	弥生前期前半	3A区土壤4
土壤6	(楕円形)	逆台形	180	130	48	148	弥生中期	3A区土壤3
土壤7	(不正円形)	皿形	124	—	10	178	弥生中期以前	3A区土壤5
土壤8	(楕円形)	U字形	96	—	75	134	弥生	3A区土壤2
土壤9	(円形)	楕形	124	—	54	157	弥生中期前半	3A区土壤1
土壤10	(隅丸方形)	皿形	(168)	114	20	183	弥生中期中葉	3B区P-1029
土壤11	隅丸長方形	U字形	—	10~15	14	199	弥生前・中期?	3B区P-1039
土壤12	長楕円形	皿形	198	134	27	183	弥生中期中葉	3B区P-1011・1025
土壤13	不整楕円形	逆台形	226	220	57	152	弥生中期中葉	3B区P-1043
土壤14	(長楕円形)	U字形	(260)	159	102	120	弥生中期中葉	3B区P-1048
土壤15	(楕円形)	楕形	(232)	—	(80)	130	弥生中期中葉	3B区P-1031
土壤16	楕円形	楕形	140	130	56	134	弥生中期中葉	4区No.5土壤
土壤17	楕円形	U字形	126	74	23	155	弥生中期中葉	4区No.3土壤
土壤18	楕円形	皿形	170	82	30~50	217	弥生中期中葉	4区No.6土壤
土壤19	楕円形	袋状	120	108	47	114	弥生中期	5区No.1土壤
土壤20	長楕円形	皿形	132	72	34	171	古墳前期	3B区土壤1
土壤21	溝状	台形	(362)	46~85	30	207	古代	0区溝5

第6表 溝一覧表

遺構名	上端幅(cm)	底面幅(cm)	断面形	深さ(cm)	底面海拔高(cm)	時期	旧遺構名
溝1	150	24	U字形	60	50	弥生中期後葉	0区溝4
溝2	110	27	U字形	40	75	弥生中期後葉	0区溝3
溝3	285~300	85	椀形	80	50	弥生中期中葉	0区溝4
溝4	20	14	U字形	10	130	弥生	0区溝状遺構1
溝5	120	21	V字形	50	128	弥生中期	1区溝1
溝6	50	19	V字形	22	124	弥生中期	1区溝2
溝7	110	26	V字形	60	112	弥生中期	1区溝3
溝8	80~200	38~160	皿形	26	120	弥生中期中葉	1区渠道部分溝1
溝9	230	30	U字形	92~105	83	弥生後期中葉	2区溝3?
溝10	100	50	逆台形	92	78	弥生後期中期	2区溝3?
溝11	118	62	U字形	70	108	弥生後期中葉?	2区
溝12	93	20	V字形	45	132	弥生後期中期?	2区
溝13	65	400	皿形	118	69	弥生後期中葉	2区溝1・2他
溝14	220	132	U字形	88	98	弥生中期	2区溝0
溝15	330	140	椀形	90	90	弥生中期前半?	3A区溝3?
溝16	415以上	180	皿形	123	57	弥生中期前半	3A区溝4?
溝17	95	33	U字形	60	162	弥生中期~後期	3A区溝5
溝18	108	50	逆台形	76	123	弥生中期~後期	3A区溝6
溝19	125	54	椀形	70	139	弥生中期~後期	3B区溝1?
溝20	58	28	U字形	40	125	弥生	6区溝10
溝21	46~76	24	U字形	6	146	弥生	6区溝9
溝22	65	28	U字形	14	150	弥生	6区溝7
溝23	15~20	10	U字形	4	153	弥生	6区溝6
溝24	200	30	V字形	60	94	弥生中期?	6区溝8
溝25	176	48	皿形	30	113	弥生中期?	6区
溝26	180	50~65	U字形	90	86	弥生後期?	6区溝14・15・16
溝27	290	45~130	椀形	60	82	弥生後期	6区溝11・12
溝28	(300)	—	椀形?	40以上	—	弥生中期?	6区溝13
溝29	260	28	皿形	40	130	古代	0区溝2
溝30	80	26	U字形	40	138	中世?	3A区溝1
溝31	50	40	U字形	40	146	中世?	3A区溝2
溝32	200	28	皿形	40	145	中世?	6区溝5
溝33	300	50	椀形	80	140	中世以降?	6区溝2・3

第7表 欄列状遺構一覧表

遺構名	全長(cm)	柱間距離(cm)	柱穴形状	時期	旧遺構名
欄列状遺構1	330以上	67~84	長椭円・不整形	古墳後期以降	4区不整形柱穴列

第8表 土器観察表

番号	遺物名	種別	器種	古墳				色調	船上	備考	
				口径	底面	底脚径	外型				
1	包合器	陶土器	釜鉢	—	—	—	ヨコミガキ、底面に斜面 ナダ、底器、底文、底面 ナダ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英		
2	包合器	陶土器	釜鉢	—	—	—	ヨコミガキ、底器、底文、底面 ナダ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、雲母		
3	包合器	陶土器	釜	—	—	—	直縁罐に附する。斜面の 上半部斜面無地ナダ、下半部ヨコミカクナダ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、角閃石		
4	包合器	陶土器	釜	(26.0)	—	—	直縁罐に附する。斜面に2 段の斜面ナダ、上半部斜面無地ナダ、 下半部ヨコミカクナダ	灰黒褐色(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石		
5	包合器	陶土器	釜鉢	—	—	(4.4)	底器、底面、底文、ケズリ ナダ	にじく小塗(7.SYR5/4)	長石、石英、滑石		
6	盤六角形	陶土器	盤	—	—	—	底盤に6枚以上 シボリ、ササエ	灰黒褐色(7.SYR5/2)	長石、角閃石、石英、赤色 斑点		
7	盤六角形	陶土器	盤	(15.0)	—	—	ヨコナナゲ、ケズリ	にじく楕(7.SYR5/3)	長石、板岩、赤色斑点、及 白色斑点		
8	盤六角形	陶土器	盤	—	—	—	ヨコナナゲ、タサハケ	灰黒褐色(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石、黑色 斑点、白色斑点、赤色斑点		
9	盤六角形	陶土器	盤	—	—	—	ヨコミガキ	にじく灰黒 (10YR7/2)	白色斑点、角閃石		
10	盤六角形	陶土器	盤	—	—	—	ヨコミガキ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、赤色斑点、角閃石		
11	盤六角形	陶土器	盤	—	—	(13.8)	ナダ	灰黒褐色(10YR6/3)	長石、石英、赤色斑点、角閃石		
12	壺穴直腹	陶土器	瓶	12.4	—	—	タサハケ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英、赤色斑点、角閃石		
13	壺穴直腹	陶土器	瓶	(37.2)	—	—	ヨコナナゲ、ハケ後ヨコナ ガキ、下縁部に凹凸	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、赤色斑点、角 閃石、黑色斑点		
14	壺穴直腹	陶土器	瓶	—	—	(4.4)	オサエ	楕(7.SYR5/6)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
15	壺穴直腹	陶土器	瓶	(17.6)	—	—	タサハケ、ヨコナナゲ	灰黒褐色(10YR6/3)	長石、石英、角閃石、黑色 斑点		
16	壺穴直腹	陶土器	瓶	—	—	—	オサエ、ヨコナナゲ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
17	瓶立直腹	陶土器	瓶	—	—	—	ヨコミガキ、ササエ	灰黒褐色(7.SYR5/2)	長石、石英、亞麻色、角閃石		
18	瓶立直腹	陶土器	瓶	(25.1)	—	—	白縁罐に角付の判別 製本部1号、ミガキ	灰白(10YR6/2)	長石、石英、赤色斑点、赤色 斑点に幾筋		
19	井戸口	陶土器	蓋	—	—	7.0	底部に2条の斜面突起。上 ヨココ、下平ら後ハラミガキ	にじく黄褐色 (10YR7/3)	長石、石英、角閃石		
20	井戸口	陶土器	蓋	13.0	—	—	底部に2条の斜面突起。 上や下タサハケハケメ 下ヨコハラミガキ	にじく黄褐色 (10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 斑点		
21	井戸口	陶土器	蓋	(16.9)	—	—	タサハケ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英、角閃石		
22	井戸口	陶土器	蓋	(18.5)	—	—	タサハケ	にじく楕(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
23	井戸口	陶土器	蓋	—	—	—	横縫にハラ抜き直による斜 め剥離突起。	灰黒褐色(10YR6/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
24	井戸口	陶土器	蓋	—	—	—	側面に2条の斜面突起。 タサハケ、タサハラミガキ	にじく黄褐色 (10YR7/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
25	井戸口	陶土器	蓋	(17.8)	—	—	タサハケ	ハケ後ハラミガキ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英、角閃石	
26	井戸口	陶土器	蓋	(18.6)	—	—	タサハラミガキ	ナダ	にじく黄褐色 (10YR7/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
27	井戸口	陶土器	蓋	(24.4)	—	—	タサハラミガキ	ナダ	にじく黄褐色 (10YR7/3)	長石、石英	
28	井戸口	陶土器	蓋	—	—	10.0	ヘラミガキ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
29	井戸口	陶土器	蓋	—	—	5.9	タサハラミガキ	タサハラミガキ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、角閃石	
30	井戸口	陶土器	蓋	—	—	7.8	タサハラミガキ	タサハラミガキ	にじく黄褐色 (10YR6/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
31	井戸口	陶土器	蓋	—	—	(8.5)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	灰白(7.SYR5/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
32	井戸口	陶土器	蓋	—	—	—	ヨコミガキに2条の斜面付 突起。下縁部に複数の ハラミガキ。	にじく赤褐色(5YR5/4)	長石、石英、角閃石		
33	井戸口	陶土器	蓋	—	—	—	口縁部に円凹、タサハケ	にじく楕(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
34	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	開口に赤褐色ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英、角閃石	
35	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	底部に2条の斜面の直角突 起付。ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/3)	長石、石英、赤色斑点	
36	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	ヨコナナゲ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/3)	長石、石英、赤色斑点	
37	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	口縁部に斜面突起。トサ 山形突起。ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/3)	長石、石英	
38	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	ヨコナナゲ、ナダ	ナダ	灰黒褐色(7.SYR5/2)	長石、石英	
39	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	ヨコナナゲ、底部に斜面突 起。ナダ	ナダ	灰白(10YR6/2)	長石、石英	
40	土壙1	陶土器	蓋	—	—	—	ヨコナナゲ、ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英	
41	土壙1	陶土器	蓋	(30.0)	28.7	(7.2)	口縁部に斜面突起。ナダ ナダ	にじく楕(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点		
42	土壙2	陶土器	蓋	(22.6)	—	—	ヨコヘラミガキ	ナダ	にじく黄褐色 (10YR6/3)	長石、石英、角閃石、雲母	
43	土壙2	陶土器	蓋	(11.4)	—	—	ヨコナナゲ、ナダ?	ナダ	にじく楕(7.SYR5/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
44	土壙2	陶土器	蓋	(12.1)	—	—	側面に削出突起。ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石	
45	土壙2	陶土器	蓋	(11.6)	21.8	(31.2)	ヨコナナゲ、ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
46	土壙2	陶土器	蓋	—	—	—	ヨコナナゲ、ナダ	ナダ	灰黒褐色(10YR6/2)	長石、石英、角閃石	
47	土壙2	陶土器	蓋	—	—	—	2条の波状の間に新削出 ナダ、ヘラミガキ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英、角閃石	
48	土壙2	陶土器	蓋	—	—	—	側面に2条の斜面突起 ナダ	ナダ	にじく楕(7.SYR5/4)	長石、石英、角閃石	

熊山田遺跡

地質番号	岩鉱石名	層別	岩種	基盤 (cm)			地層		色調	斑上	備考
				口径	標高	底牌種	外觀	内面			
59	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	褐色の透鏡。ナゲ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4) 板 (576/6)	長石、石英、角閃石 長石、石英、角閃石	
60	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	褐色の透鏡。ナゲ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4) 板 (576/6)	長石、石英、角閃石 長石、石英、角閃石	
61	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	褐色の透鏡。ナゲ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4) 板 (576/6)	長石、石英、角閃石 長石、石英、角閃石	
62	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	褐色の透鏡。ナゲ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4) 板 (576/6)	長石、石英、角閃石 長石、石英、角閃石	
63	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	上半ヨリヘリカガキ。下半 タケナシミガキ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4) 板 (576/6)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
64	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	(12.7)	—	タケナシミガキ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石、赤色	
65	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	(11.2)	—	タケナシミガキ	西河側面灰原。ナゲ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
66	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	(8.0)	—	タケナシミガキ	ナゲ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
67	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	(10.3)	—	泥質の粘土。ナゲハナ タジ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
68	土壤Ⅱ	第1土層 基	(24.2)	—	—	—	泥質の粘土に斜方石帯 I を含む。ナゲハナ	ナゲ	灰褐色 (576/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
69	土壤Ⅱ	第1土層 基	(40.9)	—	—	—	山崎を走る。下部に赤色 ナゲハナ。ナゲハナ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (576/4)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
70	土壤Ⅱ	第1土層 基	(39.8)	—	—	—	削出実測 3。ヨコミガキ。ヨコミガキ	ナゲ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石、赤色	
71	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	砂丘による段丘。	ナゲヨコミガキ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
72	土壤Ⅱ	第1土層 基	(14.9)	—	—	—	削出実測 2。2.2m 厚さ。ナゲヨコミガキ	ヨコミガキ	灰褐色 (576/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
73	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	(8.6)	—	ヨコミガキ。細いナゲ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
74	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	(13.0)	—	ナゲヨコミガキ	ナゲ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
75	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	疊合による段丘。斜面あり。 ヨコミガキ	ヨコミガキ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
76	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	河谷壁による段丘。	ナゲハナ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
77	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	化成段丘。後に 2.0m 厚さ。ナゲハナ	ナゲ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
78	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	口槽部に剥離。ヨコミガキ	ヨコミガキ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
79	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	河谷壁による段丘。後に 2.0m 厚さ。ナゲハナ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石	
80	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヘラ桂道場 4 号、大更ノ ナゲハナ	ナゲ	灰青褐色 (1076/2)	長石、石英、角閃石、赤色 長石、石英、角閃石	
81	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	前川側面の段丘以上。ヨコミガキ 後段ヨコミガキの北端。ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、雲母	
82	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	8.6	—	ヨコミガキ。その下 にナゲヨコミガキの文様。その下 にナゲヨコミガキ	ナゲヨコミガキ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、赤色、長石、角閃石 長石、赤色	斑成後津孔
83	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、赤色、角閃石	
84	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、赤色、角閃石	
85	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、赤色、角閃石	
86	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、赤色、角閃石	
87	土壤Ⅱ	第1土層 基	(16.6)	—	—	—	タケハナ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
88	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	口槽部に剥離。ナゲハナ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
89	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
90	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
91	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
92	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
93	土壤Ⅱ	第1土層 基	(9.0)	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
94	土壤Ⅱ	第1土層 基	(10.2)	—	—	—	ナゲ	ナゲ	灰褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
95	土壤Ⅱ	第1土層 基	(10.3)	—	—	—	盛りのある隙隙	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
96	土壤Ⅱ	第1土層 基	(21.2)	19.1	7.9	—	上半ヨコミガキ。下半ヨコミガキ ヨコミガキ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
97	土壤Ⅱ	第1土層 基	(20.6)	—	—	—	タケハナ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
98	土壤Ⅱ	第1土層 基	(9.0)	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
99	土壤Ⅱ	第1土層 基	(16.6)	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	
100	土壤Ⅱ	第1土層 基	—	—	—	—	ヨコミガキ	ナゲ	にじみ 黄褐色 (1076/2)	長石、石英、赤色、雲母	

番号	遺物名	種別	器種	測量 (cm)		特徴	色調	胎土	備考
				口径	高さ				
160 土墳16	陶牛1器	畜	壺	(21.3)	—	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/4)	長石、石英、赤色鉄
101 土墳15	陶生土器	穀	15.5	—	5.0	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/2)	長石、石英、赤色鉄
102 土墳15	陶生土器	穀	—	—	—	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/2)	長石、石英、赤色鉄
103 土墳15	陶生土器	穀	—	—	(6.3)	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/2)	長石、石英、赤色鉄
104 土墳15	陶牛1器	高杯	—	—	(8.8)	方唇部から少し下に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英
105 土墳16	陶牛1器	高杯	—	—	(13.7)	タケノコ型ガラス	セミヘラミガラス	青磁機 (10.98/3)	長石、石英、赤色鉄
106 土墳16	陶牛1器	高杯	—	—	—	タケノコ型ガラス	セミヘラミガラス	青磁機 (7.5186/2)	長石、石英、赤色鉄
107 土墳17	陶牛1器	高杯	粗研磨広口	19.0	—	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄、赤色鉄
108 土墳17	陶生土器	高杯	—	—	(16.6)	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/2)	長石、石英、赤色鉄
109 土墳18	陶牛1器	広口壺	—	—	—	口縁外面に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/3)	長石、石英、赤色鉄
110 土墳18	陶生土器	穀	(12.4)	—	—	タケノコ型ガラス	セミヘラミガラス	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
111 土墳18	陶生土器	穀	(16.9)	—	—	タケノコ型ガラス	セミヘラミガラス	青磁機 (7.5186/2)	長石、石英、赤色鉄
112 土墳18	陶牛1器	穀	(26.7)	—	—	タケノコ型ガラス	セミヘラミガラス	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
113 土墳18	陶生土器	鉢	—	—	—	口縁部に斜切。外側に斜削痕。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
114 土墳18	陶生土器	高杯	—	—	(8.2)	タケノコ型ガラス	セミヘラミガラス	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
115 清8	陶生土器	壺	(10.0)	(18.5)	5.2	頭部に丸みを帯び、口縁に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
116 清9・10	陶生土器	長脚壺	14.8	—	—	タケノコ型ガラス。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
117 清9・10	陶生土器	鉢	(38.2)	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
118 清10	陶生土器	無蓋鉢	(8.6)	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/6)	長石、石英、赤色鉄
119 清10	陶牛1器	無蓋鉢	(16.2)	—	—	タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (10.98/3)	長石、石英、赤色鉄
120 清13	陶牛1器	壺	(17.9)	30.1	5.6	頭部に丸みを帯び、口縁に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/3)	長石、石英、赤色鉄
121 清13	陶牛1器	壺	—	—	—	タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (7.5186/3)	長石、石英、赤色鉄
122 清13	陶生土器	壺	(16.0)	28.3	5.2	ナチュラル	ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
123 清13	陶生土器	壺	(15.8)	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
124 清13	陶牛1器	高杯	(20.6)	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
125 清13	陶生土器	高杯	(12.7)	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
126 清15	陶牛1器	小折沿	3.6	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/3)	長石、石英、赤色鉄
127 清15	陶生土器	腹口壺	9.2	—	—	タケノコ型ガラス	ナチュラル、セラミック	青磁機 (10.98/4)	長石、石英、赤色鉄
128 清15	陶牛1器	長頸壺	20.1	23.3	7.3	頭部に丸みを帯び、口縁に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
129 清15	陶牛1器	高杯	(13.5)	—	—	タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
130 清15	陶生土器	壺	14.0	24.5	(5.0)	口縁部に3本の突起。タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (7.5186/3)	長石、石英、赤色鉄
131 清15	陶牛1器	壺	(16.4)	32.4	7.5	口縁部に3本の突起。タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (5.0187/4)	長石、石英、赤色鉄
132 清15	陶牛1器	壺	—	—	5.1	タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (5.0187/4)	長石、石英、赤色鉄
133 清15	陶牛1器	壺	—	—	4.6	タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (5.0187/4)	長石、石英、赤色鉄
134 清15	陶生土器	高杯	(24.0)	—	—	杯底に沈殿。タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (5.0187/4)	長石、石英、赤色鉄
135 清15	陶牛1器	高杯	(27.2)	—	—	杯底に沈殿。タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
136 清15	陶生土器	高杯	(26.3)	16.9	15.4	杯底に沈殿。タケノコ型ガラス	ナチュラル、ミガラク、ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
137 清15	陶生土器	高杯	—	—	—	杯底に沈殿。タケノコ型ガラス	ナチュラル、ミガラク、ナチュラル	青磁機 (7.5186/4)	長石、石英、赤色鉄
138 清15	陶牛1器	高杯	(29.5)	—	20.9	頭部に丸みを帯び、口縁に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
139 清15	陶生土器	高杯	(28.1)	19.4	17.0	頭部に丸みを帯び、口縁に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (5.0186/4)	長石、石英、赤色鉄
140 清15	陶生土器	高杯	—	—	(9.6)	4本の突起。タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (5.0187/4)	長石、石英、赤色鉄
141 清15	陶生土器	高杯	(19.7)	14.4	17.0	4本の突起。タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (5.0187/4)	長石、石英、赤色鉄
142 清15	陶牛1器	鉢	(18.4)	—	—	タケノコ型ガラス	ナチュラル	青磁機 (10.98/2)	長石、石英、赤色鉄
143 清15	陶生土器	壺	(25.8)	—	—	口縁部に斜切端子。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (10.98/4)	長石、石英、赤色鉄
144 清15	陶牛1器	装飾高杯	37.7	22.1	22.6	山林地帶に斜切端子と3本の突起。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5187/3)	長石、石英、赤色鉄
145 清15	陶牛1器	装飾高杯	—	—	—	山林地帶に斜切端子と3本の突起。内側に凹部。腹部に横紋。	ナチュラル	青磁機 (7.5187/3)	長石、石英、赤色鉄

龍山田遺跡

規格番号	唐草名	種別	部屋	寸法 (cm)			特徴		色調	出土	備考
				口径	高さ	底脚厚	外寸	内寸			
146	横13	御生土器	高杯	-	-	(7.8)	脚部に円凹、斜削れなし。 タテヘラミガキ	ヨコヘラケヅリ	にじいろ(7.5H87/4)	長石、石英、角閃石	
147	横13	御生土器	高杯	-	-	(10.8)	脚部や底部に斜削れ。 タテヘラミガキ	ヨコヘラケヅリ	にじいろ 黒鉛(10H87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
148	感13	御生土器	高杯	-	-	(9.7)	脚部丸みなしともなく斜削 れ。 タテヘラミガキ	ヨコヘラケヅリ	にじいろ 黒鉛(10H87/2)	長石、石英、角閃石、雲母	
149	感13	御生土器	高杯	-	-	(12.1)	脚部部に圓窓孔。元脚部の 窓をあけたもの。	ナゾ	にじいろ 黒鉛(10H87/3)	長石、石英、角閃石	
150	感13	御生土器	高杯	-	-	(12.9)	脚部に圓窓孔と凹凸。 ハラミガキ	しばり目 ヨコマサ	にじいろ 黒鉛(7.5H87/4)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
151	感13	御生土器	高杯	-	-	11.7	脚部に4枚の羽目。 タテヘラミガキ	しばり目 ハラミガキ	にじいろ(7.5H87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
152	感13	御生土器	台付鉢	(18.7)	18.6	8.5	タケハケ	ケメリ後一派ハラミガキ	黒鉛(7.5H86/2)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
153	感13	御生土器	台付鉢	(15.7)	16.7	8.2	ハラミガキ	ナゾウ	にじいろ(7.5H87/3)	長石、石英、赤色、角閃	
154	感13	御生土器	台付鉢	-	-	7.5	ハラミガキ	ナゾ、ハラミガキ	にじいろ 黒鉛(7.5H87/3)	長石、石英、角閃石	円盤光澤
155	感13	御生土器	台付鉢	-	-	(17.6)	ハラミガキ	ニヨコラケヅリ、オサツ	10H87/4	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
156	感13	御生土器	台付鉢	10.1	7.6	3.2	ハラミガキ	ハラミガキ	12.5H84(7.5H87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
157	感14	御生土器	横置広口 壺	20.6	50.0	7.8	表面に横置広口付突起1 箇所。脚部に窓孔。内側に 斜削れ。底板丸みなし。 脚部に2箇の側窓。タ ケハク、ハラミガキ	二段鋸ロハラミガキ、 脚部アザ	にじいろ(7.5H85/4)	長石、石英、角閃石	
158	感15+16	宝生土器	壺	(16.8)	-	-	表面に3列の窓孔。脚部正面 に3列の窓孔。ナゾナダ	ナゾナダ、ヨコナダ	長石、石英、黑色、赤色 鉄		
159	感16+16	宝生土器	壺	-	-	-	ヨコナダ	灰岩(10H88/2)	長石、石英、白色、黑色 鉄		
160	感15+16	宝生土器	壺	-	-	(5.6)	タケミガキ、ナゾ	オサツ、ヨコナダ	にじいろ 黒鉛(7.5H87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
161	感16	宝生土器	壺	-	-	(2.4)	ナゾ	ナゾ	にじいろ 黒鉛(10H87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
162	感16	宝生土器	壺	-	-	4.6	ユビオナサ、ナゾ	タケハケ	灰岩(7.5H85/2)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
163	感17	宝生土器	高杯	-	-	(18.0)	脚部前面に斜削れ。 タケミガキ	ヨロハラカズ ナゾ	12.5H84(7.5H87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
164	たむ1	鬼火1	鬼火1	(7.0)	-	-	脚部前面に斜削れ。 タケミガキ	ヨロハラカズ ナゾ	にじいろ(7.5H88/4)	長石、石英、角閃石	
165	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	白口底なしに内側に1脚窓。 ヨロハラカズヨロハラ	ヨロハラカズヨロハラ	鬼火(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
166	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	白口底なしに内側に1脚窓。 ヨロハラカズヨロハラ	ヨロハラカズヨロハラ	鬼火(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
167	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	白口底なしに内側に1脚窓。 ヨロハラカズヨロハラ	ヨロハラカズヨロハラ	鬼火(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
168	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	白口底なしに内側に1脚窓。 ヨロハラカズヨロハラ	ヨロハラカズヨロハラ	鬼火(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
169	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	白口底なしに内側に1脚窓。 ヨロハラカズヨロハラ	ヨロハラカズヨロハラ	鬼火(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
170	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	白口底なしに内側に1脚窓。 ヨロハラカズヨロハラ	ヨロハラカズヨロハラ	鬼火(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
171	たむ1	鬼火1	鬼火1	(29.9)	-	-	表面無削れ。白口下口 ヨロハラ。上口ナダ	ナゾナダ、ヨロハラ	にじいろ 黒鉛(7.5H87/3)	長石、石英、赤鉄、黃鐵 鉄	
172	たむ1	鬼火1	鬼火1	(24.2)	-	-	表面無削れ。白口下口 ヨロハラ。上口ナダ	ナゾナダ	椎(10H87/6)	長石、石英、角閃石	
173	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	(8.7)	ナゾナダ、ナゾ	オサツ、タケナダ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
174	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	11.4	ナゾナダ、タケミガキ、オサツ、ナ ゾ	オサツ、ナゾ	にじいろ 黒鉛(10H88/3)	長石、石英、青銅	
175	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	6.4	ヨロハラ、ナゾナダ、ナゾナ ダ	ナゾ	にじいろ 黒鉛(7.5H87/3)	長石、石英、角閃石	
176	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	6.6	ナゾ	ナゾ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	微成後乳化
177	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	-	裏面に空氣泡の跡。	ナゾ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	微成後乳化
178	たむ1	鬼火1	鬼火1	-	-	(6.7)	横置前部にヨロハラ刻 込み。ナゾナダ	ナゾナダ	10H88/2	長石、石英、角閃石	
179	たむ2	御生土器	壺	(10.8)	-	-	脚部前面にヨロハラ刻 込み。横置前部にヨロハラ刻 込み。ナゾナダ	ナゾナダ	10H88/3	長石、石英、角閃石	
180	たむ2	御生土器	壺	(12.6)	-	-	脚部前面にヨロハラ刻 込み。横置前部にヨロハラ刻 込み。ナゾナダ	ナゾナダ	10H88/2	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
181	たむ2	御生土器	壺	-	-	-	脚部前面にヨロハラ刻 込み。横置前部にヨロハラ刻 込み。ナゾナダ	ナゾナダ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
182	たむ2	御生土器	壺	-	-	(6.2)	ハラミガキ	ナゾ	にじいろ 黒鉛(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
183	たむ2	御生土器	壺	-	-	6.8	ハラミガキ	ナゾ	にじいろ 黒鉛(10H88/3)	長石、石英、角閃石	
184	たむ2	御生土器	壺	(17.0)	-	-	白口底に2列、3箇窓孔の 内側斜削れ。タケハ	ナゾ	10H88/2	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
185	たむ2	鬼火1	鬼火1	(13.6)	-	-	タケハ	タケハ	10H88/3	長石、石英、角閃石	
186	たむ2	鬼火1	鬼火1	(14.4)	-	-	タケハ	タケハ	12.5H84(7.5H88/3)	長石、石英、角閃石	
187	たむ2	鬼火1	鬼火1	(25.8)	-	-	ナゾ	ヨコナダ	10H88/2	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
188	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	-	上半タケハ	タケナダ、ナゾナダ	9.5H86(10H88/2)	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
189	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	(7.7)	タケミガキ	ナゾナダ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
190	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	(7.8)	タケミガキ	ナゾ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	
191	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	7.4	ハラミガキ	ナゾ	10H88/2	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	微成後乳化
192	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	6.5	タケミガキ	ナゾ	10H88/1	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	微成後乳化
193	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	-	ヨロハラ	ヨロハラ	10H88/2	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	微成後乳化
194	たむ2	鬼火1	鬼火1	-	-	-	ヨロハラ	ヨロハラ	10H88/3	長石、石英、角閃石、赤色 鉄	微成後乳化

地番 番号	出土地名	種別	断面	古墳 (cm)			特徴	色調	胎土	備考	
				山径	基部	追跡径					
195	たわみ2	佐生土器	壇	—	—	—	タテハラミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	石英、長石	
196	たわみ2	佐生土器	井	(18.7)	—	—	横断面に丸く凹凸の鉋 突起、縦縫合に斜め付突 起、タテハラミヨコヒツミ ガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/3)	片石、石英、角閃石、雲母	
197	たわみ2	佐生土器	井	(12.0)	—	—	上半ヨコ下タテハラミガ キ	ヨコハラミガキ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石	
198	たわみ2	佐生土器	井	—	—	—	タテハラミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
199	たわみ2	佐生土器	井	—	(10.1)	—	上下2段に疣状、弧形的 の凸起し、ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/3)	長石、石英、角閃石、雲母	
200	たわみ2	佐生土器	台付井	—	—	(11.1)	タテハラ	ヨコナギ?	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
201	たわみ2	佐生土器	広口壺	(22.6)	—	—	口縁部に弧形的の疣状突 起3箇所の凹部、通じた円 柱状の縫合	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石、雲母、 赤色斑点	
202	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	木葉文、ナゲ	ナゲワミガキ?	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石	
203	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	横断面に圓筒状の大き さ、ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英	
204	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	凹凸の横縫合、縫合部の 凹部に斜め堆積、ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/3)	長石、石英、角閃石	
205	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	縫合部に横縫合に3箇所の ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
206	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	横縫合に斜め堆積4箇所、 ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
207	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	横縫合に斜め堆積4箇所、 ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
208	斜面堆積1	佐生土器	壺	6.7	—	—	ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
209	斜面堆積1	佐生土器	広口壺	(11.4)	—	—	口縁部に円溝、側面にヘ リコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石	
210	斜面堆積1	佐生土器	広口壺	(16.2)	—	—	側面に突出部、ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
211	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
212	斜面堆積1	佐生土器	広口壺	—	—	—	ナゲとヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
213	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	横縫合と側面のナゲと持 續する縫合部のナゲと持 續する縫合部のナゲと持 續する縫合部のナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
214	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	側面に凹凸の直角突起、 ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
215	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	(10.3)	ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石	
216	斜面堆積1	佐生土器	壺	(6.0)	—	—	ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石	
217	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	(10.2)	—	ナメハシミガキ	ナメハシミガキ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英	
218	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	40.3	ヨコヒツミガキ	ヨコヒツミガキ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
219	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	(19.3)	ヘラミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
220	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	(11.6)	ヨコヒツミガキ	ヨコヒツミガキ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石	
221	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	ナメハシミガキ	ナメハシミガキ	灰黒褐色 (7, SYR/3)	長石、石英、角閃石	全体に黒い 層
222	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	口縁部はヨコヒツミガキ ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石	
223	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/3)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
224	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	口縁部に斜め縫合、ナゲと タテハラ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石	
225	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	側面に凹凸の直角突起、 ヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
226	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	口縁部はヨコヒツミガキ、 ナメハシミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/3)	長石、石英、角閃石	
227	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	口縁部はヨコヒツミガキ、 ナメハシミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石	
228	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	ナゲとヨコヒツミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石	
229	斜面堆積1	佐生土器	壺	(21.1)	—	—	側面に直角突起と前後部を 分けるナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/3)	長石、石英、角閃石	
230	斜面堆積1	佐生土器	壺	(21.6)	—	—	側面に直角突起と前後部を 分けるナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/3)	長石、石英、角閃石	
231	斜面堆積1	佐生土器	壺	(29.4)	—	—	直角突起と前後部を以 て分けるナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
232	斜面堆積1	佐生土器	壺	(21.6)	—	—	直角突起と前後部を以 て分けるナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	
233	斜面堆積1	佐生土器	壺	(21.6)	—	—	多条の横縫合と直角突起、 ナメハシミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石、赤色 斑点	赤帯付青
234	斜面堆積1	佐生土器	壺	21.4	—	—	多条の横縫合と直角突起、 ナメハシミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石	
235	斜面堆積1	佐生土器	広口壺	(22.6)	—	—	ナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石	
236	斜面堆積1	佐生土器	広口壺	—	—	—	タテハラ	ナゲ	灰黒褐色 (7, SYR/2)	長石、石英、角閃石	
237	斜面堆積1	佐生土器	壺	—	—	—	直角突起と前後部を以 て分けるナゲ	ヨコヒツミガキ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石	
238	斜面堆積1	佐生土器	壺	(5.5)	—	—	横縫合と直角突起とナメハシ ミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/2)	長石、石英、角閃石	
239	斜面堆積1	佐生土器	壺	(6.9)	—	—	直角突起と前後部を以 て分けるナゲ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/4)	長石、石英、角閃石	
240	斜面堆積1	佐生土器	壺	(6.6)	—	—	横縫合と直角突起とナメハシ ミガキ	ナゲ	灰黒褐色 (1070R/4)	長石、石英、角閃石	
241	斜面堆積1	佐生土器	黑縞壺	(6.6)	—	—	タテハラミガキ	タテハラミガキ	灰黒褐色 (7, SYR/4)	長石、石英、角閃石	

熊山田遺跡

地名 番号	通称名	種別	特徴	内面		色調	加土	備考				
				口径	断面							
242	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	10.0	34.6	7.7	面部に複数の舟形の付着物 等、前縁に鋸歯状の切頭 等が見られ、その断面は 丸く、底面は内側に傾いて いたりハコバ、下部タマラ 等がある。	口縁部ヨコナダ ナダ	にじむ・黄緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
243	鉄面堆積	生土器	広口壺	17.3	-	-	口上部周囲に溝状の凹凸 等が見られ、外型に舟形の 付着物が残る。ナ	ナダ	にじむ・黄緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
244	鉄面堆積	生土器	広口壺	16.5	-	-	口部周囲に舟形の付着物 等が見られる。小皿状	コヨナダ	褐色(10M87/1)	長石、石英、角閃石		
245	鉄面堆積	生土器	広口壺	15.2	-	-	底面に舟形の付着物3条。 ナヨナダ	コ縁部ヨコハカ、脚筋ナ ナ	にじむ・黄緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
246	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	17.7	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。上部に舟形 の付着物と並んで、タマラ 等がある。	ナダ	褐色(10M87/1)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
247	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	16.9	-	-	底面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ナダ、タテハケ	にじむ・黒(7.3B87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
248	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	14.0	-	-	底面周囲に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ナダ	淡黃緑(10B87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
249	鉄面堆積	生土器	無頭壺	-	-	-	底面周囲に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ヨコナダ	灰黃緑(10B87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
250	鉄面堆積	生土器	無頭壺	14.4	-	-	底面周囲に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タテハケ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
251	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	12.4	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ヨコナダ・タマラ 等	灰白(2.5B87/2)	長石、石英、角閃石		
252	鉄面堆積	生土器	壺	-	7.8	-	上部ヨコ、下部タマラ等 等	タテハケ	にじむ・黒(7.3B87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
253	鉄面堆積	生土器	壺	-	9.7	-	上部ヨコ、下部タマラ等 等	タテハケ	にじむ・黄緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
254	鉄面堆積	生土器	壺	-	8.0	-	ナヨナダ	タマラ	淡黃緑(10B87/2)	長石、石英、角閃石		
255	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	10.0	23.4	10.9	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タテハケ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
256	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	12.3	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
257	鉄面堆積	生土器	壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ・ヨコナダ等	ナダ、ハケメ	灰白(2.5B87/2)	長石、石英	
258	鉄面堆積	生土器	壺	-	7.8	-	上部ヨコ、下部タマラ等 等	タテハケ	にじむ・黒(7.3B87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
259	鉄面堆積	生土器	壺	-	9.7	-	上部ヨコ、下部タマラ等 等	タテハケ	にじむ・黄緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
260	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	-	8.0	-	ナヨナダ	タマラ	淡黃緑(10B87/2)	長石、石英、角閃石		
261	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	10.9	23.4	10.9	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タテハケ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
262	鉄面堆積	生土器	壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
263	鉄面堆積	生土器	壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
264	鉄面堆積	生土器	壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
265	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
266	鉄面堆積	生土器	壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
267	鉄面堆積	生土器	広口壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	灰黃緑(10B87/2)	長石、石英、角閃石		
268	鉄面堆積	生土器	広口壺	10.0	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	褐色(3.0B87/1)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
269	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	11.2	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
270	鉄面堆積	生土器	壺	-	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
271	鉄面堆積	生土器	広口壺	10.9	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	にじむ・青緑 (10B87/2)	長石、石英、角閃石		
272	鉄面堆積	生土器	切頭広口 壺	11.0	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	タマラ	褐色(3.0B87/1)	長石、石英、角閃石		
273	鉄面堆積	生土器	壺	15.9	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ナダ	灰黃緑(2.5B87/2)	長石、石英、角閃石		
274	鉄面堆積	生土器	壺	16.2	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ナダ	にじむ・青緑 (10B87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
275	鉄面堆積	生土器	壺	17.5	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ナダ	にじむ・黒(7.3B87/3)	長石、石英、角閃石		
276	鉄面堆積	生土器	壺	17.6	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ナダ	にじむ・青緑 (10B87/3)	長石、石英、角閃石、赤色 粒		
277	鉄面堆積	生土器	壺	18.2	-	-	断面に舟形の付着物 等が見られる。ナ	ヨコナダ	灰白(2.5B87/2)	長石、石英、角閃石		

発掘番号	遺物名	種別	器種	測量 (cm)			特徴		色調	胎土	備考			
				口径	高さ	底径	外面							
							前面	背面						
278 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(37.4)	-	-	-	前面に横縫目(突起)有 る。ナメ、タケナミガキ	ナメ	淡黄褐色(10YR8/3)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
279 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(34.0)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	青褐色(10YR8/3)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
280 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(33.5)	-	-	-	ヘラニガキ、ナメ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(7.5YR7/3)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
281 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	頭端に「枝」其の背腹面端に による突起、上部に「第1 腰位」の内縫目有。ヨコハ ケ、ヨコハシヨコハケ	ナメハケ	灰褐色(10YR7/4)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
282 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.0)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ	灰褐色(7.5YR7/2)	灰石、石英、角閃石				
283 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.7)	-	-	-	「縫詰タコナメ」、騎馬 ナメハケ	「縫詰タコナメ」、騎馬 ナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石				
284 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.3)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ	灰褐色(7.5YR4/1)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
285 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(16.0)	-	-	-	ナメハケ、ヨコハシヨコハ ケ、ヨコハシヨコハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
286 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(14.8)	-	-	-	ナメハケ、ヨコハシヨコハ ケ、ヨコハシヨコハケ	ナメハケ、ヨビオチテ ヨコハシヨコハケ	灰褐色(7.5YR7/3)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
287 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.7)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(7.5YR6/1)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
288 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(16.5)	-	-	-	ナメハケ、ヨコハシヨコハ ケ、ヨコハシヨコハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(7.5YR6/1)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
289 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(16.6)	-	-	-	「縫詰」による内縫目有。 ナメハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
290 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(17.1)	-	-	-	頭端部に斜方内縫目、 ヨコハシヨコハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石				
291 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハケ、ヨコハシヨコハ ケ、ヨコハシヨコハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(7.5YR7/4)	灰石、石英、角閃石				
292 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	騎馬式、半円形の内縫目 有。	ナメハケ	灰褐色(7.5YR7/3)	灰石、石英、角閃石				
293 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	「縫詰タコナメ」、騎馬 ナメハケ	「縫詰タコナメ」、騎馬 ナメハケ	灰褐色(7.5YR7/2)	灰石、石英、角閃石				
294 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.2)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
295 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(17.2)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ	灰褐色(10YR7/4)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
296 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(16.2)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(7.5YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
297 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(17.4)	33.5	7.4	-	ナメハシヨコハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(7.5YR7/4)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
298 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.4)	-	-	-	ナメハケ、ヨコハシヨコハ ケ	ナメハケ後ヨコニガキ	灰褐色(7.5YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
299 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(15.8)	(20.7)	(6.1)	-	ナメハシヨコハケ	ナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
300 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(17.1)	39.4	9.1	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
301 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	6.0	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
302 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
303 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
304 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
305 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
306 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
307 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
308 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
309 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
310 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
311 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
312 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
313 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(16.2)	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
314 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(19.2)	-	-	-	頭端に横縫目有。	ナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
315 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(17.6)	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
316 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.6)	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
317 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.6)	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
318 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(19.6)	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
319 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(19.6)	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
320 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.1)	30.9	5.8	-	頭端に横縫目有。	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
321 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
322 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
323 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
324 鉄面堆積1	陶生土器	甕	-	-	-	-	ナメハシヨコハケ	ナメハシヨコハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
325 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.0)	-	-	-	ナメハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
326 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.5)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
327 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.4)	-	-	-	ナメハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
328 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.8)	-	-	-	ナメハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
329 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.2)	-	-	-	ナメハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
330 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(18.2)	-	-	-	ナメハケ	ヨコナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				
331 鉄面堆積1	陶生土器	甕	(21.3)	-	-	-	ナメハケ	ナメハケ	灰褐色(10YR7/2)	灰石、石英、角閃石、赤色 鉄				

熊山田遺跡

透物觀察表

編號 番号	遺傳名	類別	器種	剖面 (cm)			特徵	色調	船上	備考	
				山後	赤浜	北岸壁					
166 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	-	-	口唇部に刷毛、ハラビロ4条 ナメハケ	奶油黃(7.5WBT/5)	黃石、石英、角閃石		
166 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	-	-	口唇部刷毛、ヘラビロ4条の 間にヘラ状工具による削痕 あり。	奶油黃(7.5WBT/5)	黃石、石英、角閃石		
167 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	-	-	輪郭に把手状突起。ナ メハケ	にぶい桿(7.5WBT/5)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
168 包含層 包含層	海生土器	便	(18.1)	20.8	6.8	-	口唇部刷毛、輪郭突起。ヘ ラビロ4条、タバハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
169 包含層 包含層	海生土器	便	-	17.7	18.4	(6.3)	輪郭に把手状突起、ナ メハケ	にぶい桿(7.5WBT/4)	黃石、石英、角閃石		
170 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	(4.3)	-	ハラビロ4条 ナメハケ	灰黑(7.5WBT/2)	灰石、石英、角閃石	透物燒成後 變孔	
191 包含層 包含層	海生土器	長颈瓶	-	-	-	-	輪郭に把手状突起。 タバハケヘラビロ4条	灰黑(7.5WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
192 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	(5.2)	-	タバハケ、ヨコナメハケ4条 ナメハケ	鐵黃(10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑	變孔後 變孔	
193 包含層 包含層	海生土器	広口壺	-	-	(6.7)	-	頭部輪郭に把手状突起。 ハラビロ4条、タバハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
194 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(9.9)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起。 タバハケ	にぶい桿(7.5WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
166 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(12.5)	-	-	-	輪郭に把手状突起。 ハラビロ4条、ヨコナメハケ 等位の把手状突起。ヨコナ メハケ	灰白(2.6WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
166 包含層 包含層	海生土器	正口壺	(13.7)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起。 ナメハケ、ヨコナメハケ4条 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
197 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(17.6)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起。 ナメハケ	灰白(2.6WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
198 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(26.5)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起。 ナメハケ	灰白(2.6WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
199 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(18.2)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起。 ナメハケ	にぶい桿(7.5WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
400 包含層 包含層	海生土器	短頸広口	(16.2)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起3条。 タ ハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
401 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(14.7)	-	-	-	口縁部に把手状突起4条。 ナメハケ、ヨコナメハケ4条 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
402 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(14.6)	-	-	-	口縁部に把手状突起4条。 ナメハケ	にぶい桿(7.5WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
403 包含層 包含層	海生土器	切原広口壺	(16.6)	-	-	-	口縁部に把手状突起4条。 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
104 包含層 包含層	海生土器	広口壺	-	-	-	-	解剖部に把手状突起4条。 ナメハケ	灰黃鐵(10WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
405 包含層 包含層	海生土器	盤	-	-	-	-	ナメハケ真に把手状突起。 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
406 包含層 包含層	海生土器	短頸広口壺	(31.6)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起3条。 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
407 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(16.2)	-	-	-	頭部輪郭に把手状突起2 条。ヨコナメハケ	灰(10WBT/6)	黃石、石英、角閃石		
408 包含層 包含層	海生土器	盤	(17.4)	-	-	-	口縁部に把手状突起4条。 ナメハケ	明鐵(7.5WBT/2)	貝殻、石英、角閃石		
409 包含層 包含層	海生土器	便	(17.3)	-	-	-	新方舟の例。ナメハケ 等位の把手状突起2条。タ ハケ	にぶい桿(10WBT/4)	黃石、石英、角閃石		
410 包含層 包含層	海生土器	短頸広口壺	(19.0)	-	-	-	口縫部に把手状突起2条。 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
411 包含層 包含層	海生土器	広口壺	(16.0)	-	-	-	輪郭に把手状突起3条。 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
412 包含層 包含層	海生土器	切原	(7.0)	-	-	-	タバハケ4条	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石		
413 包含層 包含層	海生土器	短頸広口壺	(11.0)	-	-	-	タ ハケ	にぶい桿(7.5WBT/4)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
414 包含層 包含層	海生土器	長颈瓶	(12.0)	-	-	-	口縫部に把手状突起。 輪郭に把手状突起2条。 ナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	黃石、石英、角閃石、赤色 斑		
415 包含層 包含層	海生土器	短頸広口壺	(12.5)	28.8	(7.0)	-	口縫部に把手状突起2条。 ナメハケ	灰鈍火灰(7.5WBT/4)	貝殻、石英、角閃石、赤色 斑		
416 包含層 包含層	海生土器	便	(20.0)	-	-	-	タバハケ	タバハケ後ヨコナメハケ 等位	灰鈍火灰(7.5WBT/4)	貝殻、石英、角閃石	
417 四合層 包含層	海生土器	便	(20.2)	-	-	-	タバハケ	タバハケ後ヨコナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	貝殻、石英、角閃石	
418 包含層 包含層	海生土器	便	(12.1)	-	-	-	タバハケ後一品タバハケ 等位	ヨコナメハケ、タバハ ケ	にぶい桿(7.5WBT/5)	貝殻、石英、角閃石	
419 包含層 包含層	海生土器	便	(13.0)	-	-	-	頭部に把手状突起。 タバハケ	ヨコナメハケ	にぶい桿(7.5WBT/4)	貝殻、石英、角閃石	
420 包含層 包含層	海生土器	便	(17.6)	-	-	-	タバハケヨコナメハケ	ヨコナメハケ	にぶい桿(7.5WBT/3)	貝殻、石英、角閃石	
421 包含層 包含層	海生土器	便	18.1	-	-	-	頭部に二つ拉枝真による 把手状突起。ナメハケ等位 の把手状突起3条。	ヨコナメハケ	にぶい黃鐵 (10WBT/2)	貝殻、石英、角閃石、赤色 斑	
422 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	6.9	-	頭部に二つ拉枝真による 把手状突起。ナメハケ、ド半 タバハケ等位	ヨコナメハケ	にぶい桿(7.5WBT/3)	貝殻、石英、角閃石、赤色 斑	透物燒成後 變孔
423 包含層 包含層	海生土器	便	-	-	3.4	-	頭部に二つ拉枝真による 把手状突起。ナメハケ、ド半 タバハケ等位	ヘリミガキ	灰黃鐵(10WBT/2)	貝殻、石英、角閃石	全体に羅村 青
424 包含層 包含層	海生土器	便	(19.0)	-	-	-	口縫部刷毛。輪郭にハケ状 工具による削痕。	ヨコナメハケ	灰黃鐵(7.5WBT/2)	貝殻、石英、角閃石、赤色 斑	
425 包含層 包含層	海生土器	便	(17.0)	-	-	-	口縫部刷毛。輪郭にハケ状 工具による削痕。	ヨコナメハケ	灰黃鐵(10WBT/2)	貝殻、石英、角閃石、赤色 斑	

熊山田遺跡

地名 地番	遺跡名	種別	面積	遺物 (cm)		特徴	色調	施主	備考	
				口径	溝深	追跡径	分類	内面		
426	包含層	住牛 I 段 墓	(18.4)	—	—	口唇部附目、タテハケ	タテハケ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
427	包含層	住牛 I 段 墓	(24.3)	—	—	口唇部附目、タテハケ	タテハケ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
428	包含層	住牛 I 段 墓	(26.6)	—	—	ヨコナデ、ハケメ	タテハケ	灰黒(10987.1)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
429	包含層	住牛 I 段 墓	(30.0)	—	—	ヨコナデ	ナダ	薄緑(10987.3)	鳥石、石英、角閃石、雲母、 長石、白石、角閃石、赤色	
430	包含層	住牛 I 段 墓	(32.6)	—	—	ナナメヘケ	ヨコハケ後コハーミガ ホ	桃紅(10987.1)	長石、石英、角閃石、赤色	
431	包含層	住牛 I 段 墓	(31.6)	—	—	口縁部に3個の竪突起。タ テハケ	タテハケ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
432	包含層	住牛 I 段 墓	(18.7)	—	—	口縁部に3個の竪突起。裏面に利尻 火、タテハケ	ヨコハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
433	包含層	住牛 I 段 墓	(14.7)	—	—	ヨコナデ	ヨコハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
434	包含層	住牛 I 段 墓	(14.7)	—	—	タテハケ	ハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
435	包含層	住牛 I 段 墓	(16.3)	—	—	タテハケ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
436	包含層	住牛 I 段 墓	(19.3)	—	—	タテハケ	ヨコホラケタズリ	桃紅(10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
437	包含層	住牛 I 段 墓	(19.4)	—	—	ヨコナデ、ミガキリ	ナダ、タズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
438	包含層	住牛 I 段 墓	(15.2)	—	—	タテハケ	ヨコハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
439	包含層	住牛 I 段 墓	(16.3)	—	—	ヨコナデ、タテハケナ	ハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
440	包含層	住牛 I 段 墓	(24.5)	—	—	タテハケ、タテハラミガキ、ヨコホラケタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
441	包含層	住牛 I 段 墓	(25.8)	—	—	ヨコナデ	ヨコホラケタズリ	桃紅(10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
442	包含層	住牛 I 段 墓	(31.2)	—	—	ヨコナデ	ヨコホラケタズリ	桃紅(10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
443	包含層	住牛 I 段 墓	(34.0)	—	—	—	—	に近い 黄褐色	鳥石、石英、角閃石	
444	包含層	住牛 I 段 墓	(34.0)	—	—	ヨコナデ、タテハケナ	ハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
445	包含層	住牛 I 段 墓	(34.0)	—	—	タテハケ、タテハラミガキ、ヨコホラケタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
446	包含層	住牛 I 段 墓	(11.9)	—	—	ヨコナデ、タテハラミガキ、ヨコホラケタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
447	包含層	住牛 I 段 墓	(9.9)	—	—	タテハケ後タテハラミガキ 合掌部分にナダ	タテハケ後わすれにミガキ シテ、細縫合タズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、雲母、 金剛石	
448	包含層	住牛 I 段 墓	(12.6)	—	—	ヨコナデ、タテハラミガキ シテ、細縫合タズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
449	包含層	住牛 I 段 墓	(12.5)	—	—	ヨコナデ、タテハラミガキ シテ、細縫合タズリ	ナダ	灰黒(10987.1)	鳥石、石英、 門先塗	
450	包含層	住牛 I 段 台付跡	12.5	16.1	(8.6)	—	ヨコナデ、タテハラミガキ シテ、細縫合タズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.1)	鳥石、石英、角閃石、赤色
451	包含層	住牛 I 段 台付跡	12.5	7.6	8.9	—	ヨコナデ、タテハラミガキ シテ、細縫合タズリ	ナダ、ミガキ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石
452	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	11.2	—	ヨコナデ、タテハラミガキ シテ、細縫合タズリ	ナダ	灰黒(10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色
453	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	6.5	—	ヨコナデ、タテハラミガキ シテ、細縫合タズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色
454	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	(8.6)	—	ヘラタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石
455	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	(11.1)	—	タテハラミガキ	ヨコナデ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石
456	包含層	住牛 I 段 台付跡	7.5	6.1	3.0	—	ナダ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色
457	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	(4.6)	—	タテハラケタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色
458	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	(5.3)	—	タテハラケタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石
459	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	4.8	—	タテハラケタズリ	ナダ	男爵(1.5, 8.97)	鳥石、石英、角閃石
460	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	3.9	—	ヘラタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (1.5, 8.97)	鳥石、石英、角閃石
461	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	4.1	—	タテハラケタズリ	ナダ	灰白(1.7, 8.97)	鳥石、石英、角閃石、赤色
462	包含層	住牛 I 段 台付跡	—	—	(4.1)	—	ヘラタズリ	ナダ	に近い 黄褐色 (1.7, 8.97)	鳥石、石英、角閃石
463	土壤0	土師器 墓	(12.4)	—	—	口縁部後端斜め。タテハケ 後2段タテハラミガキ	ハラケタズリ	に近い 黄褐色 (10987.2)	鳥石、石英、角閃石	
464	壁列状遺構	住牛 I 段 台付跡	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	長石、黑色粒	
465	丸石	土師器 墓	(14.3)	—	—	タテハケ	ナナメヘケタズリ	灰白色	鳥石、石英、角閃石	
466	丸石	住牛 I 段 台付跡	—	—	—	横目付	ヨコナデ	灰白色	鳥石、石英、角閃石	
467	丸石	住牛 I 段 台付跡	—	—	—	カタスモセカタメ	ヨコナデ	灰白色	鳥石、石英、角閃石	
468	包含層	土師器 墓	—	—	—	全体に紺刷。ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	鳥石、石英、角閃石、赤色	
469	包含層	土師器 墓	—	—	—	竹管文。ナダ	ナダ	灰(0.5)	長石、石英、角閃石	
470	包含層	土師器 墓	—	—	—	竹管文に粒状の砂粒。	ナダ	灰(0.6)	長石、石英、角閃石	
471	井戸2	青磁 壺	—	—	—	ヨコナデ。施繪あり	ヨコナデ、ヨコナデ	灰褐色	施繪(淡褐色)	
472	井戸2	青磁 痘	—	—	—	ヨコナデ。シヌメ下平縫	ヨコナデ、施繪あり	施繪(淡褐色)	施繪(淡褐色)	
473	井戸2	青磁 頭	—	—	—	ヨコナデ。施繪あり	ヨコナデ	施繪(淡褐色)	施繪(淡褐色)	
474	井戸2	土師質土器 小皿	(5.5)	1.1	(4.6)	ナダ?底削へり切り?	ナダ?	灰褐色(10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
475	井戸2	土師質土器 小皿	6.4	1.2	4.9	ヨコナデ。施繪あり	ヨコナデ、ナダ	灰褐色(10987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
476	井戸2	土師質土器 小皿	10.6	2.1	9.8	ヨコナデ、底部切切り?	ヨコナデ、ナダ	に近い 黄褐色 (5.7, 5.97)	鳥石、石英、角閃石	
477	井戸2	土師質 小皿	—	—	—	ヨコナデ。タテハケ	ヨコハケ	灰(1.0987.2)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
478	井戸2	灰質 土器	—	—	—	ナダ?	ナダ	灰(5.7)	施繪(淡褐色)	
479	井戸2	灰質 土器	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(5.7)	鳥石、石英、角閃石、赤色	
480	井戸2	青磁 壺	29.6	—	—	ヨコナデ、ナダ	ヨコナデ、ナダ	灰(5.7)	鳥石、石英	

番号	遺物名	種別	部類	計量(cm)			特徴	色調	地主	備考	
				山桂	脚	底脚					
481	井戸3	白磁	碗	—	—	—	口縁厚。ヨコナデ	ヨコナデ	青白、石英	買入あり	
482	井戸3	白磁	瓶	—	—	—	支柱。ヨコナデ	文様。ヨコナデ	オリーブ灰(195/7)	買入あり	
483	井戸3	青磁	皿	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	青白、石英	買入あり	
484	井戸3	青磁	皿	(9.4)	2.3	(4.1)	足跡に凹み。ヨコナデ	ヨコナデ	青白、石英	買入あり	
485	井戸4	青磁	碗	—	—	(5.3)	見込みと外因の縫合。ヨコナデ	ヨコナデ	青白、石英	買入あり	
486	井戸4	灰質土器	家形土製品	29.6	29.5	31.3	手取状の縫合で、口に 横厚状のヒレ状の縫合付 け。脚・脚部・口の方の状態 のもので駆除されている。 内因は横厚状のヨコナデ。黄晶 ヨコナデ	ヨコハケ	灰(195/1)	長石、ホウ、角閃石	堅板部2/3 保存 近断面T形 等
487	井戸5	黄磁	皿	16.5	7.5	6.3	ヨコナデ。光沢のある釉裏 仕上げ。済合、割離焼付 り。削り出し。白石	ヨコナデ、釉裏あり。灰 煙あり	灰黄(2. 017/2)	建物部、 ほぼ瓦片	
488	井戸6	白磁	碗	(15.7)	—	—	口縁部は五瓣形。ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 017/3)	青白、石英	
489	井戸5	青磁	瓶	(14.4)	4.0	(0.5)	底部には底板があり。ヨコナ デ。表面は軽微な凹み。	ヨコナデ	灰白(2. 018/1)	青白、石英	
490	井戸5	青磁	碗	(14.2)	4.2	7.6	ヨコナデ。内因は底板の 凹み。外因は底板焼きあり	ヨコナデ	灰(2. 017/1)	長石、青斑、藍色鉄	
491	井戸5	青磁	碗	(13.8)	4.0	2.0	表面は軽微な凹み。ヨコナ デ。表面は軽微な凹み。	ヨコナデ	灰(2. 018/2)	長石、石英	
492	井戸5	青磁	碗	(13.7)	—	—	ヨコナデ。裏面は底板燒 きあり	ヨコナデ	灰白(2. 018/1)	長石、石英	
493	井戸5	青磁	碗	(12.7)	—	—	ナデ	ナデ	灰(2. 017/4)	長石、石英	
494	井戸5	青磁	碗	—	—	5.5	底部には底板焼切り。ナデ あり。内因は底板焼付	ヨコナデ、重ね焼き痕	灰(2. 018/2)	長石、石英、赤鉄鉱	
495	井戸5	青磁	碗	—	—	(6.7)	底部には底板焼付。ヨコナ デ。内因は底板焼付	ヨコナデ	灰(2. 018/3)	長石、石英	
496	井戸5	青磁	碗	—	—	(6.0)	底部には底板焼付。ヨコナ デ	ヨコナデ	灰黄(2. 017/2)	長石、石英	
497	井戸5	青磁	小皿	(8.8)	—	—	ナデ	ナデ	灰(2. 017/1)	長石、石英	
498	井戸5	青磁	小皿	8.1	1.2	5.6	底部には底板焼付。ナデ	ナデ	灰(2. 017/1)	長石、石英、赤鉄鉱	
499	井戸5	青磁	小皿	(9.6)	2.2	(0.2)	底部には底板焼付。ヨコナ デ	ヨコナデ	灰(2. 018/2)	長石、石英	
500	井戸5	五瓣	碗	—	—	(4.6)	ナリ付付高台	ヨコナデ、ヘラ、斜面	灰(195/1)	長石	
501	井戸5	五瓣	碗	—	—	(4.6)	ナリ付付高台	ヨコナデ、ヘラ、斜面	青白(195/1)	長石、青白、白色鉄	
502	井戸5	青磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	灰(195/1)	長石、石英、白色鉄	
503	井戸5	青磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(195/1)	長石、青白、白色鉄	
504	井戸5	青磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(195/1)	長石、石英、白色鉄	
505	井戸5	青磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(195/1)	長石、石英、白色鉄	
506	井戸5	青磁	碗	(13.0)	—	—	ナデ	ナデ	灰(195/2)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
507	井戸5	青磁	碗	12.8	4.3	9.5	断面は三角形の高台。ナデ	ナデ	灰(195/1)	青白(195/1)	
508	井戸5	青磁	碗	12.8	3.8	9.8	ヨコナデ、ナデ。底面あり	ヨコナデ、ナデ、ナデ	灰(195/1)	長石、石英、白色鉄	
509	井戸5	青磁	碗	(13.6)	3.7	9.6	断面は三角形の高台。ナデ	ナデ	灰(2. 018/2)	長石、石英、白色鉄	
510	井戸5	青磁	小皿	(8.5)	1.6	5.4	ナデ	ナデ	灰(2. 018/2)	長石、石英、白色鉄	
511	井戸5	青磁	小皿	(9.3)	1.1	(0.4)	外底はハラドリ	ヨコナデ	灰(195/2)	長石、石英、白色鉄	
512	井戸5	青磁	小皿	(8.7)	—	(0.1)	ナデ	ナデ	灰(195/2)	長石、石英	
513	井戸5	青磁	小皿	(9.5)	1.1	(0.7)	ナデ	ナデ	灰(195/2)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
514	井戸5	青磁	小皿	—	—	(6.3)	底部は底板焼付。ナデ	ナデ	灰(195/2)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
515	井戸5	青磁	小皿	—	—	—	ヨコナデタハケ	ヨコナデ	灰(195/2)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
516	井戸5	青磁	小皿	(9.0)	—	—	タハク、ヨコナデ	ヨコナデ	灰(195/2)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
517	井戸5	青磁	小皿	(34.5)	—	—	タハク	ヨコナデ	灰(2. 018/2)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
518	井戸5	瓦質土器	土鍋	—	—	—	ナデ	ナデ	灰(2. 018/1)	長石、石英、角閃石、赤鉄 鉱	
519	井戸5	瓦質土器	土鍋	(16.9)	—	—	断面分岐下に3本の脚。ナ デ	ヨコナデ	灰(195/1)	長石、石英、角閃石	
520	包合層	白磁	碗	—	—	—	口縁が丸味。ヨコナデ	ヨコナデ	灰(195/2)	長石、角閃石(2/1)	
521	包合層	白磁	碗	—	—	—	口縁が丸味。ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 018/2)	長石、石英	
522	包合層	白磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 018/1)	長石、石英、角閃石	
523	包合層	白磁	碗	—	—	—	削り出し高台。ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 018/1)	長石、石英	
524	包合層	白磁	碗	(9.9)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 018/1)	長石、石英	
525	包合層	白磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 018/1)	長石、石英	
526	包合層	白磁	碗	(10.1)	2.4	(2.9)	底部を段付施釉。ヨコナデ	ヨコナデ	灰(2. 017/1)	長石、石英	
527	包合層	青磁	碗	—	—	—	薙縁。ヨコナデ	ヨコナデ	青白(195/2)	買入あり	
528	包合層	青磁	碗	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	青白(195/1)	青白(195/1)	
529	包合層	青磁	碗	—	—	4.1	削り出し高台。ヨコナデ	ヨコナデ	青白(2. 017/1)	青白(2. 017/1)	
530	包合層	青磁	碗	—	—	6.2	削り出し高台。内因の施釉。ヨ コナデ、ケズリ	ヨコナデ	青白(2. 017/1)	青白(2. 017/1)	

第9表 土製品觀察表

番号	器種	出土遺構名	計測最大値(cm)			重さ(g)	時期・時代	備考
			長さ	幅	厚さ			
C 1	人形土製品	上層 1	42.5	40.0	32.0	45.0	弥生時代・前期後葉	殊の外陶のみ。目・鼻・耳を立体的に表現。某穴、目・鼻穴、口をハサツ工具で削りて表現。
C 2	刀劍	土壤 1	43.9	43.6	5.0	11.4	弥生時代・前期	ハサツ化粧の複数使用
C 3	土笛	土壤 8	6.0	16.0	9.0	6.3	弥生時代	小孔有り。縦吹き笛
C 4	刀劍	たかみ 2	43.0	44.0	5.0	12.0	弥生時代	土笛
C 5	人形土製品	土壤 1	35.0	35.0	9.0	12.5	弥生時代・中期	頭部のみ削り残す。頭・目・口を削りて表現
C 6	人形土製品	土壤 1	36.6	36.7	31.7	30.5	弥生時代・中期	ハサツ化粧の土笛片使用。中心に削り抜いて
C 7	臼杵	臼合板	36.0	35.0	9.0	11.5	弥生時代	ハサツ化粧の土笛片使用。中心に削り抜いて
C 8	分離式土製品	石合板	59.0	77.0	11.0	65.3	弥生時代	ハサツ化粧を付けて使用
C 9	土笛	石合板	59.0	77.0	12.0	53.1	弥生時代	中心部に削り抜き。丸径 27.0cm

第10表 石器観察表

番号	出土遺構名	器種	計測最大値(cm)			重さ(g)	石材	時期・時代	現存	備考
			長さ	幅	厚さ					
S 1	土壤 1	磨製石刀	45	31	8	16.4	青石質	弥生時代	欠	
S 2	土壤 2	石鎌	30	17	8	2.0	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 3	土壤 2	石鎌	48	13	3	2.1	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 4	土壤 2	石棒	59	32	19	56.6	青石質	弥生時代	欠	
S 5	土壤 12	微状石斧	109	67	20	16.7	青石質	弥生時代	久	頭に研磨片
S 6	土壤 12	石斧	20	16	5	1.1	ナメカイト	弥生時代	欠	有茎石器欠損
S 7	J・土器 14	双耳石釜	76	27	14	15.8	紫斑晶片岩	弥生時代	欠	
S 8	J・土器 14	大鉢形石皿	139	62	41	600.0	紫斑晶片岩	弥生時代	欠	
S 9	J・土器 14	石盤	24	19	5	1.7	ナメカイト	弥生時代	欠	当社欠損
S 10	J・土器 17	スクレーパー	—	—	—	—	ナメカイト	弥生時代	欠	当社欠損
S 11	J・土器 18	石盤	26	17	4	2.0	ナメカイト	弥生時代	欠	有茎石器
S 12	土壤 2	石盤	26	17	4	2.0	ナメカイト	弥生時代	欠	万葉歌文
S 13	J・土器 9-1	スクレーパー	45	49	10	2.0	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 14	J・土器 9-1	石盤	36	15	4	2.0	ナメカイト	弥生時代	欠	先端部磨滅
S 15	たかみ 2	印石	110	49	31	261.5	碧玉	弥生時代	完	主に上端面が叩き面だが側面に削り跡がある
S 16	刮削器	磨製石丁	28	33	6	7.7	紫斑晶片岩	弥生時代	欠	
S 17	刮削器	スクレーパー	39	65	8	19.6	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 18	刮削器	打製石臼	39	87	11	46.7	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 19	刮削器	スクレーパー	39	58	7	9.4	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 20	刮削器	大型研刃石斧	83	67	41	367.0	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	上半分欠損
S 21	刮削器	大型研刃石斧	110	72	35	481.0	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	刃部に削り用孔?
S 22	刮削器	大型研刃石斧	90	69	42	384.0	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	
S 23	刮削器	石斧	98	39	26	153.6	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	
S 24	刮削器	石斧	101	56	32	289.0	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	無頭部碧玉花崗岩
S 25	刮削器	石盤	108	35	26	249.0	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	側面が丸味を帯びている
S 26	刮削器	石盤	22	18	4	0.8	ナメカイト	弥生時代	完	
S 27	刮削器	石盤	22	18	2	0.7	ナメカイト	弥生時代	完	
S 28	刮削器	石盤	21	17	4	1.2	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 29	刮削器	石盤	25	18	21	0.8	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 30	刮削器	石盤	27	15	5	1.1	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 31	刮削器	石盤	28	19	3	1.3	ナメカイト	弥生時代	欠	基部欠損
S 32	刮削器	石盤	24	18	3	1.1	ナメカイト	弥生時代	大	先端部欠損
S 33	刮削器	打製石臼	43	118	9	61.0	ナメカイト	弥生時代	完	
S 34	刮削器	小輪狀石盤	100	35	10	39.6	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 35	刮削器	小輪狀石盤	51	23	9	6.0	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 36	刮削器	小輪狀石盤	35	21	7	2.4	ナメカイト	弥生時代	欠	
S 37	刮削器	轆	94	36	44	233.0	碧玉花崗岩	弥生時代	欠	
S 38	刮削器	扁平片石斧	37	18	6	9.0	碧玉花崗岩	弥生時代	完	小形

第11表 鉄器観察表

番号	器種	出土遺構名	材質	計測最大値(cm)			重さ(g)	現存	時期・時代	備考
				長さ	幅	厚さ				
M 1 [8]	司柵柵	司柵柵	鉄	116.0	13.3	8.3	34.9	大	中世?	鉄柵柵。頭部の方を曲げている

第12表 木製品観察表

番号	25種	出土遺構名	材質	計測最大値(cm)			現存	時期・時代	備考
				長さ	幅	厚さ			
V 1	削毛器	細直削器 1	アカガシ	418.0	106.0	12.0	次	弥生時代・中期	木製削器
V 2	削毛器	細直削器 1	アカガシ	716.0	236.0	60.0	次	弥生時代・中期	頭の部分が削り落としで、2本の頭を製作する多品種
V 3	削毛器	細直削器 1	アカガシ	462.0	274.0	70.0	次	弥生時代・中期	木製削器
V 4	削毛器	細直削器 1	アカガシ	181.0	100.0	12.0	次	弥生時代・中期	木製削器
V 5	削毛器	削器 3	スギ	358.0	48.0	6.0	中	中世	頭部がくつろいだ形状
V 6	削毛器	削器 3	イヌマキ	608.0	—	—	次	中世	頭部がくつろいだ形状
V 7	削毛器	削器 3	コチラ	694.0	—	—	次	中世	頭部がくつろいだ形状

報告書抄録

ふりがな	くまやまだいせき						
書名	熊山田遺跡						
副書名	吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う発掘調査						
卷次							
シリーズ名	邑久町埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	1						
編著者名	河本 清・福田正継・中野雅美・馬場昌一・関 幸代						
編集機関	岡山県邑久町教育委員会						
所在地	〒701-4221 岡山県邑久郡邑久町尾張300-1 TEL0869-22-1215						
発行機関	岡山県邑久町教育委員会						
所在地	〒701-4221 岡山県邑久郡邑久町尾張300-1 TEL0869-22-1215						
発行年月日	2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
くまやまだいせき 熊山田遺跡	岡山県邑久郡 邑久町山田庄 字月ノ木363 番地ほか	33362	34°	134°	1983.1.20	1,128	吉井川農業 水利事業邑 久用水路工 事に伴う発 掘調査
			40°	5'	~1.29		
			25°	43°	1983.12.7 ~1984.1.20		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
熊山田遺跡	集落	縄文時代		縄文土器			
		弥生時代	堅穴住居	弥生土器	微高地斜面で弥生時 代前期前葉から中期中 葉の土器が多量に出土。 ほかに人形土製品 や木製鉢の未製品が 出土。		
			掘立柱建物	石器			
			井戸	人形土製品			
			土壙	木製品			
			溝				
		たわみ					
		斜面堆積					
		古墳時代・古代	土壙	須恵器	統一新羅系土器が出 土。		
			溝	瓦			
櫛列状遺構	土師器						
中世	掘立柱建物	輸入陶磁器	国内産の中世土器とと もに中国産輸入陶磁器 が出土。				
	井戸	瓦器					
	溝	備前焼					
		吉備系土師質土器					
		木製品					
	土製品						
	鉄器						

邑久町埋蔵文化財発掘調査報告 1

熊山田遺跡

吉井川農業水利事業邑久用水路
工事に伴う発掘調査

平成16年3月15日 印刷
平成16年3月31日 発行

編集 岡山県邑久町教育委員会
岡山県邑久郡邑久町尾張300-1

発行 岡山県邑久町教育委員会
岡山県邑久郡邑久町尾張300-1

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市東壁871-2

図版 1



1 0区全景（北西から）



2 1区全景（北西から）



3 3区全景（北西から）

図版 2



1 3区全景（南東から）



2 3区全景（北西から）



3 3区全景（北西から）

図版 3



1 4区全景（北西から）

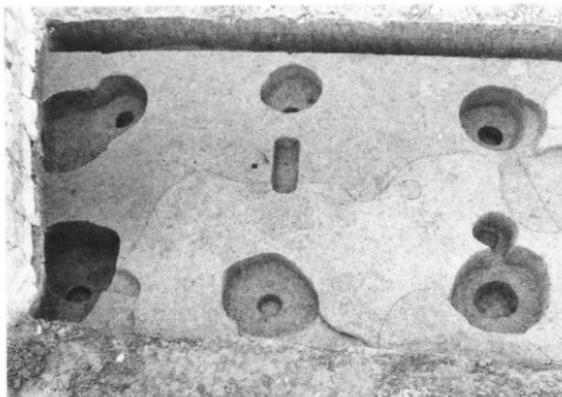


2 5・6区全景（北西から）



3 6区全景（北西から）

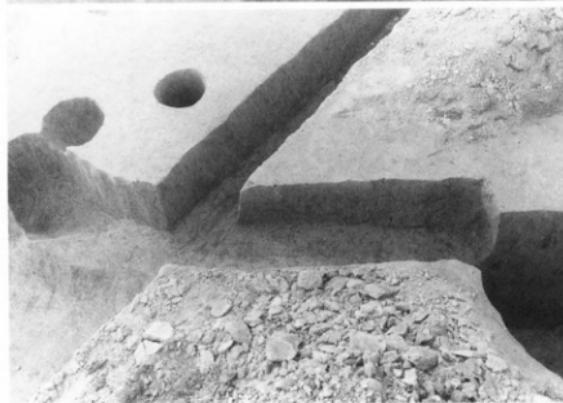
図版 4



1 挖立柱建物 1
(南西から)



2 井戸 1
(南西から)



3 土壠 1
(東から)

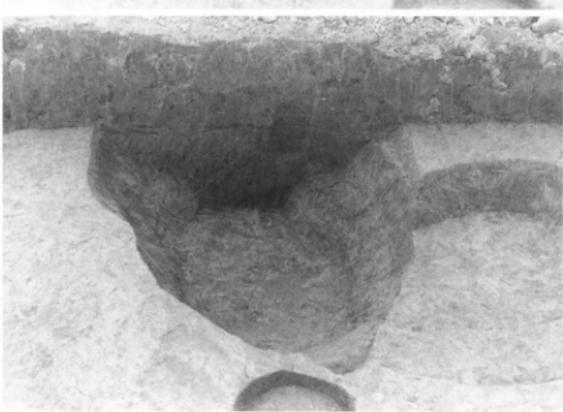
1 土壌 2
(東から)



2 土壌 3
(北東から)



3 土壌 6・7
(北から)



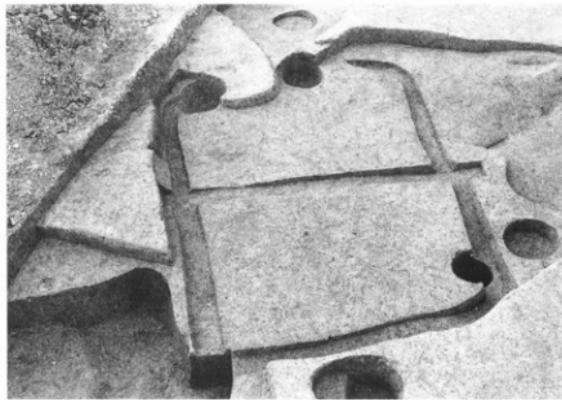
図版 6



1 土壌 8
(北東から)



2 土壌 9
(北東から)



3 土壌 11
(東から)



1 土壌12

(南から)



2 土壌14

(北から)



3 土壌15

(東から)

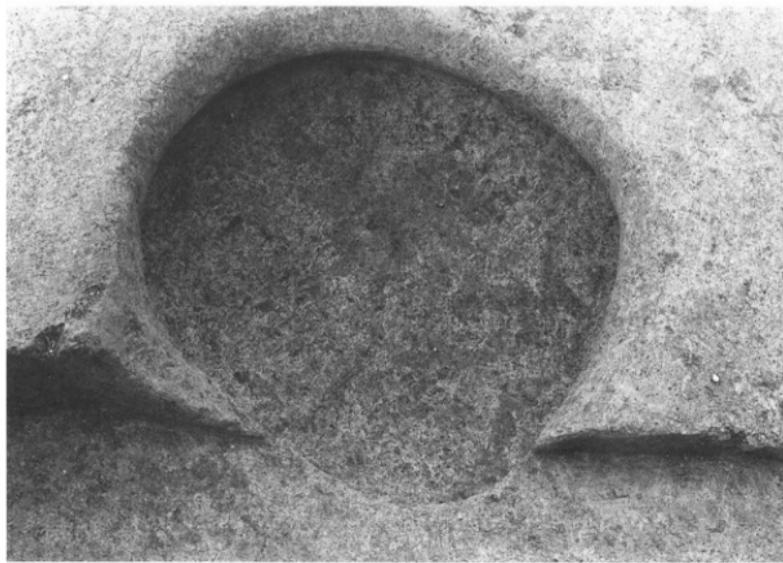
図版 8



1 井戸 1・土壤16・17（南東から）



2 井戸 1・土壤16~18（北西から）



3 土壤19（南西から）

1 2区全景
(北西から)



2 溝13断面
(北から)



3 溝9～12
(北から)



図版10



1 溝15・16
(北東から)

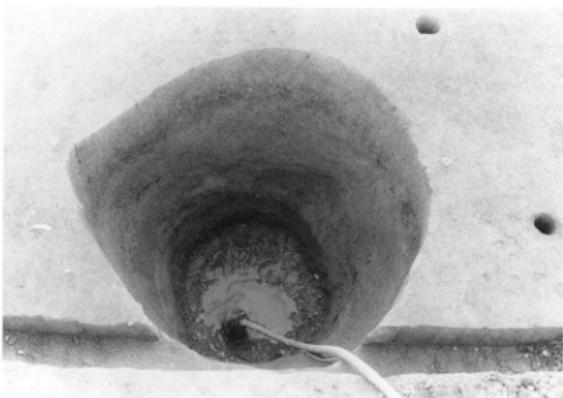


2 斜面堆积 1
木器出土状況
(北西から)



3 横列状造構 1
(南から)

1 井戸 3
(北東から)



2 井戸 3
遺物出土状況
(南から)



3 井戸 3
遺物出土状況
(南西から)



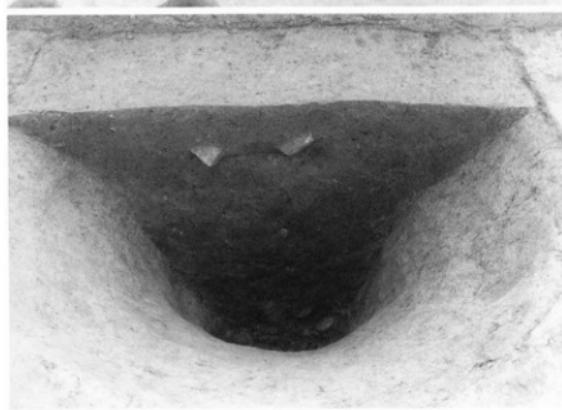
図版12



1 井戸 4
(南東から)



2 井戸 5
(北東から)



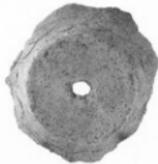
3 井戸 5 断面
(北東から)

図版13



2 土壌 1・8 出土土製品

1 繩文土器



3 井戸 1・土壌 1・2・4 出土遺物



4 井戸 1・土壌 2・12 出土石器

図版14



1 土壌14・15・17・18 出土石器



96

2 土壌9・13 出土遺物



3 溝13 出土遺物



128



139



141



130



153



156



157

図版16



168



169



S12



S13



S14

1 たわみ 1 出土遺物

2 满19・たわみ 1・2 出土石器

202



203

204



205



228



237



242

3 斜面堆積 1 出土遺物



245



319



286



283

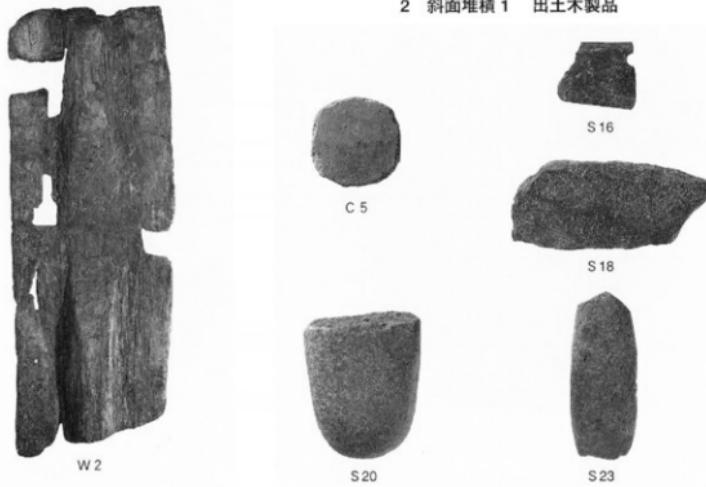
図版18



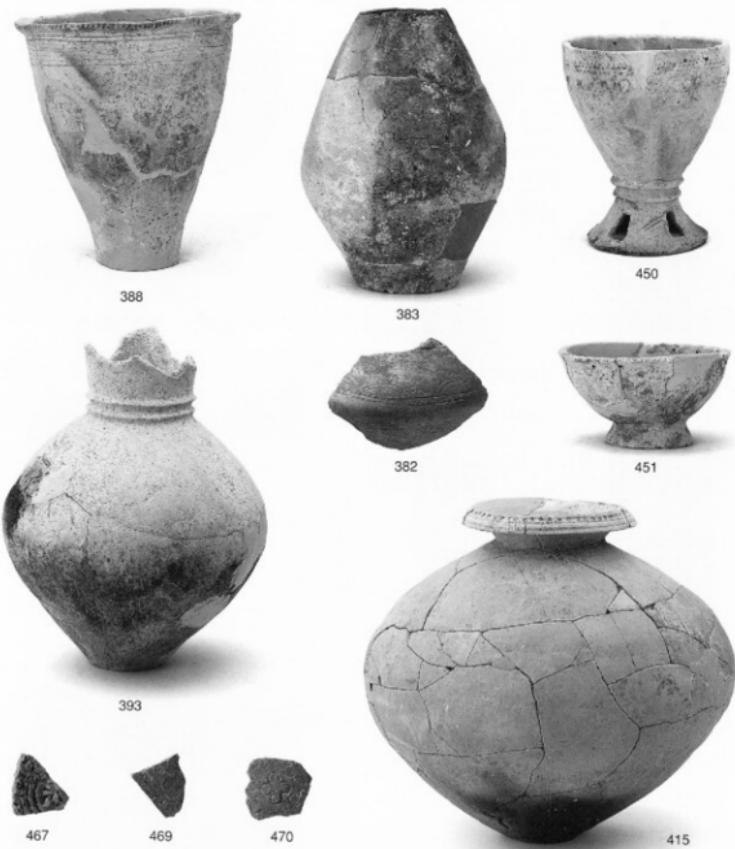
1 斜面堆積 1 出土遺物



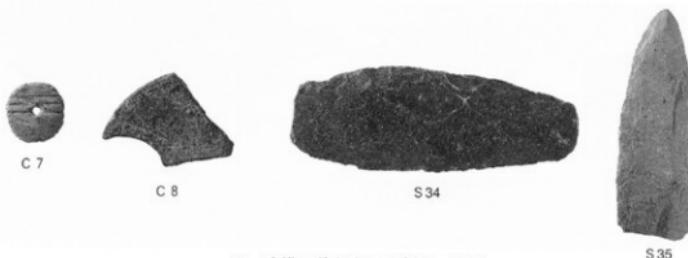
2 斜面堆積 1 出土木製品



3 斜面堆積 1 出土土製品・石器



1 遺構に伴わない遺物



2 遺構に伴わない土製品・石器

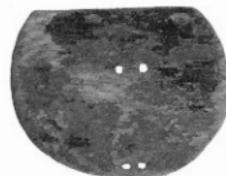
図版20



W 8



W 7



W 5



W 6

1 井戸 3 出土木製品



484



485



486



491



498



507



508



500



501

2 井戸 3・4・5 出土遺物

